
真・恋姫†無双 曹仁伝 ～外史を糺す者は華琳の弟で～

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 曹仁伝 〱外史を糺す者は華琳の弟で〱

【Nコード】

N0896U

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

外史や管理者を指導する立場にある主人公。

バカンス変わりに行った外史は恋姫の世界であった。

光の勇者と魔王???? (前書き)

駄文小説二作目です 立場上かなりチートになるかもしれませんが

光の勇者と魔王???

中世風の城の中を、一人の若者が駆けていく。

それだけならば、ありふれた光景であるが城は魔王と呼ばれる男の城であり若者は勇者と呼ばれていた。

長い廊下を経て、目の前には、重厚な扉がある、その向こうに諸悪の根元である魔王デスガイザーがいる。

あがった息を整えていると、目の前に眩い光が現れ、中から白髪に白い髭を蓄えた老人が現れた。

「光の勇者にして、ホーリランドの王子ジャステイーよ。本当に魔王デスガイザーに立ち向かうのか？」

「はい、我が至高神ホーリ様。必ずや魔王デスガイザーを倒しこの地に平和をもたらしてみせましょう」

side魔王???

勇者はまだかよー。

つか今回の外史はえらい外れだな。

先程から愚痴っているのはこの外史で魔王デスガイザーと呼ばれている男

身長は軽く2メートルは越えているだろう、体型もガッチリとした筋肉質

分厚いヒゲと厳めしい顔はタテガミをもった雄獅子を連想させる。

よく言えば頼もしく、悪く言えば暑苦しい見た目だ。

待ちくたびれた魔王であったが、ようやく開いた扉の方を見てまたため息をつく。

そこにいたのは、高貴なオーラをまとう美男子、魔王と敵対するこの外史の勇者である。

「魔王デスガイザーよ。お前を倒して平和を取り戻す」

（その名前で呼ぶなよ。こっばずかしい。デスが名字でガイザーが名前になるんかい）

「デスガイザーよ、お前の部下達は僕の仲間が戦っている。誰もお前の助けには来ないぞ」

（お前は美味しいとこどりかい！つかお前には援軍くるんだろ）

派手なポーズの後剣を構える勇者ジャスティー

「流石は魔王だ。隙がない」

（いやいや、只今絶賛隙だらけだから、どっから斬ってもクリティカル保証付き）

「でも愛と友情を力に変えて、今必殺のオーロラフェニックスアタック」

（技の名前がいい、思わず斬っちゃうとこしたぞ、愛と友情って

全部他人絡みの力だし、しかも名前恥ずかしい。後から書類に書かなきゃいけない立場も考えるよー。ほらーダメージかすだしー、あー台詞だな)

「くっ、流石は勇者よ。よく我を倒した」

魔王は黒い霧に包まれて消えた様に見えたが…

倒された筈の魔王はピンピンしており、彼の前には先程の神が、体を小さくして座っていた。

「本当にもう勘弁してくれよ。オジキの命令じゃなきゃ逃げてたぜ、又は世界征服しちゃってたよ」

「本当に申し訳ありません
ペコペコと謝る神

「しかもなんだよ。あの小僧は無駄に爽やかで、無駄にイケメンでモテて、外史の管理者がヒイキしちゃ不味いの知ってるだろ」

目の前にいる自称神はこの世界の管理者、自分の所の勇者をヒイキし過ぎて釣り合う魔王がいなくなっただて事で俺にお鉢がまわってきただが

「とりあえず担当の統括者には自分で連絡いれろよ」

統括者

同じ物語を基盤とする外史にはそれぞれ管理者がいて、それを取り

まとめるのが統括者。

俺の仕事は外史矯正指導員

今回みたいに管理者や統括者では対応できない事を解決したり、管理者が好き勝手に始めたら懲らしめに行っている。

早い話が外史を正しく導く為の便利屋

管理者殺しの雄獅子、外史を消す雄獅子とか言われているが、俺に言わせりゃただの尻拭いだったの。

さて、とりあえずオジキに報告しに行くか。

正史・外史管理事務所

「ほい、倒された技がオーロラフェニックスアタックって」
外史から帰ってきた俺は報告書をだす。

「ご苦労様です。創竜様がお呼びですので、移動願います」

「わかったよ。まったく休みもなしに次の仕事か。労働基準法違反だぜ」

向かった先は、どこまで広がる巨大な空間。

「オジキはいるぜ」

そこに居るのは巨大な竜、山と比べでも遜色ない大きさ。

オジキこと創竜は、全ての正史・外史を司っている。

正史は一つではなく、数十に及ぶ正史がありそれにより作られた外史に関してはとんでもない数になる。

「来たか豪よ。」

今回もご苦労であった」

「本当だよ。ただのサラリーマンだった俺をいきなり召喚して、この仕事につけてくれたオジキには感謝が絶えないよ」

ちなみに豪は、正史にいた時の俺の名前だ。

しがないモテないサラリーマンが、何でこんな大役と思ったがオジキ曰わく適正があったらしい。

「ふん、お前ぐらいだぞ。この儂にそんな口を聞くのは。まあ良いお前を働かせすぎたと思ってな長期休暇とバカンスをやるうと考えるの」

「さっすがオジキ、話せる。でどこに行かせてくれんだよ」

「流石にお前がいた正史はまずいから、その外史にしてやる」

「ま、ま、まじで。元の世界に関われるなんて、いつ以来だ。やばっ泣けてきた」

影響を与えては不味いって事で、俺達は自分の生まれた正史や外史

に行く事はまずない。

酷い時には、八虫類型人類の外史や虫型人類の外史。文化も違うから食事なんてのは食べる気もおきずに携帯食のみになるのが殆どだ。

「オジキ早速頼む」

「気の早い奴じゃ。細かい連絡は必要な時に事務所からいくかの。では楽しんでこい」

- - - - -

「創竜様、本当によろしかったのですか？」

「豪は、働き過ぎで疲れておるからの」

「数ある正史の中でも、指折りの仕事好き日本人ですからね」

「うむ、で日本人と言えばオタクじゃ。奴の世界の遊戯を基盤とした外史に行かせた」

光の勇者と魔王???? (後書き)

書きためた文を投稿します

豪 外史にたつ（前書き）

この物語は作者なりの外史の解釈がはいります

豪 外史にたつ

オジキこと創竜が作った光に導かれ俺は新たな外史に旅立った……

ついたか、とりあえずサーチを開始。

俺達の仕事で一番大事と言っても過言ではないのがこのサーチって能力。

その外史がどんな外史で、大気は自分にあってるか・マナの濃さはどれ位等という全体の事から、目の前にある食べ物に毒はないか？草にどんな薬効や栄養があるか等を調べる事ができる。どれだけ強くても毒殺されたら終わりだしな。

ここの外史は…三国志時代の中国。
やったーアジア圏内じゃないか、流石はオジキわかっていらっしやる。

じゃ楽しませてもらいに、行きますかって…
か、体が動かねー

『豪様管理事務所ですが連絡事項の説明に入らせて頂きます。もうお気づきがと思いますが今回の外史は三国志に対する外史となります。豪様には転生からスタートしてもらいます』

(ちょっと待て。転生なんて外史初体験の新人の研修だろうが)

『ええ、普通転生は研修生が対象ですが今回は創竜様が家族と触れ合う時間を久しぶりに味あわせてやりたいとの事だったので転生としました』

研修生が転生するのは、武力や魔力の使い方を中心に身につける為、身体に覚えさせるには子供の頃からがよい、その為最初の転生先には、武将や魔法使いの家が選ばれる。

俺の研修先は軍隊を退いた斧使いの家であった。

(つか転生って事は俺は俺は赤ん坊か。連絡を閉じる。こんな姿部下にシメシがつかなくなる)

『すげー、あの敵つい化け物でも赤ん坊時代は可愛いんだ？豪ちゃーんお元気でちゅかー？』

(くおらお前ら仕事はどうした？ふざけた事抜かしてるとしばくぞ)

『おーこえー。じゃ連絡切りますねー』

あいつ等上司を笑い者にしやがって教育間違えたか？

???

「母様、豪が起きたみたい。豪の近くにいてもいい？」

「華琳は本当に豪の事が大好きね」

「うんっ、だって私の可愛い弟だもん」

そうやって俺を覗き込んできたのは3才くらいの可愛い女の子…ここ中国何だよな、なんで金髪なんだ？

母親もいい女だねー。

つか俺は絶対に母親に似ないよ、転生先の遺伝子なんて影響されないだし絶対に血が繋がって、いないって言われるよな。

「豪はご飯の時間でちゅねー」

笑顔で胸をだしてくる母親、いやいや奥さん娘さんが見てるって。美人の相手は嬉しいが、そんなマニアックな趣味ないですから。

あーでも、奥さんからしたら俺は息子なんだよね。

お約束のオムツ交換には思考停止で対応した。

赤ん坊生活で分かったのは、俺の姉にあたる女の子は、あの曹操だとの事で俺は曹仁。

本来は曹操と曹仁は従兄弟なんだけど、外史ではよくある事だ。

この世界には真名と言う伝統があるらしい、俺の真名は豪。多分オジキが介入して本名と同じにしてくれたんだろう。

しかし、まさかあの霸王が姉になるとはね。

この時俺はまだ、長期休暇の気持ちでいたんだよな。

いざとなりゃこの外史から出りゃいいんだって

でも徐々に俺の中で曹操・姉ちゃんは大事な家族になっていった。

豪 外史にたつ（後書き）

感想 指摘お待ちしております

姉ちゃんへの想い(前書き)

投稿してから思った佐助と同時進行できるかな

姉ちゃんへの想い

あれは俺が外史の年齢3歳の時だった。

両親が忙しい事もあり、俺の養育には侍女が当たっていた。

見た目が親に似ていず言動にも可愛げがない（中身はオッサンだから当たり前だ。てか幼児言葉なんて使ったら部下達の酒の肴になりかねない）

俺に侍女達は、幼児だから言葉がわからないだろうと、曹仁様は本当のお子さんじゃないとか、曹操様とご姉弟には見えないとか好き放題言っていた。

（女つてのはどこの世界でも噂話好きだよなー。つか本当のガキならトラウマになりかねないな。しかしよく憶測であそこまで話せるな）

そんな時必ず現れたのが姉ちゃん、曹操だった。

何も言わず俺を抱きしめ侍女達を睨みつける。

まだ小さい姉ちゃんは大人の侍女達に何も言えなかったらしい。

侍女ならば睨まれると大人しくなったが、相手が武官となるとそうはいかない。

その武官は、戦で単騎突撃をして、母さんに叱られたのを根にもつたらしく

「本当に可愛げないガキだな。大方あの女がどこぞの男をたぶらかして産んだろう」

（うわっ大人気ねー。三歳のガキに本気でガンとばしてやんの）

やっぱり現れて負けじと睨み返す姉ちゃん。

「なんだいその目は。母親と同じ人を見下した目をしやがって」

武官は本気で蹴りつけてきた、そして姉ちゃんは俺を庇って、もろに蹴りをくらった。

そのまま気を失った姉ちゃん、いつも俺を庇っているがまだ六歳の女の子だぜ。

俺はこの時久しぶりに三歳のガキをしてなきやいけない事を忘れて本気でキレた。

「おいこら。お前誰を足蹴にしたかわかってんのか？手前の仕出かした事も理解できねえガキがふざけた真似すんじゃねえよ」
地から響く様な低い声で豪がせまる。

「このガキなんて迫力なんだい」

「今すぐ姉ちゃんに謝って、ここを辞める。さもないとタダじゃおかねえからな」

「はっ、なんであんたみたいなお子様に指図されなきやいけないのさ。大好きな姉ちゃんと一緒に血祭りにおいてあの女の泣きべそを拝んでやる」

女は俺を踏み潰す様に蹴りを放ってきたが

「ぬるい蹴りだな」

俺は女の足を掴み、関節をきめて投げ飛ばす。

「若造が、戦場に二、三回行っただけで強者気分か？」

女に向かい殺気を放つ、まったくこれぐらいで青ざめてんじゃねーよ。それじゃ、どう教育してやるのかな…

次の瞬間俺は暖かいものに包まれていた。

姉ちゃんが俺を小さいな体で包み込んでいたのだ。

「豪大丈夫？どこも痛くしてない」

（先まで気絶してた癖に俺を気遣って）

俺は目で武官の女を退出する用に促す

「大丈夫だよ姉ちゃんが守ってくれたから、全然痛くないよ」そう言いながら姉ちゃんに治療を施していく。

「でも泣いてるじゃない。怖かったのね、お姉ちゃんがいるからもう平気よ」

（実際は姉ちゃんの変態に感動してるんだがな）

この時俺は、何時までいれるかわからない外史ではあるが、姉ちゃんを支えて行こうと決めた。

姉ちゃんへの想い(後書き)

指摘感想お願いします

幼なじみと修行と(前書き)

原作スタートが見えない

幼なじみと修行と

「豪ちゃん、早くー」

今の俺は6歳の子供、子供だから鬼ごっこしていても恥ずかしくない。

うん、そうだ大丈夫だ。部下達の笑い声も空耳に決まっている。

「豪ちゃん、鬼が追い掛けてこないとつまらないよ」

今俺に声をかけてきているのは朱霊文博、真名を陽^{よう}外史の俺と同じ年で幼なじみである。

陽は泣き虫だ、真名で呼ばないと泣き、俺が遊ばないと泣く。

普段は真名の通り明るい娘だが、俺が絡むとよく泣いてしまう。今も俺が鬼ごっこにやる気をださないからカウルウルしている。

しかし、しかしだ 俺は実年齢で言えば30は越えているし、外史で過ごした年数はリセットされるが、それを含めたとんでもない年だ。

要するに30過ぎの2メートル超えのごついオッサンが6歳の女の子を追いかける事になるのだ。

こないだ陽にせがまれ、鬼ごっこをした時、部下達からの事務連絡が入り『豪さんそれ犯罪に見えすよ』と言われた。

しかし陽を泣かすと罪悪感もあるし姉ちゃんにバレると叱られる。

そうだ、俺は保父さんだそう思えば平気な筈だ：

早く親父とお袋に頼んで文武を教えてもらう手続きをしよう。

姉ちゃんも6歳過ぎから私塾通い始めたし

文武の師匠がついても、俺より経験つんでる奴はいないだろうが、自主鍛錬をする理由にもなるし

うん、今日の遊び終わったら頼んでみよう。
でないとバカンスじゃなく苦行になってしまう。

後日俺の師匠が決まったのだから

「えへへっ、豪ちゃん一緒に頑張ろうね」

俺が武術や勉強を習うのを聞いた陽と一緒に習いたいと言いだしたのだ。

幸い陽は文武ともに才能がありメキメキと上達していった。

何年かすると従姉妹の春さんと秋さんも認める実力になっていた。

ぶつちやけ武術の師匠の態度に腹をたてた俺がシバき倒し、俺が教えていたからでもあるが

時は流れて、外史年齢14才

俺は旅にでる決意をした、史実通り進むならこの後は乱世となる。

しかし外史は正史とは違う展開となる事も珍しくない、姉ちゃんや春さん秋さん、陽を守る為には色々としたい事があるからだ。

幼なじみと修行と（後書き）

佐助と比べてどうでしょう
指摘感想お待ちしております

豪 旅立ちを告げる（前書き）

佐助と同時進行 やってみると今はおもしろい

豪 旅立ちを告げる

side 華琳

呆れて溜め息しかでない、弟の豪が見聞を広げる為に一人旅にでた
いと言ってきた。

豪は背丈は大人以上と言えども、文武ともに人並み程度でしかない。
可愛い弟をむざむざ危険な一人旅にださせる訳にはいかないわね。

「春蘭、豪を叩きのめして一人旅を諦めさせてやって」

「華琳様わかりました」

「豪あなたが旅に出る為に試験をさせてもらうわ、まずは春蘭と試
合をしてもらうわよ」

春蘭は、大人の武官と互角かそれ以上の腕前、豪を怪我させずに諦
めさせるくらい訳ないわね。

「華琳様、春蘭様と誰か試合をするのですか」

「あら陽、豪が一人旅に出たい何て言いだしてね。悪いけど豪が怪
我したら手当てを頼むわね」

「それはないですね。確実に曹仁様が勝ちますから」

陽は興味がない様で、直ぐにその場を後にする。

入れ違いで来たのは秋蘭

「陽、雰囲気が変わりましたね。落ち着いていると言っか感情が無いと言っか」

「豪の事も真名で呼ばなくなったわね」

「陽の親は武官と言えども家格は高くないですから、豪様の嫁になると勘ぐった連中が嫌がらせをしたのでしょ」

「私は陽が義妹になるの構わないんだけどもね」

「曹家の長男に嫁入りして子供でも持てば、その親戚も権力をもつ事になりますから」

「くだらない、あつ試合が始まるわね」

試合は豪がぼろ負けをして私が豪を諷める予定だったんだけども…

「春さん相手を崩しもしないで、大技だしても当たらないですよ」

「う、うるさい。斬りまくればいつか当たるし、相手は攻撃をだす事ができないだろ」

「は、なら他の敵が背後から襲ってきたらどうするんですか。こんな風に」

豪はそう言っつと春蘭の背後に周りこみ平手で背中を打った。

「んぎゃっ」

豪の手は背丈同様に大きい、その手で背中を打たれた春蘭でもたまらないわね。

「豪、痛いじゃないか。その馬鹿でかい手で叩くなんて」

涙目で訴える春蘭。

「春さん、平手だから痛いので済んだんですよ。切りつけられた死んでましたよ」

「うるさい。今からは本気でいくぞ」
模擬刀に勢いをつけて振り回しまくる春蘭。

「ほら、春さん。足元がお留守」

豪はそう言って春蘭に足払いをかける、勢いがついていた春蘭は当然
「ぐぎゅっ」

顔からもろに地面に突っ込んでいく。

倒れた春蘭の側に、いつの間にか陽が来て助け起こす

「大丈夫ですか春蘭様、ここから私が代わりますね」

「陽、豪は見た目だけじゃなく強さも化け物だぞ。大丈夫か？」

「曹仁様を化け物なんて言ったら、華琳様が怒りますよ。それに曹仁様の事は私が一番知ってますし」

「で次の相手は朱霊か。お前が俺に勝てる訳ないだろ」

豪に斬りつけながら、陽が尋ねる

「曹仁様、旅に出るとは本当ですか？」

それを鼻歌混じりで受け止める豪

「ああ、野暮用を足しにな」

陽は豪から離れてると、何故か構えを解き

「いやだ、いやだ豪ちゃん行っちゃだー」

地面に座り込み泣きじゃくる。

「ちよつ、陽。その攻撃は反則、俺はそんなの教えた覚えねーぞ」

「知らないもん、私に何も相談しないで大事な事を決める豪ちゃん何て知らないもん。イーっだ」

「イーっだつて。お前もう14才だろ、来年から姉ちゃんの元で武官するんだろ」

「何よ。直ぐに姉ちゃん、姉ちゃんって。そんなに華琳様が好きなら華琳様と結婚しなさいよ」

「何で結婚まで話が広がるんだよ」

「変わってないわね、二人共」

「多分二人っきりの時だけ真名で呼び合ってるんでしょっな」

「止めてくるわね」

豪が陽を泣かすと（豪曰わく陽が勝手に泣き出す）と華琳が豪を叱って止める、三人や周囲にとっては馴染みの光景が久しぶりに展開されていた。

「豪何回言ったらわかるの。女の子を泣かせるんじゃないの」

「えっ？えー姉ちゃんそれは理不尽だっつて」

「それに何で今まで武をお姉ちゃんに隠してたの？」

「それは、ほら武官に組み入れられたら旅に出れないじゃないんやん」

「他にも何か隠してる事あるんじゃないの？」

「豪ちゃん頭もいいんだよねー」

「こらっ、陽お前余計な事を」

「うーっ、お姉ちゃんとゆっくーりお話をしましょうっ」

「はい、わかりましたお姉様」

その後、華琳から2時間程説教をされた豪であった。

「乱世になる前に諸侯や実力のある武将を確認しておきたいと」

「ああ、できるなら同盟を組んだり、うちへの仕官をさせたいから」

「きちんと連絡はよこしなさいよ、私が通う私塾がある洛陽の近くまで来たら顔をだしなさい」

「わかったよ姉ちゃん」

.....

旅立ちの前日、華琳は手作りの料理を振る舞った。

陽は何度も帰ってくる約束を確認していた。

「豪忘れちゃ駄目よ、貴男が帰る家はお姉ちゃんの所にあるんだからね」

華琳は泣きながら、可愛い弟の旅立ちを見送った。

豪 旅立ちを告げる（後書き）

次から豪が旅に出た理由や姫達との絡みを書きます
感想指摘お待ちしております

豪 旅を開始する

旅立ちだった日に俺が先ず向かったのは山の頂上、そこで念じる。

(事務連絡希望、つか早く繋げる)

(豪さんどうしましたか?)

(俺の武具をこっちに送ってくれ)

(わかりました。しかそちらはマナが薄い為に魔具系統は外史管理条約に引つかかるので送れません)

(わーってる、いつもの斧なら大丈夫だろ。後これから争乱に関わるだろうから統括者と管理者に連絡しといてくれ)

(わかりました。その外史には直属の管理者がいない様です、しかし洛陽という地に類似の外史で管理者をしていた者がおります。名前は卑弥呼と貂蝉です)

(わかった洛陽は行く用事があるから顔をだしとく。

後うちの馬鹿共に統括者によろしく言っとく様に伝えてくれ)

(了解しました。同時に統括者の療養休暇の手続きをしておきます)

連絡を閉じると愛用してる斧と鎧や道具が届いていた。

さてどこへ行くか、劉備はまだ世にでる前だし、そうになると孫が馬だな。

孫行つて洛陽で姉ちゃんに顔だして、ついでに卑弥呼達に顔を出して馬に行くか。

いや、先に馬から姉ちゃん、孫もあるか。

馬は確か西涼か、長旅になるから丁度もう一つの目的も果たせるな。

うっし、先ずは西涼に行くか。

旅にでて、数ヶ月となるが俺のこの外史での生活がいかに恵まれたものだったかがわかった。

重い税と飢饉により痩せ細っている民衆
逆に為政者達は私腹も体も肥やしている。

外史は物語を基盤にする物が多い為、苦境にたたさされている民衆や悪辣な為政者は良く目にしている。

最初からみんな平和に暮らしていましたじゃ物語にならないから仕方ないんだけどな。

それとは別に、ようやく旅の目的の一つが達成できた。

俺のトレードマークでもある髭が伸びたんだ。

前に髭を伸ばそうとしたら姉ちゃんには、暑苦しいからやめなさいと叱れて陽には一緒に歩いたら親娘に見られるから嫌だと泣かれて諦めたんだ。

でもよー、俺より年下の奴にタメ口で話されるんだぜ。

髭で威厳をつけとかないとな。

西涼

side 豪

あ、ありえねー、西涼って既に治安が悪化してるのか？
森を出たら槍を構えた女がいたんだ。

「で、誰が熊だって」

「だから悪かたって」

今俺に謝っているのは西涼の領主馬騰の娘馬超。

なんでも民から、巨大な熊が出たから退治して欲しいって嘆願がで
て巡回をしていたらしい。

槍で熊退治って、何か春さんと同じタイプだな。

side 馬超

森から出てきた熊、もとい男は曹仁つ名乗っていた。

曹仁は馬鹿でかく私じゃなくても熊と間違えていた筈だ。

それに背負っている斧も桁外れのでかさだった。

見た目は厳つい顔に分厚い髭、曹家の長男より山賊の親玉の方がし
っくりくると思う。

「お姉様、熊退治できた？」

話し掛けてきたの従姉妹の蒲公英、薄ら笑いを浮かべているのは、

熊退治が失敗したと思っているんだろう。

「いやそれがな蒲公英」

「熊と間違えて曹家の長男に槍を突きつけたの？うわー、下手したら戦になっちゃうよ」

「いや曹仁は怪我してないし、それに曹操に似てないから嘘をついてるかも知れないじゃないか」

「もうお姉様、曹操さんが弟さんをとても可愛いがってるの有名なよ。確実に馬騰伯母様から叱れるね」

side 豪

馬超か、武はそこそこだが性格に粗忽な面があるな。

馬術は優れてるらしいから騎馬部隊の隊長ぐらいが適任だな。

豪 旅を開始する（後書き）

豪の武器

斧 長さ2メートル

片刃で反対が鋸のようになっていて、柄の部分も太く柄でも十分な威力がある。折れない、錆びないの頑丈性が特徴。

豪 馬超と手合わせをする（前書き）

作者は恋姫の中ではばっちょさんお気に入りに入りなんだけども、作者のもう一つの駄作にでてくるオリキャラとの兼ね合いの為曹仁の方で重点的にだそうかと。

豪 馬超と手合わせをする

side 馬騰

報告を受けた時には冷や汗をかいてしまった。

娘の翠が、熊と勘違いをして曹家の長男に槍をむけたらしい。

公事で良く行く洛陽でも、曹操が弟を溺愛しているのは有名だ。

曹操は何度か見た事はあるが、今俺の目の前にいる男は曹操と似ても似つかない、俺より背が高い男なんて滅多にいないぞ。

それに男は容姿、雰囲気や落ち着いた話し方はどう見ても歴戦の古強者にしか見えない。

あれでうちの翠と年が変わらないってのは、ちょっと信じれないな。

side 豪

「曹仁殿此度は娘の馬超が迷惑を掛けてすまなかった」

「領主様自らの謝罪光栄に絶えません。私はただの旅の者、お気にならさないで下さい」

(正直腹をたてるより呆れている方が強いんだが、わざわざ有力諸侯との間にわだかまりをつくる必要は無いよな。)

「そもいかないだろ。曹仁殿が良くても話を聞いた姉の曹操殿が納得すまい?」

「姉はそこまで狭量ではありませんよ。それに今の俺はただの旅人ですから」

「そうか、それなら迷惑ついでに頼みがある。娘の翠なんだが、それなりに武はあるんだが怖い者知らずでな。ちとお灸を据えてやって欲しいんだ」

（流石は異民族の近くで領主してるだけあって、したたかだな。娘がへこんでるついでに再教育をしようってか）

「少々都合が良すぎませんか？下手すりゃ恨まれんの俺ですよ」

「わかってる。今回のお詫びを兼ねて曹家に西涼の馬を都合するぞ」

（西涼の馬か、姉ちゃんも喉から手が出る程欲しいだろうな）

「わかりました。やらせてもらいましょう」

side 馬岱

馬騰伯母様に呼ばれた姉様がどんな説教をされるか楽しみしていたんだけど言われたのは曹仁さんとの模擬戦なんだって。

「曹仁、私を馬鹿にしてるのか。きちんと武器を持って」

「どんだけお前が自分の武に自信あるのかわからねえが必要ないから持たないんだよ」

姉様に西涼の兵士でも適う人はまずいない、無手の男なんて相手になる訳もないのに

……でめ相手にされていけないのは、姉様の方だった。
姉様が槍でつく 曹仁さんかわして姉様の懐に入りデコピン。
姉様槍で尻払う 曹仁さん槍の柄を掴んで姉様を振り回して投げ飛ばす。

姉様大上段から槍を振り下ろす 曹仁さん交わして槍を受け止め姉様にシッペをする

「姉様が曹仁さんに弄ばれて傷物にされている」

「こ、こらっ蒲公英。変な言い方をするなっ」

「馬超確か俺に武器を持ってって言ってたよな」

ニヤリと怖い笑いを浮かべた曹仁さんが持ったのは馬騰伯母様の背よりも長い斧だった。

「ちよっ曹仁、これは模擬戦\$ & amp ; # \$」

あの重たそうな斧をとんでもない速さで姉様に振り下す曹仁さん。
ちゃんとストレスで外したみたいけど

s i d e 豪

まっ、これでじゃじゃ馬をちっとは大人しくなるだろう。

馬超は尻餅をついたまま動かなくなったかと思うと、

「ウツ、ウエーン」
盛大に泣き出しちまった。

やばっ、じゃじゃ馬ならしどころか、じゃじゃ馬泣かしになっちゃまった。

しかも馬超の尻の辺りが濡れてるよな。

不幸中の幸いか西涼の連中は呆気にとられて気付いてない。

「まったく武人が泣き顔を晒すしてどうする」

俺は近くにあつた水瓶を掴み馬超に向かって水をぶちまけた。

泣いてる娘に追い討ちを掛けた俺に白い目が集中する、

西涼じゃ水は貴重だしな。

それで俺は馬超が着替え終わるのを待って、城の庭の一角に集まってもらった。

side 馬超

うー恥ずかしい、まさか怖さのあまり……するなんて、曹仁が気を効かせてくれたお陰で誰も気付かなかつたみたいけど曹仁は気付いてるんだよな。

あまり顔を合わせたくないんだけど、迷惑をかけた上に庇ってもらった手前行かない訳には行かない、でも曹仁はこんな所で何をす

るんだ？

「貴重な水が無駄にしちまったお詫びをしなきゃって思ってな、あっちよつと離れていてくれよ」

そう言ったかと思うと曹仁はあの斧を持ったまま有り得ない高さに飛び上がり地面に向かって斧を勢いよく投げた。

斧は物凄い音を上げながら地面を砕いていく。

あんなのまともに食らっていたら、どうなっていたんだろうと冷や汗が流してれてくる。

突然斧が開けた穴から勢いよく水が吹き出してきた。

斧が当たった衝撃で、地面がくぼんだらしく、見る見るうちに池が出来上がった。

今度の事で良く解った事がある。

世の中には上には上がいて、それはとんでもない化け物かも知れないって事だ。

side 豪

とりあえずサーチ能力で水脈を見つけ井戸を作る事にした。

普通はその外史に釣り合わない力を使う時には管理者や統括者の許可が必要なんだが、ここには管理者はいないし統括者は俺の有能な部下達がキチンと話をつけてくれていた。まあ統括者の何人かは怪我をしたらしく事務所が先に出しておいた療養休暇の手続きも無駄にならなかった。

何故ここまで馬超の為に色々したかと思うだろうが、答えは簡単女

の子を泣かせたり恥をかかせたのがばれると姉ちゃんに説教をされるのが確実だからだ。

豪 馬超と手合わせをする（後書き）

指摘感想お待ちしております。

ちなみにこの話は最初、曹仁は馬騰さんに手を出す予定だったんですが、途中から大幅に変更しました

再開と胃痛（前書き）

書いてたら字数オーバーして分割しました

再開と胃痛

俺確かバカンス中だよな……
なのに何でこんなに胃が痛いんだろう……

馬騰さんは何故か俺を気に入ったらしく、西涼の兵達に訓練をつけせたり、馬超と巡回に行かせる等して、俺を西涼に留まれせようとしていた。

嫁入り前の娘をしばき倒し上からも下からも涙を流せた手前断りにくかったしな。

しかしそろそろ洛陽に顔を出さないと姉ちゃんが怒るだろうし陽は泣く、それで姉ちゃんがさらに怒るの悪循環になりかねない。

「馬騰さんすいませんが、そろそろ洛陽に旅立とかと思うのですが」

「丁度よい、俺も洛陽に行く用事があるから一緒に行こう。食事代や宿代は奢ってやる」

それで一緒に洛陽まで来たんだが、姉ちゃんに会う俺に何故か馬騰さんもついて来た。

「豪久しぶりね。元気そうで安心したわ、それと一緒にいる女は誰かしら？」

「ああ、西涼の太守馬騰様だ。今度うちに西涼の馬を都合してくれるんだ」

「そう、弟も世話になったみたいし、お礼をしなきゃね」

「礼等いらなさいさ。曹仁殿は将来は義理の息子なんだしな」
馬騰さんは何をおっしゃってるのだろう？
姉ちゃんの顔がみるみる険しくなってる。

「ごう、どうゆう事かしら。きちんとお姉ちゃんに話さない」

「いやいやいや、訳がわかんない馬騰さん何それ」

「曹仁殿は文武に優れている、婿に迎えたくなるのは当たり前である」
「ごう」

「当たり前じゃない全然当たり前じゃない、つか馬超さんに言いました？」

「翠なら大丈夫だ、俺が言う事を聞かせてやる。何なら俺の旦那でも構わないぞ」

年齢的には馬騰さんでも俺より年下になるんだよな。

「随分面白い事を言うおばさんね。人の可愛い弟を物みたいに扱うなんて」

姉ちゃんが怒りの表情を見せている。

「曹操殿、弟の恋愛に姉が口をだすのは無粋だぞ」

「なら母親も出すなよ。てか俺ぜったい馬超さんに嫌われてるし」

「翠の夢にでてきたそうじゃないか」

「熊に襲われてうなされたって夢の事ですか、つか俺は熊じゃない」

し」

「豪、詳しく話を聞かせなさい」

で姉ちゃんに一連の流れを話したら、姉ちゃんと馬騰さんの睨み合いが開始され、その険悪過ぎる空気が俺の胃を痛ませている。

「豪行くわよ、こんなおばさん相手にしても時間の無駄よ」

「言ってくれるな、流石にいきなりは無理だろうが俺は諦めないからな。では婿殿翠と西涼で待っているから、何時でも遊びに来てくれ」

洛陽の城に用事があるからって馬騰さんはようやく居なくなった。

「全く、せっかく豪に会える日なのに朝から禄なのに会わないわね。ほら豪お姉ちゃんがご飯作ってあげるから買い物に行くわよ」

「流石姉ちゃん。そいや陽や春さん達も元気にしてる？」

「ええ、三人とも豪が来るのを楽しみにしているわ」

.....

私は洛陽で曹操様にお仕えしている侍女です。

曹操様のお供の方々は皆様素敵なのですが私の憧れは朱霊様です。知的で落ち着いた物腰はとても私と同年には思えません。

昔から曹操様にお仕えしている侍女の人にその事を話すと、洛陽には曹仁様がいらっしやらないからねと笑って話されていました。

確か曹仁様は曹操様の弟と聞いております、その曹仁様が今日見え

られるらしいのです。

side 陽

豪ちゃんから洛陽に寄るって手紙が来てから私の頭の中は豪ちゃん一色になっている。

「よー、みんな久しぶりだな」

この声は豪ちゃんだ、一年近く聞いてなくても直ぐにわかる。気づくと同時に私は走り出して豪ちゃんに抱きついていた。

「豪ちゃんだ。ごーちゃんごーちゃん、へへっ」

「陽、元気そうだな」

「うんっ、今豪ちゃんに会えたから一気に元気になれた」

side 豪

久しぶりに会った幼なじみは前より大人びていたが陽は陽だった。昔からの連中は、見慣れた光景に微笑み新しい人達は呆気にとれている。

「豪久しぶりだな」

「春さんも元気そうぞ」

「豪様お疲れではないですか」

「秋さん大丈夫ですよ」

従姉妹の春さん秋さんと話してる最中も陽は、俺にへばりついてい
る。

この外史にきて得た大事な家族、離れて改めて感じる暖かみを俺は
噛み締めていた。

「ねっねっ豪ちゃん、私が洛陽の街を案内してあげるから今から行
こう」

「陽、豪様は今日ついたばかりだぞ。控えろ」

「秋蘭様大丈夫ですよ。豪ちゃんも私に会えて元気一杯になってま
すから」

「豪、陽は洛陽に来て良く働いてくれたのよ。料理ができるまで時
間はあるからいつてらっしゃい」

「ああ、姉ちゃんありがとう」

「あの二人の変わらないやり取りを見るとホッとしますね」

「ええ、陽のあの表情は豪がいないとでないしね。さて秋蘭は料理
を手伝って頂戴。春蘭はお酒を頼むわね」

管理者と懸念（前書き）

作者なりの外史解釈がはいります

矛盾は流してください

後豪が最初に転生した先の斧を使う獅子將軍って想像つく人いますか？

作者の豪の見た目イメージはそのキャラを若くした感じなんですかね

管理者と懸念

俺は陽に洛陽の街を案内してもらおう事にした。

案内と言っても服屋や屋台とか陽が行きたい店が中心なんだけどな。

「豪ちゃん、この服とこの服どっちが似合う？」

「豪ちゃん、ここの屋台美味しいんだよ」

洛陽の人々は陽の変貌っぷりに目を丸くしていたが、陽はまるで気にせず笑顔を絶やさなかった。

その陽が一軒の家の近くにくると突然怯えた表情を見せて話しかけてきた。

「豪ちゃん向こうに行こう、ここ怖い人が住んでるんだよ」

（陽がここまで怯えるなんて珍しいな。しかしあの家から感じる気配は）

「あーらー、こないだの失礼な小娘じゃない。また追いかけて回さりたいのかしら」

陽はヒツと悲鳴をあげると俺の背中に隠れた。

そこにいたのはピンクのビキニパンツをはいたマツチヨのオカマだった。しかもこいつは…

「おい、その化け物。俺の可愛い幼なじみを怯えさせるとはいい度胸だな」

「私は失礼な小娘を教育してあげただけよ。」

「なら俺も教育してみるかい化け物」

「言っじゃない」

そいつは勢いよく飛びかかってきた、教育は俺がしてやるんだがな

「ぬっ貂蟬やめるのじゃ。そのお方は」

「管理者が街に住んで悪影響がでたらどうすんだよ」

外史の住人には、手加減が必要だが相手が管理者なら本気でぶん殴つても問題はない。

俺は気絶した陽をお姫様抱っこしながら、もう一人のオカマに近づく。

「お前が卑弥呼だな」

「そつでございます、豪様」

「ちよつと話が聞きたいが大丈夫か？」

「しかしお連れの方は大丈夫ですか」

「よく見る。この外史の時は止めてある」

.....

「貂蟬よお主幸運であったの。雄獅子様に飛びかかって怪我だけで済んだのじゃから」

「もう卑弥呼。気付いてたら早く教えてよ」

「お主が確認をしないで飛びかかるのがいけないのじゃ。して豪様聞きたい事とは？」

「まず何でこの外史に管理者がいないんだ、お前達が管理者をしないのは何故だ？」

「それがこの外史の分裂が早過ぎて管理者の数が追いつかないのですじゃ。我々はご主人様を探している故に管理者の仕事をしておりませぬ」

「ご主人様だ？」

「そうなの、とってもイケメンで優しいご主人様なのよ、ご主人様は北郷一刀って言って正史からいらっしやるんだけど中々本物のご主人様に会えないのよ」

「その北郷ってのがこの外史の要か？」

頷くオカマ二人

外史の要ってのは、早い話が物語の主人公でそいつがいないと、話が進まない。

正史にいる要は、当然だが一人しかいない。当然、分裂しまくった外史全てが要を手に入れる事はできない。要のない外史は消滅するだけ。

それを避けたい外史は、新たに北郷一刀を外史ごと作り出し、そこから呼び寄せて自分を存続させていると。

「お前ら小さい異変でも気付いたら連絡をよこせ、面倒ことは早めに芽を刈っておきたいからな」

「面倒事と言いますと」

「外史を分裂させまくり、エネルギーを溜めて一気に集約させて正史にする。それで自分が正史の神になろうとする奴がでかねないだろ。神になんてなれたら糺すのが大変だからな」

「そんな事が可能なのですか」

「理論上はな。しかし正規の手続きを踏まないと歪みが生まれて他の正史にも悪影響をだしかねないがな」

「わかりました。必ずお伝えします」

「んじゃ、俺はそろそろ行くぞ。それと貂蟬、今度俺の幼なじみをビビらせてみる、獅子の爪がお前を切り裂くからな」

「豪様、勘弁して頂戴よー」

「あれっ、あの怖いお化けは？」

「お前が気絶してる間にきちんと説教してやったから、もうお前を追い掛けたりしないよ」

「ありがとう豪ちゃん。やっぱり豪ちゃんは陽の英雄だ」

「英雄つてのは、もう少し格好いい男じゃないのか？後そろそろ降りないか」

「いやだ！さっ華琳様の料理食べに帰ろっ。陽も作ったのあるんだから」

「ったく、わかったよ」

バカンス気分を訪れた外史、そこで得た大事な人達。俺の持てる力全てで、その人達を守ってみせる。

管理者と懸念（後書き）

ありがたい事に佐助に追いつく勢いでお気に入りが増えています

佐助との同時してよかった

感想指摘お待ちしております

豪対袁紹一行（前書き）

前回は無理やりな展開だから今回は軽めに

豪対袁紹一行

「姉ちゃん恥ずかしいよー」

「駄目よ。豪はちょっと目を離すと直ぐ迷子になるんだから」

確かに昔から俺は一人で出歩き心配をかけていた。

中身はオッサンだから迷子になる訳もないのだが、心配した姉ちゃんと一緒に人混みを歩く時には俺の手を握る習慣がついてしまったようだ。

身長差約60センチ見た目の年齢差は10才以上ある姉ちゃんに手を引かれてる俺が周りから、どんな目で見れてるのは考えたくない、逆ならば確実に誘拐犯扱いになりかねないし。

そんな風に洛陽の街を歩いていると、向こうから変な三人組が迫ってきた。

「オーホッホ、これは華琳さんではありませんか？殿方と一緒にいると聞いて来てれば、家格の低い華琳さんにぴったりの暑苦しい男ですこと」

またえらい痛いのが出てきたな。

ケバク派手な金髪とギザギザ髪とおかつぱ頭の三人組か。

「姉ちゃん…あれ何？」

「豪見ちゃ駄目よ。馬鹿がうつるから」

「あら、彼氏じゃなく弟さんだったのね。」

「姫様、曹操様の弟さんは確か曹仁様と言う方ですよ」
申し訳なさそうに話しているのはオカッパ頭

「曹仁かデカいな一度手合わせしようぜ」
礼儀もへつたくれもないのがギザギザ頭

「そう、曹仁さんと言うの。曹操さんと違い高貴で美しい私袁紹に
会えたのを光栄に思う事ね」

色んな外史で名家や王家と関わってきたから、今更なんだがな。

「麗羽、もう行っていいかしら。私は久しぶりに会えた弟の時間を
大切にしたいんだけど」

「華琳さんはそうかももしれないけど弟さんは美しい私ともっとお話
をしたいはずよ。曹仁さんは私をどう思いますの？美しいとかの平
凡な答えは駄目よ」

面倒くせーと思しながら姉ちゃんを見ると目で好きに言いなさいと
合図をおくってきた。

「あー、何つーか飾り灯籠かな」

「でかい兄ちゃんうまい事言うな。派手で中味は空っぽで目立つ以
外は役に立たない正に姫にぴったりだ」

ご丁寧に解説をしてくれたギザギザ頭、姉ちゃんは下向いて笑いを
堪えてるし。

「し、

失礼な高貴な袁家の私のどこが飾り灯籠なんですの。曹仁さんきち

んと説明しなさい」

「言ってもいいけど面倒くさくならないなら、言いますけど」

「め、面倒臭いつ何ですの。仰つてご覧なさい」

「無駄に高く派手な物を好んでつけるのは自分に自信がない者が虚飾の為によくする事、二言目に家柄をだすのは、他に誇れる物がなから。必要以上に姉ちゃんに絡むのは多才な姉ちゃんに対する嫉妬からだろ」

「うわーでかい兄ちゃん容赦がないな」

「曹仁様失礼ですよ。姫様に謝つて下さい」

「失礼？それなら先ずそちらが謝罪すべきでは、姉弟が歩いてるだけで家柄を持ち出し絡んできたのはそちらですよ。」

そしてお連れの一人は俺を名前で呼ばないばかりか、手合わせを強要してきた。それと姐と呼ぶ所を見ると貴女方は袁紹様の臣下とお見受けしました。主の愚を諫めるのも臣下の仕事ですよ」

「でかい兄ちゃん、姐と斗詩をいじめるならあたいが許さないぞ」
ギザギザ頭が剣を抜き放った。

side 華琳

豪の言葉に言い返せない文醜が熱くなり剣を抜いた瞬間、豪が大きな声で大喝し始めた。

「天子様の住まれる洛陽で剣を抜き放つとは、何事か。それとも袁家では天子様に叛意でもおありか」

豪は呆氣にとられている文醜の剣を取り上げると腕の力だけで折り曲げてしまう。

「文醜、いい事を教えてあげる。」

豪は春蘭より遥かに強いわよ。貴女春蘭に一度でも勝った事があった？それと麗羽、豪は昔から私が馬鹿にされたりすると激しく怒るのよ。ここで剣を抜いた事は不問にしてあげるから早く行きなさい」

「ふんっ、家格の低い者を相手にした私が馬鹿でしたわ。斗詩さん猪々子さん行きますわよ」

麗羽達はそのまま逃げ去って行ったわ。

「それと豪その短気を治しなさい。罰として今日の夕食は人參をたっぷり使ってあげるわね」

豪は、人參と聞くとあからさまに顔をしかめた。私の弟は背も高くなり、文武ともに桁外れの癖にまだまだ手が掛かるんだから。だけでもそれ以上に可愛くて仕方がない存在なのよね。

豪対袁紹一行（後書き）

豪の最初の転生先もあるゲームなんですけど、わかった人いますか？
斧を使う元帝国の獅子将軍がじいさんで姉に女神様がいる家に転生
した設定です

感想指摘お待ちしております

豪再びヒゲを失う（前書き）

メインヒロイン予定の陽より姉ちゃん華琳が目立ってる気が…

豪再びヒゲを失う

袁紹一行と一件は、我ながら大人気なかつたなと反省をしている。でも外史の住民にここまで感情移入するのは、かなり久しぶりの事。色々な外史で暮らしてきたが、全くモテない俺にとつては身内とはいえ好意的に接してくれる姉という存在は貴重であり、それが美少女となると格別なんだよ。

だって人間タイプの外史に行かせれたら魔王とか、勇者の師匠や山奥で暮らす鍛冶屋だとかが殆どで美少女との接するの久しぶりなんだし。

それを考えたら陽なんてのはもつと貴重な存在である。

つまりこの二人に組まれると俺は逆らえないので。

つまり……………

「姉ちゃん、ほどいてよー。何で椅子に縛り付けるんだよ」

袁紹一行と別れて家に戻ると、姉ちゃんに座りなさいと言われて座ると陽や春さん、秋さんにより縛り付けられてしまった。

縄は余裕で千切れる硬さだし、抵抗もできたんだがみんなを怪我させたくないし。

「豪お姉ちゃん言ったわよね。旅に出ても身なりはきちんとしなさいって。全くお姉ちゃんが側にいないとヒゲも剃らないんだから」

「えー、俺ヒゲ似合ってると思うんだけ」

「豪ちゃん駄目だよ。おヒゲがあるとギョッとした時におヒゲが、

当たって陽が痛いんだもん」
陽は最近成長が著しく抱きつかれると色々当たってしまい、顔が
緩みまくる。

この二人に逆らえる訳もなく姉ちゃんがカミソリを当ててくる。

「それと豪、あの大きな斧はどうしたのから。誰かから頂いたなら
きちんとお礼をしないと駄目だしね」

（言えねー、言えるわけない。この外史にない金属で、できてるん
だし。拾った？いやいや小学生の言い訳じゃないんだから）

「あの斧春蘭でも、運べなかったのよ。まさか豪はお姉ちゃんに内
緒にしないわよね」

（姉ちゃんカミソリを首筋に当てながら笑うのはやめてー）

「あれは俺が作ったんだよ。俺に丁度いい斧なかったし」

（本当は違うが、違う外史で伝説の鍛冶師をしてたから作れない訳
じゃないし）

「へー。なら私にも何か作ってもらおうかしらね。鎌はあるから短
剣でもお願いしようかしら」

「分かったから、姉ちゃん少しはヒゲ残してよー」

「駄目よ。ヒゲがあったら、豪の可愛い顔が台紙無しじゃない」

（姉ちゃん、それは身内補正ってやつだよ。俺が弟じゃない外史行
ったらボロクソに言いそだぜ）

「豪ちゃん陽は長剣が欲しいな」

(作らなきゃ泣くな)

「豪、私には手甲を頼む」

(春さんは作らなきゃ面倒臭いしな)

「豪様私には胸当てを頼みます」

(秋さんには色々と世話なってるしな)

「わかったよ。全員分作る」

「さすがは豪ね。出来上がるまでは洛陽で生活するのよ、ヒゲはお姉ちゃんが毎朝確認するから」

俺は今まで集めた材料をこっちに送らせた。

史実にそって進むなら姉ちゃんも争乱に身を投じる筈、俺が側にいない間の安心を増やしておきたいしな。

side 華琳

豪が私達の武具を作ると言ってから三週間ぐらいたったある日

「姉ちゃん全員の武具ができたよ」

微笑ましいぐらい無邪気な笑顔で豪が袋を持ってきた、早くみんなに見せて言ばせたいみたいね。

「豪ちょっと待ちなさい。春蘭や陽も呼んでからね」

そう言くと豪はおあずけをくらった犬みたいな顔をしちゃってたわ。

みんなが集まり豪から渡された武具は私が今まで見たどんな武具よりも圧倒的な存在感を放っていた。

side 豪

姉ちゃんに渡した短剣はある外史で暴れていた竜の牙を使用している。

当然錆びない上に大概の金属は切り裂く事ができる、ついでに同じ物を俺用に作成した。

陽の長剣には姉ちゃんに使った竜の爪の方を使用してある、三国志で有名な関羽の青龍偃月刀とは違い本当の竜の刀って訳だ。

春さんの手甲と秋さんの胸当てにはオリハルコンを使用、堅く軽いオリハルコンは防具にぴったりだ。

これを渡しておけば黄巾の乱で命を落とすことはないだろう。

洛陽に来て改めて思った姉ちゃん達の側は居心地がいい。

いつかこの外史から離れる時に俺は平気でいられるのだろうか。

豪再びヒゲを失う（後書き）

前回書いた豪が最初に行った外史を当ててくれた人がいました。

ちなみにサモンナイト2という設定です

豪の見た目はアグラバインの若い頃を想像してもらえれば良いかと
華琳事姉ちゃんに逆らえないのはサモンナイト時代にアメルに姉兼
母として育てられた影響もあります。

反響によってはサモンナイト編を短編で書くかも

陽と馬超と巻き込まれる豪（前書き）

陽の出番多め

陽と馬超と巻き込まれる豪

「豪ちゃん豪ちゃん。この剣に名前はついてるの？」

「いや、つけてないけど陽は何か候補あるのか？」

(この外史の人達は武器に厨二な名前つけたがるよな。まさか陽も)

「うーんとね、ゴアイの剣かな」

「愛護じゃなくてか？」

「豪ちゃんの愛が詰まった剣だから豪愛の剣だよ」

(何その厨二を上回る恥ずかしい名前は、陽が戦で活躍したら豪愛の剣も有名になっちゃうのか)

「あら、相変わらず仲がいいわね。陽が義妹になるのも遠くないかしら」

(陽、顔真つ赤じゃん。陽は俺が本当は曹仁じゃない事を知っても、このままでいてくれるだろうか?)

side 陽

それから数日たったある朝

「朱霊様、玄関に來客が見えられましたか」

「ご苦労様、私に対応しますよ」

「悪い、ここに曹仁って男はいるかい？」

豪ちゃんを訪ねてきたのは、髪を結った礼儀を知らない女だ。

「自分の名前も名乗れない方に曹仁様に取り次ぐ必要はございません」

「あー、悪い。俺は西涼の馬超つて者だ。洛陽に行くんなら曹仁に顔を見せてこいって母様に言われてさ」

馬超：たしか母親の馬騰が結婚をこり押ししてきた危険人物

「直接会う用件がございませんならば、私が曹仁様に馬超様と思われる方が見えた事を伝えておきます。曹仁様は次の旅支度でお忙しい身ですからお引き取り願います」

「せっかく来たんだから取り次ぐ位できるだろ」

「連絡もおよこしにならない自称馬超様を曹家の長男たる曹仁様に取り次ぐ家臣は当家にはおりませぬ」

何より私の豪ちゃんを狙う親子に会わせる訳にはいかない。

side 馬超

母様に名代で洛陽に行ってくる様に命令され、ついでに曹仁に顔をだす様にも言われた。

手合わせ以来、気まずくて曹仁とはあまり話をしていなかったんけど命令なら仕方ないよな。

曹操の家に曹仁の事を聞くと出てきたのは、あたしなんかと違って、落ち着いた綺麗な女だった。

でもこいつが、面倒臭いと言うか失礼なやつで曹仁に取り次がないばかりか私を馬超と信じようともしない、そりゃ連絡するのを面倒くさがった私も悪いんだけどさ。

曹仁は見た目は怖いが、気さくで話しやすい奴だったのに。

「あたしは馬超だ。そつちこそ名前を名乗らないのは失礼じゃないのか」

「私ですか？私は曹家にお仕えしている朱霊という者ですよ。この誰だかわからない人に名乗る必要はありませんから言わないだけです」

「だから馬超だって先から言ってるじゃないか」

side 豪

「陽どうした？随分賑やかだな。おつ馬超殿じゃないですか？どうなされました」

「曹仁お前んとこの家臣は随分と頭が硬いんだな。お前への取次ぎを全然許可しないんだぜ」

「取次ぎって、こんな朝っぱらが連絡もよこさないでか？それで陽を攻めるのはお門違いでしょ。第一そんな事したら陽が姉ちゃんに叱られるだけです」

「それでもせめてあたしが馬超だって信じてもいいじゃないか」

「馬超様、少し曹仁様に馴れ馴れしくありませんか？」
「普段の陽って、もの凄いドライなんだよな。」

「別に曹仁とはダチなんだから構わないだろ」

空気がピッキンとなった、これは修羅場か？

陽やけにつっかかてるし

(き緊急連絡、時間停止を希望する)

『時間停止の条件を満たしてない為に許可はできません。』

時間停止は外史の人間に危害を加えない、自分から意識がそれている、物の移動など不自然な痕跡を残さない場合のみ許可されます。』

『みんな見るよ。修羅場だ、幼なじみと親が決めた許嫁ってリアル昼ドラじゃね。』

『豪さんやるねー。つかどっちも十代じゃないか？やばいよな』

(おいお前ら楽しんでないでこの状況を切り抜ける手段を教えてください)

『自分で撒いた種は自分で始末しろが豪さんの口癖じゃないですか。面白いので通話を切って監視にさせてもらいますね』

あいつら、あっさり連絡を切りやがって上司権限で、いつかきつい外史に飛ばしてやる。

「まさか本当に婚約者なんて言うんじゃないやありませんよね」

「こ、こ婚約者って何だよ。あたしはそんなの知らないぞ」

「陽、あれは馬騰様のごり押しだから馬超殿は知らないと思うぞ。馬騰様の一件を馬超殿に伝えると、顔赤くして照れるていた。

そりゃ母親が婿に欲しいって話した男の所に自分から訪ねてきたって知ったんだからそうなるよな。

「豪ちゃんは、馬超様の味方をするの？陽より馬超様の事が好きなの？」

ヤバい陽がウルウルし始めた

「陽違うつて、馬超殿すまないが取り込み中だから今回は勘弁してくれ、つかマジにたのんます。そうだ陽、今日仕事終わったら一緒に飯食いに行こ。俺がおごつてやるから泣くな」

「まずいこの騒ぎを聞いたら姉ちゃんが来てしまう。」

「ごう、朝から何をしてるのかしら？」

遅かった、ご機嫌ななめなお姉様が俺の首に鎌を当てている。

「いや騒がしいから玄関に来たら、巻き込まれたというか。騒ぎが大きくなったとうか」

「曹仁、何か取り込み中みたいだからあたしはこれで失礼するよ。じゃなっ」

姉ちゃんの覇気にビビったのか戦略的撤退をはかる馬超殿。

「馬超殿騒ぎを起こして逃げるのは卑怯です。陽はもう泣くな。お姉様はそろそろ私塾のお時間では」

「そうね。私塾の時間ね、だから帰って来たら豪のおごりでご飯を食べながらゆっくり話を聞かせてもらっわよ」

当然のごとく春さん達も加わり、えらい散財をするはめになった。

また旅先で医術や鍛冶して旅費稼がなきゃな……

陽と馬超と巻き込まれる豪（後書き）

曹操姉ちゃんと陽コンビを打ち負かして豪に近づけるキャラいるだ
ろっか

感想指摘お待ちしております

曹仁伝が佐助を抜きそう感謝です

幕間 豪自問自答（前書き）

豪の一人語りです

乙女は一人もいません

つまらなくても勘弁して下さい

幕間 豪自問自答

何とか姉ちゃんを説得し、陽をなだめて洛陽を出発して数日立ったが日増しに俺の眉間には皺が深く刻まれていく。

あからさまに大地の力が衰えていやがる。

外史は民衆に英雄達を求めさせる為に大地の力を衰えさせ民衆を窮地に追いやってやがるんだ。

今飢え死にしている民衆は外史により英雄に捧げられたら生け贄みたいなもんだ。

こんだけ身勝手な外史も珍しいな、いや俺のいた正史から生まれた外史はみんなこんな物かもしれない。

袁紹もある意味で被害者といえるかもしれない袁紹は名家に生まれた嫌な奴って勝手なイメージが凝り固まってできたのが、あの金髪ケバ女なんだから。

創竜のオジキは何で俺をこの外史によこしたんだろう。

何で曹操を姉に選んだんだろう。

俺にこの外史をどうさせたいんだろう。

俺はどうしていったらいいんだろうか。

目の前の一人を今だけ救うのは簡単だ、飯を与えたり富をあたれば一時は救えるだろう。

でも飯を食い尽くした後には又飢えるだろうし、富は賊を呼び寄せる餌になりかねない。

姉ちゃんは、陽は、春さんは、秋さんは、俺に会わなかったからどんな外史生活を送ったんだろうか。

馬超やこれから会う人達は、俺と会ったせいで人生を狂わせたりしないだろうか。

一度オジキに会わなきゃいけないな

アメルお姉ちゃん、アグー爺さんにも会いに行きたい。

幕間 豪自問自答（後書き）

いや今回の豪というより作者の自問自答かも
アメルやアグー爺さんだしていいかな？

豪についてくる恋姫は誰がいいか？

感想指摘お願いします

皆様の意見をお聞かせ下さい

もう一人のお姉ちゃん くアメルとく サモンナイト2より(前書き)

作者の精一杯の努力でサモンナイト2を知らなくても大丈夫にした
つもり

もう一人のお姉ちゃん　くアメルとく　サモンナイト2より

この後どうするか、答えをだせないまま荒野を歩いていると

『事務所より緊急連絡です。お休み中の所申し訳ありませんが、創竜様がお呼びですので一度お戻り下さい』

（わかった。周りには誰もいないからよろしく頼む）

光に包まれると、この外史から曹仁という人間は消えていた。

次に俺が目にしたのは巨大な竜、全ての正史や外史を司る創竜のオジキだった。

「オジキ直接召還とは珍しいな」

「豪よ、休み中済まん。既に気付いていると思うが、あの外史を利用しようとしてる輩がいる」

「いるって、最初からわかっていて俺をあそこに飛ばしたんだろ？ バカンスでもなんでもねえじゃねえか」「すまんの、俺が直接手をだす訳にはいかんからの」

オジキが1個の外史の為に動くと、残りの正史や外史が無防備になつてしまつ、その為に俺等みたいな矯正指導員がいるんだからな。

「でその馬鹿の目星はついてるのか？俺としてはそいつを直ぐにでもシバいて、あの外史からおさらばしたいんだよ」

「目星はついておるが、まだ手出しはできないんじゃないか。しかしそれなりにあの外史を満喫しておったのではないか？」

「満喫して感情移入しちまってな、曹仁はこのまま行方不明になっても構わないんじゃないのか？」

「雄獅子ともあろう者が情けない。バカンスは中止じゃ、きちんとあの外史を見てお前の思う正しい形に糺せ。それが自然と今回の黒幕にも近づく事になるだろう」

「はいはい、わかりましたよ。一休みしたら行きますよ、それと普通に働いてんだから、有給は取り消してくれるんだろ」

「有給は全てが終わった時に決める」

(流石は雇い主だね、そう簡単には有給取り消しはしてくれないか)

.....

「おっちゃん久しぶり。一杯くれや」

オジキの所を後にして俺が向かったのは事務所の近くにある居酒屋。この居酒屋は色々な外史の酒を置いてあり前にいた外史を懐かしむ指導者や報告にきた統括者や管理者に愛用されている。

「豪か？ヒゲどうしたんだ」

「今行ってる外史で剃られたんだよ、龍殺しはあるかい？」

龍殺しは俺が最初に行った外史にある酒

「すまないが売り切れだ」

「珍しいな、なら俺のいた正史のウオツカの一番きついやつをロツクで頼む」

「あらー、元若人ウオツカをロツクなんてやるようになったわね」

「メイメイさん！龍殺し売り切れの原因はメイメイさんか」

メイメイさんは俺が最初に転生した外史の統括者だ。研修中の俺は大分世話になりオジキに次いで頭が上がない人でもある。

「雄獅子の噂は聞いてるわよ。お陰で統括者の集まりでも鼻が高く
てね、あなたの外史に雄獅子をやるわよって言えば飲み放題になる
し」

「そりゃどうも、でそっちのみんなは元気かい？」

「あなたがいた外史の連中は元気だし、みんな豪を心配してるわよ。
中にはここまでついてきた娘もいるし」

「えっ！誰が来たんだよ」

その時俺のウオツカが下げられ、代わりに芋がたっぷり入ったスー
プが乗っていた。

「豪君も、こんなお酒を飲むようになったんだねー。でもおイモさ
んの方が身体にいいよ」

「アメルお姉ちゃん!!」
アメルお姉ちゃんは、俺が最初に転生した外史での姉兼母親代わりだった女性。

人の心の傷を癒やす事で体の不調も治せる聖女様でもある。
まあ豊穰の天使アルミネの転生らしいから納得なんだけどな。

「メイメイさんから色々お話聞いたよ。随分無茶してるみたいだね」
そう言うとアメルお姉ちゃんは俺に手の平を当てて目を瞑る。

(やばい、女神の力使われたんじゃ誤魔化し様がねえ)

しばらくすると、アメルお姉ちゃんの目に涙が浮かんできた。

で

「あへるおねえひゃん、なにするんだよ」

アメルお姉ちゃんは両手で俺の頬を引っ張り出したんだ。

side アメル

私が見た豪君の心には虚しさが溢れていた。

元から優しい子なのに、わざと魔王さんや悪者を演じて人からそしりを受けて自分が倒されると喝采が起きていく。

中には豪君が倒された日が記念日になっていた世界もあった。

それでも身も心もボロボロになりながらも世界を糺しにで出掛けていく。

「豪君、お姉ちゃん言ったよね。辛くなったら帰って来なさいって、豪君の心を見たお姉ちゃんの方が辛いくらいだよ」

「いや、だって」

「言い訳はしないの。それと今のお仕事から逃げるのも駄目だよ。今逃げたら豪君きつと後悔するよ、そんな豪君はお姉ちゃん見たくないな」

「うん、ごめん。ありがとう」

何だかんだ言っても私はこの体も年も追い越しても、今だに手の掛かる弟が大事なんだ。

他の世界では豪君を知らない私もいるみたいだけど、この弟を遣わしてくれた創竜様に感謝をしている。

「ほら人参さんもちゃんと食べるの。もう顔にスープついてる」

「何で人参いれるんだよー」

「いい年して好き嫌いしないの」

side 豪

久しぶりに会えたもう一人の姉のお陰で、気力も満ちてきた。

俺が救える命なんて、僅かに過ぎない。

だから姉ちゃんを助けてあのふざけた外史の犠牲になる人を少しでも救ってやる。

最初の物語から離れ、自分の世界の住人を犠牲しまで一人歩きするふざけた外史はきちんと、俺が糺してやらないとな。

もう一人のお姉ちゃん くアメルとく サモンナイト2より（後書き）

サモンナイトを選んだ理由は最後に明かしたいと
感想指摘お待ちしております

豪再び外史に立つ　そして又間違われる（前書き）

とうとう曹仁伝が佐助を超えました。

感謝です

豪再び外史に立つ　そして又間違われる

さて決意も新たに外史に来たんだが

俺は今剣を突きつけられている、今度は熊じゃなく山賊の疑いを掛
けてるんだよ……

アメルお姉ちゃんもう帰っていいかな

「山賊さん、散々うちの土地を荒らしてくれたみたいね。あの世に
送る前に名前ぐらいは聞いといてあげる」

今度は褐色の肌に桜色の髪の女。

「曹家の長男で曹仁って者だ。山賊は見た目は見た目で決めてない
か？」

「曹仁？嘘ならもっと上手くつくのね。曹操は陣留の勅史よ、その
身内が何で荊州の山にいるのかしら？」

「まじ？姉ちゃん勅史になったんだ。流石だな」

「貴男ね、剣を突きつけられていて怖くないの？」

「こゆう時は…ほれっ」

俺は剣の真ん中あたりにデコピンをかます。

「えっ、キヤッ」

見事に剣が吹っ飛んでいく。

「そいじゃ、俺は陣留に行くから。」

「雪蓮大丈夫？」

今度は同じ褐色の肌でも黒髪に眼鏡の女か。

「冥琳怪我はないわよ。でもあの自称曹仁の山賊を捕まえなきゃ」

まだ山賊扱いかよ、山賊ならとうの昔に襲ってるって。

「曹仁？…雪蓮あの男に何をした」

「えっ、剣を突きつけられたら指の力で剣を飛ばされたんだけど」

何か黒髪の女の額がびくついてるな。

次の瞬間ゴツと辺りに大きな音が響く、黒髪が桜髪の頭に思いつきり拳固をかましていた。

「いったーい、冥琳何するのよ」

「あの人は自称じゃなくて本物の曹仁殿だ。前に朝義で曹家から人捜しの依頼が来てたじゃない。曹仁殿の特徴は背が高く身は厚く厳つい顔に馬鹿力どう見ても曹仁殿その者でしょ？この大事な時期に曹家と問題をおこしてどうするのよ」

「人捜しだされてんの、俺？うわー帰りづらっ。今の事はなかった事にするからウチの情報教えてくれ」

「わかりました、私は周瑜と申します。で今うづくまっているのが孫策。曹家は長女曹操を中心に目覚ましい活躍をみせています。それに夏侯姉妹と朱霊それに最近加わった軍師の荀イクの活躍が目立

っています」

「あっ、朱霊であれでしょ？我がゴアイの剣に託した思いを力に変えてって言う口上で有名になった武将でしょ。曹仁はゴアイの由来わかる？」

「俺の真名が豪なんだよ、その剣は俺が作ったやつだし」
陽のあほー、何て恥ずかしい口上作ってんだよ。」

「ほう、噂のゴアイの意味は豪愛だったのか。堅物で有名な朱霊將軍も中々乙女なんだな」

「孫策殿、周瑜殿、話はそこまでだ。囲まれてんぞ」

side 孫策

「こいつはいい。いつも手下が世話になってる呉の姫様と軍師様がお供も連れずにいるぜ」

その言葉に合わせたかの様に森の中から、賊達がぞろぞろと湧いてきた。

「あんた達ね。うちの民相手に誘拐やら略奪やら好き勝手してくれたのは」

「弱い奴は強い奴の何をされても文句は言えないんだよ」
賊がむかつく笑みで答えてきた。

「もう一人いるのは曹操の弟みたいですよ」

「いーね姫様と軍師様を楽しんで曹操から身の代金をせびる。最高

「じゃないか」

いつの間にか巨大な斧を携えた曹仁が小声で話しかけてきた。

「いいか、もう少ししたらお前たちはしゃがんでろ」

「お坊ちやま、そんなでかい斧を扱えるんですか？第一この木多さじゃまともに振るえないですよ？」

辺りを山賊の嘲笑が包んでいく。

曹仁の顔が憤怒に彩れどていく、体から溢れ出る殺気はどんな戦場でも感じた事がない濃さ。

「冥琳しゃがむわよ」

私は強引に冥琳を引っ張ってしゃがませた。

「知らねえのか、斧は木を切る道具でもあるんだぜ」

そう言っつて斧を振るう曹仁に木と賊は一気に一刀両断されていく。

「曹家の長男は化け物みたいだっつて言うのは、見た目だけの話では、なかつたみたいね」

一振りで見界が綺麗になった山を見て冥琳が呟く。

残っている賊は一人だけ、先まで曹仁を馬鹿にしていた男ね。

「た助けてくれ。この通りだ、すまなかつた」

腰を抜かした男は必死に土下座をしている。

「曹家のお坊ちやまは、嘘つきが嫌いでな。弱い奴は強い奴に何をされても文句言えないんじゃないかな」

曹仁は底意地の悪い笑みを浮かべている。

あれ見たら小蓮は泣くだろうし、連華は曹仁が悪者と思うわね。

「曹仁その辺で許してあげたら、流石に山賊なんてもう懲りたと思うから」

許したくはないけど、それ以上に私の中では今の曹仁が怖い気持ち
が勝っている。

「流石は姫様だ。曹仁様も朱霊將軍の豪愛の剣の由来だけあってお
強い」

あっ、曹仁の額が冥琳みたいにびくついている。

「へー、先の話聞いてたのか？そうかそうか。なら記憶を消し去っ
てやる！」

山賊の男は曹仁にボコボコに殴ってしまったわ。

(冥琳、冥琳曹仁の前で豪愛の剣は禁句ね)

(雪蓮、私も同感だ)

「さて、山賊退治の礼に飯でもおごってもらうぜ」

そう笑う曹仁からは先までの怖さは全く感じれなかった。

豪再び外史に立つ　そして又間違われる（後書き）

今回は魏だし　佐助は蜀だし　呉のやつも書こうかな。もちろん主人公は美男子になりません

感想指摘お待ちしております

姉弟の再開（前書き）

よーやく原作のスタートに

姉弟の再開

孫策達は飯をおごってくれた上に路銀までくれた。

一路陣留へ

姉ちゃんを手伝いこの外史に平和を
何より陽の口上を止めさせる為に

でも急ぐ旅程、邪魔が入るんだよな、今みたいに……

「その男、金目の物を置いてきな」

脅しをかけてきているのは、頭に黄色い布を巻いた男達、黄巾党つて奴か。

俺は男達に奇妙な違和感を覚えた、普通悪事に身を染めた人間は顔に独特な陰があらわれる。

しかし男達の殆どは善良そのもの顔つきをしている。

恐らく英雄達を引き立てる為に、外史が普通の民だった者に干渉をして黄巾党に仕上げたってところか。

「身包み全部置いてけば命は助けてやるぜ」男達はにやつきながら近づいてくる。

しかもこいつら、罪悪感を麻痺させられていやがるな。

ここまで外史に束縛されると、この外史では不幸にしかねない。

…こうなったら俺が救うしかないな……

俺達の仕事でサーチ以上に重要な能力がある、それは外史にとらわ

れた魂を輪廻させる力。

俺達が終わりを迎えさせた魂は外史や正史の輪廻の輪に迷う事なく加わる事ができる、いくら役目とはいえ人を殺すのは精神に負担がかかり過ぎるからな、殺すのではなく救う為に終わりを迎えさせる。それが俺達の重要な役目でもある。

曹仁は静かに斧を構えた、その姿には神に祈りを捧げる様なおしくそ厳かさ
がさえ感じれた。

「お前達の魂につけられたら罪は俺が洗いながしてやる」

斧を振るう曹仁の表情に怒りや勇ましさはなく、まるで泣いてる様な虚しさに溢れていた。

10分もすると、そこに動いているのは曹仁だけとなっていた。

「お前達も次の世では平和に生きれたらいいな…」

side 卑弥呼

雄獅子殿の闘いは、見ているだけでも身震いがする様じゃった

「大変なお役目ですな」

「卑弥呼か、外史に携わる者が誰かがやらなきゃいけない事さ」
雄獅子殿はおどける様に両手を広げてみせた。

「天の御遣いの噂が広がり始めたので、お知らせにまいりました」

side 豪

何でもこの外史では、天の御遣いが現れる前に管轄と言う占い師の言葉が国中に広がるそうだ。

不自然なぐらいに…
まっそれでなきゃ、ただの学生が天の御遣いとして崇められないしな。

「わかった。でも俺もこの外史の争乱に参加する事にしたから、場合によっちゃ、御遣いをしばくかもしれないぜ」

「やはり雄獅子殿は曹操殿の所に身を置かれるのですか？」

「ああ、情もうつってるしな。今更姉ちゃん達とケンカする気になれねよ」

「わかりました。それで雄獅子殿は陣留に向かわれるんですか？」

「まあな。少しでも多く黄巾の連中を輪廻させながら行くさ」

この外史では、天の御遣い噂と同じかそれ以上の速度である噂が広がっていた。

背の高い威つい男が、斧を振るい単騎で黄巾党を倒していく
斧の雄獅子の噂が

side 荀イク

私が敬愛する華琳様にお仕えして一年近かった。

華琳様の元で働くのに至上の喜びを感じている、でも時々華琳様が遠くを寂しげに見つめているお姿をお見かけすると胸が締め付けられる様な痛みを感じてしまう。

私は華琳様の気を紛らわす為に細作が集めてきた様々な噂を言上していた。

「最近民がある噂で騒いでおります」

「管轄つて占い師が言った天の御遣いとかの話なら、くだらなくて聞く気も起きないわよ」

「いえ、同じぐらい民が騒いでいる噂に斧の雄獅子というものがございませう」

曰わく背が高く身も厚く厳つい顔にヒゲを蓄えた獅子の様な男が、馬鹿でかい斧を振るい一人で黄巾党を倒していると話聞いていた華琳様の双眸には光が溢れてきている。

「春蘭、秋蘭、陽、貴方達は今の噂をどう思う？」

「華琳様、多分間違いないと思います。私が放った細作も確認しておりますから」

「まただ、朱霊は武将の癖に華琳様に軍師の様な言上をする、武将なら武将らしく春蘭みたいに脳筋が相応しいのに。」

「それなら陽なら雄獅子を捕らえる策もできているでしょう」

無理に決まっている、雄獅子は一人で何千何万の黄巾党を倒す男だと言う、そんな男は捕らえるのは相当な損害を覚悟しなければいけ

ない。

「はっ、私が選んだ兵100人程で雄獅子を捕らえる事ができます。後数日もすれば雄獅子は陣留に入ると思われますので、その際には必ずや華琳様の前に雄獅子を連れてまいります」

「流石は陽頼もしいわね。その策を聞かせてちょうだい」

「ならばお耳をお借りいたします」

羨ましい、いや厚かましい事に朱霊は華琳様の耳に策を囁いている。

「おもしろい策ね。それなら確実に雄獅子を捕らえる事ができるわね。早速編成を始めなさい」

悔しい事に策を聞いたを華琳様は、私が今まで見た事がない位嬉しそうに顔をなされていた。

華琳様だけでなく春蘭や秋蘭等の古参の将や兵も笑顔を見せていた。

side 豪

いよいよ陣留に入った、もう少しで懐かしい顔ぶれに会う事ができる。

姉ちゃんや陽に何て謝ろう、つか軍に加えてもらえなきゃどうしよう。

陣留での姉ちゃん達の噂も聞きたいから情報収集しなきゃな。

広範囲にサーチを行うと幸いな事に、この近くに村があるのがわかった。

村につくと村は慌ただしさに包まれていた。

「すまんが兄ちゃん、今のこの村に寄っても何もできないで」何故か関西弁で話しかけてきたのは女は水着を着ていた。

「宿もいらぬし話だけでも聞けたら助かるんだがな」

「もう少ししたら黄巾の連中が攻め込んでくるんや。兄ちゃんも巻き込まれたくないやろ」

「なら黄巾を倒すの手伝うから話を聞かせてくれ」

話を聞くと関西弁女の名前は季典と言い義勇軍だそうだ。

「風、沙和この兄ちゃんも手伝ってくれるそつや」

「真桜ちゃん、もしかするとあのお兄さん今噂の雄獅子じゃないかって沙和は思うの」

「そつやな、確かに噂の姿とかぶるな。風はどう思うっ？」

「尋常ならざる気をもっておられるから間違いないと思うが」

「なら直接聞いてみるの。お兄さんは雄獅子さんなの？」今度聞いてきたのフリフリ眼鏡の于禁って女。

その奥では傷シヨートカットが警戒をしている。

「噂かどうかわからんが雄獅子は俺の異名だぜ。で俺は何をすりゃいいんだ」

side 季典

バケモンって、本当におるんやな。

雄獅子の兄ちゃんに西門の防衛をまかせたら西門に攻めてきた黄巾の連中を瞬く間に殲滅しおった。んでそのまんま雄獅子の兄ちゃん
は他の門の黄巾の連中も殲滅しにいつとる。

沙和は雄獅子の兄ちゃんにビビっとるし、凧は憧れの眼差しで見
ておった。

「すみません季典様、陳留の夏侯淵將軍が援軍で見えられました」

「わかった、連れてきてや」

少しすると、落ち着いた感じの女がきおった、あれが夏侯淵將軍や
な。

「済まないがここが黄巾に襲撃された村で間違いないか？その割に
は静か過ぎる気がするんだが」

まっ、そりゃそつやろな黄巾の連中は雄獅子の兄ちゃんが殆どシバ
いてもうたし。

「ああ、今噂の雄獅子の兄ちゃんが偶然来て黄巾の連中を殆どしば
いてしまったんですよ」

「雄獅子、ここには雄獅子が居るんだな。誰か本陣に早馬で伝令を
雄獅子を発見した。済まぬが雄獅子を村中に誘導してくれないか」

side 豪

あらかた黄巾の連中を倒すと疲れただろうと村の民家で休む様に進められ休んでいると、外から馬蹄の音が鳴り響いたので飛び出してみると、

村の周りを姉ちゃんの所の兵がぐるりと手を繋いで囲んでいた。

しかも全員俺の知己ばかりだ。

兵達は俺に気づくと口々に

「曹仁様私は最近結婚をしました」

「私は恋人ができました」

「私には子供ができました」

と幸せ自慢をしてきた。

「だから、この輪から出ないで下さい。私達の幸せを壊さないで下さい」「」

こりゃ陽の策だな、俺がこの輪からであると知己の兵が罰されて幸せも壊れると

「わかったよ。大人しくしてるから早く姉ちゃんの所に連れて行け」

「豪その必要はないわよ」

久しぶりに会う姉ちゃんが笑顔で近づいてくる。

「姉ちゃん、元気だったか？」

「元気？よくそんな言葉が言えるわね。お姉ちゃんがどれだけ豪の事を心配したかわからないの？今日はたっぷりお説教してあげるから覚悟しなさい」

姉ちゃんは笑顔から怒り全開でお説教を شدした、でもそのお説教には俺への愛情が溢れており自然と涙がこぼれてきた。

「姉ちゃんごめん。それとただ今」

「うんお帰りなさい」

姉弟の再開（後書き）

曹仁のお気に入り登録が増えて感謝です

感想、指摘をお待ちしております

幼なじみとの再会（前書き）

今回はかなり短めです

幼なじみとの再会

side 華琳

噂の雄獅子はやっぱり弟の豪だった。

美髪の山賊殺し関羽と並んで諸侯が興味を持っている在野の将雄獅子、そのでたらめな強さは噂になっていたけれども雄獅子の名前を知る者は少なかった。

「豪は黄巾を討伐している時は名前を名乗らなかったみたいわね」

「どうせなら噂も姉ちゃんのお土産にしたかったしな。それに陽の剣の事もあつたし、姉ちゃんあのこっぱずかしい口上なんで止めないんだよ」

曹仁帰還よりも、雄獅子が曹操軍に加入したって話の方が、今なら話題性もあり周囲に広まるのも早い、その上で討伐で活躍して雄獅子は曹仁であつたとの噂を広げれば、周囲への牽制にもなる。

「お姉ちゃんがきちんとそのお土産を活用してあげるね。陽の口上は諦めなさい、貴男が作った剣が切れ味がありすぎるのも原因なんだから」

陽の口上が広まったのは、武の腕もあるけれども剣の凄まじい切れ味が要因でもあつた。

鎧や盾を簡単に切り裂いてしまう剣が噂にならない訳がないんだから。

「姉ちゃんに渡した剣の切れ味も変わらない筈だぜ。陽のやつどうすりゃあんな口上思いつくんだろ」

「他の娘への牽制と、豪に忘れて欲しくないからでしょ。ほら噂を

すれば何とやらよ。しつかりおやりなさい、我が軍の名将朱霊を泣かしたらお姉ちゃん承知しないからね」

黄巾討伐で活躍した陽に報奨を訪ねたら

「豪ちゃんの副将にして下さい」

だったものね、豪貴男かなりの果報者よ。

side 陽

雄獅子捕獲隊の一人で、私の幼なじみの兵が笑顔で近づいてくる。

「陽、雄獅子はやっぱり」陽の豪ちゃん「だったわよ。今曹操様がお会いになってるから、早く会ってうんと甘えてきなさい」返事をする時間も惜しく気付くと私は駆け出した。

着いた先にはいた、いた、いたー!!!

「ごーちゃん、ごーちゃん豪ちゃんだ。豪ちゃんを確保だー」

華琳様の前である事を忘れて私は豪ちゃんに抱きつく、豪ちゃんまた背が大きくなったし身体も分厚くなっていた。

side 豪

他の人にも挨拶に行きたいんだが、陽が離れる気配は全くない。

「そうだ、姉ちゃんあの村の義勇軍の三人は中々の人材だから推挙するよ」

「むー、何で陽が側にいるのに、他の娘の話するの」

陽は、子供の様に頬を膨らまし、俺のヒゲに手をかける。

「いてっ、陽ヒゲを引っ張るな」

「ほら、豪も陽も何時までもじゃれてないで、帰るわよ。豪帰った
ら新しい将との顔合わせをするからね」

その久しぶりの光景に周りの兵からは自然と笑みがこぼれる、変わ
り始める時代の中の昔から替わらぬ微笑ましい光景に。

幼なじみとの再会（後書き）

予定では凧や天和が、豪になびく予定だったけども、陽オンリーの
方がいいでしょうか？

指摘感想お待ちしております

獅子と猫

side 陽

久しぶりに豪ちゃんを堪能してご機嫌な私を一瞬にして不機嫌にする奴が近づいてきた。

軍師の荀イク、頭はキレるが華琳様を敬愛するあまりに周りが見えなくなり春蘭様の揚げ足をとって喜んでいるお馬鹿。

豪ちゃんも軍で厄介なのは自らの才に溺れて周りを批判する奴だつて教えてくれた。

舌戦で勝った將の部下は奢り、負けた將は部下の信頼を失う。

將の信頼を失い、部下の命令系統が機能しなくなった隊は壊滅しやすく、他の隊にも悪影響を及ぼす。

部下は將を信頼して始めて隊としての活躍できるんだと、敵の細作が流言を流すのならともかく、身内の軍師がそれをやったらいくら有能でも害悪にしかすぎない。

仲良し子よしな隊ではなく、將と兵が互いの能力を信頼しあうのが理想的な隊だ。

全部豪ちゃんの受け売りだけど、討伐に出てこの話の重要性が身に沁みた。

「ちよつと朱霊、あの暑苦しい男と知り合い？なんであんなムサイのが華琳様の隣にいるわけ？華琳様の美しさが損なわれてしまっじゃない」

豪ちゃんは、雄獅子を通してあるから荀イクは、雄獅子が曹仁で華琳様の実弟である事を知らないらしい。

「荀イクさんは雄獅子殿を信用しておられないのですか？雄獅子殿

の噂を考えれば華琳様が隣に置き宣伝に使うのは納得できる筈ですが」

宣伝っていうより、豪ちゃんが逃げ出さない為の対策も兼ねてるんだけども。

「馬鹿らしい男が武で活躍できるわけないじゃない。私はあんな化け物みたいな男がきて華琳様の陣留が汚されるのが嫌なの」

へー、私の前で豪ちゃんを化け物とか暑苦しいって言うんだ。いい機会だから、この軍師の伸びまくった鼻をへし折ってやらなくちゃね。

「つまり雄獅子殿は曹家には必要がないとおっしゃりたいのですか？もし雄獅子が名家の生まれなら、それは余計な軋轢を産むのではないでしょうか？」

「あんなのが生まれた家が名家な訳がないじゃない。馬鹿らしい」

言ったよね、はっきり言ったよね曹家が名家じゃないって。

周りの兵は私の意図に気づいて顔を青くしたり、笑いを堪えている。

荀イクは自分の論に酔っているのか、周りも同論とと思っている為か気づいていないが。

まあ 文武ともに豪ちゃんが規格外でもあるんだけどもね。

何か陽のいる辺りが、妙に騒がしい。見るとちびっこいのが陽を相手に騒いでいた。

「姉ちゃん、陽と騒いでるのは新しい将？」

「軍師の荀イクよ、頭もキレて可愛くて私のお気に入り娘、まだ豪に紹介していなかったわね」

姉ちゃんが可愛いね、余り紹介されたくないんだよな、実姉のレ相手なんて、関わりたくもない。

「豪、最初の仕事よ。あの騒ぎを納めて来なさい」

女同士のケンカ何かに口をだしたら、絶対どつちかから恨まれるだけだぜ、陽の敵なんてしたら考えたくもない事が起こりそうだし。でも俺に反論の余地はないから行きますか。

- - - - -

「朱霊將軍、随分賑やかですな。これは曹家の慣わしですか」

うわっ、何だあの軍師は猫耳がついたフードなんか着てやんの、めっちゃガンたれてきてるし。

「これは雄獅子殿、こちらは軍師の荀イク様です。今丁度雄獅子殿の話をしていましたよ」

陽も状況を見て、俺への態度を決めている。

「美女二人の噂になるとは光栄ですな」

「自意識過剰じゃない、貴男みたいに暑苦しい男を誰が好んで話題にするもんですか」

(陽、陽この娘は本当に軍師か?)

(頭はキれるけど、自信がありすぎてね。今も雄獅子を曹家から追いついて息巻いていたんだよ)

(姉ちゃんも陽も、この軍師様の鼻をへし折れと)

「これは手厳しい、軍師殿に嫌われた様ですね」

「当たり前じゃない、男と話をして妊娠したらどうするのよ」「いやいや、どんな性知識だよ、正史の小学生の方がましだぜ。」

「男の癖に武官なんて足を引っ張るだけで役にたたないわよ。どうせ夏候惇みたいに脳筋なんですよ?」

「新参者が、春さんを馬鹿にしてんじゃねえよ。手前に春さんみたいな武があるのか、武官文官共に足りない所を補うもんだぜ。手前一人で戦ができるもんならやってみな」

「う、うるさいわね。春蘭より役にたてば問題ないでしょ」

「無理だな、いくら頭がキレても隊内の和を乱して喜んでる小物が春さんになう訳がない、まして相手の素性も調べないで食ってかかる軍師何ぞに外交はまかせれないしな」

「先から何よ。男の癖に名前も名乗らない無礼者に言われたくないわよ」

「陽は俺の事をよく知ってるし、普通は下の者が先に挨拶するのが礼儀だろ」

「新参者が私より上のわけがないじゃない」

「新参者がなんで朱霊や夏侯惇の真名を知ってるんだ？少し考えたら疑問に思わなきゃいけないだろ。第一なんだその服は？公事中に私服を着る軍師は駄目だろ」

「うるさい、うるさい、うるさい華琳様に言いつけてやるんだから」

「あー、教えてやるよ。俺の名前は曹仁、曹家の長男で華琳姉ちゃんの実弟だ。名前を名乗らなかつたのは論議する相手に権力や名で押さえつけるのは反則だからだ」

「私から華琳様に言いましたよ？荀イク様は曹家は名家に非ずと思っただけ、華琳様の大事な実弟の曹仁様を追い出したい思惑があるよ」

陽嬉しそうなだー、何か腹立つ事あったんだろうな。

「まっ、姉ちゃんは貴女を軍師として買っているんだし、これからよろしく頼むぜ」

「悔しいー、悔しい。文官の私が言い負かされるなんてー。何が曹仁よ、私は認めないからね」

「いい加減にしろよ、軍師が隊律を乱したら示しつかないだろうが。手前の才誇りもいいが、軍師が簡単に相手に尻尾を握らしてどうするんだよ。軍師は武官の才を信用して策略を建てるもんだぜ。今のお前じゃ私怨で策を建てるって誤解されんぞ」

s i d e
陽

私は今とても機嫌がいい、豪ちゃんの大喝で泣いてしまった荀イクを華琳様が諭しているので豪ちゃんを独占できるからだ。猫が獅子に勝てる訳がないのにね。

獅子と猫（後書き）

豪の役職どうしよう

指摘感想お待ちしております

豪と模擬戦（前書き）

曹仁伝を楽しみにしてくれてる人いたら感謝です

豪と模擬戦

side 豪

陣留への帰路、休憩をとっていると義勇軍の三人娘が話しかけてきた。

「雄獅子の兄ちゃんおおきにな、うちらを曹操様に推挙してくれたんやろ」

大阪のおばちゃん並みのフレンドリーさで季典が話しかけてきた。

「でも流石は雄獅子さんなの、初めて会った曹操様に推挙なんて中々できないの」

于禁、俺も初対面ならあの姉ちゃんには推挙は無理だよ。

「曹操様もそれだけ雄獅子殿をかっておられたのだ」

楽進、それは完璧な買い被りだよ。

「俺は関係ないよ、お前等に才があったからだろ」

姉ちゃんの人を見る目は確かだしな。

「あら、豪あんまり他の娘と仲良くしていると陽が泣くわよ」

「雄獅子の兄ちゃん、曹操様と真名も交換したんか」

派手に驚く季典、姉ちゃんが真名を許してる男は身内だけだから仕方ないが。

「豪、三人にも名前を教えてないの？桂花をなだめるの大変だったんだからね」

「三人と会ったのはこれで二回目だから仕方ないだろ」

「何か雄獅子さん、曹操様とすごく仲良しなの」

「当たり前だろ、姉弟なんだし。俺の名前は曹仁、曹操は姉ちゃんなんだよ」

「「「姉ちゃん!?!!!」」」
また三人見事に八モったな。

「信じれないの、曹操様と雄獅子さんはあまり似てないの」
それは何回も何十回も言われたよ

「どちらからと言うと雄獅子殿の方が年上にみえるのだが」

それに関しては否定できないな。

「ちよい待ち、まだ義理の姉弟の可能性もあるで」
正史ならDNA鑑定もんだよな。

「この子は間違いなく私の可愛い弟で、曹家の長男の曹仁よ」
姉ちゃんの一言でようやく三人とも納得したらしい。

「まっ、お前等も曹家の一員となるんだ。よろしく頼む」

「陣留にいたら、紹介も兼ねて豪と手合わせをしてもらおうわね。
豪は他の武将とも手合わせをしてもらおうよ」

「わかった。そいや姉ちゃん俺も見習いでいいんだろ」

「馬鹿おっしやい。豪は私の親衛隊に所属してもらおうよ。指示はその都度私がだすからね」
つまり、しばらくは何でも屋をしると。

.....

無事に陣留についたのは、いいんだが姉ちゃんの人使いの荒さを実感する羽目になった。

「弟の曹仁が今度から軍に加わる事になったから、各武将は挨拶代わりとして模擬戦を命じるわ」

俺に各武将の弱点を自覚させようって所か。

「まずは今入った三人が模擬戦を行うわよ、最初は季典」

「おっしや、うちの実力みせたる」

季典の使う得物は、ドリル付きの槍って…何の動力で動いてんだ？

「雄獅子の兄ちゃん、螺旋の動きを味わい」

（あのドリルにあの装置ついてんのか？試してみるか）

俺は季典の槍をかわしながら、ある場所に誘導していく。

「雄獅子の兄ちゃん、覚悟しいや。後ろは木だからもう逃げようが

ないで」

木に誘導したから当たり前なんだよ、俺は槍をよけた後に季典の背中を強めに押す、勢いをまして突っ込んだ螺旋槍は見事に木にめり込んだ。

「あかん、こつなると螺旋槍は中々抜けんのだ」

「次からは逆回転の機能もつけときな」

俺の攻撃は頭への拳固にしといてやった。

「いったー、その馬鹿でかい手で拳固くらわすなんて雄獅子やなく鬼獅子や」

季典が涙目で訴えてくる。

「戦場じゃ拳固じゃすまないぞ、次は于禁」

「嫌なの！雄獅子さんみたいなの化け物に沙和みたいな可愛い女の子が適う訳ないの」

「いいから構えろ」

于禁は双剣か、なら。

「おらおら、懐に入らなきゃ双剣は活かせないぞ」

俺はボクシングのジャブで于禁を翻弄していく。

「無理なの！そんなに早く拳をだされたら懐にはいれる訳ないの」

「だったら隙をつくる方法や蹴り技や素早さを身につけるんだな」
同じく拳固をかます。

「痛いのだ。沙和の可愛い頭がデコボコになっちゃうの」

「そんだけ言えるなら、まだまだ大丈夫だ。次は楽進」

楽進は体術に、気弾が面白れえ。

「おらおら、いくら遠くから狙える気弾でも、狙いが単調なら当たる訳ないだろ。体術を活かして相手を翻弄して隙を狙って気弾で仕留めてみる」

「無理です、雄獅子殿はその巨体で私より素早いではないですか」

「ちなみに巨体だけじゃねえぞ」

俺は両手に気をまとわせて、楽進の気弾を撃ち落としていく。

「気弾を使える奴は少ねえが、他にいない保証はねえんだよ。最初から手の内を明かす馬鹿がいるか」
同じく拳固。

「わかりました。雄獅子殿、今後もし指導お願いします」

「次はどいつだ」

「豪、次は私の隊の季衣が相手だ」

春さんのとこの許緒か、しかしあの小さい体ででかい鉄球も振り回せるな。

「春蘭様、嫌ですよ。曹仁様は怖いです」

「季衣、大丈夫だ。豪の拳固は確かに泣く程痛いけど勝てば拳固をさ
れない」

春さんにもよく拳固がましたからな。

「おらおらどうした、もう終わりか？」

俺は斧で鉄球を打ち落としたり、叩きつけて地面にめり込ませてい
く。

「一撃放つたら位置を変えなきゃ懐には入れちまうぞ、こんな風
にな」俺は鉄球が戻るのにあわせて懐に飛び込む。

許緒はデコピンで済ましておく。

流石にあんなチビっ娘に拳固をくらわしたらまずいな。

「次は豪と同じ親衛隊の典韋よ」

姉ちゃんに言われてでてきたのは許緒と変わらぬチビっ娘、得物は
でかいヨーヨーって、スピンして突っ込んで来たりするんじゃない
だろうな。

「鉄球と違って途中で戻す事もできるだろ。後きちんと上下に分け
て放ちな」

「それとこうされたらどうするんだ？」

俺は斧の柄をヨーヨーの糸に絡ませる。

終始無言だった典韋が拳固への恐怖からか泣き出した。

「次からは俺の言った事への対策と体術か短刀術を習っておけ」

「ぐすつ、わかりました」

于禁達がひいきだつて騒いでいたが気にしない。

side 華琳

「どう私の可愛い豪は使えそう？」

私が話しかけたのは桂花、風、稟の軍師達。

「悔しいですけど、個人の武は抜きん出ております。後は指揮能力次第ですね」

桂花も私怨を抜いても認めたいね。

「面白いです。曹仁様を組み込んだら大概の策の幅をひろげられますね」

風は指揮能力が駄目な場合も想定しているみたいね。

「私も風と同じ意見です。むしろ兵が曹仁様についていけず曹仁様の武が発揮仕切れない可能性もあります」
稟も豪の使い方を見つけた様ね。

本当に自慢の弟。あの子が私の弟に産まれてくれた事に色んな意味で感謝しなくちゃね。

「華琳様、春蘭様も負けてしまいましたが大丈夫ですか」

「大丈夫よ風、豪も陽に違ふ意味で適わないから」

side 豪

結構粘った春さんに、張り手をぶちかましてダウンしたので終了し
ようとしたら

「豪ちゃんやっぱりあの三人と仲良しなんだ。流琉ちゃんだけに優
しかったよね」

「陽、目が怖いって。あれをどうみたらそうなるんだよ」

「ふうんだ。陽の事淋しくさせといて他の娘を構う豪ちゃん言葉
なんて聞こえませーん」

正史の泣く子と地頭には勝てぬと言つ言葉が心に染みる豪であった。

豪と模擬戦（後書き）

まだ天和どころか一刀もでてこない

豪、太平要術の書を考える（前書き）

投稿した文章に誤字脱字が多いとの指摘を受けたので少しずつなお
しました

豪、太平要術の書を考える

朝起きると城内が凄い騒ぎになっていた。

「秋さん何かあったんですか？」

とりあえず近くにいた秋さんに話しかける。

「豪様おはようございます。実は遠征中に書庫から本が一冊消えておりまして」

たかが本一冊と思うかもしれないが、城に不審者に入られたのなら警備の不手際になるし、城内の者の犯行なら本を管理している者にも責が及ぶ。

「もしかして姉ちゃんのお気に入りの本だったんですか？」

「はい、太平要術の書という本で偶然この書庫で華琳様が見つけられたらんです」

太平要術の書か、確か三国志演義にでてくる本で風雨を起こす方法や符で病気を治す方法が記されていたって話だよな。でもあの現実主義の姉ちゃんがそんな胡散臭い物に興味を示すかねえ？

俺も天候操作や治癒はできるが色々と面倒なんだぞ。

先ずは天候操作は天気の流れを知らなきゃ無理だ、雨を降らせるには雨雲を作らなきゃいけない、その為には空気中の水蒸気を空に集約させてからでないは無理なんだよな。

治癒も同じく、どんな病気が怪我なのかを見立てる知識がないと逆効果になりかねない。

骨折一つをとっても、本来の骨の形をきちんと把握してないと半端な形でくっつけてしまっし、ウィルス性の病気ならウィルスを消滅

させた後に患部の治癒にはいらなきゃいけない。

「それでそれには何が書いてたんですか？」

「華琳様が興味を持たれたのは人心掌握術らしいのですが」

今度は魅了系の術か、あれがそんなに万能なら俺にも、とうの昔に彼女できてるって。

人を意のままに操るなんて先ず不可能、常に対象者に魔力を送り続けなきゃいけないし、精神が乱れるほどに術も破れやすくなるんだから。

1の恋心を100にするのは可能だけど、0からは不可能だし常に100を維持させるなんてのは携帯メールを打ちながら車を運転し続けるのと同じくらい無理が生じる。

「秋さんありがとう、それで書庫はどこ？」

書庫の前では姉ちゃんと軍師三人組が議論をしていた。

「姉ちゃんおはよ。その消えた本はどこに閉まってたんだよ」

「豪が本に興味を示す何て珍しいわね。この箱に納めていたのよ」
姉ちゃんが見せてくれたのは木製で蓋がついた箱。

俺は箱に対してサーチをかける、ある程度の力を持った本ならば何らかの痕跡が残っている筈だ。

……こりゃ魔術書じゃねえか、どす黒いマナがまだ残っていやがる。効果は欲望拡大だな、人心掌握じゃなく人心を乱す為の物だ。

魔術書としては三流以下の物だから、この外史に密輸する事もでき

たんだろう。

三流と言えども、この外史の人間は魔力慣れしてないから効果は絶大、酒を飲んだ事がない人間がアルコール度数が低い酒でも酔っ払うのと一緒だ。

「話は聞いたけどそんな胡散臭い本は姉ちゃんに必要なিদらる？」
俺は納得させる為に魅了の魔法を使う。

軍師三人組は姉ちゃんを敬愛しているし、姉ちゃんも自分の才に絶対の自信をもっているから、抵抗感を感じる事はないだろう。

「そうね、確かにそんな物は私の霸道には必要ないわね」

しかし、あのマナこの外史に来てから何度か感じた事があるんだよな。

「みんな騒がせて悪かったわね。ほら豪朝議に行くわよ」

「えー、俺朝飯まだ何だけど」

「それなら今度からはきちんと一人で起きる事ね。ほら行くわよ」

陣留軍議の間

「それじゃ桂花、お願い」

「はい華琳様、黄巾党が集団を形成しつつある様です。あまり大きくなる前に叩く必要があるかと」

また黄巾党か、うん黄巾党…

（そうか、それで彼奴ら何も言わなかったんじゃなく、何も言えなかったんだ）

「でも相変わらず、黄巾党の首謀者はわかりませんね〜」
いつ聞いても程イクの声は力が抜ける。

「黄巾党を数多く討伐された曹仁様なら首謀者の事を知っておられるのではないのでしょうか？」

荀イクが挑発する様にこつちを見てきた。

姉ちゃんの前で恥をかかせたいらしいが弟に対抗心を持ってどうすんだよ。

「黄巾党の首謀者は張角三姉妹っていう、旅芸人だよ。まっ暴れてるのはそいつらの応援者らしいがな」

この外史の黄巾党は、三種類に大別できる。

正史に近い反乱した民による集団。

俺が関わった外史にとらわれた集団。

そして太平要術の書により、人心を乱された張角三姉妹のファン。恐らく外史を利用しようとした奴が魔術書を密輸し太平要術の書に偽装した後に姉ちゃんに見つけさせる、それで外史の黄巾党騒動に合わせて張角三人姉妹に太平要術の書を手渡したんだろうな。

人の欲望を吸収しすぎた魔術書は制御も効かなくなり、反乱を起こした民や張角三人姉妹のファンを捉えて離さなくなってるんだな。

「くっ、確証はあるんでしょうね」

そりゃ輪廻させた魂に直接聞いたんだしな

「彼奴ら天和や人和や地和とかたまに言うだろ。それが張角達の歌い手名なんだよ」

「豪、それでその三姉妹は今どこにいるのかしら？」

「元々が旅の歌い手だから、各地を転々としているらしいな。張角達の周りに黄巾が集まってるみたいから、でかい所を潰してくのが、手っ取り早いと思う」

あの様子じゃ、直接攻めても黄巾達が盾になって逃がすだろうしな。

「わかったわ、陣留の周囲の黄巾党を各個撃破していくわよ。」

噂の三姉妹はどんな娘達なんだろう、潜入捜査も考えとくかな。

「豪ちゃん、陽も歌うまいんだよ」

「へー、そうなのか」

「だ・か・ら三姉妹に興味持つのは禁止だよ。歌が聞きたいなら陽が歌ってあげる」

陽って読心術の素養があるんじゃないのか。

もし陽が全てを知った上で俺についてきてくれたとしても、浮気なんかしたらすぐにバレるんだろうな…

その光景を想像すると背中が寒くなる豪であった。

豪、太平要術の書を考える（後書き）

そろそろ一刀がでできます アンチになる可能性も
指摘感想お待ちしております

御遣い達との出会い（前書き）

アンチ御遣い劉備っぽくなっています

御遣い達との出会い

これで三回目だよな。

今度は薙刀みたいのを突きつけられている。

しかもここは姉ちゃんの陣だぜ。

思いっきり睨んできているのは見た事ない黒髪の女。

それなりに戦果をあげてきた弟にこんな扱いをするか？

- - - - -

あれは数日前の事、軍議で近くに黄巾党の砦が2つ見つかったとの報告があった。

黄巾党達は、お互いに連絡をとっている為に、同時作戦が決まったのだが

「片方は、曹仁様一人で充分かと。旅の間に同規模の砦も落とされているみたいですし」

このエセ猫耳軍師は何をほざいている。

確かに砦を一人で落とした事はあるが規模が一緒だからって戦力が同じとは限らないだろうが。

まあ俺を可愛がってくれている姉ちゃんが、そんな無茶振りに賛同する訳がないよな

「そうね、雄獅子が豪である事を周囲に知らしめるのには丁度いいかもね」

あつれー？姉ちゃんこの策にのる気なの？

まあ確かに曹仁として公式に戦に参加した事はないから、中途半端な軍功は下駄を履かせたとしかみられないだろうからな。

それで出発したんだけどさ、いや一人旅は慣れてるよ。

いくら民に俺が単騎で砦を落とす所を印象づけさせる為とはいえ、隊にあまり近づくなつてのは、酷くないか？

今の俺の心の支えは陽がくれた手作り弁当だけだよ。

幸い、砦の大体の場所は聞いていたから、サーチも併用する事でずぐに見つける事ができた。

単騎で落とすは事できるけど証人いないよな！。

商人か樵が近くに來たら攻め始めようかな。

とりあえず陽の弁当で腹ごしらえして様子を見るか。

……この時代にもデコ弁あつたんだ。

陽の弁当は、まるで新婚さんの愛妻弁当だった。

海苔や薄焼き卵で好きって文字が書いてあつたり、そこら中にハートが飾れていた。

ど真ん中に俺の名前と陽の名前がハートで囲んであるし。

陽が俺に着いて来てくれないと、こんな弁当は二度と貰えないと思うのでこっそりカメラを取り寄せて写真をとっておく。

『うわっ、豪さん手作り弁当を貰ったのが嬉しいみたいで写真に収めてるぜ。羨ましいけど淋しくね？』

『仕方ないだろ。あの娘が、ついて来てくんなきやまた一人者なんだし。帰ってきたらあの写真を見ながらコンビニ弁当を食う生活なんだぜ』

『豪さんせめてその外史では幸せを満喫して下さい』

あの弁当を見られるより、恥ずかしい所を部下に見られてしまった。まあ、弁当はかなりうまかったから陽には礼を言わないとな。

しっかしそう都合よく人は通らねよな、サーチを何回かけても皆からしか反応ないし。多分商人とかは警戒して近づかないんだろな。

たまにサーチに反応するのは黄巾党だけだし、しかもこいつら外史の影響も太平要術の書の影響も受けていないんだよ。多分山賊辺りが、威嚇も兼ねて黄巾党になったんだろうな。

黄巾以外の人間がくれば反応をするようにサーチを周囲に展開しておく。

一人旅の利点は好きな時に休める事。

普段こんな風にだらけていたら姉ちゃんの説教、荀イクの嫌味、陽は体調の心配をしまくるから、できないんだよな。

しばらくウトウトしていると、サーチに反応があった。

「誘拐」

黄巾党の連中が娘を担いでいた、被害がでる前に片づけるか。

side ????

情けない、この俺が男に黄巾党なんか捕まるなんて。

黄巾の奴らを倒したいが縄でぐるぐる巻きにされているせいで身動

きがとれない、そうこうする内に砦が見えてきた。

えー俺このまま酷い目にあっちゃうのかな、頭の中で悲劇的な場面を想像していると、突然そいつは現れた。

「はい、ここは通行止めです。その肩に担いでる物を降ろしてトットと砦のお仲間連れてきやがれ」

目の前に現れたのは賊より賊っぽい、でかい男だった
(物ってなんだよ。こんな可憐な少女をつかまえて)

啞然としている黄巾党の連中が身構える前に、
でかい奴は殆どの黄巾党を殴り倒していた。

「おら、トットと砦の奴らを連れてこい」

でかい奴は生き残った黄巾党を砦に向かってぶん投げやがった。

(ありえないって、人がそんなに飛ぶ訳ないだろ)

「さて、邪魔になるから片付くまでそこに隠れてろ」

でかい奴は縄に縛れた俺を木の間に転がすと、馬鹿でかい斧を携えて砦に向かって歩き出した。

それからの光景は、恐ろしいなんて表現は生易しい物だった。

でかい奴は斧で斬ったり叩いたり、果てはでかい手で黄巾の頭をわし掴みにして他の奴に投げつけるわ、一回の蹴りで10人以上を蹴り殺すし。

誰だよ女に武で勝てる男はいないなんていった奴、少なくとも俺は

あんな化け物とは戦う所か敵対もしたくないぞ。

「黄巾党はいねがー、隠れてる奴はいねがー」

いやいや、お前が怖すぎて隠れてる黄巾党に同情しまくりだぜ。

でかい奴は、どんな能力があるのかわからないが隠れてる黄巾党を次々に見つけては倒していく。

しばらくすると、でかい奴は、砦に入ってしまったんだけど砦の中からは黄巾党の断末魔だけが響いてくる。

少し時間がたった頃には物音一つしなくなっていた。

一人で砦をこんな短時間で潰すなんて、あれは絶対人間じゃない。

この恐怖が過ぎ去るのを待っていたのに

「おい、片づいたぜ。俺はこれから仲間んとこに戻るが一緒にくるか？」

俺が返事をする間もなく、でかい奴は俺を担いで歩きだした。

仲間って……化け物の仲間なのかな、俺本当の意味で食べれちゃうんじゃないかな。

でも救いの神は現れた。

黒髪の凛々しい女性がでかい奴に得物を突きつけてくれているんだ。でかい奴は、啞然としていた。

side 関羽

ご主人様や桃香様と義勇軍を率いて、世直しの旅にでたのはいいが、糧食も尽きかけ、朱里の提案で曹操軍に一時的に加入すると事した。

丁度、曹操達も黄巾党の砦を攻めるので、その結果で加入してもいいか決めると言っていたが砦にいた人数は僅かな為に、私達は全く活躍できずにいた。

このままでは、全員飢え死にしかねないと焦っていたところにそいつは現れた。

見るからに賊みたいな男が少女を担いで陣に向かって歩いてきたのだ。

「止まれ、ここは天の御遣い様がおられる曹操軍の陣だ。お前の様な卑しい賊が来る所ではない。命が惜しくば、娘を置いて早々に立ち去れ」

私はご主人様や曹操軍の将に聞こえる様に大喝をする、これで曹操も私達を見直して戦いに加えるはず。

計算通り、曹操軍の将が、次々に現れて臨戦態勢をとっていく、しかし標的は、賊の男ではなく私だった。

「曹操さん、何で愛紗を狙うんですか？倒さなきゃいけないのは賊の男でしょ？」

ご主人様が私の為に怒って下さっている。

しかし次に曹操が発した言葉は衝撃的な物だった。

「賊？私の目に映っているのは、可愛い弟が礼儀知らずの女に刃を突きつけられている姿しかないけど」

弟？どこにそのような方がいるのだ？

「愛紗、すぐに刃を降ろせ。その方は曹操様の弟君で曹仁様だ。曹操軍に仕えている私の友人に確認をした」

星の言葉で、事態を把握した私が刀を降ろすと一斉に曹操軍の将が駆けつけてくる。

その目は私に対する非難で満ち溢れていた。

side ????

最初は啞然としていた俺だけど、周りの兵に聞き込みをするうちに事情がわかった。

俺を助けてくれたのは、曹操の弟の曹仁。

噂の雄獅子だとの事、大概こういう噂は事実が拡大解釈されている事が多いんだが曹仁の武は噂以上だった。

それで得物を突きつけていたのは、雄獅子と並んで噂の天の御遣い軍の関羽、今日大した武功をあげれず焦ったって所だろう。

曹仁が曹操軍でいかに重要な人物かは周囲の対応でわかる。

side 豪

今回も何とか、誤解は解けたんだが俺の顔って、そんなに悪人顔なのかな。

今回は孫策の時以上に呆れてるし、何だよ天の御遣い様がいる曹操軍って。

兵は祿に訓練も、されていないし、装備も貧弱な上に兵の中には老人や子供までいた。

肝心の御遣いは、見た目も文武も貧弱そのもの。

途中から愛紗がこんなに謝ってるから許してくれてもいいだろうとか逆ギレしてたし。

劉備のみんなが笑える国とかは噴飯ものだし、よく姉ちゃんこいつら引き入れたな。

お互いの空気がギクシャクし始めた頃、劉備の所から、ちっこい軍師がでてきた。

「今回の汚名を晴らす為にも、もう一つの砦は私達にお任せ下さい。策は既にできております」

無い胸を張って言われてもな

「そりゃ、必要ねえよ」

「曹仁様が私達の事を信用されないのはわかりますが、お願いですからお任せ下さい」

いや本当に必要ないんだって、確かにお前等は信用できないが

「信用とかじゃなく、その砦は俺が先陥落させたから必要ないんだ
よ」

「う、嘘です。今日攻めた砦の兵の大部分も、もう一つの砦にいた
筈です」

まあ普通は信用できないわな。

それを打破してくれたのは俺が助けた娘

「本来だぜ。そのでかい兄ちゃんは一人で砦と黄巾党を全員をぶっ潰したよ。あれは俺のトラウマになりそうな位に凄惨な光景だった

ぜ。流石は噂の雄獅子だな」

「貴女は誰ですか？そんな言葉は信用できません」

ちびっ子軍師は必死だ、当たり前か今回の一件は劉備軍が滅ぼされても、文句か言いようないからな。

無計画に人を集め、糧食を切らして他の軍にたかりに来ただけでなく、その将を確認もせずに殺そうとしたんだから。

「俺かい？俺は胡質文徳って女さ。」

下手こいて黄巾党に捕まったのを曹仁の兄貴に助けてもらったんだよ。どっかの誰かさんは俺がかどわかされたって誤解したみたいだけれどな。疑うんなら砦に行ってみな。二目と見れない光景が広がっているけどさ」

次の日、確認に出掛けた劉備軍の面々は暫く飯が喉が通らなかつたらしい。

御遣い達との出会い（後書き）

胡質文徳

曹操に仕えた文官

事務処理能力に長けており在籍中に殺人事件を解決した名探偵な人。

一人称は俺

黒髪のボーイッシュ少女

真名はこれから考えます&募集します

それでは指摘、感想お待ちしております

豪、外史を伝える 外史と昔話（前書き）

まだ原作の序盤の序盤

豪、外史を伝える 外史と昔話

side 豪

御遣い達が、砦の確認に行ってる間に俺は姉ちゃんの天幕に呼び出された。

「豪、貴男は天の御遣いをどうみる？」

あんなのでも、この外史の要だけあつて周りに与える影響はそれなりにある。うちの将や兵達もしきりに噂をしていた。

「どうこうもただのガキだよ。確かにここと違う世界から来たかもしれないが、何の役にもたちはしない」

毎回、毎回仕事とはいえあんなイケメンでモテる奴のフォローさせられる俺達の身にもなってみろ。自分に彼女いないのに、わざわざ悪役を演じてフラグたてに協力させられんだぜ。

「流石は私の豪ね。噂に惑わされず、見る所は見てるわね。なら劉備はどう？」

「ただの詐欺だな。甘言で兵の経験もない民を戦地に立たせて、あげくには自分の無計画さで、兵を飢えさせるなんざ無能を通り越して有害でしかない」

誰もが笑えるって何だよ、誰かが笑えば誰かが泣く。

そんなのは世の摂理だしどうやって、矛盾が生じる。誰かを泣かせる民はどう扱うんだ？自分に都合のいい民しか置かないならそれは独裁政治と変わらない。

「珍しく手厳しいわね。それなら御遣い軍はどう扱うのが一番良いと思うかしら」

「今は新しく入った将や兵に少しでも経験を積ませたいからな、兵站ぐらいが丁度いいだろう。下手に将や兵と接して悪影響を与えて欲しくないしな」

他人のフンドシで相撲取るうって奴等を、わざわざ土俵にあげてやる必要はない。

「ありがとう参考にさせてもらっわ、豪が潰した砦の証人にも使えるでしょうね」

後日、劉備軍に兵站を扱わせる事を伝えるとブーイングの嵐となった。

私達は民の平和の為に戦いたい、兵站なんて我が武を侮辱している、曹操軍は私達を恐れている等好き勝手言い始めた。

代表して、御遣いが俺に近づいてきた。

「何で、こんな酷い扱いをするんですか？曹操軍はそんなに、手柄を独占したいんですか」

「俺はポリエステル装備の学生勇者を信用してないんでね」
多分、御遣いはこの言葉に食いつく筈だ。

.....

曹仁さんは、確かにポリエステル装備の学生勇者って言った。

あの人はこの世界の事を何か知っている。

夜になるのを待ち、曹仁さんの天幕を探していると

「よお、御遣い様。曹操軍の陣に夜這いにも来たのか？」
向こうから声をかけてきた。

「ち、違います。俺が用があるのは曹仁さんです、貴男は何者なんですか？今の時代の人間がポリエステルなんて言葉知ってる筈がないです」

個人的には気に入らないタイプだが、外史に迷い込んだ人間に色々教えてやるのも俺等の仕事だ。

俺は御遣いを持ち上げると、陣から離れていった、誰かに聞かれるのは不味いしな。

「さて御遣い君は、どこまで知ってるんだ？」

「御遣い君じゃありません。北郷一刀です、この世界が外史って事は貂蝉さん達から聞きました。でも詳しくは教えてもらえませんでしたし」

「なら俺がお前に教えてやろう。ただし条件がある一つはこの事を誰にも言わない事、もう一つは調子に乗りすぎて外史に呑み込まれない事だ」

「わかりました」

「お前は日本人だろ？日本は昔から外史に結構縁があるんだせ。代表的なのは昔話の三太郎だ、知ってるか？」

「桃太郎、浦島太郎、金太郎ですよね」

「一番分かりやすいのは浦島太郎だ、あれは蓬莱島と言う理想郷が元になつてる外史だ。桃太郎は逆に外史から生まれた鬼が正史に迷い込んだんだよ。金太郎は外史から来た竜が正史の娘と結ばれて生まれただよ」

「俺は元の世界に帰れるんですか？」

「お前が外史に呑み込まれなきゃ俺が協力してやるよ。外史は今でも正史に関わつてるしな。ネツシーって聞いた事があるだろ？あれは恐竜に憧れた人間の力が外史との境目を曖昧にさせてしまい正史に時々現れたんだよ、調査でネス湖にいないのが証明されると信じられる人もいなくなり外史の境目が消えてしまいネツシーも見かける事がなくなつたんだよ」

「曹仁さんは何者なんですか？何でそんなに詳しいんですか？」

「まっ、そのうち教えてやるよ。それじゃ帰るぞ」

帰り際、うちの将や兵に遊び半分で手を出したらただじゃおかないぞって軽く脅してやった。

豪、外史を伝える 外史と昔話（後書き）

指摘 感想お待ちしております

豪、曹操軍から追い出される？（前書き）

作者は、元々ヒーローより脇役が好きでした。

ゲームで言えば恵まれた王子様な主人公より、町娘にちょっかいをだして倒される人とか。

そんな人達のその後を考えてたのがこの話のキツカケです。

豪、曹操軍から追い出される？

「曹仁の兄貴、俺も曹操様の所で文官として、働くことになったからよろしくな」

胡質が笑顔で話しかけてきた。

「おう、よろしくな。後言葉使いは気をつけとけよ。くだらん揚げ足をとる馬鹿もいるからな」
主に荀イクとか猫耳軍師とか。

「わかったよ。宮仕えは面倒くさいな」

「人が集まりゃ規則が必要だからな。わざわざそれを教えに来てくれたのか？」

「いけねっ、忘れるとこだった。曹操様がお呼びなんだよ」

華琳天幕

「姉ちゃん来たよ」

「豪、貴男にしばらく別行動を命じるわ。黄巾党に潜入してちょうだい」

姉ちゃんは張角達の人を集める力に興味があるらしく、張角達を引き入れたらしい。

しかし黄巾党の殆どは男で構成されている。

いざとなつたら黄巾党を一人で相手にでき、しかも黄巾党にいても違和感を感じさせない男。

それで俺が選ばれたらしい。

確かに黄巾党にはイケメンいなかったしな。

この話に殆どの将が納得したらしく、唯一反対をしたのは陽だけだったらしい。

それに加え俺が一人で砦を陥落させた事で、新しい兵に悪影響がでているとの事。

「ぶっちゃけこの軍、曹仁様一人で充分じゃね」

「あの人の武をみてしまうと、武官でいる自信がなくなる」

「あんな化け物といったら、どんな手柄をたてても霞んでしまう」

確かに悪影響のオンパレードだな。

多分誰かが意図的に広めたんだろうけども、不味いのは確かだ。

「わかった。とりあえず張角達に接触できたら連絡するよ。俺の斧は屋敷に置いとく」

雄獅子の代名詞の斧を持っていたんじゃ、黄巾の奴らに疑われるしな。

天幕をでると、そこには曹操軍の主な将が揃っていた。

「豪、華琳様は涙を流して、この決断をされたんだぞ」

春さん、俺も姉ちゃんと長い付き合いだから、わかってるよ。

「あんたが、軍の和の大切を私に説いたんだからね。今度からは、私ができちんと御遣い軍の軍師を抑えといてあげるから、早く帰って来て華琳様を安心させなさい」

ありがとな、荀イク。

「しっかし、アイツら気にいらねえな。正義だ何だ言いながら姑息な手で兄貴を追い出しやがって」
胡質も、怒ってくれている。

「曹仁様、軍の事はお任せ下さい。曹仁様に指摘頂いた武をさらに磨きあの者共に手柄は渡しません」
楽進期待してんぞ。

「豪ちゃん、早く帰ってきてね。でないと陽いっぱい泣いちゃうからね」
陽、もう涙目だろうが。

「まったく、みんなして今生の別れみたいな面しやがって。ふん縛っても張角達を連れてくるから姉ちゃんを頼むぞ」
敵軍への単独潜入だから、みんなが心配するのも仕方ないけどな。

side 華琳

豪はそう言うと、天幕から出て行ったわ。

いつも大きな背中がしょぼくれた感じで小さく見える、身を切られる想いとは、こういう事を言うのね。

噂の出所は多分、御遣い軍の軍師でしょうね。

手柄が喉から手がでる程欲しい御遣い軍にしてみれば、圧倒的すぎる豪は邪魔以外の何でもない存在。

確かに豪しか張角達を任せれる男はいないし、新しい兵に悪影響を与えかねないのは否定もできない。

でもね御遣い軍、私から可愛い弟を引き離れた事を、後からたっぷり後悔させてあげる。

多分今回の事で、御遣い達の悪評は、この外史にはたたないだろう。流言を使い、自分達の手柄の為に軍から主力を放逐させる、こんな事をしてもだ。

外史特有の主人公補正。正しいから主人公になるんじゃない、主人公だから正しいと思われてしまう、いわゆる絶対的正義ってやつだ。正史には、絶対的正義なんてものは存在しない。正義なんて曖昧な物は、人それぞれの立場で違うんだからな。

だけど御遣い軍さん達よ。
自分達の正義に酔いしれてるとおっかない雄獅子が主人公補正を、
食い破っちまうぜ。

豪、曹操軍から追い出される？（後書き）

このひねくれた話を楽しみにしている人はいるんでしょうか？
指摘感想お待ちしております

豪の黄巾党生活 1 (前書き)

恋姫の要素はごく薄です。

姉ちゃん達から離れて、向かうのは、またも山奥。

(事務連絡希望、黄巾党に潜入するから装備を送ってくれ)

目を開けると、目の前にあったのは古びた黄色い布が一枚だけ。

『豪さんが、賊に潜入するなら変装は必要ないじゃないですか。い
よっ、この悪人顔』

『そっちでの曹仁の噂、面白い事になってますよ』

『豪さん諦めないで下さい。俺は豪さんが嫁を連れてくる方に賭け
たんですから』

本当に上司思いの部下ばかりだよ。

旅を続けて聞こえてきた曹仁の噂は、

”美しい者好きな曹操は暑苦しい曹仁より美男子の天の御遣いを選
んだ”

”曹仁は曹操軍の美しさを損なう為に放逐された”

いつもの世も、噂は無責任なもんだ。

陽のゴアイの剣が、天愛の剣に変わったって噂もあったし。

どうやって、黄巾党に潜入しようかと、考えていたがそれは杞憂に
終わった。

接触をはかった黄巾党の人達は、噂のお陰で俺が曹仁とわかってて

も生暖かく迎えてくれた。

「辛かったな。ここでは見た目で人を判断する奴はいないから安心しろ」

でもこの人、俺の顔を見て噂は本当だったんだなって納得していたんだよな。

そんな事があり、違う意味で俺がへこんでいると、気を使ってくれたのか一人の男が近づいてきて

「そつだ。俺は急用が出来て行けなくなったから、お前が黄巾党に入った記念にこれをやるよ」

それは数え役萬 姉妹 野外公演と書かれたコンサートチケット。

(ありがたいー。これで張角達に会える。うまくいけば早く戻れる)

- - - - -

あれだな、飲み会に遅れて来て、周りの盛り上がりに乗遅れた時を思い出しまうな。

張角達に客は黄色い声援をあげていた俺以外は。

張角達のコンサートは熱狂的に盛り上がった俺以外は。

張角達の歌でみんな涙を流していた俺以外は。

確実に浮いていた俺だけが。

アイドルの応援は中学で卒業したんだよ、正史にいた時に推しメン誰ですか？言われた時も反応が出来なかったんだよ。

中身は30過ぎのオッサンだぜ。アイドルに熱中するわけないだろ。私塾(学校)での片思いの歌を聞いても、男子校出身の俺は共感で

きないんだよ。

そんな訳で、早く公演が終わればいいのにと俺は願っていた。もし隣の奴が、もう一回とかアンコールかけたらしばいていたかもしれない。

仕方がないから俺は、時間潰しと調査を兼ねてサーチで色々探る事にした。

楽屋だろう、少し離れた場所からどす黒いマナを感じる、あれが太平要術の書いや魔術書だろう。

そして周りの奴の思念をサーチで探ると、何とか泣きたくなってきた。

この外史は女尊男卑の傾向が強く、男はなかなか結婚ができない。一部の有力者や才知に溢れた者、美男子以外は結婚が夢で終わる事も少なくない、ここにいる連中は、今の境遇を張角達を応援する事で紛らわしていたんだ。

俺がクリスマスやバレンタインの時に、そのイベントがない外史に仕事に行っていたのと、ある意味大差ないよな。

そうだ！今の任務が終わったら、陽に告ろう。

そうしたら陽が、俺について来てくれる可能性も高くなると思う。

積極的になって、今年こそイベントの日に有給をだしてやるんだ。自分の悲しい思考に集中するあまり、周りへの観察が疎かになっていた。

気づくと明らかに一人だけコンサートを楽しんでいない俺に周りから不審の目が向けられていた。

中には「一生懸命歌っている天和ちゃん達が可哀想だ」ってきれかけてる奴までいたし。

この場をどう取り繕うか、考えていると急に腕を掴まれた。

「この男性は具合が悪い様なので、医務室に連れていきます」

腕を掴んできたのは、眼鏡をかけた柔和な表情の男、これが俺と先生の最初の出会いだった。

先生は黄巾党で医者をしており、周りから先生と呼ばれているとの事。

名前は、故郷から逃げた時に捨てたらしい。

「駄目ですよ。みんなが楽しんでる時には水を差すような真似をしちゃ、下手をしたら怪我して私の仕事も増えるんですから」

最近コンサートで、興奮するあまりファン間での喧嘩も珍しくないらしい。

多分それは、魔術書の力が強まっているのが原因だと思う。

「すみません、券を譲って貰ったのは良いんですがどうもついていけなくて」

「最近黄巾党も、変わりましたからね。殺伐とした空気が漂っていて、張角さん達も気にしているんです」

後から聞いた話では、先生は張角達の健康管理もしていたらしい。

「先生は、張角達と親しいんですか。」

なら太平要術の書がどこにあるかわかりますか」

あんなに人の欲望を吸った魔術書は封印が破棄しないと、後々面倒な事になる。

「やはりあの本が目当てでしたか、曹仁さん」

「俺の事をわかってたか。あれは元々は姉ちゃんの物だ。何よりあの本は厄介な本で人の欲望を高め、それを吸う妖術書なんだよ」

「私は妖術は、わかりませんが確かに日に日に禍々しさを増してますね」

魔術のわからない人間に禍々しさを感じさせるってのは、厄介な成長だな。

「その証拠はどこにあるんですか？あの本を手に入れてから、張角さん達の人気が高まりましたから納得できる理由がないと彼女達は手放しませんよ」

確かに他の世界の魔術書だって、敵対してる曹家の長男に言われても納得しないよな。

「確かにな。でもあの本がある限り、黄巾党は暴走し続けて確実に討伐されるぜ、張角三姉妹も一緒にな」

「太平要術の書が無くなれば、彼女達を救えるんですか？」

「黄巾党は遅かれ早かれ討伐されるだろうが、姉ちゃんも張角三姉妹の人を惹きつける才を欲している。俺を信用出来ないなら先生の手伝いをさせながら見極めればいいだろう。先生が知らない医療の知識を俺が教えてやるし」

俺は張角達より、目の前にいる先生という男の医療の才を欲していた。

この人に俺が知っている正史や外史の医療知識を伝えれば、姉ちゃ

んの軍や民の死傷者をかなり減らす事ができるだろう。
こうして俺の黄巾党生活は幕を開けた。

side 華琳

今日、劉備が曹操さん元気なですって、無邪気な笑顔で聞いてきた。

誰の軍師が原因か分かっているのかしらね。

御遣いは豪が、いなくなったのを幸いとばかりにうちの軍の将や兵達に声を掛けまくっているらしく、陽や風、胡質が怒っていたわ。

そのうちに殆どの将や兵が、豪がどれだけ、この軍に必要な人材だったか身に染みるはず。

(豪、待ってなさい。お姉ちゃんが絶対に貴男が大手を振って戻ってこれる様にしといてあげるから)

豪の黄巾党生活 1 (後書き)

先生は、ある恋姫と密接な関係を持っている予定です。

昨日いただいた感想を読ませていただいたら、蜀の一刀嫌われてますね。

指摘、感想お待ちしております。

黄巾党生活2 外史の遮断(前書き)

恋姫から、どんどんかけ離れいつている。

黄巾党生活2 外史の遮断

先生の助手兼護衛、それが黄巾党での俺の役目。

先生は黄巾党の中で一目置かれていたらしく、先生が自ら希望した人事に異論を唱える者は一人もいなかった。

最初は黄巾党に医者がいるのに驚いたが、何万という人が生活をしているのだから、患者もひっきりなしに訪れる。

風邪や二日酔いから戦闘による怪我、蛇に噛まれた者、食あたり等様々な患者が訪れてきた。

先生はそいつらを善悪、美醜、貧富関係なく真剣に相對していく。最初に会った日も、先生は俺の医学知識に目を輝かせて食らいついてきた。

面白れえ、これだから外史を巡るのはやめられねえ。

この男は、先生は家も名も捨てても人を救う事は医者である事はやめない。

むしろ貪欲なまでに知識を求めてストイック過ぎる程に医者であるうとしている。

この人が最新の医療知識や技術を身につけて、治癒力を持てば立派な外史矯正指導員になれる。

医術を持って外史を糺す男か、ありだな。

スカウト候補として、事務所に申請しとかなきゃな。

俺達が外史を訪れた際に、才能を持つ者を新たな矯正指導員としてスカウトする事がある。

あくまで、その外史の主要人物ではなく、外史から消えても悪影響を与えない人物に限定されるが。

それを考えると名を捨てた先生はスカウト対象にうってつけなんだよな。久しぶりに気持ちのいい男に会えて、むしろ劉備達に感謝を

したいぐらいだ。

「豪さんは、劉備達を恨んでないんですか？」

最初先生は俺を仁さんと呼ぼうとしたが医者関係で、その名前はま
ずいので真名を預けた。

「別に恨むつもりはねえよ。確かに俺の存在は曹操軍でも異質だか
らな。劉備の件はうまく利用させてもらうさ」

策をたてた奴や、策にのせられた奴が俺の力を渴望する状況にして
やればいいだけ。

「確かに豪さんは医療知識も、心身両方の強さも異質ですからね」
先生も、その内に異質の仲間入りする予定だから。

「俺から見れば先生も充分異質だぜ。太平要術の書の影響を受けて
ないしな」

「私から見れば彼女達は妹みたいな存在ですからね。それに全てを
捨てた男に色恋は必要ないでしょ？」

「そうかい？俺は先生の心には決めた女がいて、それが要因だと思
っていたんだけどな」

「言ったでしょ？私は全てを捨てて、ただの医者になったん
ですよ」

そう言いながらも、先生の顔には独特な寂寥感が浮かんでいた。

だけど、世捨て人を選んだ男に色々聞くのは野暮だよな。

診療所を閉めた後、俺は人気のない場所へと歩を進める。

（事務連絡だ。矯正指導員候補生の申請と、この外史に紛れ込んだ魔術書のデータを送る。それから場合によっては、外史の遮断要請をだすかもしれない」

今回の様に外史が異質な物に晒された場合は外史を遮断する事がある。

遮断された外史は、物語の影響を受けなくなり正史に近い存在となってしまう。

そして外史の要は主人公ではなくなり、外史の一員となってしまう。つまり主人公補正という、ご都合主義の力が効かなくなってしまう。今回、俺が巻き込まれた件も主人公補正があれば正義の劉備軍の成長の邪魔をしていた曹仁を軍師孔明の叡智で、戦う事なく軍から追いつ出す事ができたとなる。

遮断は外史にとっては、かなりのリスクを背負う事で、遮断をされると変身ヒーローが変身中に倒されたり、ゲームでならレベル1の勇者が生まれる町がラストダンジョン近くの最後の町になったりする。

変身ヒーローが変身する間は悪い怪人が礼儀正しく待つのも、ゲームの最初の敵がスラムなのも主人公補正があつてこそ。

当然、正史に近い存在になれば、それはなくなる。

当然物語は成り立たない。

つまりその外史は消滅してしまう。

幸い今の外史は主人公と成り得る存在が、御遣い以外にも何人かいるから消滅は免れるだろう。

俺は御遣い達を恨んでもないし、叩きのめすつもりもない。

ただ、差し伸べた手を払った相手に、また手を差し伸べる程俺は優しくもないが。

side 陽

「陽、華琳様が心配……いや、何でもない」春蘭様が私に話すのを途中でやめた、自分でもわかるほどに今の私は表情は危険だと思う。でもそれより、何より豪ちゃんが心配でたまらない。

あの自称御遣いは、

「曹仁さんは強いから大丈夫です。朱霊さん心配しないで下さい。

貴女の可愛い顔が台無しですよ」

とかほざいていた。

確かに豪ちゃんは強い。

だけど優しい豪ちゃんは誰よりも傷つきつやすい心の持ち主でもあるんだ。

それと御遣い良く覚えておけ。

ただの食いつぱぐれ集団の飾り者が、曹仁”さん”って言うな、立場的には曹仁様だろうが。

後私に可愛いとか、いつも綺麗だよとか陽大好きだよと言っていいのは豪ちゃんだけだからな。

あんな飾り者より、豪ちゃんの事だ。

黄巾党で虐められてないだろうか、嫌いな人参を残してないだろうか、黄巾党にお弁当を届ける方法はないだろうか、前の旅と違って望んで出掛けた訳じゃないし黄巾党での待遇も悪いに決まっている。

私の豪ちゃんに対する想いが尽きる筈がある訳ない。

（豪ちゃん、陽は何時までも豪ちゃんを待っているし、曹家の人間じゃなくなっても陽には豪ちゃんが必要なんだからね）

私はお弁当が届けられない分、気持ちだけでも届いて欲しく神様に祈りを捧げる。

side 創竜

「創竜様、真剣なお顔をされてどうされたんですか」

「いや、ようやく豪の奴に嫁が来そうでの、結婚式の祝辞を考えておるのじゃ」

陽の必死の祈りは、確かに神に近い存在に届いていた。

黄巾党生活2 外史の遮断（後書き）

前の話の華琳や今回の陽は、恋姫要素を残す為の作者の苦肉の策です。

指摘感想お待ちしております。

医術で外史を糺す者：小説として、ありなのか

雄獅子と銀狼（前書き）

三人目のオリキャラは、またしても男。

曹仁伝はどんどん恋姫から離れていきます。

しかもまだ、董卓のとの字もでてこない遅々。

雄獅子と銀狼

『豪さん、魔術書のデータ解析が済みましたので報告をいたします。魔術書のランクとしてはE+但し蓄積能力だけはAでした』

つまり人の欲や乱心を煽り、それを溜め込むだけの代物。

使用用途は封印された魔物を解放する時の触媒ぐらい。

そんな魔術書だから、外史から消えた所で管理者も気づかなかったらしい。

(わかった。それなら遮断を始めくれ)

違う外史の異物が持ち込まれたという事は、外史を渡る能力者が来ている証拠。

つまり他の外史の管理者かそれ以上の者が関わっている証だ。

恐らくそいつは、今はこことは違う外史に紛れ込んでいるだろう。

『それと依頼の医術書ですが、指導員の一人が、その外史に行く事を希望しているので、ついでに持たせても構わないでしょうか？』

(構わねえが、この外史には人しか存在しかいねえから亜人やドラゴン系の奴は来れないぞ)

『豪さんも、見た目は獣人に近いじゃないですか』

(うるさい。来るのはジャック、お前か？)

『あの魔術書は俺がいた外史の物なんすよ』

一呼吸置いて現れたのは、銀色の髪に鋭い目つきの男、豪を雄獅子とすれば、狼を連想させる。

ジャック・ウォーレン

俺がある外史に行った時にスカウトしてきた男で、今じゃ矯正委員の中堅を担っている。

「豪さんご苦労様です、相変わらず怖い顔ですね」

上司への久しぶりの挨拶がそれかい。

「お前を似たようなもんだろが。あの魔術書を知ってるのか？」

「あの魔術書には野暮用がありましたね。それと俺は目を合せただけで餓鬼を泣かせる迫力はもってませんよ」

「大きなお世話だ。とりあえずお前はウォーレンだから王連文儀になればいい。この外史には、本物の王連はいないみたいだしな。それで真名はジャックだから邪悪でどうだ？」

「それはどこの暴走族です、若狗にしますよ。これが頼まれていた医術書です」

ジャックと先生、この二人がいれば、張角三姉妹を仲間になんかできなくても帰還は大丈夫だろう。

幸い三姉妹も先生の説得で太平要術の書を手放す事を納得したらしいし。

数日後

「豪さん見た目だけじゃなく、普段の行いも悪いんじゃないですか？」

ジャック次のボーナスの査定は覚悟しとけよ。

「見た目はともかく、俺は品行方正な善人だつての。それより問題は于吉つて男だ。」

「豪さんが品行方正な善人つてのを認めるのも大問題ですよ。確かにタイミングが良すぎますね」

魔術書は返還される前日に于吉を名乗る妖術士に略奪されたのだから。

略奪をされた場所でサーチ使用して確認をしたが、違う外史の気配は感じられなかった。

つまり于吉以外に黒幕がいる事が確定した。

「しかし、どうせ使わせるなら、もう少しましな魔術書を持ってきてやりやいいのによ」

「力は蓄えまていますから、妖術や魔術の力の底上げはできますが、抵抗力が弱けりゃ自分の力を奪われますからね」

「下手すりゃ生命力も持つていかれかねないな」

「于吉はそれを教えてもらつてはないでしょうね」

確実に聞いてないだろう、于吉は調子に乗って魔術書を使いまくるだろう。

それにより、さらに魔術書は力を蓄え込んでいく。

「それで豪さん、これからどうするんですか？」

「とりあえずお前や先生と一緒に姉ちゃんの所に帰還する、先生の説得に応じれば張角達も連れて行くつもりだ。姉ちゃん達は外史の主流になるだろうから、嫌でもあの魔術書が関わってくるだろうしな」

「それじゃ部下としては、豪さんをはめて喜んでいる天の御遣いとか言う小僧にも、しっかりと挨拶をしなくちゃいけませんね」
ジャックはしっかりとこの部分を怖い笑顔で強調して話す。

今まで俺の周りにいたのは姉ちゃんの部下達で、俺との主従関係はない。ジャックはシルバーウルフの異名を持っている、それは見た目があるが、忠義心の強さもあらわしている。
ジャックがこの外史に来たのは魔術書も関係しているが、自分の上司をふざけた策にはめた奴らが、気に入らなかつたんだろう。
ありがたいが、御遣いと孔明にジャックが”挨拶”をしている姿は優等生カッブルに絡んでいるヤンキーにしか見えないと思う。

side 胡質

世の中には、たちの悪い連中は大勢いる。

その中でも、俺が気に入らないのが自分達の正義に酔いしれている奴らだ。

そいつらは、何をしてもこれは正義の為、大義の為に自分の行動を

省みようとはしない。

そればかりか批判をされると烈火の如く怒ったりする。

早い話、今俺が一番気に入らないのが御遣い軍の連中だ。

御遣いの威光を世に知らしめる為にと、曹仁の兄貴を策にはめて放逐させた。

確かに普通は女の方が強い、だから御遣い達は兄貴の事を曹操様が弟可愛さに作り上げた軍にとっては無用の長物と判断をしたんだろ
う。

皆の事も、別働隊が行ったものを兄貴の手柄に仕立てと思っ
たらしい。

御遣い軍の軍師孔明の才は確かに素晴らしい。

しかしある大きな失策をしてしまった。

文武共に女の方が男より優れていると言う常識に捕らわれてしまい、
兄貴に一度も接触せずに策を練った事だ。

まあ、俺も実際に自分で見る前は雄獅子の噂は眉唾物と判断して
いたんだけどな。

だから兄貴早く帰って来てくれ。

女達の御遣い賛美も、御遣いの無遠慮な視線にも俺はもう、こりこ
りしてるんだから。

兄貴は俺が唯一認めた男なんだから期待を裏切らないでくれよ。

雄獅子と銀狼（後書き）

ジャックの外史はオリジナルの外史です。

そのうちジャックがスカウトされた時の話も書こうかと。

でも恋姫とは無関係な殆どオリジナルな話に興味を持ってくれる人がいるかが心配だったりします。

後、この駄文に驚く程のアクセスがあり感謝の極みです。

外史で吼える雄獅子（前書き）

ようやく恋姫達と再開

外史で吼える雄獅子

side ジャック

俺は豪さんと話をしていて、ある疑念を感じた。

「豪さん、それで曹操軍の将はどんな人物がいますか？」

「主な将は文武ともに優れている俺の姉ちゃん、強いけど不器用な大剣使いの春さん、いつも落ち着いてる秋さん、俺の幼なじみの陽、生意気な猫耳軍師の荀イクとかだな」
「やっぱりな。」

「俺は豪さんに聞いたんですよ。今の答えは、曹仁としての答えじゃないですか。豪さんこの外史に感情移入してないですか？」

仕方ないといえば仕方ない、最近の豪さんの仕事は悪役や短期間しかないのが殆どだった。

「朱霊の事も浮かれている様にみえましたが本当に好きなんですか？外史から連れ出すリスク知らない訳ないですよね」

外史から連れ出される、俺みたいに死ぬ運命ならともかく、周りは知らない人間ばかり、自分の今までの常識が通用しない世界、信じてついできた人間も隠し事をしていて、そのストレスは計り知れない。

「部下に説教されるとは、雄獅子も堕ちたな。俺は曹仁である前に矯正委員の雄獅子でなきゃいけないえよな」

「俺達は豪さんに惚れて自分の故郷捨ててきた奴ばかりですよ。豪さん教えてくれたじゃないですか。正義や優しさに囚われすぎたら外史は救えないって」

「ありがとな。優先するのは神様になるうんなんて、ふざけた企てをした奴に世の中を教えてやる事だよな」

「ですね。それで朱霊の事は本気で好きなんですか？豪さんを見ると条件にあった女をみつけて無理に自分のテンションをあげてる感じですよ。俺が女房を連れてくる相談した時言ってくれたじゃないですか。正史や外史の全部を敵にまわす覚悟があるんなら連れて来い、四の五の言う奴は雄獅子がかみ殺してやるからって。豪さんの為なら委員の全員にその覚悟はできてますよ」

side 豪

ジャックに言われて、改めて陽の事を考える。

ガキの頃は、俺に懐いている女の子と思っていた。

だけど陽は成長しても、一途に俺だけを見ていてくれている。

条件とかじゃなく、きちんとあいつをみてやらないと駄目だよな。

「今はよくわからないんだよ。女に好かれるなんて事なかったから、浮かれすぎてたな」

「豪さん戦いや謀略は化け物みたいですけど、恋愛はガキ並みですからね、既婚者の部下を頼って下さい」

「悔しいがそれに関しては反論できねえな。よっし、俺達は曹操軍に合流する。この外史を糺した後には託されるのは曹操が適してるか

らな」

side 華琳

悔しい、こんな形で私の覇道が潰えるなんて。

豪が私の所から離れた後に、張角達が近くに潜伏しているとの情報を掴む事ができた。

凧の活躍もあり無事に張角三姉妹を配下に加える事もでき、これで豪を迎えに行く事ができる、そう思った矢先に于吉と名乗る男が現れた。

宇吉は僅かな黄巾党を連れて、戦いを挑んできた。

その僅かな男達に私の将や兵も、御遣い軍達も齒が立たたずにいた。

「大人しく曹操と劉備、御遣いの命を差し出さない。そうすれば他の女は私達が可愛がってあげますから」

下卑た笑顔で于吉が高笑いをする。

「誰が喜ぶもんですか。私を可愛がって、もいいのは曹仁様だけです」

満身創痍な陽が叫ぶ。

「生意気な女ですね。なにそのうちに于吉様お願いと言いますよ。それっ」

于吉が片手を高くあげて振り下ろすと、私達全員が地面に叩きつけて身動きがとれなくなつた。

「くそつ卑怯だぞ。動けー」

御遣いが、格好をつけているけども微動だにしないわね。期待もしてなかったけど。

「どうです。まだ生意気な口をきけますか？貴女の口の聞き方ではお仲間死んじやいますよ？言ってみなさい、素敵な于吉様お願いってね。ヒヤッーハッハ」

于吉はそう言つて陽に手を伸ばす。

陽は、悔しさで顔を歪ませる。
でも私の体は動かない。

豪、ごめんね。お姉ちゃん迎えに行けなくなつたかもしれない。
もう一度豪に会いたかつたんだけどね。

side ジャック

豪さんと、先生と俺は張角三姉妹と落ち合う場所にむかつた。
先生が手筈を整えておいてくれたお陰だ。

そこで見たのは、男が高笑いをして地面に臥した将や兵を見下ろしている場面。

容姿をみると話に聞いている曹操軍の将に間違いない。

俺は同情を禁じ得ずにいた、曹操軍ではなく、于吉達にだ。
彼奴等は雄獅子の尾を踏んでしまったんだからな。

そして雄獅子が吼える、木々を揺るがし地に轟く雄叫び。
そして現れる怒りに満ち溢れた雄獅子。

その姿をみたある軍が感じるのは歡喜と安堵。

その雄叫びを聞いたある軍が感じるのは恥辱と後悔。

その迫力に気圧された軍が感じるのは疑念と恐怖。

豪さんが曹操達に慕われ頼りにされているのがわかった。

御遣い主人公補正がなくなったお前の気合いなんて役にたたないんだよ。

それと今になって豪さんの実力が、わかって遅い。

それと于吉達は、ご愁傷様。

side 于吉

素晴らしい、この太平要術の書の力は素晴らしいですよ。

私達妖術使いを馬鹿にしていた軍の将達が私の妖術で身動き一つとれないんですから。

そして太平要術の書で強化した黄巾党の兵は、歴然の武将を齒牙にも駆けずり打ち倒しましたし。

この力があれば、金も権力も女も全て手に入ります。

私を睨んでいる曹操軍の女達も御遣い軍の女達も私の後宮で暮らすんですよ。

その時です。

この世の者とは思えない恐ろしい叫び声が響きわたりました。現れたのは、ごつい男。

その男から発せられている気は、太平要術の書が霞んでしまう程に

強力なもの、あんなに強力な気をもつ人間なんて存在する訳がありません。

黄巾党達を仕向けますが、一瞬も持ちませんでした。

何故、あの男には私の術が効かないんですか？

あの術の効果範囲内では、身動きすらとれない筈なのに。

なのに、なのにあの男は苦もなく近づいてきます。

怖い、恐い、こわい、コワイ、コワイ……

side 豪

合流先で、俺が見たのはいつも気高く、誇り高い姉ちゃんが地面に臥してる屈辱の顔。

いつも強い春さんの弱気な顔。

いつも落ち着いてる秋さんの焦る顔。

そしていつも笑顔を見せてくれている陽の泣き顔。

そうだ、俺は姉ちゃん達に感情移入にしていたんじゃない。

本当の姉であり、大事な仲間であり、そして……

怒りが満ち溢れ俺は吼えた。

高笑いをして陽に手をかけているのが于吉だろう、どす黒い魔術書の臭いがプンプンしている。

魔力で強化された黄巾党をけしかけてきたが、今の俺には足止めにもならない。

そして于吉が浮かべるのは、俺が一番見慣れている恐怖に彩れどられた表情。

「お前、誰の家族に、誰の仲間に、誰の女を泣かせたかわかってんのか。そんなちんけな本で強くなったつもりか？今から本当の強さ

つてやつを骨身にしみらせてやるよ」

side 関羽

あれは何だ。

私達が身動き一つとれない中を悠々と動き、その身からは、とてつもない気を感じさせる。

私が、鈴々が、星が適わなかった黄巾党を瞬時に打ち倒す。

私達が触れさえできなかった男を、怯えさせ身動きすらできなくしている。

あれは化け物だ、私達が策にはめて喜んでいたのは、姉に保護されただか弱い弟ではなく、とんでもない化け物だった。

そしてそんな化け物に、策にはめて放逐させた男に私達は救われている。

side ジャック

雄獅子の爪は、相変わらずえげつないな。

気をまとわせた豪さんの手は獅子の爪の様に、鉄でもコンクリートでも容易く切り裂いていく。

それを一身にくらっている于吉は既にぼろ雑巾にしかみえなくなっていた。

普通なら情報を聞き出す為に生かせなきゃいけないんだろうが、豪さんは切り裂きながらサーチで情報を得てるだろうし。

怒った事で朱霊に対する豪さんの本人も自覚していなかった本音も聞けたし。

俺が結界を張ったから先生は倒れている将や兵を治療していつている。

当然御遣い達もだ。

俺は先生を攻める気はさらさらない。

怪我人より元気になった奴に教えたほうが面白いからな、お前達がケ
ン力を売った相手がどんな人なのかを。

外史で吼える雄獅子（後書き）

これから原作の流れにそいながら先生の正体とかを書いていきたいです。

豪VS于吉 ジャックVS御遣い軍(前書き)

豪とジャックが悪者みえるかも？

豪VS于吉 ジャックVS御遣い軍

side 胡質

ありえねー。

俺は目の前で繰り広げれた光景に溜め息をもらす。

それは豪の兄貴が、俺達を助けてくれた後に起こったんだ。

兄貴のお陰で、身体自由に動ける様になった俺は状況把握をする。殆どの武官は傷だらで、ヘトヘトになっていた。

そんな中で朱霊だけは

「俺の女、俺の女、陽は豪ちゃんの女。へへっ」

満身創痍でうっとり笑顔を浮かべていてかなり怖い。

そんな中で彼奴等が動いた、武官じゃないから動けたんだな。

「曹仁君、于吉さんを許してあげて。もう反省していると思つよ」

兄貴と于吉の間に劉備が両手を広げて立ちはだかった。

「桃香を殴るなら俺を殴れ。」

無抵抗な于吉を殴るよりいいだろ」

御遣いが、劉備の前に立つ。

確かに兄貴（賊顔）が、于吉（優男）を殴り倒してる姿だけを見たら、殆どの人間は于吉の肩を持つだろう、でも于吉は、先までここにいる人間に敵意を示していたんだぜ。

御遣い軍は正義と仁愛を掲げている、だから身動きがとれず攻撃し

てくる可能性がない敵を庇う事で、安全にこの場の主役を兄貴から奪うつもりだろ。

劉備軍の中には、御遣い達の行動に感動をしている娘もいるけど、あれで感動できるって、どんだけ自分達中心な思考なんだよ。

side ジャック

あの二人、自分達の思考に酔ってやがる。

さしずめ俺の正義を

私の仁愛を見て

味方をしない人は悪者になるからって所か？

つつか豪さんが、于吉を殺さないで痛めつけているのは理由があるんだよ。

黒幕を誘き出す為にあえて致命傷は避けて攻撃してんだぜ。

いくら豪さんのサーチが有能でも万能ではない。

多分黒幕は手下をつかって于吉に接触している可能性が高いからサーチだけでは特定は難しい。

豪さんは、力を蓄えた魔術書を餌に黒幕か、部下を誘き出す算段なんだよ。

それに于吉を豪さんが攻撃し続けても平気だったのには理由がある。今の于吉は本の操り人形みたいなもんで、痛みも命の危険も関係なく動かされている。

つまり

「ありがたい、ありがたいですよ。劉備様わざわざ私を庇ってくれて人質にまでなってくれたんですからね」

于吉は傷だらけの体でも平気で劉備を人質にとれている。

それに御遣いの主人公補正と同じく劉備には仁愛補正があったから、今まではあの三文芝居でも通じたんだろう。

「劉備を殺されなくなかったら御遣いは退きなさい。さあ曹仁今までの借りを帰してあげますよ。私の美しい顔を貴男みたいな野蛮人が殴った事を死ぬ程後悔させてあげますよ、いえ死んで後悔して下さいね」

御遣いはサツサツと退いたか、まああの優男が豪さんに傷を負わせる事は無理だろうけど。

そんな中、傷だらけの曹操が立ち上がり大喝をした。「豪、お姉ちゃんか許すから劉備ごとそのクズを殴りなさい。お姉ちゃんの霸道が豪の罪や傷を全部背負ってあげるから貴男は目の前のクズを倒すのよ」

へー、あれが曹操か。

確かに豪さんが慕うだけあって、いい根性してる。

「曹仁様よく考えて下さい。私達御遣い軍と曹操軍は同盟関係にあります。桃香様と一緒に殴るのを許可した軍と今後は、どこの軍も同盟を組みたがらずに曹操軍は孤立してしまいますよ」
あれが豪さんをはめた孔明か。

いつの間にか同盟にまで自分達をあげてら。

この場で否定をしなきゃ曹操が認めたって事にするんだろな。

その時豪さんは口角を僅かに上げて微笑った。

孔明よ、豪さんは卑怯とか薄汚い策略には慣れてんだよ。

「なんか勘違いしてないか？俺はどこかの軍師の策で軍から放逐されたんだ。早い話が今の俺は曹操軍とも劉備軍とも、全くの無関係。

だから俺に同盟なんて関係ないし、姉ちゃんの名にも傷つかない」
流石は豪さん、孔明の策を利用した癖に、逆手にとって責める材料
にしている。

「于吉、お前が選べるのは2つしかない。素直に本を差し出してば
こられるか、ぼこられて本を取られるかだ」

豪さんどっちにしる結果は同じですよ。相変わらず悪いですねー。

「劉備様、安心して下さい。御遣い様が貴女の見た目じゃなく中身
を愛してるなら、多少の傷がついても変わらぬ愛を与えてくれる筈
ですからね」

にじりよる豪さん、後退する劉備と于吉。

「こら何逃げてんだよ。次は痛みも感じないくらいに一瞬で逝かせ
てやるよ」

豪さん、もう悪役そのものですよ。

劉備軍も恐怖からか、手をだせないでいる。

だから手をだしたのは、劉備軍じゃなかった。

辺りにゴンツと鈍い音が響いた。

「ゴウ、いつお姉ちゃんが貴男を放逐したからしら？お姉ちゃん
が命じたのは張角三姉妹の調査よ」

すげっ、曹操が豪さんの頭を鎌の後ろで 叩いた。

「姉ちゃん今それを言う？」

おー！珍しい豪さんが涙目になっている。

「そうだよ豪ちゃん。陽は今傷だらけで泣きたいくらいに痛いんだよ。そんな人達はほっといて、いつもみたいに傷を治して。だって陽は豪ちゃんの女なんでしょ？ねー」

豪さん朱霊に治療を施していたんですか？
それって外史管理条約スレスレですよ。

「陽、傷は後からきちんと治してやる、だから今はくつつくな。于吉が逃げる」

「いやーだ。傷治してくれないと、痛くてもう歩けないんだもん」
朱霊って、豪さんが来るまで于吉を睨み付けていたよな。

「今のうちです、劉備さん貴女は惜しいですけど、命はもっと惜しいですからね」

于吉は、うまく逃げたつもりだろうけど、黒幕が来なかったから豪さんが泳がせたんだろうな。
さて、俺は御遣い達に世間ってものを教えてやるとするか。

side 豪

今回の俺は大活躍だよな、全員を于吉から救った筈だ。
でも

「曹仁殿、もし天の御遣いたるご主人様に何かあったら、どう責任をとられるつもりだったのですか？」

関羽が絡んでくる。

「結局、曹仁様は曹操軍に帰順されたではないですか。つまり曹操軍は同盟の將に拳をむけたのを認めるんですね」

孔明が弁護士並みのイチャモンをつけてくる。

姉ちゃん達も怒る寸前だが、今は姉ちゃん達以上に怒っている男がいた。

俺の部下のジャックだ。

「おい、小娘ども誰に口を聞いているのかわかってんのか？豪さんがいなきや今頃お前達は于吉の後宮行きで自称御遣いは殺されていたんだぞ。感謝をするのが当たり前で文句をつけるとは恐れいったね」

「ご主人様は天の御遣いだ。曹仁殿とは違う」

「どこに天の御遣いって証拠があるんだよ？占いがあつたからか？変わった服を着ていたからか？お前達が天の御遣いの名声を利用したいから強引に祭り上げたんじゃないのか？本当に天の力があるならあの程度の妖術は効かないと思うぜ？今後からは天の世界の一般人に名前を変える」

反論できない関羽に対して次にジャックは、孔明の方をむく。

「先に于吉を庇って同盟を破棄したのは、そつちだぜ。敵を保護したんじゃないか？お前等と于吉は最初から手を組んでたんじゃないのか？それが違うんなら手柄泥棒を認めるかどつちかだな」

部下とはいえ、孔明を責める姿はやが、女子中学生に絡んでくる様に見える。

「くっ、お前は誰だ？名乗りもしないで卑怯だぞ。それ以上我等を侮辱するなら覚悟はあるんだろうな」

関羽さんやっちゃったねー、自分からジャックに喧嘩うつたよ。

「俺の名前は王連。豪さんには返しても返しきれない恩もつ男だ。お前等みたいな世間知らずに豪さんを馬鹿にされっぱなじゃ仲間に合わせる顔がないんだよ。喧嘩ならはそっちは御遣いと武将何人が組んでもいいぜ。」

向こうは関羽、張飛、御遣いの三人か、趙雲はうちの軍事二人に遠慮をしたって所か。

「豪、貴男の知り合いは強いのかしら？」

「俺よりは弱いけども、そこそこは強いよ。姉ちゃんが軍に入れたくなる位にな」

「先生つて医者腕も確かだったし、いいお土産もってきてくれたわね。でも武器はあれでいいのかしら？」

ジャックは、その辺で拾った小枝を武器代わりにしていた。

「前に手合わせで、拳に気をまとわせたたる？あいつは小枝に木を流すから半端な武器よりも頑丈になるよ。それにジャックに当てられなくちゃ意味ないしな」

side 華琳

王連が小枝を持った事に腹をたてて先に動いたのは張飛ね。

「そんな小枝を持つなんて、鈴々達を馬鹿にしてるのだ」

勢い良く飛びかかった張飛だったが、ひらりとかわした王連が張飛の首筋に小枝を当てた瞬間に気絶していたわ。

「豪、王連は何をしたのかしら」

「首から大量の気を流しこんで気絶で済ませたんだよ。張飛殿は絡んでこなかったしな」

あれで、そこそこの武ね。

確かに関羽はもつと惨めだったかも知れないわね。

構えをとった瞬間に気絶させられて、自慢の武を披露する時間すら与えられなかったから。

王連は小枝を携えたまま、御遣いに近づいていく。

見ている武将には、たかが小枝と見くびっていた物が、今は御遣いの命を刈り取る凶器にうつっているでしょうね。

「く、来るな。いや来ないで下さい」

追い詰められた御遣いは岩にへばりつく。

あんな強さを見せれたら御遣いが怯えるのは当たり前ね。

「うるせーよ小僧。こっちは腸が煮えくり返ってんだよ」

小枝を高々と掲げて御遣いに向かって振り下ろした王連。

信じれない事に小枝は岩に突き刺さっていたわ。

「次に女の背中に隠れて豪さんに上等をきってみやがれ。小枝をデコに生やしてやるからな」

御遣いは恐怖の余りに気絶したみたいね。

王連の空気に飲まれて劉備達は気絶した仲間を回収するしかなかっ

たみたいわね。

可愛い豪も帰ってきたし、張角三姉妹も配下に加える事ができた。さらに豪は、腕の優れた医者にとんでもない強さの武将も連れて来てくれたし。

今日は久しぶりに美味しいお酒が飲めそうね。

豪VS于吉 ジャックVS御遣い軍（後書き）

ようやく黄巾党編の終りが見えてきました。

お気に入り登録も500を超えて感謝しかありません。

感想指摘お待ちしております。

豪の知らない所で（前書き）

今回は話が途中で違う方向に行きます

豪の知らない所で

side ジャック

張角三姉妹が、曹操軍の軍門に降り、事実上黄巾党は瓦解した。

当然、御遣い達とも別れる筈なんだけど、行く宛がない彼奴等は当然の様に帰還する曹操軍について来ている。

ちなみ御遣いに、人間生け花宣言をした俺に対して劉備軍はガンをつけまくりだ。

「豪さんアレどこまでついて来る気なんですかね？」

「独立の算段ができてないだろ、離れた即飢え死。お前はは御遣い達をどう見る？」

「武官、文官共に能力は優れています。でも天の御遣いや正義とか仁愛を看板にしちゃ行動を狭めてしまっただけですからね。豪さんの時みたいに相手に難癖をつけてるしかないでしょう」

「あれでよく瓦解しないよな。しかし姉ちゃんどこに付いて来るのはいいが、仕事はどうするつもりなんだ」

武官の出番は、しばらく激減するから曹操軍で間に合うし、他の軍の文官に任せれる仕事なんて限られている。

豪さんが外史の遮断をしなければ、都合よく食料が手に入ったり商人の援助を受ける事ができて、何らかの役につくまで食いつなげたいと思うが。

「曹仁としては、彼奴等をどう扱うんですか？」

「変な宣伝や噂を広めそうだから、あまり街には入れたくねえな。劉備は正史では平原の相につくから、そのまま平原に行ける様に黄巾党の残党刈りを平原方面に進みながらやっもらうさ」

「御遣い達に気づかれない様に追い払うんですね」

「いくら正史の影響を遮断したとはいえ劉備達がいなくなると外史の混迷が増すからな。かといってあの青春グループに関わる気はしねえし」

「流石は曹家のご長男、考えてますね。」

「じゃなきゃ金や食糧をせびられそうだし、平原近くで話が届けば我等の働きが認められたと祿に準備もせずに平原に行ってくれらる」

「あんなのが、政治しちゃ役人も民も堪らないでしょうね」

「朝令暮改とか平気でしそくだよな。清く正しくじゃ内政がうまくいかないのは古今東西変わらないんだけどな」

「ただ、あれだけ迷惑をかけといてついて来れるのは、ある意味尊敬できる。」

side 李典

雄獅子の兄ちゃんだけでも充分なのに、また規格外なのが入ってきた。

あの王連って男はなんなんや。

普通、小枝で張飛や関羽を倒せるか？

挙げ句の果てに岩に小枝を突き刺すって。

いつものなら、あんなのを見たら興奮する風はえらい大人しい。

多分、雄獅子の兄ちゃんが言った、俺の女がこたえたみたいやな。

風のやつ、雄獅子の兄ちゃんに憧れとったみたいし。

「沙和、話があるちよつと耳を貸すんや」

「真桜ちゃん何か用なの？……それで風ちゃんが元気になるならいいの」

side 華琳

真桜と沙和が私の天幕に来て、折り入って話があると目通りを願ってきた、珍しく風は一緒じゃないみたいね。

「華琳様に相談があるんですけど、実は風が最近元気がないんです」

「確かにいつもの覇気が感じれないわね。貴女達何か知ってるのかしら？」

「雄獅子さんがいけないの。風ちゃんは雄獅子さんの事を好きだったのに、風ちゃんの前で朱霊さんに告白したから元気がないの」

「それで私はどうすればいいのかしら」

「いや、雄獅子兄ちゃんの立場からして跡継ぎは多い方が安心やと

思うから、華琳様から雄獅子の兄ちゃんに言ってもらえませんか」「確かに私は男に興味ないから、豪に子供が産まれたら養子にするつもりだったしね。」

「豪に側室を持つのを許可すればよいのかしら」

「雄獅子さんが素直に言う事を聞くのは華琳様しかないの」

確かに豪を扱えるのは私しかないわね。

「お願いします。凧なら雄獅子の兄ちゃんの嫁になっても、政治に口出しはしないと思います」

「わかったわ。豪と陽には私から話しておくけど、後はあくまで豪と凧の問題よ」

約束をすると真桜と沙和は嬉しそうに天幕から出て行った。

「秋蘭、今の話どう思う?」

「豪様に跡継ぎが増えれば曹家も安泰となります。陽も祖父の代から曹家に仕える身、反対はしないかと思えます」

「でもまさか凧が豪を好くとはね」

姉が言うのも、何だけでもあの子が陽以外の娘に好かれるとは思っていないかった。

「最近はいった文官の胡質も豪様に好意をもっている様子、古い将や兵は華琳様や陽に遠慮をしていましたから」

「意外と豪もやるわね。それならあの三人娘も任せてみようかしら」

豪は鍛錬時間は少なめでも大丈夫だろうし、しばらくは内政と三人娘の相手をさせとこうかしら。

side 陽

華琳様に呼び出されて告げられたのは、将来豪ちゃんに複数の側室を持たせて跡継ぎを確保させるって話だった。

負けない、陽はこれくらいじゃめげないんだから。

華琳様も豪ちゃんの意志に任せるのが大前提って言ってたし。

そう、豪ちゃんの女である陽が常に豪ちゃんを虜にしていれば大丈夫。

強いとか、頭がキレるとかそんな半端な理由で豪ちゃんを好きになる娘に陽の愛が負ける訳ないんだから。

華琳様の天幕から出た私は先手必勝とばかりに豪ちゃんに会いに行く事にした。

豪の知らない所で（後書き）

最初の予定では、陽、凧や他数名が豪とくつつく予定でしたが、陽が活躍しすぎて

そこでこの小説をみてくれている皆様に質問です、陽オンリーとハーレム系どちらがよいかお聞かせ下さい

側室宣言 それぞれの反応(前書き)

たくさんアンケートの答えありがとうございました。

とんでもなく嬉しかったです。

あと今回の陽は壊れ気味です。

側室宣言 それぞれの反応

胃が痛い、あとからガスー110を送ってもらおう。

「豪ちゃん聞いてるの?!」

「はいっ!」

陳留に帰って直ぐの事、俺は姉ちゃんに呼び出された。

「豪、貴男側室を持ちなさい。これは主君としての命令よ。拒否権はないからね」

しかしお姉様、奇跡的に陽に好かれている様ですが、貴女の弟は、まごう事なき独身中年なんだぜ。

あれから陽に会えてないし、「豪ちゃん勘違いしてたのごめんね」って可能性もあるんだよ。

「姉ちゃん見合いでもしろってのか?」

正史時代にいた時は写真で断れたんだよな!。

「馬鹿言っつてんじゃないの。余計な繋がりには面倒なだけよ、これだけ女性が多いんだから、身内でなんとかしなさい。後泣かせたりしたらわかるわよね」

「姉ちゃん、鶏に大空に羽ばたけって言ってるのと一緒にだよ」

「鶏だつて、崖から飛ばせば羽ばたけるはずよ。あつ陽には了承させといたから。お姉ちゃん、豪の結婚式を楽しみしてるか」

ら・ね」

それで姉ちゃんの部屋をでたら陽がいた。陽は無を言わずに、俺を私室に拉致する。

「豪ちゃん、豪ちゃんのこないだの告白、陽スツゴい嬉しかったんだよ。やっぱり豪ちゃんも陽と同じ想いだっただってわかって」言葉は甘い言葉だけど、陽は寝台に腰をかけて俯きながら話している。

しばらく沈黙した後、突然陽が顔あげて高らかに宣言をする。

「曹家の跡継ぎが大切なのは陽もわかる、側室はとっつっても嫌だけでも認めるよ。だけど正室は陽になるんだからね。ううん、側室なんか必要としないぐらい素敵な奥様になるんだから」

陽は拳を握りしめて闘志を燃やす

「負けないわよ、あんな拳法使いや探偵文官なんかに負けてたまるもんですか。幼なじみの積年の想いの重さをみせつけてやるんだからっ！」

陽、想いの重さって随分へビーなお言葉なんですけども。

「豪ちゃん聞ってるの?!」

「はいっ!」

御遣い軍って、あれだけ手をつけていて、何で和気あいあいとしていたんだろっ。

それより今お暇したら陽に背後から刺されたりしないだろうか。

side 李典

「なーぎ、いい知らせ持つてきてやったで。曹操様が側室を持つ許可をしてくれたで」

「別に私は曹仁様が正室を持たれようと側室を持たれようと関係ないっ！」

随分と、この話題には敏感やな。

「沙和、うち曹仁様のその字でも言ったかな？」

「うっん真桜ちゃんは側室の許可しか言ってないのに、凧ちゃんは直ぐに曹仁様って言ったの」

「二人共私をからかいにきたのか？どうせ私の様な無骨な女に恋等は無縁な話なんだ」

「凧、見損のうたで。気持ちも伝えなくて逃げるんかいな。朱霊さんは雄獅子の兄ちゃんが鈍いにも関わらず毎日の様に攻めて攻めまくったそうやで。女尊男卑の世の中で乙女が男に惚れるのは奇跡に近い事や。負けっぱなしが武道家楽進の生き様なんか？」

雄獅子の兄ちゃんは、つい最近まで朱霊さんの気持ちに気付かなかつたらしい。どんだけ鈍感やねん。

「お前達には好きな男がないから、わからないんだ。もし曹仁様に嫌われたと思うだけで体の震えが止まらなくなるんだぞ。真名も交換していない私が朱霊様に適う訳ないだろう」

「確かに沙和は男の人を好きになった事がないから凧ちゃんの気持ちは良くわからないの。でも動かなきゃ何もかわらないの。まずは雄獅子さんに手合わせをお願いして、お礼に凧ちゃんが、ご飯作っ

てあげたらいいの」

「よっし、善は急げや。雄獅子の兄ちゃんに手合わせをお願いしてくるぞ」

凧はまだ騒いでるけど関係ない。

うちは友の幸せの為に頑張るんや。

side 胡質

今日、俺は新たな情報を掴んだ。

曹操様が兄貴に側室を持つ様に命令したらしい。

曹操様が女性を愛しているのは有名だ。

つまり可愛がついてる兄貴の子供の中で、才能ある者を養子として跡継ぎにする腹なんだらう。

この話には権力に飢えた者達が、砂糖に群がる蟻の如く反応するのは目に見えている。

させない、武には疎いが俺は文官だ。

見合い話の中で怪しい物は全て白日にさらけ出してやる。

家柄からいくと祖父の代から曹家に使えている朱霊が正室になる可能性が高いだらう。

しかし、正室より側室が愛でれるのは良くある話だ。

先ずは真名の交換からだ、幾重にも恋の策を巡らせて兄貴に愛でてもらふんだ。

side ジャック

『ジャックさん、事務連絡です。創竜様が豪に女難の相が見えたから、気をつける様に伝えろとの事です』

（もう遅いと思っぜ。あの朴念仁が何人もの女の相手をできる気がしない。普通ならモテたと喜ぶんだろっが、豪さんは胃をやられるだろっよ）

『胃薬を送っておきますね』

豪さん、憎まれ役は慣れてんだけどな、御遣いみたいに八方美人になれる器用さは期待するだけ無駄だろっ。

側室宣言 それぞれの反応（後書き）

実際にハーレムをやっている男って、なかなかいないと思う。

しばらく幕間が続きますが、以下の様な幕間は興味ある方いますか？

豪とジャックが出会った時の話

ジャックと奥様の馴れ初め

豪とジャックの二度と行きたくない外史

感想指摘お待ちしております。

明日は仕事が休みですから感想いただけたらテンション上がって何話か書けるかも

幕間 豪とジャック 二度と行きたくない外史(前書き)

みたいて言ってくれた人がいたので書きました。
文中に苦手な表現があったら、許して下さい。

幕間 豪とジャック 二度と行きたくない外史

豪私室

「豪さんお疲れ様です」

「おー、ジャックこの外史はもう慣れたか？」

「慣れたって言うか久しぶりにまともな外史ですよ。飯はまともだし、人から恨まれないし」

「だよな。お前もう行きたくない外史とかあるか？」

side ジャック

あの外史には二度と関わりたくない。

俺は豪さんと違い安請負いはせずに、ある程度吟味してから仕事を受ける。

その時の外史は

時代 中世

場所 城に所属

内容 護衛

護衛対象を襲う犯人が強すぎるから、助けて欲しいとの依頼。まあ、主な人種が人間がだから平気だと思ったのが甘かった。

城にて新兵の募集をしているから、応募すればいいらしいんだが

なんだ、この城は！

なんで男同士が手を繋いで歩いてるんだよ。

兵士がそんなフワフワな服や目立つ服着たら駄目ろっが。

そこの長髪、髪を切れっ、それと何回も髪をなおすんじゃない。

やばい、ここは命じゃなく違うものがやばいかもしれない。

犯人を速攻倒して、おさらばしてやる。

新兵の受付をしていたのはサラサラ金髪の無駄に胸ボタンを外している男だった。

「ジャック・ウォーレンです。国の平和の為に命をかける所存です」

「ははっ、そう硬くなるな。私は騎士隊長のカイルだ。ジャックが
いい体しているな」

触るな、俺の体を微妙なタッチで触るんじゃない。

「早速だがお前の実力をみたい。私の部下と試合をしてもらおう」

次に出て来たの妙に熱いメッシュの短髪戦士。

「俺の名前はヒート。お前か新人の癖にカイルさんに気に入れたっ
て生意気な奴は。カイルさんの目にとまるのは俺だけで充分なんだ
よ」

こいつ暑苦しいうえに、うざい。

俺は無言でノックアウトしてやった。

帰り際にヒートが

「カイルさんより強いなんて……」

潤んだ目で見てきたのは幻覚だ、絶対に幻覚だ。

「あのヒートを一撃か。お前なら王子を守れそうだな」

こら、カイル何で俺の肩に手をまわすんだよ。

「王子、カイルです。新たな護衛を紹介いたします」

そこにいたのは、青い髪の童顔王子、つか女みみたいな顔だな。

「僕の名前はホーリー三世だよ。よろしくね新しい護衛さん」

上目使いしてくるなよ、こいつを犯人から守らなきゃ、いけないんだよな。

あの後、カイルやヒートが妙に話しかけてくるし、王子は潤んだ目で見つめてきている。

俺は女房一筋の既婚者なんだよ。

でようやく、ようやく夜になって現れた犯人が…

黒づくめの服金の刺繍を施している長い黒髪の男、

「私の可愛い王子、夜の騎士が迎えにまいりましたよ。その護衛、恋の邪魔を、ぐえっ」

「うるせーんだよ。このホ 野郎。こちらとっと帰って女房の手料理くいながらイチヤイチャしたいんだ」

俺は念入りに黒髪をしばき倒してやった。

(任務終了。はやく俺を戻せ。何か王子が怖くて一人で寝れないとかほざいて俺を探してんだよ。頼むから早くしてくれー)

俺はその日、女房の膝で泣いた…。

side 豪

今回の外史も、悪役。

創竜のオジキが、

「豪くらい悪役のオファーが多い矯正委員も珍しい」とか言ってた。

ちなみに今回は、国のお姫様をさらって婚約者の王子に倒されて欲しいとの事。

何でも強い騎士がいて、王子がくる前に解決して困っているらしい。

それでついた先は…

蛙の歌しか、聞こえてこないよ…

蛙型人間の外史だった。

蛙人間の身長は、人とそれ程変わらず二本足であるき、何故か髪が生えている。

俺にあてがわれた城は沼の上に立っており、湿気が半端じゃない。手下のカエルが言うには、ここは聖地で大変過ごしやすい場所らしい。

でもこのままじゃ、俺のヒゲにカビが生えるんじゃない？

早く帰りたい俺は、速攻カエル姫をさらってきたのは、いいがこの姫がうざい。

つうか金髪のカエルって。

「魔王さんは変な皮膚をしているから、今まで差別をされてきたのでしよう、だからこんな事をされるのですね。私が愛で治してあげます」

とかぼざいていた。

料理は愛情を込めれるんですって、出してきたのはでかい八工の料理。

「初めて作ったからお口にあつか自信ありませんが」

自信をもって言う、口にあつ訳がない。

とりあえず部下に食べさせたら、カエル姫に夢中になった様なので世話役を命じた。

携帯食の存在が、こんなにありがたく感じのは初めてだ。

姫と部下は仲良くなったらしく、一緒にグエツグエツと歌を歌っている。

俺は姫を取り戻しにくるカエルを倒す毎日。

この外史を終えたら、有給とってアメル姉ちゃんに会いに行こう、今なら人参も美味しく食べる自信がある。

ちなみに姫カエルは、世話好きらしき俺の寝台を湿気だらけにしてくれたり、グエツグエツと子守歌を歌ってくる。

終いには俺の寢所に、夜這いをしようとしてきた、この時ばかりは管理条約を無視してドアにロックの呪文を重ねがけしまくった。

結局、王子は世話を命じた部下だった。

何でも国を滅ぼされて復讐の為に魔王に仕えたらしい。

多分王子カエルに刺された時俺は満点の笑顔をしていただろう。

s i d e e n d

「お互い大変ですよね」

「だよな…。今日は飲もう」

幕間 豪とジャック 二度と行きたくない外史（後書き）

豪が御遣いにキレない理由がわかるかもしれません。

幕間 凧編 豪の氣の使い方講座

side 凧

「なにぎ、雄獅子の兄ちゃんが手合わせをしてくれるんやて」
真桜がニヤニヤしながら私に話かけてくる。

「真桜いい加減その呼び方を止める。曹仁様は私達の仕える曹家の
ご長男なんだぞ」

「凧は硬いのー。雄獅子の兄ちゃんはそんな細かい事気にしてない
で。ほれ行くで」

「待て。まだ気持ちの準備が…」

「曹家の長男を待たせるのも失礼になるんやで」
真桜は私の手を引っ張って、鍛錬場に連れてきた。
そこには私が敬愛する曹仁様がおられた。

「よっ、楽進久しぶりだな。手合わせもいいが、お前は外氣の使い
方はわかるか？」

曹仁様は偉ぶる事もなく、無邪気な笑顔をみせてくれる。

「雄獅子の兄ちゃん、内氣とか外氣ってなんや？」

「内氣は自分の身体にある氣の事、殆どの奴は無意識に使っていて
存在すら認識してないけどな。それを認識して練る事で楽進みたい
に氣弾を打てたりする。逆に外氣は自分以外の万物にが持っている

気の事だ。逆に外氣の方が認識はしやすい」

「でも私は未熟故に外氣をわかりませんが」

でも流石は曹仁様だ、師匠の小難しい説明と違い説明がわかりやすい。

「楽進は難しく考えすぎだよ。外氣じゃなく秀囲気と捉えればわかるだろ。」

「気まずい秀囲気、敵かな秀囲気、姉ちゃんの覇気、説教する前の笑顔の姉ちゃんからでる威圧的な秀囲気、これはそれぞれがもっている内氣が何らかの原因で溢れ出して感じやすくなってるんだよ」「秀囲気か、それならわかる気がする。」

それに今私は独特な覇気を感じている。

「ごう、貴男随分と氣に詳しいわね。私も一緒に聞かせてもらおうわよ。それと私が説教する前の威圧的な秀囲気って何かしら」

笑顔の華琳様から溢れ出ているのが、それなんだろう。

曹仁様は硬まって、冷や汗をかかれています。

「姉ちゃんいつの間に。姉ちゃんは人より氣の内蔵量が多いから、わかりやすいんだよ」

「豪、説明が終わったらお姉ちゃんとゆっくりお話をしようね。それと他にも聞きたい娘もいるだろうから会議場に行くわよ。その後に氣を使つての豪と凧との模擬戦をしてもらおうね」

side 豪

それで集まってきたのが、姉ちゃん・楽進・李典・陽・胡質・秋さ

ん・程イク。まだいた御遣いの所の劉備・関羽が来ていた。

「豪ちゃん陽も氣弾使えるの?」

「鍛錬次第だけど、氣弾を実戦で使えるまでの鍛錬量を考えると現実味が薄いな。それより自分の得意な武を磨く方がまだよ。氣は体調管理程度に使うくらいで充分だ」

「兄貴、それなら氣は文官にも役立つのか?」

「胡質、いい質問だ。交渉時に相手が本心がある程度わかるし、兵を伏せているのかもわかるから文官にも役立つ」

「曹仁様、外氣を感じるのには理解できましたが、具体的にどう利用したらいいのでしょうか?」

「一番役立つのは周囲の氣の流れを見て、氣弾を放つ場所を決める事だな。氣の抵抗力が少ない場所に放てば氣の威力も落ちないし、相手の氣が薄い所がわかれば、そこに目掛けて放てば効果的だ。」

「豪ちゃんそれなら陽に関係ないの?」

「外氣を利用する方法はあるよ。今は御遣い軍の方にもいるから言わないが」

流石に雰囲気が悪くなったが、気にしない。

「それで体調の管理は誰にでも、できるのかしら」
流石は姉ちゃんナイスフオー!

「氣使った体調の管理は体に氣を流して流れが滞っている場所を確

認するんだよ。氣を使った治療は医療の知識がないと逆効果になりかねないからな。姉ちゃんや希望する人には後から俺が教えるよ。ただ肌に触れる必要があるから、それが嫌な奴にわざわざ教えるつもりはない」
特に睨んでくる関羽とかは勘弁して欲しい。

「後聞きたい事がないなら手合わせをするぞ。すいませんが御遣い軍の方々はご遠慮ください。旅立ちの準備もあると思いますから」

「えー、私も曹仁君の手合わせみたいなの」

「氣は扱える人にきちんと教えてもらわないと体調を崩しかねますので、後から苦情を言われたくないんですよ」

side 楽進

これから曹仁様が外氣の使い方をお教えてくれる。

「内氣は無尽蔵じゃないからな、外氣をうまく取り込めば氣の消費を少なくできる」

曹仁様がそう言って大きく息を吸い込んだ瞬間、曹仁様を中心として巨大な氣の渦ができた。

「風うちにも渦が見えるぞ。本当にあのお人は規格外としかいい様がないな」

「さて氣弾にも使えるが、氣脈を開いてやるから希望者は並んでくれ」

「豪、まずは私からね。それでどこを触るのかしら」

「姉ちゃんウナジでいいよ。最初は軽く流して徐々に強めていくかな、姉ちゃん体に何か流れてるのがわかる？」

「ええ、これが氣なのね」

「姉ちゃん頭痛あるみたいだから治しとくよ」

曹仁様はそんな事まで、できるのか。

その後、各将が気脈を開いてもらいながら治療も受けていった。

「さて楽進、またせたな。手合わせをするぞ」

「はいっ、お願いします」

「まず俺の氣を感じてみる。そこから戦術を考えろ」

そこからの手合わせは、本当に充足したものであった。

「曹仁様お願いがあります。これからも手合わせをして下さい。それと私の事は良かったら凧と呼んでもらえますか」

目を伏せて緊張した時間が過ぎると、大きく暖かい手が頭に乗せられた。

「そんな緊張するなよ。俺の真名は豪だ。よろしくな凧」

豪様の手は、とても大きく暖かくて子供の頃に父様に頭を撫でられた時を思い出させてくれた。

今なら、はっきりとわかる私が豪様に感じている想いが何なのかを。そしていつかこの想いをきちん豪様にお伝えしたい。

その後、外氣を感じれる様になつたお陰で、華琳様の覇氣が強まるのと豪様の氣が弱つていくのがわかった。
豪様が華琳様にお説教されいるんだろう。

幕間 凧編 豪の氣の使い方講座（後書き）

胡質の真名考えてない…

幕間 胡質レポート(前書き)

胡質がメインです

幕間 胡質レポート

この人達は、いつまでいるんだろう。

俺の活躍が目立ちすぎたのか、劉備が平原の相に任命される気配が全くかない。

つまり御遣い軍がなかなか出てってくれないんだよ。

確かに今陳留から出ると補給を受けれないから、当たり前なんだけど。

だがこのままタダ飯を食わせる訳にもいかない民がせっかく納めてくれた税を無駄にするのは申し訳ない。

「胡質、頼みがある。御遣い達の身辺調査を頼めるか」

「兄貴、任せといてくれ」

side 胡質

この好機を逃す訳にはいかない。

兄貴に頼まれた俺は御遣い軍を徹底的に調べ上げた。

調べたが……何なんだ彼奴らは。

曹家の長男の兄貴より仕事をしてない客将は駄目だろ。

胡質調査書

起床時間

御遣い 朝8時

兄貴 朝5時

侍女

御遣い 三人

兄貴 なし

午前中主な仕事

御遣い 街の見回り

兄貴 内政処理、陳情処理

昼食

御遣い 食堂で女の将と

兄貴 手弁当

午後の主な仕事

御遣い 訓練見学及び鍛錬

兄貴 武官への稽古、各諸侯との面会、民からの陳情対応

仕事終了時間

御遣い 5時

兄貴 8時

仕事終了後の過ごし方

御遣い イチャイチャ

兄貴 自己鍛錬または華琳様との会食、将を飯に連れて

行く

朝早く起きて、炊事洗濯をしている兄貴の背中には泣けるものがあった。一人旅で慣れたらしいのと、女尊男卑の為に立候補する侍女がいなかったらしい。

仕事はこの他に賊の捕縛、村への農業指導、治水事業（斧を使って

の井戸掘り)、先生からの医療相談等、飛び込みのものをこなしていた。

王連が言うには、

「豪さんはお仕事大好き人間なんだよ」
との事。

兵、民の意識調査

見た目(新人兵)

御遣い 美少年

兄貴 怖い

見た目 (中堅兵)

御遣い 顔だけ

兄貴 頼りがいがある

見た目 (古参兵)

御遣い 情けない

兄貴 可愛い

どうやら兄貴は付き合いが長い人に人気あるらしい

周りからの不満

御遣い 軟派、浮気

兄貴 鈍感、働き過ぎ

兄貴の鈍感には俺も思いつきり同意する。

兄貴は民とか兵の気持ちには、敏感な癖に乙女の気持ちには鈍いん

だよな、そこが可愛いんだけど。

最近の楽しみ

御遣い 可愛い娘探し

兄貴 部屋での手酌酒

兄貴、俺に声かけてくれたらいくらでもお酌するのによ。

side 豪

胡質のレポートは驚く程よく出来ていた。

でも何で俺と比較するんだよ。

俺って正史のサラリーマン時代と変わらずお仕事中心の生活なんだな。

御遣いは学生時代の生活から抜けてないな。

手酌酒は仕方ないんだよ。遮断ができたお陰で、正史の飲み物とか食い物の持ち込みが許される様になっただよ。

最近は芋焼酎と鯖の水煮缶の組み合わせにはまり中。

姉ちゃんや陽とかに、見せるのはまだ早いから一緒に飲めないし。

愛妻家のジャックは、毎日帰ってるみたいから無理。

しっかしレポートを見る限り隙ありすぎて、逆に責めにくいよな。

平原の相にするには、懇意にしている役人に何か贈っておくか。

食糧は、貸付で担保代わりに将を何人か派遣する形をとれば分断にも繋がる。

とりあえず胡質に礼を言わないとな

「胡質ありがとな。お陰で策を組めそうだ」

「兄貴なら真名の交換をしてもいいか？俺の真名は調だ」

「わかった。俺の名は豪、調これからもよろしくな」

幕間 胡質レポート（後書き）

アンケート？のお願い

正史の食べ物や飲み物が持ち込める様になつたから、このキャラこれが好きなんじゃねとかあつたら教えてください

ちなみに豪は ポテチはオー・ザック薄塩 牛丼はすき屋 コーラはペプシネクスト ドリンクはダカラ ハンバーガーはモスとなっています

なぜわざわざ聞くかと言うと作者の住んでる所は田舎（東北の端っここの県）でコンビニやハンバーガー屋やファミレスの種類が少ないんです。

お願いします

三姉妹と豪（前書き）

最初は前にいた外史でプロデューサーをした経験がある豪がプロデューサーとしていく構想でした。

三姉妹と豪

side 豪

警護中の事、街のチンピラに女性が絡まれてるとの報告があったので、現場に急行した。

報告の場所に行くと7、8人の男が一人の女を取り囲んでいる。

「俺達あなたの支援者なんだから一緒にお茶しようよ」

「何もしないからさー」

「俺達天の御遣いの友達なんだぜ」

その言葉で付いて来る女性がいたら見てみたいよ。

姉ちゃんの説教を防ぐ為にも、救った女から俺は心身ともにきつい一撃をもらうはめになった。

side ????

「天和姉さん、いい加減泣き止みなさい。それで助けくれた男の人にはきちんとお礼は言ったの?」

天和姉さんは町で男の人達に絡まれた所を助けてもらったらしい。

「だってー、その男の人背も高くてごつくて、顔も恐かったんだもん」

天和姉さんは謝るところか、助けてくれた男の人に平手打ちをした上に、

「顔が怖い」

と叫んで逃げたらしい。

「天和姉さん、ちーでもそれはしないよ」

「ちーちゃんまで意地悪言う、ヒゲも生えていて本当に怖い人だったんだよー」

背が高い、ごつくてヒゲが生えた怖い顔。

チンピラの頭を掴んで投げ飛ばす事ができる強さ。

まずい、かなりまずい。

今私達三姉妹は曹操様に匿われている立場。

「姉さん達、直ぐに先生の所に行くわよ」

「えー今日はお姉ちゃん怖いから外行きたくないよ」

「天和姉さんが叩いたのは曹操様の弟の曹仁様よ。曹仁様の話は聞いた事あるでしょ？」

「人和、曹仁様って雄獅子の曹仁。あの一人で黄巾党の砦をおとしたり、曹操軍と御遣い軍が束になっても適わなかった于吉をボコボコにした曹仁様？」

「そうよ。さらに曹操様が溺愛している弟で、朱霊様の想い人、私達を保護した楽進さんが敬愛してやまない男、曹操軍における立場は絶大な人よ」

「えー、どうしよう。お姉ちゃんまずい事しちゃったかな」

「天和姉さん、まずいどころじゃないわよ。陳留から追い出されるだけで済まないかもしれないのよ」

「今騒いでも何にもならないわ。幸い先生が曹仁様と仲がいいから助力を頼みに行くわよ」

side 先生

治療を終えて、ゆっくりしていたら張角達が慌てて飛び込んできました。

何でも張角がチンピラに絡まれている所を豪さんに助けてもらっただけらしいのですが、顔を叩いた上に豪さんの顔が怖いと言って逃げ出してしまったそうです。

それで先、豪さん愚痴ってたんですね。

「三人とも大丈夫。豪さんはそれ位じゃ怒りませんよ」

「でも先生、周りの方々は大丈夫でしょうか？」

「若狗、王連さんはその話を聞いて腹を抱えて笑ってましたからね。豪さんにその顔をいきなり見せたら大概の人がびびるの当たり前じゃないですよって話してましたよ」

「でも曹操様や朱霊さんは？」

「きちんと豪さんに謝れば平気ですよ。今から呼んで来ますから、きちんと謝って下さいね」

side 天和

先生が曹仁様を呼んで来てくれたから、ちゃんと謝る事ができた。

曹仁様は

「そんなに俺の顔は恐いか？」

って笑いながら許してくれたんだ。

それは子供みたいに無邪気で可愛い笑顔。

私達の歌にある貴男の笑顔が好きって歌詞の意味がわかった気がした。

三姉妹と豪（後書き）

三姉妹の口調がわかりません！

水を汚して魚を棲まわせる？（前書き）

以外？な人が絡みます。

水を汚して魚を棲まわせる？

姉ちゃんが西園八校尉に任命される事になった。

劉備も平原の相になり、ようやく陳留から出て行く様だ。

「豪をさん、面白い者が見れるって何ですか？」

「この外史における最強の武将、呂布奉先。あいつだよ
面白いぐらいに強力な気が溢れてる。」

「強いですね。少し鍛えるだけで他の外史でも使えますよ。豪さん
スカウトしますか？」

「ジャック、お前サーチかけてみたか？あれじゃきついよ」

「あー、武は強いですけど他は子供と一緒にだ。帯に短しタスキに長
しですね」

「純真無垢。あんなに綺麗な心の持ち主だと俺らみたいな汚れ役は
耐えられないだろうからな。明日から洛陽に今回のお礼と挨拶回りに
行くけどジャック一緒に行かないか？」

「洛陽ですか？」

「貢ぎ物を持って有力な役人や宦官にこれからも曹操をよろしくお
願いますってな。どこの世界でも大人のお付き合いは大切だぜ」
御遣い達は毛嫌いするだろうけど俺が汚れてトラブルを防げるなら
頭も下げるし、貢ぎ物も贈る。」

「勘弁して下さい！宦官つてあれじゃないですか。それで貢ぎ物つて事務所に送らせたんですか？」

「おう。ダイーのガラス製品だ。この時代はガラスが貴重だから評判がいいんだぜ」

「御遣い達は手ぶらで行きそうですね」

「金がないから持つてく物もないだろう。御遣い様が活躍したんだから当然って思いもあるだろうし、汚れた行為は許せない連中だからな。水清ければ魚棲まずなんだけどもな」
「今まで色んな外史を見て来たが、清く正しくだけが通じる世界なんて存在しなかった。」

side 華琳

豪は政治関係でも如才がないから今回の洛陽行きを安心して任せる事ができる。

それに豪は一人で大量の物資を運べる上に護衛も必要としないから経費も安くつくのよね。

問題は同行者、どこで聞きつけたのか陽や調は自分から願い出てきたし、真桜や沙和は風を推薦してきた。

陽は洛陽に詳しいから必要、胡質は新しく洛陽の太守になった董卓の調査をさせたい、風は背後を守らせようかしら。

side 豪

「姉ちゃん入るよ。明日辺りに洛陽へ出発するよ。久しぶりに一人旅を満喫してくる」

「馬鹿おっしやい。曹家の代表が供も従えないでどうするのよ」

「俺は一人で動いた方が気楽なんだよ」

「陽、凧、調を連れて行きなさい。あの娘達も洛陽で動いてもらうんだから豪に拒否権はないわよ」

俺が真名を交換した三人じゃないか。

絶対姉ちゃんなんか企んでるだろ。

「その三人は騎馬で行くのか？」

「豪、真桜に今回の貢ぎ物を運ぶ為に随分と面白い物を作らせたみたいね。あれに乗せていけばいいじゃないの」

「何で姉ちゃんがあれを知ってたんだよ」

「可愛い弟がこそこそ動いてたら姉が興味を持つのは当たり前じゃない。真桜に人が乗っても快適な様に改良させといたから」

「快適つて。姉ちゃんも使う気が満々じゃないか」

「あれは使わないわよ。真桜には私専用のを作らせてあるもの」

俺が李典に作らせていたのは幌馬車風の荷車。

李典にバネや衝撃吸収についての工学本を渡したら目を輝かせて制作に没頭していた。

「馬はどうするんだよ、人を乗せて運ぶに馬が何頭も必要だろ」

「王連に聞いたたら豪が引いた方が早いつて言つてたわよ」
ジャックの野郎、余計な事を言いやがって。

「三人には言つたのかよ。出発は明日だせ、あ・し・た」

「お姉ちゃんが豪の行動を予測できないと思つて？きちんと出発日は伝えてあるわよ。三人共楽しみにしているから今更中止は無理ね」

「姉ちゃん〜」

「甘えても無駄よ。豪一人で行かせると、どこで道草するかわからいしね」

次の日

「豪ちゃんら洛陽の事は陽にお任せあれ。きちんと案内してあげよ」

「兄貴、俺は董卓の調査をするから意見聞かせてくれよ」

「豪様、背後の守りは私にお任せ下さい。出来れば旅の中で手合わせをお願いします」

「…よろしくお願いします」

「うん？このちっこい帽子は誰だ？」

「豪ちゃん、劉備軍の鳳統ちゃんだよ。鳳統ちゃんも洛陽に行くか

ら乗せてあげて」

劉備が平原の相に任命されたから、お礼の書状を軍師の鳳統が届け
るらしい。

「兄貴、鳳統はこないだの放逐に反対だったみたいから大丈夫だよ。
鳳統兄貴は見た目と違って全然恐くないから大丈夫だよ」
調、お前も初対面の時はビビってたじゃないか。

「旅の間は私が護衛いたしますので」
凧は面倒見がいいから、お姉さん気分なんだろう。

「俺は構わないが、御遣い達は大丈夫なのか？彼奴等にかなり恨ま
れてると思うんだけどな」

「…護衛を雇うお金がないんです。でも一人だと怖くて…」
平原の相になったからって、直ぐに金が入る訳じゃないしな。

「ったく、侍女を雇う金があるんなら護衛ぐらいつけてやればいい
のよ。出発するから乗り込め」

「…高くて乗れないんです…」

「仕方ねえーな。ほれっ」
俺は鳳統を抱っこして荷台に乗せた、鳳統が顔を真っ赤にしていた
がスルーしとく。

「豪ちゃん、陽も抱っこ」
陽、ストレート過ぎ。

鳳統がさらに顔を赤くしてるだろうが。

「俺急に足が痛くなってきた」
調、今荷物を抱えて歩いてきた奴がそれ言うか。

「私は昨日の鍛錬の疲れが…」
凧、顔真つ赤にしながら棒読みで言つと嘘つてばれるだろうが。

「わかつたから並べ。出発すんぞ」

side 天和

「先生、今日は曹仁様来ないの？」

「豪さんなら洛陽に出発しましたよ」

「えー！私聞いてないよ」

「天和姉さん、私達に話す必要ないでしょ？」

「ちーちゃん、先生は知ってたよ」

「先生は曹仁様の友人なんだから。もう気が済んだでしょ。練習に行くわよ」

「人和ちゃん、お姉ちゃん元気なくしちゃったから無理」

「若狗さんに頼んで天和達にお土産を買ってくる様に豪さんに伝えてもらいますよ」

「さすが先生。よっしちーちゃん、人和ちゃん練習にいこー」

水を汚して魚を棲まわせる？（後書き）

鳳統は恋姫相性占いで豪との占いが一番だったので登場しました。
感想・指摘・リクエストお待ちしております。

頂いたリクエストは話の進み具合に合わせて書いていきたいです。

陽と調（前書き）

今回は政治に対する豪の姿勢です

陽と調

「この度はご尽力ありがとうございます。曹操からもくれぐれもお礼を伝える様に申し使つてきましたので」

「本来なら曹操自らが来るべきなのですが、与えられた職務をこなすのが天子様への御恩に報いる事ですので不詳ですが私が名代でまいました」

「天子様の為に身を粉にして働く姿勢は常々尊敬しております」

俺は相手が喜びそうな、言葉を並べていく。

そして最後に

「これはつまらぬ品物ですが、良かったらお手元に置いて下さい」と言つて貢ぎ物を渡す。

「ふいー、陽これで全員か？」

「そうだよ豪ちゃん。お疲れ様」

「ありがとな、しつかし随分と宦官の連中が幅きかせてるな」

彼奴ら性欲が薄くなった分、権力欲が濃くなっている様で全員目が潤んでいた。

「豪ちゃん、董卓さんの所には顔をださないの？」

「今回は何も連絡してないし、調が調べた結果で挨拶した方が有益そうなら顔はだしとくよ。ところで鳳統は無事に書状を渡せたのか」

？」

あの恥ずかしがりで貢ぎ物の一つも用意してないときついかな。

「書状は渡せたみたいよ。でもそれだけになるかもね」

役人にしても、宦官にしても書状を受け取るには受け取る。

しかし相手が気に食わないと渡された事を忘れたあの、礼儀がキチンとしていなかったから受け取れない等難癖をつてくる可能性が高い。

下手をすりゃ統治が安定した頃に場所を移されたりお役御免となりかねない。

それにある程度の関心を得ていないと、次に来た者が色々理由をつけて報告すら拒否される事も珍しくない。

「貢ぎ物の一つでも融通してやれば良かったかな」

「止めといた方がいいよ。俺達の正義を汚されたとか文句をつけてきそつだもん」

確かに彼奴いちゃもん得意そつだしな。

「正義や仁愛で土地を治められたら苦勞はしないんだけどな」

「難しい話はこちらまでにしてお土産を買いに行こ」

「買ってかないと春さんの機嫌が悪くなるからな」

「豪ちゃんは誰に買ってくの？」

「姉ちゃんにジャック、先生、春さん、秋さん、李典、于禁、張角達辺りだな」

「張角さん達にも買ってくんだ。へー豪ちゃん優しいねー」
陽の視線がとんでもなく冷たい。

「先生から頼まれたんだよ。あの三人は先生の妹みたいなものだからな」

「なら許してあげる。王連さんには何を買ってくの？」

「ジャックからは嫁さんの櫛を頼まれている」

普通、上司の出張土産に自分の嫁さんの物を頼むか？

side 調

「兄貴、董卓の調査が終わったから感想を聞かせてくれ」

「董卓は随分ときれいな政治をしているな」

「だろ？俺も関心したよ」

董卓の政治は、税も安くて汚職も許せないきれいな政治だった。

俺は兄貴も関心すると思っていたが、兄貴の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「ただど洛陽を治めるにはしたたかさが足りない、御遣い達と同じ感覚かもな」

「兄貴それはどうゆう意味だよ」

優しい董卓とあの御遣いも一緒にするなんて。

「民の為に正しい政治をしている私達を責める人はいないだろうって言う青臭さだよ」

「正しい政治を責めるのはおかしいだろ？」

兄貴は賄賂をもらわないし、オベツカを使う人間を好まない清廉潔白さがある。

その兄貴が正しい政治を批判するのが信じれなかった。

「調、ボウフラって知ってるか？蚊の幼虫なんだがな、こいつは綺麗な水には住めないんだよ。政治をする人間はボウフラが生きる方法も考えなきゃいけないんだよ」

多分、兄貴が言いたいのはこういう事だと思う。

今の董卓の政治は逆恨みを買いやすい物であり、清く正しくありすぎて犯罪者から更正した者や身内が犯罪を犯した者が住み辛いと。

次に兄貴がつぶやいた言葉が俺の胸を苦しめた

「俺は清い水を羨んでいるだけのボウフラかもしれないがな」

兄貴は自ら政治の汚泥に足を踏み込み華琳様達を泥で汚さない為に自分の背中を渡らせている。

そして兄貴は泥まみれになる、誰よりも汚れを嫌う人が顔を泥に突っ込みながらも他の人を汚さない為に。

汚れないの場所で清く正しい政治を行うのは確かに素晴らしい。でも俺の大好きな兄貴は汚泥の中にありながらも自らを清廉潔白でいる様に徹している。

兄貴がまたつぶやいた。

「ボウフラだって蚊になりや憧れていた青空を堂々と飛びたいのさ」
兄貴が宦官達に賄賂を贈っていると聞いた時にはガツカリした。
それを朱霊に話したらアイツはこう言った。

「今の豪ちゃんにそれを言ったら私が絶対許さないからね。今豪ちゃん
の気持ちは暗く沈んでる。私の真名は陽、豪ちゃんの心を照らす
ための太陽なんだから」

陽が太陽なら俺は兄貴が疲れた時には休める場所を調べて導く女になるんだ。

陽と調（後書き）

次は凧と鳳統を絡めたいです。
指摘感想お待ちしております。

森と木と林（前書き）

豪の政治の考え方 第二弾です。

森と木と林

side 鳳統

「は、はい。ありがとうございます」

曹仁様達と洛陽まで同道させてもらえたお陰で無事に洛陽に書状を届ける事ができました。

今回の旅で私の大好きな小説【槍に託した想い】の主人公赤霊の元になった朱霊さんとお話できました。

お話する前までは朱霊さんはいつでも沈着冷静で大人の女性と思っていました。曹仁様とお話する時の朱霊さんはもの凄い甘えん坊になってビツクリしました。

そしてその曹仁様、黄巾党征伐の時は怖い人と聞かされていたので会うのを避けていましたし、朱里ちゃんの方策で放逐されたので怒鳴れたりしたらどうしようかと不安に思っていました。曹仁様はとても優しく気さくな方でした。

旅の最中も荷車を一人で引いて野宿をする時は私達を屋根のついた荷車に寝せてくれて自分は野宿をされていました。

愛紗さんは曹仁様をご主人様をないがしろにする不届き者で血も涙もない男だと言っていました。私にそうは思えません。

曹仁様は私が恥ずかしくては上手に喋れないでいると

「わりいな、俺の顔が恐すぎて震えちまったかな」

とおどけてみせたり、洛陽で緊張して宦官の人に上手く挨拶できないでいたら

「この者は洛陽に来るのが初めてですから、天子様のご威光に触れた感激で上手く言葉がでない様です。これも皆様が日頃から天子様に誠心誠意お仕えされている結果の現れでしょう」

そう言つて取り持つてくれたんです。
そして何よりあの一件が私の曹仁様を見る目を変えてくれました。

side 凧

今回の旅に私を推薦してくれた親友2人には感謝をしなければいけない。

旅の中で私は豪様に何回も手合わせをしてもらえ、その度に氣の応用から様々な体術や体術を活かした戦術の建て方など色々な事を私に教えてくれました。

そして何より豪さまの懐の深さに触れる一件があつたのです。

その日私は鳳統さんと一緒に洛陽の街を見て回っていました。

「待て泥棒。誰かそいつを捕まえてくれ」

私も警備隊の端くれ、他の街とはいえ治安維持に協力しない訳にはいない。

豪様に教えていただいた体術で泥棒を捕まえるとそれはまだ幼い女の子だった。

「ありがとな。その薄汚いガキがうちの商品を盗すみやがつたんだ。こつちにこい警備に突き出してやるっ」

店主と思える男はかなり興奮している様で女の子を叩きかねない勢い。

ここで女の子を庇つたら華琳様と董卓様の間にイザコザが生まれかねないと悩んでいたその時です。

「いい大人が子供相手にむきになるんじゃないよ。ほれっこれだけ払えば文句はないだろ」

いつの間にか女の子と店主の間に立ちはだかつた豪様が店主にお金を渡していました。

それは女の子が盗んだ物の値段よりも大分多い金額の様で店主は

「いや旦那もこんな小汚いガキにご奇特な事を。いや私はうまい商売になったから文句はないですよ」

嬉しそうにそう言って戻って行きました。

「さてお嬢ちゃん。おじちゃんに洛陽の街を案内してくれないか」

豪様はそう言うと言自分の服が汚れるのも気にせず女の子を肩車しました。

最初は警戒していた女の子も徐々に打ち解けたのか洛陽の街の事を楽しそうに案内しています。

途中で豪様が

「腹減つただろ？案内賃の前払いだ」

と渡した肉まんを頬張る姿は年相応な無邪気な子供のもので

「あの女の子と曹仁様まるで親子みたいですね」鳳統さんもその微笑ましい光景に笑顔を浮かべていました。

「もうこんな時間だ。お袋さんが心配してるぞ。おじちゃんが超特急で送ってやるから家を教えてくれ」

女の子に案内されてついたのは、華やか洛陽からは想像もつかない貧民街私と鳳統さんが踏み込むのをためらうなか豪様はズンズンと歩を進めて行きます。

「ここが私のお家」

案内された家は今にも倒されそうな小さいな小屋でした。

会話を聞きつけて出て来たのは痩せこけた母親と女の子の弟と思われる小さな男の子、男の子の顔は青白く氣もかなり弱っていました。ことあらましを聞いた母親が涙を流しながら語ったのは

女の子の父親は洛陽の城で文官をしていたが宦官達により濡れ衣を着せられて失職をしてしまいこの貧民街に流れついたとの事。

その父親も病にかかってしまっても医者にかかれず失意の中で亡くなったと

そして弟も体を壊してしまい娘は弟に何かを食べさせたくて盗みを働いんでしようと深いため息共に話を終えました。

そんな中女の子が

「おじちゃん達も一緒に私のお家でご飯食べていこうと勧めてきました。」

母親もせめてものお礼ですからと出してくれた食事はとても曹家の長男に出していい様なものではなく、私と鳳統さんはどうやって母親を傷つけずに帰ろうかと目配せをしていました。

そんな中で豪様はそれを美味しそうに平らげてしまい母親に

「ご馳走様。うまかったよこれは飯代だ。」

そう言って母親が驚く程のお金を渡し

「俺の名前は曹仁。こんな見てくれでも一応は曹家の長男だ。もし貴女にその気があるんなら陳留に来な。姉ちゃんはこれからどんどん出世をしていくから人手はいくらでも欲しいんだよ」

帰りの出発の日時を伝えて家から退去した豪様が私達にこう話してくれました。

「政治に携わる者としては甘すぎるかもしれないけどあんな親子を少しでも減らしたいよな。俺は姉ちゃんの覇道を助けて民が理不尽な目に遭う機会を防ぎたいんだよ」

そして一呼吸おき

「森を見るの慣れてしまうと一本一本の木に注意を払えなくなる。一本の木だけに注目してしまうとその木を中心とした林を作ってしまう。森を木も林も同時に同価値に見れていける政治をいつかできたらいいよな」

「森は国、木は個人、林は個人が所属する集団なんですな」

そう鳳統さんが答えると豪様はニッコリと笑いながら頷いていました。

森と木と林（後書き）

へビーな話が続いているので洛陽探索編が終わったら幕間を書こうか考え中です。

指摘感想お待ちしております。

雄獅子と鳳雛（前書き）

なんとかリクエストに答えれる形で雛里を絡める事ができていますか？

雄獅子と鳳雛

side 鳳統

曹仁様にお聞きしたい事があるんですが中々お話ができません。
私が恥ずかしいのもあるんですけども

「豪ちゃん、お昼食べに行こー。陽はラーメン食べたいな」

「兄貴、洛陽の街と一緒に調査しようぜ。それと服屋で俺にどんな服が似合うかも調査だ」

「豪様、手合わせをお願いします。その後によろしかったら一緒にお茶を・・・」

話し掛ける隙がなかったんです。

その日公務を終えた曹仁様が珍しくお一人で過ごされていたので

「あの…お話を聞いてもいいですか」

私は勇気を振り絞って曹仁様に声をかけました。

「うん、鳳統殿か？俺で答えれる事なら答えますよ」

「そ、曹仁様は私達の事を怒っていないんでしゅか？」
私が言葉を噛むとご主人様は嬉しそうに指摘をするのですが、曹仁様は気にする様子も見せず話を続けてくれました。

「うーん、鳳統殿は幼子に叩かれた時にはその子を本気で怒りますか？」

「それはご主人様や私達を相手にしていないって事ですか？」
雄獅子の曹仁様に見れば私達御遣い軍は幼子程度の存在なんではないでしょうか？」

「きつい言い方になるでしょうが私から見た北郷殿は文武共に幼子程度ですからね」

私はこの時敬愛しているご主人様が馬鹿にされたのに反論ができませんでした。

よく鍛錬や公務をさぼるご主人様と常に文武を磨き続けている曹仁様では比する必要もないのかもしれませんが。

「もう一つお聞かせ下さい。曹仁様は文武共に優れているのに独立しようとは思わないのですか？」

「それない。俺は姉だから仕えているんじゃない。曹操という人間を気に入っているんだ。ましてや姉ちゃんは俺の育ての親みたいなんだしな」

姉の為に汚れるのも厭わない弟、弟を案じ続けている姉。

曹仁様と曹操様の絆はかなり硬いようです。

曹仁様は旅の間御遣い軍である私に意地悪をしないどころかとても優しく接してくれました。

私が曹仁様のお世話になったと聞いたらご主人様や愛紗さん達はど

んな風に思うのでしょうか？

悩みは解決しないまま洛陽から帰る日を迎えました。

私は平原に曹仁様達は陳留へ。

平原までの一人旅は不安ですがこれ以上曹仁様達に甘える訳にはいきません。

お金がなく軍師に護衛がつけれずに他軍の将に送り届けてもらった、そんな話が流れたら民衆の心は離れていくに違いありません。

「離れ久しぶりだな。随分と気合いが入っているようだがどうした？」

「星さん！！どうしたんですか？」

私に話しかけてきたのは同じ御遣い軍の星さんでした。

「どうしたもこうしたもお前を迎えに来たのだぞ。」

「あ、ありがとうございます。一人で平原に行くのは凄く不安だったんです」

「お礼ならお節介な雄獅子に言えばよい。私は親友の風から手紙を貰ったから来ただけだしな」

「お手紙ですか？」

「ああ、鳳統の様に才ある軍師を危険に晒すのは忍びないって曹仁様が言ってるから星が迎えにいくべきですと書かれた手紙と二人分の路銀が贈られてきた。風達からも聞かされていたが曹仁殿は主が言うよなただのお坊ちゃまではないようだな。うん？離れいきなり

笑いだしてどうした？」

曹仁様がお坊ちゃま？

ご主人様その陰口は的が外れすぎてます。

「曹仁様を知っている人なら誰でも笑うと思いますよ」

「雛里がそんな事を言うのか。ふむ私も久しぶりに親友達に会いたくなつた、雛里陳留への道案内を頼めるか？」

「もちろん任せて下さい」

私は久しく会っていないご主人様より、つい先別れたお坊ちゃまらしさがまるでない曹家のお坊ちゃまに会いたくなつたのです。

雄獅子と鳳雛（後書き）

星は豪をどう見るのでしょうか？
指摘感想お待ちしております

幕間 豪のお土産（前書き）

キャラにより扱いの格差が激しいかも……

あと結構話が長いです

幕間 豪のお土産

旅行とか出張で何故か行きより帰りの荷物が増えてるんだよな。鳳統殿が降りた分軽くなるかと思いきや、それぞれの洛陽土産で荷車の重さは出発時より大分増えていた。

「豪ちゃん陳留もすぐだね。豪ちゃんは着いたら何するの？」
御者用の席に座っている陽が話しかけてきた。
陽達は日替わりで御者席に座って俺の話し相手をしてくれてた。

「俺は姉ちゃんに洛陽の報告をして土産を配ったら寝るよ」

「えー兄貴、洛陽に行った4人で晩飯食いに行こうぜ」
幌の中から調が顔をだして声をかけてくる。

「なら調がお前が荷車をひいてくれるか？」
調の買った服も結構な量なんだよな。

「あー、兄貴今日はゆっくり休んでくれ」

「しかし豪様も大量にお土産を買われましたね」
直ぐに逃げた調に代わって凧が話しかけてくる。

「うちの軍の将は頑張ってくれているからな。曹家からのほんの気持ちだよ。凧も李典達に土産を買ったんだろ」

「ええ、しっかりと買ってくる物をねだられましたので」

「李典達らしいな。まっ俺にも土産をねだったからな」

「も、申し訳ありません。帰ったらきちんと叱っておきますので」
「気にすんなよ。李典がこの荷車を作ってくれたんだから土産ぐらい安いもんだよ」

「さあ陳留に着いたぞ。俺は姉ちゃんここに報告に行くから3人はゆっくり休んで疲れをとってくれ」

「豪ちゃんは疲れてない？陽がまた肩揉んであげるね」
話し相手と同じく俺の肩揉みも3人が日替わりでやってくれた。

「陽、肩揉みは俺の番だぜ。兄貴後から部屋に行くよ」

「そんな気をつかわずにゆっくり休め。3人には旅の間随分と面倒をかけたな」
話し相手と肩もみが日替わり制って地味に嫌だったからなんだろうし。

「さて報告は俺がまとめてするからここで解散するぞ」

華琳執務室

side 華琳

「姉ちゃんただ今。今戻ったよ」

豪は洛陽から戻った足で私の執務室に来た。
何か重要な報告があるのかしら。

「豪お帰り。洛陽はどうだった？」

「相変わらずの役人と宦官の天国。まっ誉め言葉と貢ぎ物で円滑に進んだよ」

「苦勞をかけたわね。それで董卓はどうかしら？」

屈辱を強いられる様な外交に豪が積極的に参加してくれるお陰で私達の洛陽での評判は低くない。

宦官や役人は屈強な豪が脆弱な自分達に頭を下げる姿をみてご満悦との事。

まあ、いつか私の可愛い弟に頭を下げさせて喜んだ馬鹿は死ぬ程後悔させてあげるけどね

「言葉は無料だし貢ぎ物も安く済ませたがら問題ないよ。董卓は長くもたないな」

豪の顔が険しくなる、何か董卓に関する情報らしいわね。

「報告書には洛陽は治安が良く税も安くて董卓は民の支持も高いつて書いてあるわよ」

「あんなに税が安けりゃ軍に使える金も外交に使える金も限れてくる。ましてや洛陽には天子様がいる。宝の山を子羊に守らせてるよ
うなもんだよ」

「誰かが洛陽にちよっかいをだす可能性が高いのね」

「それか董卓の清廉潔白な政治を疎ましく思つた十常侍と対立する可能性も高いよ」

「わかつたわ。遠征に備えて糧食の確保をしておくわね」

「それがいいと思う。あつ姉ちゃんこれお土産」

豪がくれたのは雄獅子が黒い宝石をくわえている銀の指輪だった。

「ありがとう。他の将にもお土産を渡すんでしょう?」

「この後回るよ。後その指輪つけていたら于吉程度の妖術なら無効化できるから」

やっぱりあの子が側にいると気持ち落ち着く。

今日は疲れて寝たいでしょうから明日は久しぶりにあの子の好きなご飯を作ってあげなきゃね。

鍛錬場

side 秋蘭

「秋蘭、今日お土産じゃなく豪が帰ってくるな」
姉者今完璧にお土産と言つたな。

「春蘭様いーなー。僕も洛陽のお土産欲しいです」

「豪のことだ。季衣や流琉にもお土産を買ってくるだろう」

「でも僕はあまり曹仁様とお話した事ないですよ」

「私もです。曹仁様ちょっと怖くて話しかけ辛いんです」

「豪様は色々忙しいお方だな。ほら噂をすれば何とやらだ」

「おつ武官は殆ど揃っているな。まず春さんにはこれだ」

豪様が姉者に渡したのは雄獅子が赤い宝石をくわえた銀の指輪。
私のは青い宝石をくわえていた。

「それは姉ちゃんのと三対一揃えになってるんだよ。で典章にはこれだ」

「曹仁様こんな立派な包丁貰ってもいいんですか？」

「何でも洛陽にいる有名な鍛冶職人が作った包丁なんだとよ。良かったら使ってくれ」

「ありがとうございます。私この包丁大事にします」

豪様はその人が喜ぶ贈り物をするのが好きなお方だ。

「それで許緒にはこれだ」

「曹仁様これは手袋ですか？」

「おうつ、でもただの手袋じゃないぞ。それは特別な手袋で丈夫な上に蒸れない。それをはめて鉄球を触ってみろ」

「曹仁様凄いです。棘を触っても痛くないです。ありがとうございます
ます」
そう言えば豪様は季衣が鉄球を扱って手を痛めないか心配されてお
られたな。

「喜んでもらえたらそれが一番だよ。それじゃ次に行くからまたな」

警備隊詰め所

side 凧

「凧ちゃん雄獅子さんに旅の間で気持ちを伝えたの？」

「それとも、もっと進展あったりしたんやないか？」

「ふ、2人共声が大きい誰かに聞かれたどうするんだ？」

「凧ちゃんお顔真っ赤にして可愛いの」

「そんな都合よく人が来る訳…あつたな」

「おう邪魔するぜ。丁度3人いるな。まずは季典にはこれだ」

「こ、これは工具の詰め合わせやないか！流石は雄獅子の兄ちゃん
わかつとる」

「お前の荷車は役にたったからな。で于禁には頼まれていた阿蘇阿

蘇に載っていた服だ」

「雄獅子さんありがとうなの。凄い靴とかみんな揃っているの」

「で最後に凧にはこれだ。手甲は愛用のあるから足甲だ」

「そんな私こそ旅でお世話になったのに申し訳ありません」

「凧が作ってくれた飯うまかったからな。そいつは蹴りをいれても足に負担がかからない様にしてある。それじゃ次に行くよ」

「凧良かったやないかい。凧？」

「……………」

「真桜ちゃん凧ちゃんは嬉しすぎて自分の世界に浸っちゃてるの」

文官部屋

side 胡質

「兄貴からの伝言だ。洛陽を中心に争乱が起きる可能性が高いから準備を頼むそつだ」

「本当にあのデカブツは軍師でも何でも無い癖に腹がたつわね」

「荀イクは兄貴の予見が当たるから余計に腹がたつんだろ」

「たまたま何回か当たっただけで私はあんなデカブツは信用してない

んだからね」

「そりゃ悪かったなおちびさん。まずは程イクと郭嘉にはこれだ」

「おーこれは靴ですか？曹仁様は物で風達を釣るつもりなんですね」

「釣られる気ないだろうが。今の靴じゃ洛陽まできついからな。履けばわかると思うが長く歩いても疲れない靴だ。で荀イクにもあるぞ、これだ」

「ってこれ私が着ている猫耳服じゃない？もう少し気を効かせる事できないの」

「そいつは特製でな虫とか蛇が寄り付かない様にしてある。野営中に誰かさんが騒がなくて済むんだよ」

「効果なかったら華琳様に言うからね。一応ありがとって言うってあげるから」

「姉ちゃんは確実に俺を信じてくれるけどな。それで調にはこれだ」

「そんな兄貴悪いな。これは何だ？」

「そいつは手帳って言って携帯できる記録書だ、それと携帯用の筆記用具だよ」

「兄貴、紙って滅茶苦茶高いんだぜ。しかもこんな真っ白な紙見た事ない」

「お前の董卓調査は助かったからな。んじゃ次いくわ」

医務室

side ジャック

「ねー王連さん。曹仁様はまだ来ないの？待ちくたびれちゃった」

「別に豪さんお前と待ち合わせしてないだろ？先生と俺がいるからもう少しでくるよ」

「おっジャックもいたか。ほれジャック頼まれていた櫛だ」

「豪さんありがとうございます。この赤い櫛は女房に絶対似合うな」

「よくそんなにのろけるな。先生には生薬の詰め合わせでよかったか？」

「豪さん高い薬ばかりじゃないですか」

「それで陳留の健康が保てるなら安いもんですよ。で張角達にはこれだ」

「あーお姉ちゃんはこの桃色の宝石がついた首飾りがいい。ちーちゃんの水色で人和は紫の首飾りね」

「曹仁様このような高い物を頂く訳にはいきません。それにこの首飾りは…」

「おっ気づいてくれたか。そいつはお前達の妖術の力を高めて制御の助けもしてくれる優れ物だぜ」

豪さんそれ絶対に洛陽の物じゃないでしょ。

「人和かたーい。お姉ちゃんは曹仁様からせつかくもらった首飾りはもう手放せないからね」

まさかだよな？

こいつまで豪さんを好きなんじゃないだろな。

「さて、これでだいたい渡したな。それじゃ戻るわ」

陽私室

side 豪

「陽いるか？」

「豪ちゃんいるよ。ようこそ陽のお部屋に」

「長旅で疲れている所悪いな。宦官を相手にして疲れた時陽に癒やしてもらったから、これはお礼だ」

「豪ちゃんこれは腕輪？」

「ああ、そいつには猫目石って宝石をはめこんでいてな。猫目石の言葉は恋愛だそつだ」

「……………」

陽の目から涙が零れてきた。

これはまずったかな。

「豪ちゃんありがとう。女の子は言葉も嬉しいけども想いを形にしてくれると凄く嬉しいんだよ。でももっと嬉しいのは想いを行動にしてくれる事なんだよ」

陽はそう言つと目をつむつた。

これはあれだよな、うんあれだ。

陽の形のいい桜色の唇が細かく震えている、俺それに自分の唇をソツと重ね合わせた。

幕間 豪のお土産（後書き）

次は趙雲さんがでるかも？

指摘感想お待ちします

星と雄獅子（前書き）

相変わらず恋姫要素が薄い気が

星と雄獅子

Side 趙雲

「それで雛里、曹仁殿はどの様なお人だ？」

「そうですね。大きいです」

「ほう雛里は曹仁殿ともうそのような関係に」

「あわわわ。ち違いましゅ。曹仁様は背も大きいんですけども器が、
そう器が大きい方です」

雛里はそれから曹仁殿が自ら荷車をひいた事

野宮時は一人野宿で済ませた事

雛里が言葉をかんでも笑わなかった事

宦官と接した時に緊張の余り言葉に詰まった自分を助けてくれた事を
教えてくれた。

「せ、星さんは曹仁様にお会いした事はないんですか？」

「愛紗が賊と勘違いした時は曹操軍に囲まれて姿を確認できなかつたし于吉が襲ってきた時は殿しんがりだったからな。陳留にいた時も姿を見た事はなかったぞ」

「曹仁様は文官と武官のお仕事を兼務するだけではなく様々な雑務をこなしているそうです」

「風、程イクもあまり話した事がないと言ってたな」

「曹仁様への指示は曹操様が直接しているそうですから。曹仁様の力を借りたい将は曹操様に申請をするそうなんです」

「曹操との関係は良好なのか？それだけの人物なら良縁も少なからずいだろうし独立を促す者もいるのではないか？」

曹操と言う姉がいる限り曹仁は常に二番手にしかねないし実力のある一族を擁して旨い目をみようかと企む輩がいてもおかしくはないのだが。

「曹操様は曹仁様を溺愛しているそうです。何でもご両親が忙しかつた為に幼い曹仁様を曹操様が面倒をみていたそうですから。ですから曹操様は曹仁様を手放す気はないみたいですよ。どんな良縁も難癖をつけて断っているそうです」

まるで曹操は過保護な母親だな。

「しかし雛里は随分と曹仁殿について詳しいな。もしかして…」

「ち違いましゅよ。一緒に旅をした朱霊さんや胡質さん楽進さんお三方とも曹仁様を慕っている様で旅での話題は自然と曹仁様になりますから詳しくなっただんですよ」

「雛里は旅の間で印象に残っている事はあるか？」

「だ抱っこ、あわわわ。じゃなく洛陽の街で…」雛里が話してくれたのは貧しい親娘の話と森や木になぞらえた内政の考え方だった。

「ふむ。曹仁殿は聞く度に興味が湧く人物であるな。雛里は曹仁殿に会ってどうしたいのだ？」

「朱里ちゃんに誘われて桃香様やご主人様にお仕えしたんですけど、あの器に私の才を注いでみたくなっただんです」

あの大人しい雛里が親友である朱里を裏切つてでも仕えてみたくなる人物か、ますます陳留がに行くのが楽しみになってきたな。

side 風

星ちゃんが陳留に来ました。

一緒に旅をした親友だから再会するのとても嬉しいのですが

「風久しぶりに会ったというのに随分と浮かない顔ではないか」星ちゃん風は今曹操様にお仕えしている事をお忘れですか？

「風にとって今の星ちゃんは招かれざるお客様さんなんですよ」

「これは随分と酷い言い方をしてくれる」

「陳留で御遣い軍を好む者は殆どいないんですよ」
むしろ嫌われてと言った方が正しいのですが

「私はあくまで御遣い軍の客将だぞ」

「はー、もういいです。それで星ちゃんは風達に会いに来た訳ではないですよね」

「流石は風。曹仁殿に興味があつてな。風何とか曹仁殿に会う事は

できないか？」

「星ちゃん御遣い軍が曹仁様に何をしたか忘れたんですか？曹仁様は気にしなくても曹操様や周りの将が許可しないです」

「なら曹仁殿がお一人になられる場所はないのか？私は曹仁殿の手柄を確かめたいのだ」

「武を確かめるとか言って襲いかかったりしないですか？」

「いくら私でもそこまで酷くはないぞ。親友の立場を悪くする事はしない」

「私より曹仁様に詳しい者を呼びますからその者にお問い合わせしてみればいいのです」

side 趙雲

しばらくしてやって来たのは胡質という文官だった。

「兄貴が一人になる場所？最近陽の奴が前にもまして兄貴にベッタリだからな。……この時間ならあそこに一人でいる筈だ」

胡質はそう話すと席を立てて歩きだした。

「調、どこに行くんです？」

「軍人墓場だよ。兄貴が留守の間にあった賊の討伐で兵が何人か死んだろ？今日葬式を終えて墓場に入ったから多分兄貴はそこだ」

墓場？曹仁殿に会うのに墓場？

「おお、そうでした。風も前からあれを見てみたかったです」
風、あれとはなんの事だ。

「風今は夜だぞ。墓場はちょっと」

「星ちゃん大丈夫です。陳留の軍人墓場には幽霊はでないですから」

風、幽霊がでないって何故言い切れる？

side 豪

仕事を終えた俺は留守の間に死んだ兵達が眠る墓場に向かう。

「文、お前は花が好きだったな。次は花が綺麗に咲く世界に行つてこい」

「烈、お前は料理人になりたいって話してたな。ならお前が料理人として活躍できる世界に行け」

「田、お前彼女が欲しいって言ってたな。次の世界では縄みてえに太い赤い糸がつくようにしてやるよ」

そして最後は同じ言葉で締めくくる。

「向こうで管理者に会ったらこう言え、俺達は雄獅子の身内だつてな。そしたらふざけた扱いはしないさ」

俺は曹操軍の為に死んだ兵の魂ををそいつが望む外史へと送る。
次の外史で穏やかな生活できる様に。

side 趙雲

そこで見たのは不思議な光景だった。

あまり近いと気付かれると距離をとった為に曹仁殿が何を話しているかは聞こえないが、墓にむかって曹仁殿が優しく話しかけると墓から淡い光が浮かんできた。

「兄貴は死んだ兵の魂をああして弔っているんだ。不思議な事だけど兄貴が弔ってからここで幽霊を見たって話はないんだよ」

今ならわかる気がする。

淡い光の中には嬉しそうに微笑む人が見えたのだから。

星と雄獅子（後書き）

恋姫の割に暑苦しい感じの、この小説を楽しみにしてくれている人がいるみたいで感謝です。

皆様からいただいた指摘や感想はできるだけ小説に反映させていきたいです。

雜里と星の加入 それぞれの反応（前書き）

雜里の今後どうしよう？

雛里と星の加入 それぞれの反応

side ジャック

管理事務所

豪さんが遮断をしてくれたお陰で俺は毎日帰って来ている。

「ジャック、豪さん今度はロリか！いつの間にあの人がモテる様になったんだ？」

話しかけてきたのは矯正指導員の一人。

確かこいつは豪さんに彼女ができない方に賭けてたんだよな。

「ロリ…あー鳳統か。別にあれは曹操軍に加入したんだから豪さんは関係ないだろ」

「曹仁様の近くで働かせてくだしゃいって何だよ。ちきしょーあの外史は何かがおかしい」

豪さんが女に慕われただけそこまで言うか？

「鳳統は豪さんの器に惹かれたんだとよ。それなら納得するだろ？」

豪さんの器はへこんで嘆いてどん底から這い上がって大きくなった器だ。

「確かにあの人の器は俺も認めている。だけど豪さんが女に好かれるなんて今まででなかったじゃないか？」

「曹操の存在が大きいかもな」

「曹操って外史での豪さんの姉貴っていうチビか？」

「お前それ豪さんに聞かれたしばかれるぞ。豪さんは顔が厳ついから女に避けれていたし自分から積極的に絡んでなかっただろ？今の豪さんは姉の曹操に頭があらがないから周りの連中もあまり怖がってないんだよ」

「それにしてもよー、みんな可愛い娘ばかりじゃないか。今までクリスマスイブとか豪さんが率先して仕事してくれたのも無くなるんだよな」

「まっ豪さんが無事に嫁を連れてきたら盛大に祝って、ふられた盛大にからかってやろうぜ」

side 豪

姉ちゃんに呼ばれて執務室に行くと、そこには何故か鳳統殿と趙雲殿がいた。

「えーと俺なんか御遣い軍にやらかしたっけ？」

御遣い軍から苦情でもきたんだろつか？

「豪、この2人は今日からうちで働く事になったから。趙雲は風と

凜の護衛兼武官、鳳統には内政を手伝ってもらおうから」

「いやいやいや、その2人御遣いのとこの軍師と客将だろ？」

「趙雲は元々公孫贖のところの客将だったらしいから御遣い軍からうちにきても問題はないわよね。それに鳳統は自分の意志でうちに来たのよ」

「よ、よろしくお願いしましゅ」

「雄獅子殿こうして会うのは初めてですな。どれだけ強いのか期待してますぞ」

「2人とも豪に興味をもつてうちに来たのよ。きちんと責任とりなさい」

「姉ちゃんそれ理不尽。趙雲殿は程イク達がいるからわかるけど鳳統殿は大丈夫なんですか？」

「確かに私は朱里ちゃんに誘われて北郷さんや劉備さんの志に感銘して仕えました。でも今の御遣い軍は昔の御遣い軍と変わってしまっただんです」

「確かに私が惹かれた頃の御遣い軍とは天と地の開きがあるな」

「前は北郷さんに天の加護あるかの様に都合がいいくらいに全てがうまくいってました。私達の志しに感銘した農民が食料を分けてくれたり商人が援助をしてくれました」

農民はともかく商人は先行投資だろ。

「最近は全くありませんがな」

趙雲殿、平原の相になっても援助を受けてたら、まずいですって。

「民の味方だった御遣いが税を取り立てる者になっただんだから仕方ないわね」

「民の為に安くすると言っていた税も上げたそうです。平原の人はそれでも税を納めてくれているそうです。でも……」

「御遣い達が儉約をしないのね。大方いい顔をして施しをしたり侍女に泣きつかれてクビにできないんでしょ？」

「まったくその通りで。しかし御遣い軍の連中はまた天の加護があると信じて疑っておりませぬ」

あー姉ちゃん確かに全て俺の責任だ。

主人公補正が消されたなんて本人は気づかないだろうしな。

「姉ちゃん、荀イクに言っただけで御遣い軍を養うのにかかった経費を算出させてくれ」

「わかったわ。豪は役人への貢ぎ物の準備をよろしくね」

side 鳳統

曹操様の執務室から出ると星さんが話しかけてきました。

「雖里なぜ役人に貢ぎ物をやる必要があるのだ？」

「義勇軍でなく平原の相になったから経費を請求するんですよ。おつきの侍女がいるのは経済に余裕があると見なされます。でも曹操様から言つと角がたつので任命の権限がある役人かその周囲からだしてもらつんです。曹仁様は前から貢ぎ物を渡して懇意にしているから、すんなりといく筈です」

「しかしそんな余裕はないと思うぞ」

「それは曹仁様もわかっていますよ。恐らく減額の条件として人材の譲渡をつけるおつもりでしょう」

「罷免も金も払うのが嫌なら私達をよこせと。これは北郷殿にはない本当のしたたかさだな」

「自分の為ではなく私達の事を考えてのしたたかさですしね。多分御遣い軍では誰も私達から志願したとは考えないでしょう」

side 華琳

「御遣いは豪の事をお坊ちやまつ言ってるらしいわよ」
この話を聞いた殆どの将が笑ったのよね。

「俺だつて曹家みたいな金持ちの家に生まれて良い師匠をつけてもらっていたなら、あれぐらいはできていたって言いたいんだろ」

「自分が文武共に優れていないのは仕方がないっ言いたい訳ね」

「そう言えば陽達は鳳統殿の事は知ってたりする訳？」

「知ってるわよ。多分部屋の外に待機してる筈よ」

「姉ちゃん窓を借りるよ」

豪は大きい体を屈めて窓から逃げだそうとしている。

「駄目よ。やましい事がないならきちんと説明しなさい」

部屋から出た豪は反論虚しく連れて行かれたみたい。

あんな可愛い弟を御遣い達は何で化け物なんて言うのかしら？

難里と星の加入 それぞれの反応（後書き）

感想指摘お待ちしております。

反董卓連合始動（前書き）

ようやく反董卓連合に

反董卓連合始動

side 豪

曹操私室

「豪、麗羽からこんな物が届いたわ」

姉ちゃんから渡されたのは反董卓連合の参加を促す書状だった。

「あの馬鹿は書状も中味がないな。暴政の具体例も書いてなきゃ信用できないっての」

あの会社は儲けているだから悪い事をしてる筈だと同じレベルの発想じゃないか。

「董卓は善政をしいてたのよね？豪はどうみる？」

「甘すぎるぐらいの無責任な善政だよ。袁紹は名家たる袁家が天子様の一番じゃないのが気に入くないんだろ」

「うちはどうしたらいいと思う？無実の董卓を攻める？」

「洛陽を治める人間はそれぐらいの覚悟していて当たり前だろ？董卓からうちに洛陽を治めるにあたっての根回しあったか？ここで参加しなきゃうちが不利益を被るだけだよ」

「それで具体的にうちはどうしたらいいと思う？」

「あくまで知らぬ存ぜぬで発起人の袁紹に責任はもってもらう、洛陽の民には炊き出しや保護の救護策をとる」

そいや貂蟬や卑弥呼はまだ洛陽にいるんだろうか？

「うん流石は豪、お姉ちゃんと同じ考えね」

姉ちゃんは満足そうに頷いた。

「鳳統と趙雲は陳留の守備隊にしておくか？」

御遣い達と会いたくないだろうし。

「あの2人に話をしたらついて来るって言ってたわよ。後お姉ちゃんと同じ考えの豪は強制参加。お姉ちゃん用の荷車を引っ張ってもらわよ」

「姉ちゃん最初からそれが目当てで俺を試したな？」

「あらお姉ちゃんは豪ならきちんと答えてくれるって信じてたわよ」

「わかったよ。それで留守は誰にまかせる？」

「そうね武官は沙和で軍師は凜ね。後今回は先生にも医療班として参加してもらってから連絡頼むわね」

side 先生

仕事が一段落したので休憩をとっていると戸を叩く音が聞こえてきました。

「先生いるかい？」

「豪さんどうしました？」

「いや姉ちゃんが今度の反董卓連合に先生を医療班として参加させるって言うから伝えに来たんだよ」

反董卓連合ですか。あの人に会うかもしれませんね。

「わかりました。他にはどんな諸侯が参加するんですか？」

「袁紹、袁術、馬騰、御遣い達が主なとこだ」

あの人わざわざ他の医療班に来ることはないですよね。

「豪さんが留守になったら張角が寂しがりますから、きちんと声をかけてあげて下さいね」

「俺じゃなく先生だろ」

「張角は豪さんからもらった首飾りをとても大切にしてるんですよ。私の可愛い妹分を泣かせないで下さいよ」

若狗さんが言っただけで通り豪さんは女性の気持ちに疎いみたいですね。

「先生の勘違いだと思っただけ？ 後から苦情を言われても俺は知らないからな」

最も私も豪さんの事を言う資格はないんですけどね……

side 豪

さて、どうしたもんか。

先生はあんな風に言っただけで、大概は

「あっ、そうなんです。頑張って下さいね」

とかで終わるんだよな。

一応報告はしとくか、先生はスカウト許可もおりてる事だし。

サーチを使って張角を探す。

……鍛冶屋の隣の食堂だな……

「お姉ちゃんその春巻きはちーの」

「早い者勝ちだよ」

幸いというか張角達はまだ食事中だった。

「よっ、ちっと邪魔するぜ」

「曹仁様なにになに？私に会いに来てくれたのかな？」

張角が笑顔で迎えてくれた、とりあえず嫌われてないないみたいだ。

「お姉ちゃんはしゃぎすぎだよ」

「いーの。お姉ちゃんは嬉しい時は素直に喜ぶんだから」

「それで曹仁様は私達にどんな用事でしょうか？」

張梁が警戒しながら質問をしてくる、雇い主の弟が突然来たんだから当たり前だが。

「なんつーか、もう少ししたら結構大きな戦に参加するからその報告」

張角の顔が強ばっていく。

「曹仁様は強いから怪我したり死んだりしないよね？」

物語りとかじゃ悲しませたくないから絶対に帰ってくるよとか言うんだろうけども

「戦じゃ個人の武だけじゃ生き残れないんだよ。武が強い分目立って標的にもされやすいしな」

仲間に裏切れて後ろからバツサリとか監視に裏切れて夜襲をくらい仲間もろとも全滅とか外史で嫌って程味わってきた。

「…てんほーてんほーてんほー！！！」

重い空気を振り払うかの様に張角が突然大きな声で叫びだした。

「お姉ちゃんどうしたの？」

啞然としている張宝を尻目に張角が俺を睨みつける。

「天和は私の真名。数え役萬 姉妹では支援者みんなに呼んでもらっていたけど個人の男の人として許すのは曹仁様が初めてなんだから。ぜつたいぜーったい私の所に帰って来なきゃ駄目なんだから」

涙目になりながらも俺の目を見つめてくる張角。

女に嫌われるのには慣れてんだけど、この外史にきてからは調子が狂いつぱなしだ。

「俺の真名は豪だ。間違っても様なんぞつけるんじゃないぞ。帰ってきたらゆっくり歌を聞かせてくれ天和」

凧は様を外すのを意地でも認めなかったけどな。

「ならお姉ちゃんは豪君って呼ぶ。待ってるからねごうくん」

泣いたかカラスがなんとやらで笑顔になった天和。

「それじゃ邪魔したな。オヤジあそこの三人の分の会計は後から俺のところに持って来い」

「お姉ちゃん曹仁様に真名を許したのは曹家の長男だから？」

「ちーちゃん違うよー。2人共もう少し大人になればお姉ちゃんみたいに見た目以外の魅力も理解できるわよ」

「それは曹仁様を見た目はなしだとして事？」

「最初はね、でも今は違うよ」

子供みたいな無邪気な笑顔、曹操様に叱れた時のしよぼくれた顔、先生と一緒に患者さん救おうとする真剣な顔。

私は戦場での豪君は知らないけどもそれ以外でも魅力的な豪君をきちんと知っているんだから。

反董卓連合始動（後書き）

作者は真未プレイなんですけども劉備と天和がキャラ被ってる気がするのは勘違いでしょうか？

感想指摘お待ちしております

出奔の訳（前書き）

もう少し趙雲達が出奔した理由を知りたいと言われて書きました。
納得してもらえたら嬉しいです

出奔の訳

「曹仁殿少しよろしいでしょうか？」

「趙雲殿いかが致しましたか？」

俺に話しかけてきたのは御遣い軍からうちに来た趙雲。

「曹仁殿は随分と硬い話し方をされるのですな。せつかく仲間になれたのに寂しいですぞ」

趙雲殿はオーバーにため息をついてみせる。

「俺は何回も話した事のない女性と親しくできる器量はないですよ」

「ふむ、朱霊殿や楽真殿胡質殿、張角殿に慕われている男子と同じ人物には思えませんな」

陽達はともかく天和の事はいつ知ったんだ？

「それが用事でしたらもう行きますよ」

「いやいやつい曹仁殿の厳めしい顔を見ていたらついからかいたくなりましてな。せつかく雄獅子殿と知り合えたのだから手合わせをお願いしたいと思ひまして」

また絡みにくいのが入ってきたな。

「手合わせですか。鍛錬ではないんですね」

それならサクッと終わらせちまおう。

side 趙雲

手合わせと鍛錬にどの用な違いがあるのか考えていたら雛里が言っていた言葉を思い出した。

旅の間曹仁殿は楽進殿と手合わせをした際に手直しと新しい型や武術の伝授をしていたそうだ。

曹操軍の武将が定期的に曹仁殿に手合わせを希望しているのはその為なのであろう。

「いや鍛錬をお願いします。でもこの趙子龍を鍛える事ができればな話ですがな」

「鍛錬が納得できるものであるならば一つ俺からも要望があります。がよろしいでしょうか？」

「乙女の約束に誓って破りはしませぬよ」

もし私を鍛える事ができたなら真名でも何でも許すのは構わない。

鍛錬場につくと噂を聞きつけた曹操軍の主将や兵で溢れかえっていた。

武官ならともかく何で文官の風や稟までいるのだ？

「星ちゃん今日と明日はお休みにしときましたから頑張ってください」

風なぜ私に休みが必要になるのだ？

「しかし曹仁様の武将鍛錬もすっかり名物になってしまったな」

稟が悪い笑顔で呟く。

「そろそろ武器選びがはじまりますね」風が見ている先では曹操が箱に手を入れていた。

「先ずは無手これは凧ね」

「これで槍対策ができます」
楽進が笑顔で答える。

「次は双剣、沙和ね」

「雄獅子さんの真似は無理だけど勉強するの」

「次で最後。あら葉々ね流琉良かったわね」

「やったー曹仁様くじ初めて当たった」

「流琉良かったね。曹仁様が葉々をどう扱うか僕も楽しみだよ」
典章と許緒が手を取り合って喜んでいる。

「風、曹仁様くじとは？」

「曹仁様が手合わせをする時自分の武器を使ってもらって参考にす

るんですよー。星ちゃん安心して下さい。最後はきちんと斧を使いますよ」

得意の武器を使わないで手合わせとは随分と私も舐められたものだな。

「凧きちゃんと見とけよ」

手合わせの最中によそ見など、私は隙をついて本気で突いた。

「槍の厄介さはその長さだ。だから無手の時はこうする」

気づいた時には曹仁殿は目の前にいた。

「なあ凧、雄獅子の兄ちゃんは何したんや？」

「趙雲殿の槍を交わした後に柄に自分の腕を押し付けて捻る事で趙雲殿の懐にはいったんです」

「相変わらず化け物やな。下手に自分から近づくより捻る力で相手をおびき寄せたんやな」

呆然としていると曹仁殿は太い指で私のおでこをはじく。

「つうつう。おなごには優しくするものですぞ」

「次から優しくしますよ。于禁双剣の番だぞ」

「わかったのー。でも私にできる技にして欲しいの」

「双剣の利点は攻守を同時に行える事だ」

なんて馬鹿力なんだ、片方の剣で槍を押さえつけられてるだけなのに槍を動かす事ができない。

「ほいこれでお終い」

曹仁殿はそのままもう片方の剣を私の首に突きつけてきた。

「雄獅子さんの馬鹿ー。沙和の細い腕じゃそんなの無理なの」

「抑え所見極めりゃ力は少なくて済む。于禁次の鍛錬の時は槍でたつぷりとしごいてやる」

「沙和同情するで」

「次は典韋、ヨーヨーなんて餓鬼の時からやってねえんだよな」

それを聞いて安心した私が馬鹿だった葉々は同行している時に見たが曹仁殿のそれは比べ物にならないぐらいに早い。

「投げ型を一種類にするなよ。下手から投げたり糸に指をかければ軌道を変えられる」

変幻自在の葉々は避けるので精一杯だった。

「曹仁様そんなに早く投げたら受け止める時に手が痛くなっちゃいます」

「今度許緒とお揃いの手袋をやるよ」

「曹仁様ありがとうございます」

「さて最後はお待ちかねの斧の出番だ。動くなよ」

今日で一番いい笑顔で曹仁殿が斧を構える。

愛紗が化け物と言っていた意味が理解できた。

あんな規格外な武を見せられたら化け物と否定するのが一番楽なのかもしれない。

side 豪

「趙雲殿、納得してくれましたか？」

「あそこまで差を見せつけられたら納得するしかあるまい？それで曹仁殿の望みとはなんですか？」

「率直に聞こう。何故うちに来た？」

「御遣い軍に愛想を尽かしたのと曹操軍には親友がいるからでは？」
「不満ですか？」

「愛想を尽かした理由は他にもあるんじゃないのか？」

「今平原は財政が逼迫しております。主な原因は北郷が提案した屯田兵と質の高い鉄を作る為の製鉄所」

「どつちもろくな結果を生まなかつたる？」

屯田兵は銃器が発展して兵が鍛錬より集団動作に重きを置ける様になったから開墾の余裕も生まれたし、

織田信長が兵農分離を行ったのは収穫期でも行軍できる為だ。

質の高い鉄を作るには高温が必要だしそれに耐えられる入れ物も必要になってくる、俺が姉ちゃん達の武具を外史から離れて鍛えたのこの外史では無理があるからだ。

「それを補う為に税を高くしたのか？」

「生活必需品の税率を高めるだけでなくカマドや井戸、厠を使用するのにも税をかけている。民を救う筈の御遣い軍が民を苦しめては本末転倒ではないか」

「最初から無理なお題を唱えちまったからな。税が高いのには問題はないその税をいかに活かすかだ」

「北郷殿は侍女にめいど服なる着物を着せて喜んで、将は毎日たらふく飯を食べている。民が高い税で苦しんでいるのにも関わらずにだ。私が諫言しても天の御遣いである北郷殿の意志が正しいで済まされてしまった」

「正義なんてのは十人十色なだけだな。正義の味方の旨味は麻薬並みだからな」

誰もが自分を褒め称える、正しいから正義なんじゃなく天の御遣いたる自分の行動だから正義なんだって所か。

「辛い事聞いてすまなかつたな。おっそうだ、今日の鍛錬の褒美にこれをやるよ」

程イクから趙雲殿はメンマと酒が好きだと聞いていたから管理事務所にあらかじめ送らせておいた旨いメンマとそれに合う酒を趙雲殿に手渡す。

「俺と手合わせをした将には武の進歩に合わせて物を贈るんですよ。今回は初回だから特別ですがね」

ちなみに獲得数の一番多い陽の希望は逢い引きが殆どだった。

「疲れただろうし酒でも飲んでゆっくりして下さい。うちは大事な税金を貰う将には沢山働いてもらいますからね」

出奔の訳（後書き）

屯田兵に関しては作者の考え方です。

リクエストの雛里の幕間も書けたら書きます

雜里の気持ち（前書き）

雜里が曹仁に惹かれた話をみたいってリクエストがあり急遽書きました。

雛里の気持ち

side 鳳統

「雛里、お主の言う通り曹仁殿は中々の人物だったぞ」
曹仁様から頂いたというメンマをつまみにお酒を飲んでいた星さんが話しかけてくる。

「星さん体は大丈夫ですか？曹仁様の手合わせはかなりきついと聞きました」

「正直あの斧とは二度と相對したくはないな」

何を思い出したのかお酒で赤かった顔が青くなっていきました。
星さんは青ざめた顔を赤くする為にお酒を一気に飲んだ後に

「あの恥ずかしがり屋の雛里がなぜ曹仁殿に興味を持ったのだ？」

「あれは陳留から洛陽への旅の最中の事でした」

「うー、早く洛陽に着かないかな」

改造された荷車の乗り心地は快適でした。

「憧れの朱霊さん、胡質さん、楽進さん達は優しく色々と気遣ってくれました。それでも人見知りの私にしてみればかなり苦痛な状況

だつたんですよ、その頃は曹仁様とは一度も口を聞いていませんでしたね。男の人も苦手でしたし曹仁様の見た目に勝手に怯えていたんですね」

「曹仁殿と初対面の人は大抵は怯えるらしいからな」

曹仁様は洛陽では人が避けてくれるから歩きやすいつて話してましたね。」

「朱霊さんが優しい人だと言ってくれても無理でしたね。私は幌の中から出てる事がなかったですし、曹仁様の話し相手は朱霊さん達が率先してやってくれていましたし」

「あの3人は曹仁殿を慕っているから競争だつたんだろ」

毎朝はくじ引きをしてましたね。」

「怖かつたんですけど徐々に私は曹仁に興味を惹かれていきました。名家の長男のとは思えない気さくさ、朱霊さん達との主従の垣根を超えている会話、何より普通なら幌の中でふんぞり返っていてもおかしくない人物が荷車を引っ張り野営の時は一人外で寝ているんですから」

一度朱霊さんに訪ねたら

「豪ちゃんに乗馬の時も重たい自分が乗る事をためらう優しい人なんだよ。野営の時は寂しくない様に陽が時々豪ちゃんの布団に潜り込んでるから大丈夫だよ。豪ちゃん暖かいんだよー」

ノロケで返されてしまいました。

「そんな旅のある日森の中で寝ずの見張りをしていた曹仁さんを氣遣って朱霊さん達が水汲みや薪集めに森へ行き私と曹仁様の2人つきりになつた時があるんです」

「あの3人が曹仁殿から離れるとは珍しいな」

「普段から曹仁様が食料集めとかしてましたからね。不思議な事に曹仁様は食べれる野草や狩りがもの凄く上手なんですよ。朱霊さん達はたまには曹仁様を休ませたかつんだと思います」

「その頃の雛里は曹仁殿と2人つきりで恐くもなかったのか？」

「怖かつたんですよ、帽子を目一杯被つてましたね。時々曹仁様の子供みたいな寝顔を見ていました」

「あのいかつい顔が子供みたいとは想像がつかないな」

星さんそれはかなり勿体無い話です。

「そんな時急に曹仁様が急に起き上がってこう言つたんですよ」

「鳳統殿、今から胸くそ悪い展開になるから幌の中に入っていて下さい。そこの2人組でてきやがれ」

曹仁様が怒鳴り声をあげると森の中から刀をもつた2人の男の人が出てきました。

「雛里は何をしていたんだ？」

「幌の中から様子を伺っていました。星さん曹仁様はそれからどうしたと思います？」

「あのお方の事だ一瞬のうちに賊を征伐したのであるう」

私もあの時はそうなると思っていました。

曹仁様は2人組を少し見つめた後に穏やかな声でこうおっしゃいました。

「お前ら賊じゃないだろ？手を見る限りは職人ってとこだな」

曹仁様の言葉にどこか安心した様子で男の人が応えました。

「なぜ私達が賊ではないとわかるんですか？」

「賊ならもつと人数集めてくるし相手を見て襲うもんさ。それにそんなにきつく刀を握ってちやうまく刀を振れねぞ」

「仰る通り私達は元は鍛冶職人です」

「だから腕にあわねえ良い刀持ってたのか。旅で暇をしてたんだ飯でも食いながら話を聞かせるや」

曹仁様はそう仰ると懐から干し肉をだして職人さんに手渡したんですよ。

職人さん達はよほどお腹が空いていたのか無我夢中で干し肉を食べていました。

「人間空腹ほど惨めなものなねえからな。今じゃ賊のぞの字も浮か

んでこねえだろ？俺の名は曹仁てんだ。粗略にしねえから話を聞かせろや」

話を聞いていた星さんがニヤリとして言った。

「曹仁殿とわかって2人は慌てただろう」

「ええ土下座して謝っていましたよ」

「曹仁殿に襲いかかるとはなんとも運の悪いやつらだな」

「いえむしろ幸運でしたね」

2人は元々幽州近くに住んでいた職人さんでした。

一人はお嫁さんがいてもう一人に方にも、もう直ぐで結婚する恋人がいたそうです。

そんな時に村が賊に襲われたそうです、幸いに御遣い軍いえ劉備軍が駆けつけて村は全滅は防げたそうです。

「それならなぜ2人はそんな所に」

「ここからは私達の耳には痛い話ですけど聞きますか？」

星さんが頷いたので私は話を続ける事にしました。

「全滅は防げたんですけど村の再建は不可能に近かったそうです。

幸い親戚が洛陽の近くで鍛冶屋をしいるのでそちらに引っ越し事にしたそうです」

「あの村の住人そんな事になっていたまのか。しかしそれなら何故

2人なのだ？嫁や恋人はどうしたんだ？」

「お嫁さんも恋人さんも私達は何回も顔を合わせていますよ。御遣い軍の侍女として、お嫁さんも恋人さんも綺麗な方でしたから北郷さんが賊が怖いならうちに来ればいいよって侍女として雇ったらしいんです」

「賊に襲われる恐怖から旅に同行しなかったのか。それでその2人はどうしたんだ？」

「何とか洛陽着いたも宦官との癒着の嫌疑から鍛冶屋は潰れていたそうです。そのうちに路銀も尽き飢えたお二人は賊になる決意をして曹仁様に出会ったんですよ。話を聞き終えた曹仁様はこう仰ったんです」

「お前達の腕は賊にしとくの勿体ねえよ。陳留に隣が食堂の鍛冶屋がある無愛想な親父だが腕は確かだから流行っている。お前達の刀を持って行って曹家のデカ物から紹介されたって言や大丈夫だ。お前達の技術この曹仁が買い取る。これが代金だ、陳留までの旅費にするもよし逃げるもよし。陳留にくりや賊の真似事よりましな生活させてやるよ」

そう言っただけのお金を手渡していました。

「今お二人方とも鍛冶屋で働いて良く曹仁様達お酒を飲んでるみたいですよ」

「賊を倒すだけでは救いになっていなかったんだな」

「それからですね。曹仁様を見る目が変わったのはそして洛陽で貧

しい親娘と出会った一件から曹仁様と話す様にしたんですよ。あつあの母親も陳留で働いて女の子も男の子も元気にしてますよ」

自分を襲った相手も救う器に惹かれたんですよ。

難里の気持ち（後書き）

いつも多くの感想ありがとうございます。

感想の全てが男性からってのが豪華しい気も。

次こそ反董卓連合になります

曹仁と曹操（前書き）

実はこの話は次話の冒頭部分として書いた物が膨らんで独立した話となりました。

今回も恋姫らしさはゼロです

曹仁と曹操

外史のお金は狐の葉っぱ

いくら貯めても持つてはこれぬ

外史のの家族はまぼろし

いくら愛しても終われば他人

行くも来るも虚しき外史生活

明日はどの物語にいくのやら

明日は誰になるのやら

終わり無きは外史生活

我らは矯正指導員

昔から指導員の間で自嘲気味に歌われていた歌。

俺は幌の中で眠る1人の女性ひとを見つめながらそれを呟いた。

当たり前だが答えは返っててくる訳もなく夜の静寂が2人を包んでいった。

数日前

反董卓連合出発の前日

の事

曹操は弟曹仁をとても可愛がっている。

両親が忙しかった為に幼い頃から身内の愛情に飢えていた彼女にとって弟が可愛くて仕方ないのは当たり前なのかもしれない。ましてその弟が将として規格外な能力を有していればその力を十二分に活用して周りに自慢をしたくなるのも理解できる。できるけど……

「あの一お姉様もしかしたら俺にこれをひけと」

姉ちゃんに呼ばれた場所にあつたのは巨大な荷車。
しかも俺がひいて行軍できるギリギリの重さを見切っていた。

「流石はお姉ちゃん自慢の弟ね。洛陽まで頼むわよ」
荷車の中には武具や鎧、食料等が積み込まれている。

「姉ちゃんは俺の力をきちんと把握してるんだね」

これなら氣を使わないでもギリギリひいていけるだろう。

「当たり前じゃない。優秀な将でもある可愛い弟の事はきちんとわかってるわよ」

「でもこれじゃ俺の斧とか鎧を載せれないじゃん」

俺の斧や鎧も結構な重さなんだぜ。

「豪は氣で身体強化ができるし疲労回復もできるのよね？なら大丈夫でしょ」

流石は姉ちゃん氣の使い方をもう把握してんだ。

「豪が弟でお姉ちゃん本当嬉しいわ」

素敵すぎる笑顔で笑いかけてくる姉ちゃん。

この外史に来て一番の嬉しかった出会いはと聞かれたら陽達よりも姉ちゃんとの出会いをあげるだろう。

様々な外史を巡り戦闘や謀略に明け暮れていた俺にとって身も心も委ねれる存在はありがたいのだ。

それを知ってか姉ちゃんは俺への無茶振りの時は命令よりも

豪がやってくれたらお姉ちゃん嬉しいな。お姉ちゃんの豪ならできるわよね。

と愛情のあるお願いとしてくる。

これが断れないんだよな。

女としての依頼なら利己的な計算が見えてくるが姉ちゃんのは純粹に民や軍の為だし。

配下の武将とはあくまでも契約関係であり俸禄で繋がっているけども身内はお互いに支え合う関係だから姉ちゃんのそれには部下に行う命令の時にある計算は入っていない。

ちなみに俺への報酬は手料理、頭を撫でる、膝枕等がある。

必要以外の金は狐の葉っぱになるんだから俺には不満はなかった。

しかしこないだジャックの前で頭を撫でた時は報酬ではなく罰ゲームに近かったけど。

その後ジャックは

「豪さんシスコンになったんですね」

と笑いを堪えながら話しかけてきた。

「わかったよ。今回は野営の時は幌の中で寝れそうだな」

それなら幌の中と事務所を繋いで俺の部屋でも寝れるな。

「お姉ちゃんも幌で寝るから綺麗にしとくのよ」

「えっ?! 姉ちゃん天幕で寝るんじゃないの?」

「何回かはね。お姉ちゃんは豪の近くが一番ゆっくり休めるのよ」

あー春さんや荀イクも俺と休むんならあれこれ騒がないし姉ちゃんも霸王の仮面を脱げるわけね。
洛陽着いたら他の諸侯への牽制から霸王モード全開にしなきゃいけないしな。

「久しぶりに姉弟水入らずの時間になるわね」

姉ちゃんは春さん達と俺は陽達やジャックと過ごす時間が増えたからな。

姉ちゃんは基本的に人の面倒を見るのが好きなタイプなんだけども霸王に世話をやかれて平気なのは俺しかない。

春さん達は奉仕タイプだしあの許緒でも姉ちゃんの手料理をだされた時は旨さより緊張や感謝が先立っていたし。

姉ちゃんの手料理をがつついて食うのは俺だけだから姉ちゃんはいつもそれを満足そうに見ていた。

「寝床はどうする？まさか今更一緒の布団はないだろ」

「お姉ちゃんは一緒でも構わなくてよ。昔は良く一緒に寝たわよね」

主に姉ちゃんが寂しくなった時だけでも。

「まったくりあえず来る前に連絡してくれよ。飯の準備もあるし」

行軍して2日目に姉ちゃんから連絡がきて久しぶりの姉弟2人っきりの食事とくだらない華を満喫した姉ちゃんは早めの就寝をとった。この小さい身体に数十万人の命や生活を抱えてるんだよな。その心労からか姉ちゃんは深い眠りについていく。

指導員の歌を呟いた後に俺は思う。

この外史で一番辛い出会いは誰かと聞かれたら姉ちゃんと答えるだろう。

王である姉ちゃんを外史から連れ出すのは難しい。

俺が仕事を終わらせるのは姉ちゃんと別れるのを意味する。

そしたら姉ちゃんが心労を休ませる夜はあるのだろうか。

曹仁と曹操（後書き）

たまにはこんな話どうでしたか？

反董卓連合 それぞれの思惑（前書き）

お気に入り登録が900を超えました。
大感謝です。

反董卓連合 それぞれの思惑

董卓軍 軍議場

side 賈馱

「いよいよ連合の連中が来たわ。華雄と震はシ水関で防衛に徹して。恋とねねは虎牢関をお願い」

「詠、恋はうちらと一緒にシ水関やなかったの？」

「恋は曹操軍の曹仁にあてるつもりだったの。でも細作の報告では行軍している曹操軍には曹仁が見あたらなみみたいのよ。だから恋は虎牢関にさげるの」

「気にしすぎちゃうか？曹仁って宦官達に贈り物をしてたらしいないか？本当はそんなに強くないんちゃうか？」

「曹仁は本当に強い」

「そういえば恋は一度陳留に行ったのよね。もし曹仁が来たら止めれそう？」

「無理。もう一人いる」

「つまりや曹仁は恋がわかるぐらい強くてそんな奴がもう一人曹操のところにおると。まじかいな」

恋が頷く。

曹仁は親衛隊にも朱霊隊にもどこの隊にも姿は見なかったみたい。これはかなり助かる状況ね。

side 豪

「しっかし凄いですね。さしずめ角砂糖に群がる蟻ってところですかね」

反董卓連合の集合場所につくとジャックが叫んだ。

確かに中央政権って角砂糖に群がる蟻みたいなもんだよな。

「ここまでは正史に近い状態で進んでるな」

「ええ于吉や黒幕も絡んでくるでしょうね」

ここで黒幕を倒したら、この外史ともサヨナラになるかもな。

その後もジャックと話をしていたら姉ちゃんが呼びに来た。

「うー本陣に行くわよ」

晩御飯ができたから家に帰るわよぐらいの気軽さで姉ちゃんが歩き出す。

「待って姉ちゃん今行くよ」

送れない様に駆け足で追いかける。

「豪さんはやつ。曹操をスカウトして豪さんのマネージャーにしたらしいんじゃないか？」

ジャックやめてくれ。

俺の自由時間がなくなるじゃないか。

反董卓連合本陣

本陣につくと聞き覚えのある声が響いてきた。

「オーホツホツホ皆様この連合の盟主にふさわしい美しく高貴な人間は誰かしら？」

周りの諸侯の疲れ具合からみるとそれなりの時間袁紹のアピールタイムが続いているようだ。

何か袁紹の奴ますます磨きがかかったな。

「姉ちゃん先に帰っていい？」

「あら豪はあれの相手をお姉ちゃんに押し付けるの？」

帰ったら戦で活躍してもお説教が待ってるな。

「あつ曹仁久しぶり。相変わらずでかいわね」

「曹仁殿お久しぶりです。それで軍議はどうなっていますか？」

「孫策殿に周瑜殿お久しぶりです。今は自己主張の固まりが盟主に自薦中ですよ」

俺を見つけた孫策さん達が話し掛けてきてくれた。

「豪この人達は？」

俺が知らない人と話しているのが気になるのか姉ちゃんが軍議そっちのけで話に参加してきた。

「姉ちゃん孫家の長女の孫策殿と軍師の周瑜殿だよ。前に一人旅した時に世話になったんだ」

路銀もらったし剣を突きつけられたら事は伏せておこう。

孫策殿達との繋がりはこの回の戦ではかなり重要なので、しばらく袁紹に構わないで4人で話をしていると

「よっ曹仁またでかくなっただんじやないか」

「今度は馬超殿ですか。まさか次は……」

ちなみに馬騰さんは自陣で待機しているとの事。

「曹仁星と雛里を返せっ」

すんごい遠くで劉備と孔明の後ろに隠れた御遣いが叫んでいた。

「小僧ここは軍議の場だ。それなら先に金を返せ」

鳳統と孔明は親友らしいからうちに来た経緯はふせておく。

「お前星達に酷い事してるんじゃないだろうな」御遣い話を聞けよ。

「北郷、軍議に参加しないなら黙りなさい。それと平原に書状はきちんと送ってい筈よ」

姉ちゃんの一喝で北郷が黙る、主人公補正なくなると無惨だよな、その犯人は俺何だけどね。

「これで参加諸侯は全員揃ったみたいですね。さてもう一度確認しますわよ。この連合の盟主にふさわしいのは一体誰かしら？」

袁紹はまだ諦めていなかったらしく再度自己アピールをし始めた。こんな茶番につきあう気がない俺と姉ちゃんは関わらない様になっている。

董卓達の無実と袁紹の駄目っぷりを知っている身としてはこの連合に深く関わるのは避けたいんだよな。街で絡んでくるヤンキーと一緒に各諸侯が袁紹と目を合わせない様になっていると

「私は袁紹さんが相応しいと思うな」

劉備が言った言葉に袁紹が食いつく。

「流石は劉備さん、他に誰も推薦する人はいないのかしら？それなら仕方ないから私が盟主になって差し上げますわ。劉備さん感謝してよろしくつてよオーホッホッホ」

ひとしきり高笑いをした袁紹が口を開いた。

「それと先鋒は劉備さんのところをお願いしようからしら。後の事はおつて伝えますわオーホッホッホ」

茶番劇が終わったので帰ろうとすると劉備達に囲まれた御遣いが近付いて来た。

「おい、曹仁俺達が先鋒で活躍した絶対に星達を取り返してやるからな。見ている」

姉ちゃんは怒りを通り越して呆れているようだ。

しかし俺は一つ確認しておく事がある。

「小僧、勢いと自信がたつぷりなのはいいけど先鋒の重みをわかっているのか」

先鋒が戦の勝敗に与える影響はかなり大きい。

「私達は負けないんだからね。絶対に星ちゃん達を助けだすんだもん」

御遣いに劉備が加勢してきた。

「親友の雛里ちゃんに酷い事をしていたら許しませんからね」

小学生の時にクラスのイケメンと対立した時を思い出してしまう。

あの時も多数の女子から非難を浴びたんだよな。

「豪、小物を構ってないで帰るわよ。」

姉ちゃんが俺の手を掴んで歩き出しだす。

「まさか御遣い達が連合に参戦するとはね。あそこは資金難の筈だけど」

「俺も気になる事があったから調に探らせてあるよ
本陣に着くと調が駆け寄って来た。」

「流石は兄貴だな。兄貴の予想通りだったぜ」

「豪、調に何を探らせていたの？」

「御遣い達の食料や装備の状況とその調達手段だよ」

「兄貴は御遣い達は必要以上に充実した装備で来ているだろうって
言っただよ」

「そ、それはおかしいでしゅ。今の北郷さん達にそんな余裕はない
筈でしゅ…まじやか？」

「鳳統の予想通りだよ。御遣い達は平原の税收を担保に金を借りた
らしい。後は劉備との養子縁組みもやっただらうな」

劉備の養子になれば名目は劉の名字がつく。

金を貸した商人は子供に劉の名字と平原を受け継がせる気なんだろう。

「だから北郷は強気で豪に絡んでくれたのね」

「ほう、元主は何と言われてましたか？」

「せ、あー俺は真名もらってないな。趙雲殿と鳳統殿を取り返すつてのと酷い事をしてたら許さないそうだ」

「ひ、酷い事れしゅか…。しよれ悪くないかも…」

何でだろ陽達の視線が痛い。

side 馬超

曹操の所に配置の伝令に来ただけども、何で…何であいつがここにいるんだ。私は近くにいた曹操軍の兵士に伝令を頼んでその場を離れた。

反董卓連合 それぞれの思惑（後書き）

募集

鍛冶職人2人の名前を募集します。

幕間にはだす予定です

反董卓連合 シ水関(前書き)

鍛冶職人の2人は感想から頂きました。
感謝です

今後暴間にでる予定

反董卓連合 シ水関

side ジャック

御遣いの餓鬼が俺の忠告を無視して豪さんに絡んできたらしい。

本来ならビビらせてやるつもりなんだが朱霊達から発せられた怒りのオーラをみたら俺の出番は必要なさそうだ。

そんな事を考えていると先鋒の御遣い軍から関羽が飛び出してシ水関にむかって何かをわめいている。

「あれ何してるんすかね？」

「砦にいる華雄は自分の武に誇りを持っている将らしいから挑発をしてみた砦から誘き出すそうとしてんだろ？」

でも…

「俺達に聞こえないんなら砦にも聞こえてないんじゃないですか？
つかこの軍勢相手に誘いにのる馬鹿はいないでしょ」

「まあな御遣いが外史の要だったら主人公補正でうまくいくんだろ
うな、単騎で行かなきゃ挑発の意味ないし近づき過ぎれば董卓軍に
囲まれちまうから徒労に終わるだろ」

当然砦からは梨のつぶてだった。

「あれに効果期待したんですかね？」

「この時代の人間は名誉を重んじるから無意味ではないかもな。多分皆では華雄に声が届かない様に兵に雑談をさせてるか華雄を他の隊の兵が囲んでいるだろう」

「豪さんどうやら例の物の出番がありそうですね」

俺の言葉に豪さんはイタズラ小僧の様な笑みを浮かべた。

s a i d o 豪

まるでサザエの蓋だな。

シ水関の扉は硬く閉じたままピクリともしない。

御遣い軍は装備は整えてあるが兵の練度に自信がない為か思い切った行動にはでれない様だ。

まっ下手に動いて潰走されるよりはましなだけでも。

その後も何人かが挑発を繰り返したが、結果は変わらずであった。

「このままじゃ向こうの思う壺ね。豪頼んだわよ」

「姉ちゃんわかった、やるだけやってみるよ。ジャックサザエの蓋をこじ開けにいくぞ。例のヤツを持ってついてこい」

s a i d o 鳳統

曹仁様と王連様がシ水関へと近付いて行きます。

曹仁様の策は事前に聞かせていました。が少し不安がありました。

関羽さんよりもかなり近づいた曹仁様は

「よっしゃるか。ジャック鎧はその辺に置いてくれ」

「あわわわ曹仁しゃまが」

「ふむ雛里、曹仁殿が上半身裸になったから顔を両手で覆うのはわかるがしっかり指の間から見てるではないか。しかし曹仁殿はなぜ裸に？」

「ゆ、ゆ弓矢を射る為だと思いましゆ。今から射る弓は曹仁様でも思いつきりひかなければならないので鎧は邪魔になるそうです」

「あれが弓とはまた随分と巨大だな。では王連殿が持っている槍みたいのが矢なのか」

「前に話した陳留の鍛冶屋さんに作ってもらった特性の弓矢だそうです」

曹仁様が弓をひくと筋肉がうごめくのがわかる。

「この弓は俺のダチの創拍と焰龍が作った物だ。威力はよくみやがれ」

「次は火矢か。しかしあの大きさはまるで松明だな。それでも火攻めには弱いのでは……あれを飛ばすのか？」

火矢の次に曹仁様が弓につがえたのはヤジリの代わりに鉄球をつけた矢。

「火で脆くなった扉を砕くそうですよ。陳留には秋の天気の変化と曹仁様のなす事に一々驚く馬鹿はいないって言葉があるそうですよ」

side ジャック

「さてようやくサザエの蓋が開いたな。ジャック突撃するぞ」

豪さんが無茶苦茶するからシ水関から董卓軍が巢をつつかれた蜂の様に湧き出て来ている。

「開いたんじゃなく破壊したんでしょ。豪さん鎧はいいんですか？」

「面倒くせえ。行くぞ」斧を構えて豪さんが突っ込んでいく。

俺も愛用の槍を構えて後に続いた。

「まったく無茶しかしいんだから。今後の為にも曹操のスカウト申請だしとくかな」

「ジャック俺の委員での威厳を壊す気か？」

確かに十代の女の子に大人しく頭を撫でている姿を見られたら威厳もクソもなくなりますね。

side 華琳

鎧もつけないで突撃なんて全くあの子は何歳になっても姉に心配ばかりかけるんだから。

「桂花準備はできている？」

「はつ夏侯敦隊、朱靈隊、楽進隊は魚鱗の陣を組み曹仁様と王連から敵を引き剥がせ。孫と馬には伝令を」

豪覚悟しておきなさいよ。

掠り傷一つでもあつたらお説教をたっぷりしてあげるからね。

side 張遼

シ水関の扉を壊した2人を囲んだ兵が次々に打ち倒されていきよる。

「なんやあの化け物どもは？全員虎牢関に下がるで」

「華雄様はどうしますか？」

「あれを見てみい。恋みたいのが2人も暴れてんねんど。それに曹操、孫策、馬騰も動き出したんや。華雄は悪運に期待するしかない」

「張遼様大変です。御遣い軍が砦に攻め行つてきました」

「シ水関は捨てるで。火を放つて時間稼ぎをするんや」

side 秋蘭

豪様が心配なのか姉者や陽は無謀ともいえる突撃を繰り返していく。

「姉者危ない。矢で狙われてる」

私は敵の弓兵を射る。

私の弓が敵兵を貫くのと姉者に矢が襲いかかるのはほぼ同時であった。

ガキンツと言う金属音が辺りに響き渡る。

「姉者、無事か？」

「秋蘭心配をかけたな。豪がくれた手甲のお陰で無傷だ。しかし矢に貫かれないばかりか逆に矢を砕くとは豪がくれたこの手甲は豪と同じぐらい信じれぬ丈夫さだな」

「ああ、だけでもあれだけの敵に囲まれたら豪様と言えど無傷で済むまい。姉者まだいけるか？」

「当たり前だ。それに豪は私達にとつても弟みたいなものだからな。」

side 陽

邪魔、邪魔、じゃまー。

早くいかないと豪ちゃんも痛い思いするかもしれないんだよ。

「私の邪魔をするな。曹仁様の救出を阻む者は何ものであれ切り捨てる」

次の瞬間、私の前に斧を構えた女が立ちはだかった。

「我が名は華雄。シ水関が堕ちた今武人として後悔せぬ様に一人でも道連れにしてやる」

「私の名は朱霊。ゴアイの剣の朱霊だ。誰であろうと邪魔をするなら斬る」

強いけども……

「陽と豪ちゃんの邪魔したら酷い目にあうんだからー」

豪ちゃんが絡んだ時の私に敵はいない。

華雄を生け捕りにした私は隊の者華雄を任せて豪ちゃんに向かい突き進んでいく。

side 豪

正座をさせられている。

姉ちゃんの説教が鳴り止まない。

結果としてシ水関は陥落し華雄は陽が生け捕った。

シ水関の一番乗りは御遣い軍がほぼ無傷でのりこんだらしい。

普通なら一番乗りの手柄を横取りされた説教になる筈が姉ちゃんはいかに俺が無謀な事をして心配をかけたのかに費やされている。

さらに陽、凧、調や何故か鳳統まで加わってどれだけ各自心配をしたかを代わる代わるとなえていく。

「あの〜皆様足を痺れてきたし俺それなりに斬り傷とかあるんですけども」

「鎧もつけずに敵陣に突っ込んで行ったら斬り傷できるのは当たり前でしょ？ほらっ先生のところに行くわよ」

「姉ちゃん耳を引っ張らないで。逃げないし歩くから」

side 馬岱

曹仁さんが敵軍に裸で突っ込んで怪我をしたので翠姉様と陣中見舞いに行く事にした。

でも先伝令に行つてから翠姉様が無口になっている。

こんな姉様はあの日以来だと思つ。

案内された天幕に入るとそこには曹仁さんと信じれない人がいた…。

「療なんでここにお前がいるんだよ。生きてたらなんで連絡くれな
いんだ？」

泣きながら翠姉様が走つて行つた。

「お兄ちゃんなんでここにいるの？」

そこにいたのは私のお兄ちゃん。翠姉様の許嫁の馬休だった。

反董卓連合 シ水関（後書き）

よーやく先生の正体が

ちなみに馬休は正史では馬超の兄弟です。

次で先生の過去が…

つて恋姫に関係ない話に興味ある人はいるのかな？

馬休伝 患者を治す者は馬岱の兄で（前書き）

今回は先生特集です

もう恋姫関係ないかも

本編あまり関係ないから先生に興味ない人はスルーしても大丈夫です

馬休伝 患者を治す者は馬岱の兄で

side 豪

重い、怪我人をいたわる感じが全くない重い空気が天幕を包んでい
る。

「お兄ちゃんなんで何にも言ってくれないの？蒲公英の事忘れたの
？曹仁さんも何で教えてくれなかったの」

馬岱殿は半泣きになってるし、先生は押し黙ったままだ。

「先生とは黄巾党に潜入している時に知り合った。その時の先生は
世捨て人だったから敢えて俺達も何も聞かなかったんですよ。先生、
昔何があつたかわかりませんが後悔しない様にしましょうや」

「豪さん…ありがとうございます、蒲公英を頼みます。蒲公英心配
をかけましたね。お兄ちゃんは翠と話をしてくるから後から3人で
ゆっくりご飯でも食べよう」

先生、馬休が立ち上がった。

「先生しつかりな。後馬超殿は天幕をでて左に行ったみたいだぜ」

俺の話聞き終わるや否や先生は走り出した。
しっかし先生が西涼の人とはね。

「お兄ちゃんと翠姉様と私は小さい頃からずっと一緒だったの。翠

姉様とお兄ちゃんは生まれる前からの許嫁だったし。お兄ちゃんは西涼の将になるには優しすぎたんだと思う。お兄ちゃんは武より知人を倒すより救う事に夢中になっていったんだ」

確かに先生が剣やら槍を振り回す姿は想像できねえな。

「馬騰叔母様もそんなお兄ちゃんを苦々しく思っていたみたい。西涼はただでさえ女尊男卑が強いから翠姉様にはある程度の武がある男の人が望ましいんだって」

それで俺を婿にしようとしたのか。

「それだけで先生は生まれ故郷や家族を捨てるかね？」

「西涼は一つの国じゃなくて連合だから。前から問題にはなっていたんだ。次代の王の伴侶が医者 of 真似事に夢中になるのは問題だって連合の解散の危機にまで発展したの」

この時代は医者 of 地位は低いからな。うちのきちんと先生の腕を評価している。

「翠姉様は許嫁としてだけではく一人の男性としてお兄ちゃんを愛していたから駆け落ちも考えていたみたい」

「それで先生は消えたのか」

問題の自分がいなくなる事で結束を戻そうとした訳か。

「それから翠姉様は必要以上に武にこだわる様になったんだ。自分がお兄ちゃんの分も強くなればいつか帰ってくるってね」

それで馬騰様が心配し過ぎる程の武オンリーになってしまったと。確かに今の馬超殿じゃ内省や外交は心配を通り越して問題を起こしそっだしな。

「今の先生なら大丈夫だよ。あの人は黄巾党にいて色んな人間と接してき人情の機微を知り尽くしてるから」

先生の医務室には話だけでも聞いて欲しいっ人も来るぐらいだし。

side 馬超

今の私はグチャグチャだ。

顔を涙で濡れてグチャグチャ、気持ちもグチャグチャ。

療が生きていて嬉しい涙、療が曹仁の所にいた悔し涙、私は療にもう必要とされていないんじゃないかっていう哀しみの涙。

色んな涙も混ざってグチャグチャだ。

「隣失礼しますよ。相変わらず翠は泣き虫ですね」

隣に座った療が手拭いで私の涙を拭いてくる。

「それと久しぶりですね。健康そうだなによりです」

「今さら今さら何しに来たんだよ」

「大事な人が走り去れば追いかけるのは当たり前じゃないですか」

「何だよ。そんな言葉を言ったら女がみんな喜ぶと思ってるのか？」

「知り合いに不思議ともてる人がいるんですけどもその人が朴念仁というか鈍感でしてね。側で見てる人間は言葉できちんと伝える大切さを学んだんですよ」

そういつて私の顔を見て来た療は前よりずっと大人びていた。

「なら何で今まで会いに来てくれなかったんだよ。私や蒲公英がどれだけ寂しかったかわかるか？ いっぱい泣いたんだぞ。会いたくて会いたくて仕方なくて寂しくて寂しくて泣いたんだぞ」

今でも夢に見て泣く事もあるんだ。

「西涼から逃げ出した後色んな土地を巡り色んな人に会いました。貧富、貴賤、美醜、強弱みんな違うのに一生懸命生きていました。貧しい人達は医者にもかかれずその命をおとしていく、弱い人達は暴力の標的にされる私にできるのは相手に拘らず医術で救うだけでした。でも私の拙い医術では救えない人も大勢いて私は毎日自分の無力さを嘆いていたんですよ。西涼から自分の無力さが嫌で逃げた癖に情けないですよ。そんな時には豪さんに出会って医術の可能性を教えてもらい医者としての誇りを得たんです。でも今さらどの顔をさげて西涼にもどれますか？」

そう呟いた療の顔は寂しさに溢れていた。

療は毎日命に向き合い真剣に闘っていたんだな。

「豪つて曹仁の事か？」

「ええ私が名前を明かさないので真名を預けてくれました。あの人

といたら大概の悩みは小さく思えてしまいますよ」

「療は療は今好きな女はいるのか？陳留にはおしとやかな女の子もいるんだろ？」

「私の好きな女の子はずっと前から一人しかいませんよ。医者としての誇りを得た今ならきちんと言えます。翠愛してますよ、昔から今もこの先もずっと」

私は療の胸で思いつきり泣いた。

久しぶりに感じる療はとても暖かく優しかった。

side 馬休

翠が落ち着くのを待つて話を再開する事にしました。

「西涼のみんなは元気ですか？」

「ああ、みんな元気だぜ。でも最近母様の様子がおかしいんだ」

翠から聞いた症状からすると不味いですね。

西涼の陣には行き辛いですが患者がいる場所に医者がためらう訳には行きません。

「私は一度曹操軍の陣に戻ります。翠は馬騰様と一緒にいて下さい」

確か豪さんからもらった薬を持ってきていた筈。

馬休天幕

「蒲公英、これから西涼の陣に行くから案内して下さい」

「お兄ちゃんどうしたの？翠姉様は？」

「翠は先に陣に行ってもらいました。豪さんすいません前に頂いた薬を陳留の民にはなく馬騰様に使わせてもらいます」

「あれは先生にあげたんだよ。西涼の陣に行くなら着いて行くのか？」

「毎日豪さんや若狗さんと面つき会わせてんですよ。西涼の将もおしとやかなお嬢様に見えますよ」

「そりゃそうだな」

豪さんは笑いながら手を振ってくれた。

西涼陣

side 馬岱

あれが本当にお兄ちゃんなんだろうか。

昔は頼りなかったお兄ちゃんが遮る将を一喝して馬騰叔母様の所までズンズンと進んでいった。

覚めた目で

「邪魔ですよ。それに私は曹操軍から派遣された医者だという事もお忘れにならない方が身のためです」
「つてお兄ちゃん渋すぎっ。」

「お久しぶりです馬騰様。今回は同じ連合の曹操軍から医者として派遣されてきました」

前は馬騰叔母様に睨まれたら目を逸らしていたお兄ちゃんが逆に睨み返している。

「少しはいい面構えになったな。お前に俺の病が治せるのか？」

「患者が深酒したり暴れたりしなければキチンと治りますよ。まあ今回は本格的な治療とは行きませんから今回の戦が終わったら陳留に来て下さい」

「面倒くさいな。パツパツと治らないのか？今さらそこまで長生きするつもりもないんだよ」

馬騰叔母様が物憂げに断りをいれた。

「つぎけんなよババア。今まで好き勝手に人を殺したからにはそいつらの分までキチンと天寿をまっとうする努力する責任があるんだよ。患者は黙って医者言うことを聞きやがれ」

お兄ちゃんが蒲公英の優しかったお兄ちゃんが、曹仁さんの悪影響を受けまくっている。

お兄ちゃんの迫力に飲まれた叔母様は頷くだけだった。

後姉様が

「私の療が、私の大切な療が曹仁の馬鹿野郎ー」
大きな声で叫んでいた。

でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだ、その夜は久しぶりにお兄ちゃんと
翠姉様と私の3人で晩御飯を食べる事ができたんだ。

馬休伝 患者を治す者は馬岱の兄で（後書き）

先生は豪やジャックの影響を受けまくっています
ジャックの幕間の前にまさかの先生幕間となりました。

鳳統の真名交換作戦（前書き）

ようやく雛里の真名交換話です

鳳統の真名交換作戦

side 豪

「ひまだ……」

うちの軍では戦中は各部隊毎に生活を送る。

天幕も隊別が基本だから無所属の俺は荷車の中で寝起きしていた。普段なら姉ちゃんや陽のところに顔を出しているんだけども昼間に鎧を外しての武双をしたせいでお姉様より外出禁止令をだされている。

「晩飯どうすつかな。ジャックみたいに事務所に戻って居酒屋でも行くか？ いや姉ちゃんの抜き打ちチェックの可能性は否定できない」
久しぶりに長い独り言を喋って、そこはかたない虚しさに襲われる。この外史来る前は自分の部屋で意味なく独り言を言ってたんだよな。

「事務所からカップメンでも送らせるか」

やっぱり基本のカップヌードルの醤油かシーフード。

いや ちゃんの塩も捨てがたい。

がつつりとスー ーカップにしようかな。

このまま黒幕を糺すとカップラーメン生活に戻っちまうな。

まずい…こんな条件のいい外史に来れる事は滅多にない。

しかも外史の住人と深く関わる事ができる役目がまわってくるのは次は何時になるか予想もできない。

ましてやそこで女に慕われる可能性なんてのは天文学的確率になる

かもしれない。
つまり黒幕を糺すのと同時に独身彼女なし生活を終わらせなきゃいけない。

やばい先から語尾がないでしか終われてい”ない。”

ネガティブな思考に苦悶していると幌の外から声がかかる。

「そ、曹仁様今よろしいでしゅか？」

この声は鳳統殿か？

「鳳統殿ですか？構いませんよ」

鳳統殿が小さい体をさらに縮こまらせて幌の中に入ってきた。

「し、失礼します」

「こんな夜中にどうされました？」

「曹仁様と少しお話したくて…。そのあの星さんが程イク様達のところに行ってしまいましたし」

鳳統殿の性格からして知らない兵が多くいる隊の天幕は行きづらいか。

「構いませんよ。俺も一人で暇していましたから」

駄目な時を想定して一人時間にも慣れとくかな。

「今日は朱霊様達はいらっしやらないんですか？」

陳留に居た時は陽や調、風は暇を見つけては俺の所に来てたから鳳統殿が疑問に思つのも不思議じゃない。

「うちの軍では戦中の生活は自分の所属する隊で送らなきゃいけないですよ。隊の結束をはかるのと夜襲に備える隊を当番制にしますからね」

「確かに将だけが同じ所に集まるのは兵に不満が生まれかねませんね」

将が不在の間に兵が反乱を起こすのは決して珍しくはない。

「そりゃ自分達が兵糧生活なのに将達のご馳走食ったり酒を飲んで騒いでいたら面白くないでしょ」

将が同じ釜の飯を食べる事で新たな結束も生まれるんだから。

「素晴らしいですね。恥ずかしいですけど御遣い軍に居た時は北郷さん中心に集まっていましたから」

北郷君そんなに女の子を侍らせて君の王道は夜王道なのか？

「そう言えば何時の間にか北郷さんって呼んでるんですね」

ご主人様って、俺の中でご主人様って言葉を使っているのは忍者ハット 君にでくくる黒猫だけだ。

若い人は何のことかわからないだろうな。

「私は今曹操軍に仕える身ですから」

いつの間にかじゃなく確信犯なんだ。

「そう言えば御遣い軍の方達と顔を会わせましたか？」

軍議の時は遠くから絡んで来たし鳳統殿や趙雲殿の奪還の為に接触をはかっておかしくないし。

「朱里ちゃんには手紙をだしました。私が仕えたい器をもつ人物を見つけたって」

「姉ちゃんの霸王としての器は別格ですからね」

「ち、違いましゅ。私が惹かれた器の持ち主は曹仁様でしゅ。そして私の真名は雛里です」

あー鳳統殿、俺が一人の時を狙ってきたな。

「そんな大層な器はないんだけどな。もうわかってると思うが俺の真名は豪だ。これからもよろしくな雛里」

「あ、ありがとうございます。豪様これからもよろしくお願いします」

「様はいらないんだけどな。それと本当は陳留に帰ったら渡そうと思ってたんだけども」

カップメンと一緒に送らせてよかった。

side 雛里

私は曹仁様と真名を交換する機会を狙っていました。普段は曹仁様の側には朱霊様達いて真名の交換は不可能に近かったんです。

星さんに相談をすると曹操軍では戦中は部隊別に生活するみたいだから今回が好機ではないかって言われました。

私は文官ですから武よりも人柄や器に惹かれた事を伝えれば曹仁様に断れる可能性は低い筈です。

作戦は成功しました。

豪様は真名だけではなく不思議な帽子もくれたんです。

豪様くれたのは私がいつも被っているのと似た帽子でした。

「それは陽の剣や春さんの手甲みたいに特別製のやつなんだよ。その辺の槍や剣じゃ傷一つつけないしちょっと深めに被ってみな」
私は言われた通りに帽子を目深に被ってみました。

「凄いです。帽子を被っていてもキチンと周りが見えています」

これなら恥ずかしいふりをすれば周りを怪しまれずに伺う事ができます。

side 豪

雛里は鳳凰の毛で編んだ帽子を持って喜んで帰って行った。

俺はのびたカップメンでも食うか。

鳳統の真名交換作戦（後書き）

董卓達どうしよう。

董卓って豪を恐がりそうだし詠と豪ってあわなそうだし。

陽外史から離れる（前書き）

最初は普通に朝飯を食べて軍議に行く話が…

陽外史から離れる

のびたカップメンで腹を満たした翌朝の事。
荷車に陽がやってきた。

「豪ちゃんおはよ。華琳様が軍議に行くから後から来なさいだつて」
にこりと笑うと手慣れた様子で幌の中へ入り込み俺の隣に座る。

「はい豪ちゃん。今朝の朝ご飯は陽特製愛情たっぷりお握りだよ。」
。
ちなみにお握りは俺が子供の頃に作ってひろめた、携帯食にもむいているから曹操軍では既にお馴染みの食べ物である。

「陽おはよ。それじゃいただきます」

戦中だから中味は入っていないが一人で食べるカップメンより断然うまい。

ジャックに絶対に朱霊を連れて来れなきゃ豪さん後悔しますよつて言われた言葉が胸に染みる。

今朝も早起きしてお握りを作ってくれてんだよな。

「豪ちゃん虎牢関ではちゃんと鎧を着てね。陽は豪ちゃんが怪我するの嫌だし他の女の人に豪ちゃんの体を見られるのも嫌なんだから」

陽大丈夫だ。

大概の女の人は俺の体を見るのを嫌がってるから。

「わかってるよ。ここであれこれ考えても袁紹の予想外発想で碎かれるんだろっな」

「華麗に雄々しく前進だもんね」

陽も苦笑いをしている。雄々しくは攻めたけど華麗さは全くなかったから、あの高周波で嫌みを言われるんだろか。

「どうせ意味がない軍議なんだから俺一人が行かなくっても大丈夫だろ？」

「豪ちゃん駄目だよ。シ水関陥落の一番の立役者がいかなきゃ軍功を御遣い軍にまた横取りされちゃうよ」

あの横取りで御遣い軍は皆一番乗り軍功を手に入れたが連合では一番大事な他の諸侯からの信用を失ったに違いない。

「彼奴らは軍功をあげなきゃ生活が逼迫するだろうから、なりふり構ってられないんだろ」

連携してもらえなくなるリスクは考えたんだろっか？

「逼迫するのは民とか兵なんじゃない？あつ豪ちゃんほっぺにご飯粒ついてる。陽が取ってあげるー」

陽はそう言つと俺の頬に唇をつけて直接ご飯粒をとってくれた。

「よ、陽そのありがとな。まあ北郷も天の国帰りたんだけど帰れなくて一人あがいてるのかもな」

いきなり違う世界に連れてこられるきつさは俺もよくわかっている。

「一人だからだよ。陽は豪ちゃんにどこまでもついて行くんだからね」

女の勘ってヤツか、陽は薄々気付いてるのかもな。

「どこまでもか？」

「うん。どこまでも」

洛陽に黒幕がいる可能性はかなり高い、糺したら戻らなきゃいけないからな。

「陽ちつと目をつぶれ」

素直に目を閉じた陽の額に手をあてて俺の正体を伝える。
断られた直接黒幕のところに乗り込んで本気でズタボロにしてやる。

side 陽

ここ何日か豪ちゃんの様子がおかしかった。
華琳様やみんなを大切そうに淋しそうに見つめている事があった。
まるで自分が遠くに行かなきゃいけない感じで。

目を瞑ると豪ちゃんが手を当ててきた。
すると突然私の頭の中に色々な光景が流れ込んでくる。

とつても高い建物がある世界で働いてた豪ちゃんが、大きい竜に呼

ばれて色んな世界で色んな体験していた。

「今見たのは全部本当だよ。俺も御遣いと同じくこの世界の人間じゃないんだ。あいつは巻き込まれて来たが俺は仕事で来ていつかは帰らなきゃいけない。騙っていたのは謝るし陽が認めないなら仕事を速攻終えて帰ってもいい。きちんと本当の曹仁を違う世界から連れて来て俺と違和感なく交代もできるから問題はない。多分本当の曹仁は姉ちゃんに似てる美男子だと思う」

豪ちゃんが早口でまくし立てる。

この人は私も華琳様もみんなを騙して生活をしていたんだ……。うん、スツゴい腹がたつ。

「豪ちゃん何で今まで言ってくれなかったの？陽が頼りないから？陽を信用できないから？陽を本当に好きじゃないから？陽が大事なのは豪ちゃんなんだよ、見たこともない曹仁様なんかじゃない」

そう言つて豪ちゃんに抱きつくと私と豪ちゃんを淡い光が包み込んでいく。

「オジキ普通このタイミングで呼び戻すか？」

悪態をつく豪ちゃんが見る先には山みたいな大きさの竜がいた。竜って本当にいたんだ。

「人の娘に問う。汝全てを捨てても豪に着いてくる覚悟はあるのか？今ならお前達の記憶にある豪の記憶を本物の曹仁に塗り替える事もできるぞ」

ギョロリと竜が大きい目で睨みつけてくる。

物凄い迫力、まるで一人嵐の中に放り出されたかの様な不安。でもでも負けない。

こんな巨大トカゲに陽の豪ちゃんを奪われてたまるもんですか。

「絶対に嫌。豪ちゃんの記憶をなくすのも豪ちゃんから離れるのも絶対に嫌」

「主本気か？家族にも友人にも二度と会えないんだぞ。それでもこの男について来る気があるのだな」

みんなに会えなくなるのは寂しいけど豪ちゃんに会えなくなるのは比べる事ができない。

「しつこいつ。陽は豪ちゃんの陽なの、豪ちゃんも陽の豪ちゃんなんだから」

「豪よ、良い娘を見つけたな。創竜の名において朱霊が外史から離れる事を認める。朱霊よ汝に世界を生きる知識を与えよう」

色々な知識が私の頭に流れ込んでくる。

科学、魔法、外史それより何より私はこの世界公認の豪ちゃんの恋人になれたんだ。

「それじゃ豪ちゃん一緒にあの外史をを糺しに戻ろう。この戦が落ち着いたら陽に色々教えてね」

陽外史から離れる（後書き）

陽以外が外史をいつ知るかは未定です。

一途娘陽がますますパワーアップします。

感想指摘お待ちしております。

虎牢関軍議で地味に絡まれて（前書き）

地味の人ようやく初登場

虎牢関軍議で地味に絡まれて

オジキに別れを告げて俺と陽は外史へ帰って来た。

「ふえー凄い。まだお握りが暖かいよ」

「時間的には1分もたつてないからな」

「でも何で豪ちゃんがあんなに強いのか納得できたよ。色んな世界で色んな相手と闘ってきたんだね」

「俺達が負けたら仕事にならないからな。実力的に余裕がある世界にしか回されないんだよ。それでも経験はつめるから強くはなるわな」

ドラ エのレベル99のキャラが違うゲームに行ってる様なもんだ。そしてそこでまた99になっての繰り返しをしてるから強くもなる。

「それでも創竜様には適わないの？」

「適わないどころか一睨みで消滅させれちまうよ」

あれは強さとかの概念じゃないしな。

自分の強さに天狗になった矯正委員をそいつより強いヤツがゴロゴロいる外史に連れてつたりするし。

あくまで俺が行った世界では強い方だったけど俺より強いヤツなんて他の外史の中には沢山いるんだろう。

「あっそろそろ時間だよ。豪ちゃんいつてらっしやい」

誰かに見送られて仕事に行くか、いいもんだな。

……行き先がここじゃなきゃな……

「オーホツホツさすがは盟主が美しいと素晴らしい結果がでますわね。皆様今日も1日あれば虎牢関も墮とせる筈ですわ」

無理だつて、張遼とかシ関では撤退ありきだったし今度は董卓軍の抵抗が違うだろ。

「豪、ちゃんと最後までいるのよ」

姉ちゃんに釘を刺されました。

「おいお前が曹仁か？」

威嚇全開で赤い髪の女が話しかけてきた。

「姉ちゃんこの女の知り合い？」

「公孫賛よ。こないだの軍議の時も確かいたはずよ」

「居たっけ？でその公孫賛殿が何か御用ですか？」

「今すぐ趙雲と鳳統を桃香のところにもどせ」

言ってる本人は大真面目みただけども、劉備か御遣い辺りに頼まれたんだろつな。

「豪相手にしなくてもいいわよ。どうせ劉備辺りに泣きつかれて御遣いが曲げて伝えた話を真に受けてるだけだろうから」

朱里の策のお陰で何とか水関に先行する事ができた。
まだ弱小の俺達が軍功をあげるには敵と真つ正面から当たらずに機微を見て当たらなきゃいけないんだ。

ここで軍功もあげれば星や雛里を取り戻す事が出来るんだ。
将を金としか見てない曹仁の足元に金を叩きつけてやる。

「う、ご主人様雛里ちゃんからお手紙が来ました」

朱里が俺の天幕に息を切らせて入ってきた。

「朱里本当か？雛里は無事でいるの？」

「手紙では無事を伝えてきました。それと……」

朱里は何かをいい淀んでいた。

「朱里手紙を見せて」

そこには朱里に謝る言葉と自分が仕えるべき相手を見つけた事がしただためれていた。

「これ本当に雛里が書いたのかな？曹操軍の誰かが真似て書いたんじゃないの？そくに違いないよ」

「流石ご主人様、危なく雛里ちゃんを疑うところだったね」

桃香も同じ意見の様で同意してくれた。

「しかし私達が行っても曹仁達はそれを認めないと思います」
愛紗が疑問を呈してきた。

「大丈夫、俺に考えがある白蓮を呼んできて」

「うん白蓮ちゃんは義に厚いから私達の味方をしてくれると思うよ」
そう俺は天に選ばれた御遣いなんだ。
俺にはこの世界を正しく導く必要があるんだ。

side 豪

公孫贇殿が騒いでるのに気づいた先生と馬超殿が駆けつけて来てくれた。

「つつか陣で手を繋ぐなよ。」

「豪さんどうしたんですか？」

「おう先生、何でも御遣い達が鳳統殿と趙雲殿が曹操軍に無理やり拘留されているから解放しろだよ」

「拘留ねー。星なんか思いっきり自由にしてたよな」

馬超殿それ大正解。

「お前達いきなり来てなんだよ」

公孫贇殿が先生達を睨みつける。

「失礼、私は西涼連合の馬休と申す者。ここにいる婚約者の翠と一緒に今回の反董卓連合の代表を当主馬騰より仰せつかっております」

流石は先生、西涼の代表として牽制をしてくれた。

何か馬超殿は、流石は私の療だつて目を輝かせて見ていた。

「その馬休が何のようだ？私は今曹仁と話をしているんだ」

「私は曹仁さんと真名を交換した仲でしてゆくゆくは曹操軍と同盟を結ぶ予定なんですよ」

早い話が曹操軍と西涼と敵対する覚悟があるかつて事。

「確か公孫贛殿は趙雲殿とお知り合いでしたな。それなら本人と会つて確かめればよいでしょう。それと利用するだけの人間を友人とは呼びませんよ」

友人の領地で兵を募集したり、友人を他軍の将にけしかけたりね。

「桃香はそんな人間じゃない。訂正しろ」

「誰も劉備殿とは一言も言ってませんがね。苦情は戦が終わればいくらかでも聞きますよ」

ムキになるって事は気にはしてるんだな。

side 袁紹

これ以上華琳さんの軍を目立たせてはいけませんわ。

シ水関ではあの敵つい弟と王連という男2人に主役を奪われましたし、孫策さんの手柄は美羽の手柄になってしましますから

「オーホツホツ虎牢関の先鋒はシ水関に一番乗りをした劉備さん達
にお願ひしますわ」

こそ泥みたいな真似をして人気の落ちた劉備さん達なら活躍しても
人気はでませんからね。

side 華琳

たまには麗羽も面白い事をするじゃない。

シ水関で軍功を横取りした御遣い達と好き好んで連携するのは公
孫贇ぐらいね。

将は有能だけど兵が少ない御遣い軍。

兵はある程度いるけど将がいらない公孫贇軍。

董卓軍は洛陽を守る為に必死の抵抗をするわね。

それに豪、王連、趙雲抜きで呂布や張遼と渡りあえるのかしら？

虎牢関軍議で地味に絡まれて（後書き）

陽が外史を知ったからこれでジャック幕間を書ける？

みたい人いるかな？

感想指摘お待ちしております

虎牢関 開始前 ジャックの暗躍？（前書き）

お気に入り登録が1000件を超えました

大感謝です

虎牢関 開始前 ジャックの暗躍？

御遣い達が先鋒か。

シ水関では于吉達に動きなかったから虎牢関では注意をしておかないとな。

虎牢関の事を考えていると腕に柔らかな物が触れた。

「豪ちゃんサーチってどうやるの？」

陽が腕を絡ませながら質問をしてきた、俺も先生の事は言えないか。

「そうだな。その木にむかって手の平をむけてみる」

「じゃ？」

陽の手を上から包むようにして重ね合わせる。

「それで木に意識を集中する」

「すごい、木の名前から用途までが頭に浮かんできた」

重ねた手の平をそのままにしてはしゃぐ陽、端から見たらただのバカップルだろう。

「豪ちゃん他にはどんな風に使えるの？」

「他には…論より証拠だ。実際にやってみた方がわかりやすい」

近くにジャックがいないのを確認して動く、ジャックに教えた時は食い物を並べて辛い物・毒・正解の3択でサーチ能力を磨かせたんだ。
絶対にひいきだつて騒がれる。

「よう華雄はどうしてる？」

俺が陽を連れてやってきたのは華雄がいる天幕、まあ華雄は檻の中なんだけども。

「邪魔するぜ、ちょっとお前に聞きたい事があるんだ」

「ふんお前達に教えてやる義務はない」

(今から俺が華雄に質問するから陽はサーチをかけてみる)

「于吉つて妖術士を知っているか？」

「妖術士なんて怪しい奴は知り合いにいない」

「髪の毛の長い眼鏡をかけた優男なんだよな」

華雄の目を睨みつけながら話をしする。

「知らないつて言ったら知らないんだよ」

「そいつは黄巾党を裏で操っていたんだがな。御遣い達が邪魔して取り逃したんだよ。かなりやばい奴だから洛陽にいないんなら安心

だ。いや良かった良かった」

(陽どうだ?)

(眼鏡をかけた優男に見覚えがあるみたい。それで華雄はその男に不信感をもってるよ)

(于吉は臆病だから華雄の口から洩れるのを怖れて名前を教えなかつたんだろ)

(あの時の豪ちゃん相手なら誰でも臆病になるよ)

「それじゃ用事は済んだから行くよ、邪魔したな」
于吉は洛陽に居るみたいだ。

「ちよつ、ちよつと待て取り引きをしないか? 于吉の情報を教えてやるから董卓様を助けてあげてくれ」

「情報を教えるって事は于吉が洛陽にいるってのと言ってるようなものだぞ?」

「くつ卑怯だぞ。ならお前の部下になってやる。私は武には自信がある」

「陽に負けた女が何言ってるの! 豪ちゃんは陽の文武の師匠なんだよ。貴女は足手まといにしからならないんだから」

陽何か必死だな。

「な、なら女になってやっても」

陽が笑顔で剣を抜いてかまえる。

「豪ちゃん、陽久しぶりに豪愛の剣の切れ味確かめたくなっちゃった。あれ檻ごと斬れるかな…」

陽は剣先で華雄をさしていた。

「やめとけ。それより姉ちゃんに于吉の事を報告に行くぞ」

「そうだね。豪ちゃんにちょっかいだしたら斬ればいいんだし」

陽さん爽やかな笑顔で物騒な事を。

華琳天幕

「姉ちゃん華雄から聞き出した。于吉が洛陽にいるみたいだ」

天幕に緊張感が走る。

曹操軍の将や兵は于吉に苦汁を飲まされたからな。

「それは厄介ね。豪はどうしたらいいと思うの？」

「夜警の時は俺とジャックが交代で指揮をとる。戦中は防衛に徹するのが一番だろう。後は御遣い達の動きを観察してれば于吉がでてきたかわかると思う。于吉がいるのが分かったら俺とジャックで対応する。落ち着くまで他の将と兵は混乱しないように適度な距離を保ってくれればいい」

「豪ちゃん陽も戦うよ」

陽は必死な様子で俺の目を見つめてくる。

「そうなたら陽は姉ちゃんの護衛を頼む。それなら安心して戦えるから。なつ頼むよ」

「うーわかった。絶対に無茶しないでね」

いや無茶苦茶するぜ。

陽に矯正指導員のお仕事を見せるいい機会だからな。

「豪、お姉ちゃんが言いたい事はわかってるわよね？」

やっぱり無茶はやめようかな。

side ジャック

管理事務所

外史に戻ろうとすると、行く手を委員の独身連中がふさいできた。

「ジャックさん、先創竜様の所に豪さんの幼なじみが来てたんですよ。なんであんな可愛い娘がああのお爺ついで親父に夢中になるんですか？ やっぱりあの外史はおかしい」

いや泣くなよ。

「そうか豪さんも年貢の納め時だな。最悪でも朱霊はついて来ると

思ってたけど安心したよ」

「朱霊はって何ですか？まさか、まさか他にもあのむさ苦しく暑苦しいのを好きになっっている娘が？」

「今の所は可能性があるのは、こいつら4人だな」

俺は資料写真を手渡した。

「何で全員レベルが高い娘ばかり。有り得ないですよー」

全員がうざいぐらいに絶叫している。

女房とも話したが、豪さんには朱霊みたいに我が儘なぐらいに積極的に愛情表現できる娘が必要だったんだ。朱霊はの豪さんの懐に入り込んで笑顔でしがみついていられる女だろう。

「それよりお前ら曹操を外史から連れ出す嘆願書に協力しないか？」

「曹操って外史での豪さんの姉ですよね？」

「ああ中々の女だな豪さんを叩いてなだめすかして誉めてうまく操ってたんだよ。あれが来たら豪さんの無茶振りやハードスケジュールに付き合わされなくて済むぞ」

「命に変えても指導員全員分の嘆願書を集めてみせます」

豪さん大事な”お姉ちゃん”も外史を渡るかもしれませんよ。

虎牢関 開始前 ジャックの暗躍？（後書き）

更新速度は早いけど展開がおそい曹仁伝

感想指摘お待ちしております

虎牢関 くそれぞれの思惑く（前書き）

相変わらずの強引な展開は許して下さい

虎牢関 くそれぞれの思惑く

side ジャック

「ジャック、サーチの範囲を広げてみる。于吉のゲスな匂いが風にのってブンブンしいやがるぜ」

豪さんが舌なめずりしそうな表情で話しかけてくる。

「今の豪さんはどっからどうみても悪者ですね」

豪さんの顔は戦に望む英雄と言うより獲物を狙う賊のほづがシツクリとくる。

「うるせーよ。まっこれで今回の于吉の企みも大体の予想がついたな」

「英雄殺しによる外史の崩壊ですね」

俺と豪さんが来た外史でで企てをするなんざ、不幸な奴らだよな。

side 豪

三国志が元になっている外史で三国の英雄全てが殺されたら少しずつ外史が崩壊していく。

「多分于吉は英雄を全て倒せば、この国の王にしてやるとしか言われたんだろ。だが黒幕の狙いは崩壊だけじゃない」

「この外史が失った三国の英雄を求める力に魔術書の力を加える事で外史の統合をねらうんですね」

三国の英雄を失うと外史として成り立たなくなり、それは外史の崩壊を招く。

崩壊を防ぐ為に外史はら戦に負けて死ぬ英雄達を連れて来ようと違う外史に干渉を始める。

「同じ外史を一つにまとめると同じ人物は一つになる。しかし重なり過ぎると容量オーバーで無になっちゃう。後は黒幕に都合がいい人間だけを他の外史から連れて来て自分はその世界の神になるってとこだな」

曹操Aと曹操B統合されるぐらいなら問題は少ない。

しかしそれにCやDも加えると魂の容量オーバーに加え記憶に矛盾が生まれて自分を維持できなくなってしまう。

「そついや外史を正史にするなんて可能なんですか？」

外史から正史になるなんてのは滅多にないからジャックが知らなくて当たり前か。

「正史が存在している宇宙の中には、生命が生きていける星が結構あるからかな。力が強くなり過ぎた外史をその星に写してしまうんだよ。星ってコピー用紙に外史を印刷する感じだ」

大概の外史には設定されていない部分がある。

例えば宇宙や深海とか基になった正史でも確認されていない場所は人の認識が及んでない為に存在していない。

もし外史が発達して、そこに調査が及べば外史は己が抱えている矛盾から自己崩壊を引き起こす。

発達する事で蓄えられていたエネルギーが一気に解放され正史や関係のない外史にまでシヤレにならない影響をあたえてしまう。

だからその前に蓄えられたエネルギーでどっかの星に写してし正史とし存続させる。

「蓄えられたらエネルギーの代わりに増えてる外史をかき集める事で補うんですね」

「正史になられたら干渉権は殆どなくなるからな。しかし神様なんてそんないいもんじゃないんだけどな」

何回か管理者が不在の外史で神様代わりをした時があつたが願い事が叶うわなきや露骨に信者減るし叶えたら叶えたで得をするのは神をあまり敬っていない教祖様だったりする。

「その為に黒幕は三国志の英雄が一堂に会する反董卓連合を利用する気なんですな」

「最低でも姉ちゃんや孫策殿は守らないとな」

劉備や御遣いは守つたらその隙に背中から刺されそうだし。

「曹操と朱霊の間違いじゃないですか？朱霊はともかく豪さんがデレてる姿はきついですよ」

「うるせえよ。とりあえず先鋒の御遣い達がどれだけ頑張るか注目しよつや」

side 一刀

朱里からの提案で俺達は董卓軍と戦闘をした後に軍を分断し曹操軍になすりつける事にした。

これでいつも人を見下している曹仁の鼻をあかす事ができる。

「愛紗、董卓軍の先鋒は呂布それとも張遼？」

三国志で一番強い呂布との戦闘はできれば避けたい。

「いえご主人様あの旗印は執金吾の丁原のものです」

「確か丁原は個人の武勇を優れているが粗略な人物な筈だよ。それなら丁原の隊を俺達が壊滅させた後に呂布隊や張遼隊を他の軍に任せて俺達は虎牢関をおとすんだ」

俺達に協力をしてくれた商人から董卓は洛陽で善政をしていたって聞いた。

董卓は可憐な少女で謀略に巻き込まれたらしい。

可憐な少女を救うのは昔から英雄の役目なんだ。

俺が董卓達を救ってみせる。

side 丁原

今俺の横に立つ男子吉は反董卓連合が組まれた直後俺の所に訪ねてきた。

「男性ながら武双の武勇を誇る丁原様こそ乱れた今の世を導く英雄です。私はその手助けをさせて欲しいんです」

于吉は兵の鍛錬に自信あるとの事で任せてみると数日であの生意気な張遼や呂布の隊を模擬戦で完膚無きまでに叩きのめしてくれたんだ。

今の世の中を導くのは天の御遣いなんて坊主じゃない、この俺丁原様こそが英雄に相応しいんだ。

「むこうの先鋒はあの生意気な御遣いの坊主か。女に囲まれて自分は何もせずに英雄ぶる餓鬼にまさか俺の兵が負ける事はないだろ」

「その通りでございます。丁原様とこの于吉が組めば数刻もせず董卓連合は壊滅する事でしょう」

その時こそあの生意気な十常侍や董卓軍が俺にひれ伏すんだ。

side 于吉

私の隣で丁原が下卑た笑いをあげています。

将来はこの国の将来の王たる于吉様の側にいれる人間ではないのですが、今はくだらない夢に溺れてもらいましょう。

私には天子や天の御遣いより尊い神様がついているんですからね。あのお方も言っておられました

「力を蓄えた太平要術の書の力を正規の兵に使えば英雄達といえど恐れる事はないであろう」

王は血筋で決める世の中は終わり、私の様に神に選ばれた優れた人間こそが王となる世になるのです。

side 豪

敵の先鋒が城から出てきたのサーチをかける。

于吉の野郎まだ人形遊びに飽きてないらしいな。

「姉ちゃん于吉の野郎が戦場でお人形遊びをおっぱじめる気だ。先鋒が崩れて混乱する前に俺が叩き潰しに行く。ジャックお前は護衛を頼む」

「豪やめときなさい。御遣い達に背中から刺されかねないわよ」

姉ちゃんも俺と同じ意見なんだ。

「豪様それなら私を背負って下しやい。まだ私を味方と信じている劉備軍への牽制になる筈です」

雛里はかなり本気な目つきだ。

「鳳統許可するわ。豪わかっているわよね。貴方や鳳統が怪我をしたらお説教と陽と二人で会つのをしばらく禁止にするからね」

「ちよっ姉ちゃん理不尽すぎっ」

「いいから行きなさい。鳳統貴女は戦況を見て狼煙で合図をだしなさい。私達はそれにあわせて動くから」

「わかったよ。おぶって行けばいいんだろ。雛里荷車から物取ってくるからちよつと待ってる」

俺が持ってきたのはおんぶ用の紐と愛用の黒の皮製のコート。

ある外史で倒したミノタウロスの皮を使用している物だ。

矢も槍も通す事はないから雛里が怪我をする事はないだろう。

それじゃ、ちびっ子軍師を背負って于吉の野郎とケン力をおっぴじめるとするか。

虎牢関 くそれぞれの思惑く（後書き）

次回おんぶ武双に注目？

お気に入り1000件突破でやってみたい事

オリキャラ人気投票

トータル10票とかになりそうで不安

幕間

ジャックと豪の出会い＋ジャックと嫁さんの話

豪の華麗なる独身生活＋ハーレム化豪へのアメルお姉ちゃんのお説教

皆様の反応をみてやりたいです

感想指摘お待ちしております

おんぶ武双 〱軍師と糺す者〱（前書き）

おんぶ武双の開始です。

おんぶ武双　く軍師と糺す者く

戦場を男が駆けて行く。

黒い皮のコートを着込み巨大な斧を携えたその姿はホラー映画の登場人物にしても遜色のない迫力を持っていた。

もっともその強面な風貌と分厚い髭のせいで主人公側ではなく恐怖の対象としての方がしっくりとくるであろう。

しかしその姿を見かけた全ての人間は同じ違和感に捕らえられるに違いない。

彼の強面な顔の脇から可憐で可愛らしい少女が顔を覗かせていたからだ。

少女はお気に入りの帽子をしっかりと被り目の前に広がる戦場をしっかりと見続けていた。

side 関羽

「愛紗まずいのだ。この兵隊さん達強いのだ。まるであの時の黄巾
党みたいなのだ」
「まずい、鈴々も押されている。」

「何なんだこの者共は。力が異常に強いし斬られても突き進んで来
る」

「みんな何も喋らないで気持ち悪いだ」

丁原の兵達は無言で攻めこんで来る。

「ちつ。仕方ない本隊まで撤退してあの策を開始する」

side 桃香

丁原さんと戦いに行った愛紗ちゃん達がボロボロになって帰ってきた。

「ご主人様、桃香様申し訳ありません。朱里策の指示を頼む」

「わ、わかりました。各隊防護に撤しながら敵を誘導して下さい」

丁原さん達が攻めてくるのが見える。

丁原さんの兵隊さんはみんな目が虚ろで表情も変わらない。

(怖い、ご主人様助けて)

ご主人様の姿を探すと愛紗ちゃんに付き添われて既に撤退をしちゃってた。

「桃香お姉ちゃん早く逃げるのだ。敵さんが攻めてきてるのだ」

鈴々ちゃんの切迫した声に反して私の体は恐怖で動いてくれない。兵隊さんが剣を私にむかって振り下ろすのが見えた。

でも恐怖から私は目を閉じて体を強ばらせる事しかできなかった。

(私死んじゃうんだ)

でもいくらたつても痛みを感じる事はなく代わりに懐かしい声が私の耳に届いた。

「桃香様大丈夫ですか？ここは私と豪様が引き受けますから早く逃げてください。鈴々ちゃん桃香様をお願いします」

そこいたのは曹仁さんに背負われた雛里ちゃんだ。

「ったくあの坊主自分の女を置いて逃げたな」

曹仁さんは愚痴りながらも次々と丁原さんの兵を倒していく。

「さあ桃香お姉ちゃん早く逃げるのだ。悔しいけど鈴々達は足手まといにしなければならないのだ」

鈴々ちゃんが私の手を引つ張る。

でも私には聞きたい事があるんだよ。

「雛里ちゃんは怖くないの？なんでそんなに落ち着いているの？」

私達と一緒にいた頃の雛里ちゃんは恥ずかしがり屋さんで臆病な娘だったんだよ。

その雛里ちゃんが曹仁さんの背中で冷静に戦況を見ている。

「豪様右手の兵が態勢を建て直しています」

「ほいきたつ。お前達ろくに鍛錬をしてないな、いくら力を強くされてもそれじゃ意味ないんだよ」

曹仁さんが斧を振る度に丁原さんの兵が切り裂かれていく。

体真つ二つにされた兵隊さんが動く事はなかった。

「桃香様早く下がって下さい。このままじゃ豪様が本気をだせませ
ん」

雛里ちゃんの言葉はいつも通り丁寧だったけどピシヤリと追い払う
様な厳しさがある。

「雛里ちゃんは怖くないの？なんでそんなに強くなれたの？」

雛里ちゃんは一瞬私を見て優しく微笑んだ後にこう言ったんだ。

「私は今どんな若よりもどんな大軍より安心できる背中に居ますか
ら」

side 雛里

黄巾党の時に感じたのは恐怖。

陳留の手合わせの時に感じたのは驚愕。

そして今感じているのは安堵。

だから普段なら怖くてたまらない武官の男の人と相対しても平気で
した。

「女背負いながら戦うとはいいい度胸してるじゃねえか。于吉の野郎
嘘つきやがって。俺の名は丁原、偉い執金吾様だぜ」

豪様と同じく荒い口調の男の人が話しかけてきたんです。
でも感じるの豪様とは間逆の嫌悪感。

「てめえの部下を使い捨てにした野郎が威張ってんじゃねえよ。俺の名は曹仁、偉い執金吾様を糺す男だ」

豪様の言葉を聞いた丁原さんの顔が濁りました。

「部下を使い捨てだと？ふざけた事をぬかすな」

「豪様使い捨てとは？」

「于吉の使った妖術は無理矢理に力を強くする術なんだ。短期間ならいいが何日もかけられると負担がかかりすぎて筋肉がぶち切れて死んじまうんだよ」

豪様の顔は怒りと哀しみで憂いをおびて来ました。

「なっ、嘘をつくんじゃねえ。于吉なんか言ってるやれ」

「本当に貴男は私の邪魔ばかりしてくれる。もう少しこの愚物を利用したかたんですけどね」

どこから出てきたのか于吉が丁原さんの隣に立っていました。

「于吉お前騙したな」

「騙した？人聞きの悪い。いい夢を見せてあげたじゃありませんか。でも丁原、喜んで下さい。貴男の名前は歴史に永遠に残るんですよ。偉大な王于吉の為に犠牲となった忠臣としてね」

于吉が不思議な言葉を呟くと丁原さんが苦しみ始めたんです。

「于吉やめろおー。ヤメテクレ、ヤメ……」

そこにいたの恐らく既に丁原さんで無くなった者、感情も理性も失ったまるで獣です。

「さあ化け物同士殺し合って下さい」

于吉は豪様も丁原さんも見下している様でした。

「丁原よ、お前をぶっ倒して執金吾として最後を迎えさせてやる」

豪様が斧を一閃すると同時に丁原さんが崩れ落ち、豪様の顔から憂いが消えて慈愛に満ちた顔になりました。

「馬鹿な執金吾とそれを信じた兵達よ。次の世では酒でも酌み交わしてくれ」

豪様は英雄にはなれないと思っんです。

英雄には時として民を導く偽善と自分を信じ抜ける自惚れと敵対した者を容赦なく倒せる無慈悲さを必要とします。

でも豪様は偽善より自分の醜悪さを隠せない正直さを持ち、自惚れよりも自虐を好み、何より自分を憎んだ相手にも限りない優しさを持っんです。

私はこの人の器に己の才を注ぐより、優しすぎて本当は繊細で傷つきやすいこの人を私の策で守る事を決めました。

side 豪

「于吉よ、お前はこの世界の規則を破りすぎた。もう終わろうぜ」

「何を知った風に私は神に選ばれた人間ですよ。洛陽にいる天子よりも偉いんです」

「お前は選ばれたんじゃない、利用されたんだよ。俺がお前を糺して術者が評価される世界に送ってやる」

この外史じゃ妖術はキワモノ扱いだ。

なまじ術者として才があつた于吉にしたら悔しかつただろう。

俺は物言わぬ骸となつた于吉の目をそつと閉じてやる。

「雛里、姉ちゃん達の所にいったん帰るぞ」

背中に感じる温もりが俺の冷えた虚しさを温めてくれていた。

おんぶ武双 〱軍師と糺す者〱（後書き）

前回のおふざけ感を台無しにした感じが

感想指摘お待ちしております

曹操軍対御遣い軍？（前書き）

戦闘描写より駆け引きやら会話が長引く

曹操軍対御遣い軍？

side ジャック

鬼だ、鬼が俺の前にいる。

御遣い達が丁原から逃げ出して来るのが遠目で確認ができた。

鳳統の合図で確信をもった曹操は孫と馬に伝令をだした後に鶴翼の陣を展開して待ち構えている、そう敵じゃなく御遣い達を。

俺は御遣いの行動を責める気はない、ヤバくなったら即逃げるこれは将として当たり前の事。

半端に未練や情けを戦場に持ち込んで全軍壊滅させる方が愚者なんだからな。

曹操もそれを知った上で御遣い達に鉄槌を下すつもりなんだろう。鶴の頭では御遣い達を覇気を全開に溢れさせた鬼が笑顔で鎌を構えて待ち構えている。

side 華琳

曹仁は確かに強い。武に優れたどんな女性武官の相手も鼻歌交じりで鍛錬にしまっ程。

だけでも私の可愛い弟の豪は優しすぎる子。前線に好んで立つのは仲間を傷つけさせない為、本当は人を傷つけるのも嫌う優しい子は前線から帰る度に人知れず深い憂いをみせる。それをあの御遣いは豪一人に押し付けて前線から逃げ帰ってきていた。

あの子に戦いを命じて良いのは、その深い憂いを知り受け止めれる

者だけ。

陽が豪の前で必要以上に明るく振る舞うのも
調が丹念に探索を行うのも

風が武に必要以上に磨きをかけているのも
豪の憂いを知っているからだ。

「桂花、準備はいいかしら？」

「はい華琳様、必ずや御遣い達を前線に舞い戻らせてみせます」
御遣い覚悟しなさい。

そんなに手柄をたてたいなら無理矢理にでも手柄をたてさせてあげるから。

side 荀イク

御遣い達は私達と遭遇して驚いているようだ。

後方に控えている筈の私達に遭遇したからだろうか、それとも敵を
なすりつけようとした相手に突然会ったからだろうか。

「流石は種馬ね。逃げっぷりだけはご立派だ事、でもここから先は
曹操軍の陣、戦場は反対よ」

「いや俺達は丁原隊から命がけて逃げて来たんだよ」

貴男が命がけ？。

随分と笑わせてくれる、その言葉が曹操軍ではどれだけ失笑を買う
物なのかもわからないのね。

「命がけ？私が見たのは命がけて戦った曹仁様に全部押し付けて命

からがら逃げ延びてきた種馬だけよ」

こいつらは途中で戦況を確認しときながら救援に一人も向かわなかつたのよ。

「あれは曹仁が勝手にやったんだよ。曹操軍は手柄をたてれたからいいじゃないか！」

私は男が嫌いだ、けども実力のある者はきちんと評価をする。

「あの1隊を殲滅しただけで華琳様や曹仁様が喜ぶと思ってるの？戦場で手柄にしか価値を見いだせないなんて哀れな男ね」

「先から無礼だぞ。ご主人様は天の御遣いであらせれるんだ。口を慎め」

華琳様の元お気に入りが騒ぎだした。

「天の御遣い？光輝くだけで何の役にも立たない着物を着てるだけでしょ？着物も中身も役立たずな男を誰が敬う事できて？」

「ふんっ、曹操軍には不思議な着物なぞないから悔しいだけではないのか」

「不思議な着物？あるわよ貴女の目の前に。私が今着ている服は虫や蛇を嫌う私の為に曹仁様がくださった物よ。しっかりと虫を遠ざけてくれる優れ物なんだから」

半信半疑だったけど篝火の側を通っても蚊の一匹も寄りつかなかった。

「曹仁は物で女の歡心を買つのが得意なんだろ。星や雛里もそれで勧誘したんじゃないか？まっあの顔じゃ物に頼るしかないだろうけど」

御遣いは悔し紛れの反論をしたみたいけど、その言葉がどれだけ曹操軍の怒りをかうかわかっていないらしい。

曹操軍の将や兵は一斉に武具を構えて臨戦態勢をとった。

side 華琳

「北郷、誉めてあげるわよ。私の目の前で可愛い弟を愚弄したその度胸をね」

私は鎌を構えたまま御遣いに近づいて行く。

「曹操様、ここで揉め事を起こすと軍規違反になりますますがよろしいのですか？」

私に反論してきたのは軍師の孔明ね。

「それならさつさと前線に戻りなさい。まだ戦える余力は十分な筈よ。まさか先鋒があれで終わりな訳ないわよね」

「もう俺達じゃなくてもいいだろ？曹仁一人に攻めさせたらいいだろ」

「豪は私の弟で部下。貴男に指示をだす権限なんてないわよ。それに連合で一人が手柄を独占して良い訳ないじゃない」

各諸侯はそれぞれ思惑があつて反董卓連合に参加しているんだから。

side 豪

丁原と于吉を糺し終えて陣に戻ると、姉ちゃんが御遣い軍に強烈なダメ出しをしていた。

気まずいので回り込んで後ろから合流した後、俺は雛里を背中からおろしてジャックの側に近づく。

「ジャック今戻った。姉ちゃん随分とヒートアップしているな」

触らぬ姉ちゃんに説教なし、落ち着いてから報告に行こう。

「御遣い達が先鋒から撤退した言い訳を連発してさらに激興してますよ。で豪さん何かわかりましたか？」

「于吉は神様とやらに会つたらしい。魔術書は持ってなかったが、違う外史の匂いが僅かだけどあつたよ」

「随分と気の早い自称神様で。神様この後はどっかの諸侯に加担して英雄殺しを続けますかね？」

「多分な。狙うなら袁紹、袁術、御遣い、公孫贄当たりだろうな」

ジャックと話し込んでいたら、俺の敬愛してやまないお姉様から一喝された。

「豪、帰って来たらきちんと報告する様にお姉ちゃん教えてあるわよね」

「ごめんなさい、今行きます」

全速力で姉ちゃんの前に着くと意外な一言を言われた。

「豪、貴男は後方待機になるわよ」

反論を許さぬ迫力で姉ちゃんが宣言をした。

曹操軍対御遣い軍？（後書き）

豪抜きの真意は？

とか次回予告風にしてみました。

指摘感想お待ちしております

日韓戦勝利記念？ 豪の虎牢関攻略方法（前書き）

作者は昨日会社の人と焼き肉屋で見ました

日韓戦勝利記念？ 豪の虎牢関攻略方法

side 豪

「なんで俺が待機なんだよ？」

「豪がいたら敵が警戒して虎牢関からでてこないでしょ？それに貴男も曹家の長男なんだから本陣に居る事にも慣れなさい」

いや、ここ以外では充分経験してるんだけど。

「でも虎牢関に呂布もいるんだぜ？」

「他の将が余す様なら豪にでもらうわよ。貴男がどれだけ心配をかけていたか身を持って知りなさい」

「姉ちゃんでも」

「でもも、何も無いわよ。大人しくどっしりと構えてなさい」

姉ちゃんは俺が李典に作らせた折り畳み式の椅子に腰を掛ける様に促す。

「戦場で大人しくしてるのは苦手なんだよな」

「豪は戦場でなくても昔から大人しくしていた事がないでしょ？少しは落ち着きなさい」

三十路越えてる男が十代の少女に落ち着け言われてしまった。

「でも姉ちゃん、董卓軍は多分動かないぜ？俺が揺さぶりかけた方が得策だよ」

虎牢関みたいな強力な砦があるなら籠もって相手の糧食切れを待つのが一番だし、土地勘を活かした夜襲も効果的だろう。

「それはまだ早いわね。今日のところは御遣い達に徒労に終わらせるだけにしとおきましょう」

動きのない戦場は神経的にかなりまいるんだよな。

「姉ちゃんは夜襲が来ると思う？」

こつちからの夜襲は確実にバレるが、向こうは間道を利用して火矢を放つだけで十分な効果を得る事ができる。

「多分来るわね。狙うとしたら先鋒で疲れている御遣い達か警戒を全くしていない麗羽の所かしら」

袁紹とか夜襲を受けたら一人で混乱しそうだもんな。

「狙いは深夜より明け方の少し前だろうな」

深夜に松明をかかげていたら目立つし夜明け間近に気が緩むからだ。

「そだね他に何か防衛策はあるかしら？」

「一番は火矢が来た時の水を確保する事これはいつも通り俺が水を掘り当てるから大丈夫だ。後は食事時間もずらす事人は満腹になる

と警戒心がどうしても緩むからな。飯は俺が少し現地調達しようか
猪や鹿の肉、岩塩とかも補給したい。

「ごう、お姉ちゃん大人しくしなさいって言ったわよね」

これは速攻却下される。

一応各隊に防火対策は伝えたが

袁紹には

「名家たる袁家にはそんなせせこましい策は必要ないですわ」

御遣い達には

「天の加護がある我等を火も避けるから心配ない」

って断られた。

袁紹は姉ちゃんに、御遣い達は俺に対して意地を張ったんだろう。でも一週間近い夜襲により両軍ともキツチリ糧食を燃やされたらしい。

自業自得なんだが、糧食がヤバくなり焦った袁紹がわめく。

「美しい私が盟主をしているのに、あんな砦を落とすのに一週間もかかるなんてありえませんか。」

命令です明日は確実におとしなさい」

いや普通あんだだけの砦おとすんなら普通は数ヶ月はかかるんだけど、いくら糧食を燃やされたにしても、ピクニックじゃないんだから、きちんと計画をたてとけよ。

「先鋒は特別に曹操さんにお任せしますわ。ご自慢の弟さんの武を披露する場面を作って差し上げたんだから感謝して下さい」

個人指名をする訳ね、今度はどうやって扉を開けよ。

「豪ちゃん、何か手立てはあるの?」

陽が心配して聞いてきた。

「手っ取り早く氣を全身にまとわせて扉ぶん殴るよ」

そう言い終えた瞬間に俺の目から星が飛び出す、姉ちゃんの鎌の柄が俺の頭にクリーンヒットしたのだ。

「本当にこの子は、もう少しましな考えはできないのかしら?」

溜め息全開で呆れているお姉様。

いや魔法使うのが安全で手っ取り早いんだけど、黒幕に俺が違う世界の人間だつてばれるし。

どうしようか考えていると、許緒の鉄球が目に入った。

真名は許されてないけど許緒の真名は季衣だよな。

「そつだ許緒お前の鉄球をもらつてもいいか? 帰つたらもつとすげえのをつけてやるから」

「いいですけど曹仁様何をするんですか?」

俺は鉄球を鎖から切り離して足元に置く。

「ジャック、いいセンタリングをあげるよ」

「まったく豪さんもう影響されたんですか」
おうよ。

昨日は喜びのあまり、撮りためておいた試合を全部みたからな。
季衣から季を連想したんだよ。

「あれは1月の試合ですよ」

そう言いながらもジャケットは長 ばりのセンターリングをあげてくれる。

鉄球をサッカーボールに見立てた俺は虎牢関にむかってボレーシュートを決めた。

鉄球は見事に虎牢関の扉を砕く。

「よっしゃあ！ゴールこのまま一気に責めおとすぜ」

side 張遼

「張遼將軍た、大変です。曹仁が蹴った鉄球で扉が砕かれました」

普通鉄球を蹴り飛ばされるか？

全くとんでもない化け物が相手になったもんやな。

「恋きついと思うが曹仁の相手は頼んだで」

「駄目なのです。いくら恋殿でもあんな化け物にかなう訳ないです。
ねねと逃げましょう」

恋至上主義のねねでもそう思うんやな。

「ねね大丈夫。恋も昔から化け物言われてきた」

恋にしてみれば初めて本気をだせる相手を見つけたんやな。

「よっしゃあ。彼奴らに目に物見せてやるで」

日韓戦勝利記念？ 豪の虎牢関攻略方法（後書き）

今日しか投稿できない話となりました。

指摘感想お待ちしております

虎牢関決戦 豪対呂布（前書き）

特に盛り上がらないかも

よつやく反董卓連合の終わりが見えてきた？

虎牢関決戦 豪対呂布

side 凧

豪様が呂布と戦われている、私は後方でそれを見守っていた。呂布は豪様の鋭い攻撃を受け止めた後すぐに反撃を繰り出す。

先から幾度となく繰り返されている武の達人同士の無言のやり取り。

「なんや雄獅子の兄ちゃん呂布にえらい苦労しとるな
真桜がそう話しかけてきた。」

「豪様が今使っている斧は、本来多数を相手にする為の物だから1対1では不利になる。それに豪様は先程から氣を一切使われていない」

「なんやて。なんでそんな事をしとるんや」

「多分、氣を使えない呂布を真正面から正々堂々と受け止めるつもりなんだろう」

「何でまたそんな事を？まさか雄獅子の兄ちゃん呂布に同情してるんか」

「あのお方の性格からして多分そうだろう。呂布は今まで色んな意味で特別扱いをされていただろうからな」

「それで凧は焼きもちを妬いてるんか。可愛いのおー」

「ま、真桜どうすればそんな風に思えるんだ？」

「風の顔にしっかりと書いてあるで。私も豪様と武で語り合いたいし、特別扱いをして欲しいってな」

そう指摘されると、自分の顔が赤く熱くなっていくのがわかった。

side 呂布

曹仁との戦いは面白い。

今まで誰も受け止められなかった恋の攻撃をちゃんと受け止めてくれる。

振り下ろされた斧は直ぐ戻ってきて、すくい上げる様に斬りつけてくる。

きっと曹仁は恋を特別扱いしないし、怖がりたりしない。恋が本気で繰り出した一撃も簡単にかわされた。

もっと曹仁と戦いたい、恋をきちんと受け止めて欲しい。

side 豪

何だろ、この娘は。

呂布はどうみても十代なんだぜ。

しかも型をもっていない所を見ると、誰かに武を教えてもらったんじゃないく生まれつきの強さだ。

俺は死ぬ思いで色んな外史を巡って鍛えたのに呂布だからって、この強さは反則だろ。

「恋、曹仁の変な技も見てみたい」

変な技って、丁原達と戦った時に氣をまとっていたのを見たんだろ

うか。

「変な技って氣の事か？」

呂布が幼い子供の様に頷いた、周りとの関係で人間性は成長して行く。

小さい頃から強かった呂布の人間性は周りから距離を置かれた為に小さい頃からあまり成長していないんだろう。

「氣を使ったら、楽しむ間もなく終わっちゃうぞ。それでもいいのか？」

「恋、曹仁の本氣見てみたい」

そこまで言われたら本氣までいなくても見せてやるか。

斧を地面に突き刺して、息を深く吸う。

丹田で氣を練り上げ、息を吐き出すのと同時に全身に巡らせる。

使う武器も変えた、氣と相性が良い姉ちゃんとお揃いの竜の牙を磨き上げた短剣を取り出した。

「準備は、バッチリだ。いつでもかかってこい」

side 恋

凄い、曹仁は凄い。

深呼吸しただけで、先までの曹仁とは全然違う。

恋の本氣の一撃も小さい剣で簡単に受け取れた。

「ほらよっ」

曹仁が軽く力を入れただけなのに恋は飛ばされてしまった。

次からはどれだけ素早く攻撃しても掠りもしない。

恋も曹仁みたいになりたい、曹仁みたくもつと強くなりたい。

「さてと、それじゃ終わるぜ」

曹仁が消えたと思ったたら恋の首に手刀が落とされて恋はそのまま寝ちゃった。

side 張遼

曹仁も、うちの相手をしている朱霊も曹操軍の将は化け物ばかりやな。

「朱霊なかなかやるやないか」

「戦場で無駄口を叩くとは随分と余裕ですね」

しかし、この朱霊って女は冷静というか感情が薄いというか、相手のしがいが無い奴やな。

「ならうちの無駄口を黙らせてみい」

朱霊は無言のまま斬りつけて来たけども

(なんや、この剣は？受け止めたうちの飛竜堰月刀が刃こぼれしてるやないか)

そのまま、朱霊は無言で斬りつけてくる。

本気でうちを黙らせるつもりやな。

朱霊の猛攻が止まった。

その視線の先には恋と曹仁が戦っておった。

(ほー、あの恋が男相手あんな嬉しそうな顔をして…)

次の瞬間うちはもの凄い迫力に気圧された。

そこにいたのは先まで朱霊とはまるで別人。

あれはまるで修羅や。

「駄目、あんな表情で豪ちゃんを見つめる女は危険なの。これ以上、陽と豪ちゃんの大切な甘い時間を減らさないんだからね」

危険な笑顔のまま、朱霊がうちの方を振り向く。

「董卓軍の女性将は全て陽が倒す。豪ちゃんは陽のものなんだから言ってる意味はわからないが、先とは比べものにならない攻撃をうちを襲う。」

「ちよつ待ちいな。うち無関係やん」

「問答無用。危険な女は先に排除して豪ちゃんに近づけさせないんだから」

あかん、あれには勝てる気がせえへん。

「陽やめなさい。貴女が張遼ね、私の名は曹孟徳。貴女の部下を見逃してあげるから仲間になりなさい」

うちは速攻了解した。

曹操軍に入ったんやけど、絶対に曹仁には必要以上に近づかない

様にせなあかん。

side 豪

将を失った董卓軍を馬超殿率いる西涼連合の騎馬隊により壊滅。それと連携して孫策殿達が虎牢関を陥落させた。

俺らが陥落させる事もできたけど政治的な配慮ってやつ。

手柄を独占するより友好的な諸侯との関係を考慮しての事。

虎牢関決戦 豪対呂布（後書き）

感想指摘お待ちしております

やっぱり悪者顔？（前書き）

やっぱり豪は悪い感じの時間が書きやすい

やっぱり悪者顔？

side 豪

「邪魔するぜ。知恵を借りに来た」

俺が訪れたのは軍師達が控える天幕。

「兄貴、珍しいな。知恵なら俺個人に相談してもいいのによ」

「わ、私でもいいですよ」

「調に雛里ありがとな。でもこれは曹操軍全体に関わる問題だからここに来たんだよ。姉ちゃんにはきちんと形にしてから報告するつもりだ」

「相変わらず軍師を無視して動くわね。特別に知恵を貸してあげるから早く言いなさいよ」

「苟イクすまないな。呂布と華雄の登用を張遼に相談したら条件を了承すれば大丈夫だろうって話だ。呂布は飼ってる動物と陳宮の保護が条件」

「それなら大丈夫ですよ。呂布ちゃんが敵にまわるより動物さんを飼った方がお得です」

「程イク俺も同意見だ。陳宮は才はあるが、まだ幼いからここにいる連中で教育をして次世代の軍師に育てて欲しい」

「それだと問題なのは華雄さんの条件ですか？」
すぐさま雛里が反応してくれた。

「ああ、華雄は董卓と賈馱の保護らしい。この2人を下手に扱えば元董卓軍は離反の危険性もでてくる」

流石は曹操軍の頭脳だな、この問題の厄介さを理解してくれたみたいだ。

「兄貴、董卓はあまり表にでなかったらしいけど保護するにしても確認はできるのか？」

「同じ西涼の先生と馬超殿が協力してくれるからそれは大丈夫だ。だけど西涼には帰れないらしいな」

「董卓さんの人柄を知っていても、今や悪逆の代名詞になってしまいましたからねー。親御さんとはとかく周りが了承しないでしょうね」

「なら貴男が先生に頼んで手伝いでもさせなさいよ」

「一応、打診はしたけど馬超殿が猛反対したんだよ。それに西涼連合にヒビがはいりかねない」

馬騰殿の治療もあるからしばらくは、先生と馬超殿は遠距離になるから気が気じゃないらしい。

「誰かの侍女をしてもらうのは、どうでしょうか？」

「最悪はそれだけど誰の侍女にするかが問題だよ」

立場からして一般の侍女と同じ扱いはできない。

でも姉ちゃんの侍女にしたら春さんや荀イクの目の敵にされそうだし、俺の侍女になってビビられなが仕事をされてもきついし、確実に陽達が反対する。

「董卓は置いとくして一番厄介なのは賈馱なんだよ。うちは一流の軍師が揃っているから今更だし外交や内政の手腕をみても、うちとは相容れない」

「賈馱は何はともあれ董卓が大切らしいな。董卓が嫌う政治には非協力かもな」

「甘言で北郷さんに内通する可能性もありますしね」

雛里は完璧にうちの人間になったみたいだな。

「城の中より街に住ませた方がいいかもしれないわね。私達に協力的な住民に監視をしてもらえますし」

「店でもやらせるか」

確か馬騰殿の病の時は、あれを食べた筈だ。

「おっ、兄貴何か思いついたみたいだな」

「ああ、ここにくりや色んな知恵がでてくるからな。後は姉ちゃんに了承を得られるかだ」

これなら今進めている計画も役に立つ。

side 華琳

「うん、その方向で進めていいわよ」

豪が洛陽を陥落させた後の計画を持ってきた。

「それじゃ俺はジャックと先生で洛陽に行ってくる。洛陽の街は何度も行ってるし、先生がいれば董卓も警戒しないと思う」

「それなら、しばらくしてから春蘭・陽・凧に隊を率いて張遼と一緒に陳宮と呂布の動物の確保をさせるわね」

俺とジャックがいれば敵の隊に会っても平気だし、街中でなら近接戦に強いあの4人がいいだろう。

「頼んだよ。俺達は直ぐに出発する」

董卓達や呂布の動物を保護する為には時間は僅かでも惜しい。

〔洛陽の街中〕

side ジャック

洛陽の街は閑散として殆ど人がなかった。

逃げられる民は他の街へ逃げて、残った民は家にこもってんだろう。

董卓を探す為に洛陽にかけたサーチには、恐怖と怨恨が入り混じった視線をとらえていた。

まあ恐怖の視線の殆どは豪さんに集中していたんだけど。

豪さんを恐怖の視線で見ている民の気持ちは痛い程わかる、俺と豪さんが最初に会った時も似たような状況だったからだ。ちなみに豪さんは斧を担いで行こうとした為に曹操のお説教が決定している。

ただでさえ見た目が怖い侵略者が、でかい斧を担いできたら嫌がらせにしかない。

「月ちゃん達と、うまく会えるといいですね」

こんな時は、御遣いの主人公補正が羨ましい。

広い街で脱出する人間と攻め込んだ人間が偶然出会えるなんて、どんな確率かわかってるのか？

それに豪さんは、どっから、どう見ても火事場泥棒に來た賊にしか見えない。

ちなみに偶然出くわした洛陽の民は豪さんを見て腰を抜かした。

「ジャック、南西にそれらしい反応がある。急ぐぞ」

董卓達を十侍長が見逃すとは思えない。

捕縛して袁紹辺りに突き出して自分の身の安全を保証してもらおうと企てる可能性が高いだろう。

だから豪さんが焦る気持ちはわかるが…

「豪さんが先行したら、董卓が逃げるのわからないんですか？いい加減に自分の見た目の恐さを自覚して下さい」

豪さん貴男の見た目に慣れるのは、時間があるんですよ。

side 董卓

「詠ちゃん、私が連合に投降して洛陽のみんなの安全をお願いするよ」

「月、馬鹿言わないで。霞達の命懸けの戦いを無駄にしちゃ駄目。みんなお願い」

私は詠ちゃんの言葉で、動いた衛兵さん達に馬車に押し込められてしまいました。
私は無力だ、

結局みんなを不幸にただけだ。
そんな中おめおめと洛陽を逃げ出そうとしている。

落ち込んでいたら突然、馬車が止まって詠ちゃんの叫び声が聞こえてきました。

side 賈馱

私達を乗せていた馬車が、突然現れた兵に囲まれた、あれは確か十侍長の兵。

兵の中から1人の男が進み出てくる。

「あなたは張讓。くっ月は私が守るんだから」

「もう連合はそこまで来ているんですよ。逃げるのは無理、だから私の役にたってもらいますよ」

張讓の方が兵は多いし私は武に自信がない。

(月ごめん。結局守る事が出来なかったよ)

「ごめんよ、ちょっと通してくれや。…通せって言ってるんだろ」

野太い男の声が響いたかと思うと、十侍長の兵が次々と宙に舞っていく。

「ぐつ、貴様は誰だ。私を張讓と知っての狼藉か？」

「今から死ぬ奴に名乗る義理はねえよ」

突然現れた敵ついヒゲの男が、笑みを浮かべながら答えた。

「豪さん、それ患者の言葉ですよ」

次に現れたのは銀色の髪をした鋭い目つきの男。

「詠ちゃんお久しぶりです。月ちゃんは無事ですか？」

「ば、馬休様、何故ここに」

次に私の前に現れたのは、行方不明になっている筈の西涼の馬休様だった。

「先生そつちは任せますよ。豪さんは馬車にあまり近づかないてくださいね」

「わかつてるよ。さて可哀想だけど姿を見られたからには1人残さ

ず逝ってもらおうからな」

恐怖で体が動かなくなる。

あれは味方なの？悪者なの？

「まったく豪さんそれだから誤解されるんですよ。詠ちゃん大丈夫だよ。見た目と言動は怖いけど優しい人だから」

「くおら。兵が戦にでない何してんだ？俺がきつちりと仲間の元におくってやるよ」

あれが優しい？

「豪さん、私の言葉が無駄になるじゃないですか」

あつと言う間に馬休様の知り合いの2人だけで張譲と、その兵は倒された。

私達の兵は恐怖から微動だにしない。

あの化け物に比べたら張譲達の方がましだったんじゃないの！！

やっぱり悪者顔？（後書き）

豪が悪ぶる時と陽の暴走時が一番書きやすいんですよ。
指摘感想お待ちしております

不器用者の勧誘（前書き）

お盆休み？ 作者は今日も明日もお仕事です。

仕事の人もお盆休みの人も、良かったら駄文曹仁伝を見て下さい。

不器用者の勧誘

side 豪

俺は今とても困っている。

このまま洛陽にいたら不味いんだけども。

「ち、近づかないで。馬休様は、ともかく残り2人は信用できないわ」

賈馱殿が俺達を絶賛拒否中なんだよ。

「ほらー、豪さんがビビらせるから」

ジャック俺が原因なのか？

頭を悩ませ、危険を冒して助けに来た俺が悪者なのか？

この微妙な空気を破壊したのは

「ごーうちゃん見つけ！豪ちゃん豪ちゃん、陽がちゃんと陳宮ちゃんと動物さんを保護したんだよ」

俺が関係すると周りの空気を一切読まない幼なじみの陽が抱きついてくる。

「よ、陽、いきなり走り出してどうしたんだ」

春さんが、息も絶え絶えと行った感じで追いついて来た。

多分、陽がサーチを使って俺を発見して暴走したんだろう。

「春さんご苦労様です。春さんがいるなら張遼殿もいますか？」

「よ、陽の暴走の原因はやっぱり豪お前なのか。張遼は凧と一緒にこっちに来る」

体力バカの春さんが、こんなにへばるなんて、陽はどんな走りをしたんだろう。

当の本人は、そんな事は一切お構いなしに俺にまわりついている。そんな陽を賈馱殿は信じれない様で啞然となっている。

「豪様、ご無事で何よりです。陳宮殿と動物達は隊の者に合流地点へと送らせました」

他の諸侯にバレない為に姉ちゃん達は洛陽の近くに待機している。

「流石は凧だ。将がいなきや俺らの軍とは疑われないからな。陳留に戻ったら新しい防具をやるよ」

「いえ当たり前の事をしただけですから。でも豪様の贈り物はう、嬉しいです」

「しっかし曹仁がこんなにモテるなんて、他の軍の奴は信じないやろな」

「張遼殿お待ちしておりました、何とか賈馱殿を説得して下さい。それと俺はモテませんから」

「どの口がそんな事を言うねん。よっ詠無事そうで何よりや」

「霞、生きてたの？それじゃその化け物は？」

陽は俺が女に誉めれたら怒る癖に、化け物扱いはスルーするんだ。

「あー詠そんな言ったらどうなっても知らんで。このごついのが曹家の曹仁や。曹操軍はうちらを引き入れてくれるそうや」

「その男は、月に手をださない？」

張遼殿が反応するより先に

「豪ちゃんを御遣いと一緒にしなないで。これ以上側室候補はいらないの」

「そうです。豪様は鈍いぐらいに硬派な人なんですよ」

陽と凧が反論してくれる。

「誤解している様だが俺はお前にも董卓にも興味はない。将として才がある張遼殿・呂布殿・華雄殿の要望があるから保護をするんだよ」

「わ、私や月には才がないっていうの？」

「才があってもお前達みたいに甘ちゃんな理想主義者は曹操軍では必要としない。反論は時間がねえから後で聞いてやる。選択肢は死ぬか俺達についてくるか2つだ。まっ同じ理想主義者の御遣いの所に行く方法もあるがな」

「御遣いの所に行ったら確実にお手つきになるけどな。豪さんは女

に関しては根性無しだから、その点は安全だ」

ジャックそれはフォローをしてるのか？
馬鹿にしてんのか？

「豪様は、もっと女心を知って欲しいです」

これは凧のお言葉。

「えー、豪ちゃんは鈍さも可愛いんだよ」

陽、鈍いつてのは否定してくれないんだ。

「あー、この短期間でもうちも曹仁の鈍さはよくわかったわ」
張遼殿と会って何時間だっけ。

「強い・悪い・鈍い、そして華琳様によく叱られる。それが私達の
豪だ」

春さん、威張って言わなくても。

…俺、今日は酒飲んでもいいよな。

「どうすか早く決めてくれ。あまり長くなると他の軍にバレる危険
がある。そしたらわかるよな」

そしたら賈馱も董卓も殺さなきゃいけない。

曹仁が言ったのは、脅しではなく最後通告ね。

「わかったわ。でも決めるのは月よ。月が決めたのなら私は何も言わない」

馬車の中の月にも、今までの言葉は全部聞こえていた筈。私は馬車に近づき中の月に、言葉をかける。

「月聞こえていたでしょ？答えは月がだして」

一瞬の沈黙の後に、馬車の扉が開かれた。

side 董卓

「詠ちゃんありがとう。そして曹仁様や皆様にお願ひがあります、教えて下さい。私はこれからどうしたら良いんでしょうか？」

詠ちゃんや洛陽のみんなは、私を気遣って優しい言葉しか言ってくれなかった。

でも自分飾ろうとしない曹仁様や、曹仁様に物怖じせず話せている曹操軍の人達なら、違う言葉を聞かせてくれると思っんです。

「やだね。俺はテメエや大事な仲間の事だけで手一杯な人間で、他人の人生相談に責任はもてないんだよ。それに俺はお前が何ができるか知らないしな。俺にできるのは曹操軍の為に貴女を利用するだけだ」

曹仁様が、そう言い終えた瞬間、ゴソッと鈍い音が辺りに響きました。

「全く遅いから心配して来てみれば、勧誘する人間を怖がらせてどうするのよ」

「姉ちゃんには、叩く前に注意をするってゆう選択肢はないのかよ」

曹仁様のお姉様と言う事は、この方が曹操様。

「豪に対してはないわよ」

「姉ちゃん、それ理不尽」

「貴女が董卓ね。豪の提案をきちんと教えてあげる。貴女と賈馱には陳留で店をやってもらうわ。店舗や売の商品に関しては我が軍が援助をするから。全くこのぐらい事も言えないなんて」

「言おうとしたら、姉ちゃんが叩いたんじゃないか」

「あんな言い方じゃ拒否されるに決まっているでしょ？全くこの子は董卓の為にあれこれ苦慮した癖に、どうして宦官を相手にした時みたいに甘言が出てこないの？」

「だってよー、宦官は基本は野郎だろ。御遣いと違って女相手にペラペラと甘い無責任な言葉はでないよ」

「そういえばまだ名乗ってなかったわね。私の名前は曹操、このお馬鹿の姉よ。この子は自分で責任をとれない事は、他人に勧めないから安心して来るといいわ」

「姉ちゃん、自分で聞いていて俺の訴えは無視かよ」

「豪もう1回叩かれないの？それと戻ったらお説教の続きをするからね」

口では厳しい事を言っていました。曹仁様を見る曹操様の目はとても優しい物でした。

私も陳留に行ったら、こんな風に心地よいやり取りができるのでしょうか。

不器用者の勧誘（後書き）

豪の説得は色々と考えたんですが、他の作者さんと、かぶりそうならんでこんな風にしました。

反董卓連合は後1話か2話で終わる予定です。それが終わったら幕間を書く予定です。

感想指摘をもらえると、作者はテンションがあがります。

豪の二刀への意趣返し？（前書き）

リクエストが多かった仕返し？です

豪の一刀への意趣返し？

side ジャック

「それで豪さん、董卓達の隠蔽工作はどうするんですか？」

「幻術を使うのさ。とっても楽しい幻術をな」

攻撃魔法じゃなく幻術なら、そんなに怪しまれないか。
でもあの豪さんの表情は

「また何か悪い事を企んでいるんですか？」

「失礼なお茶目な悪戯だよ」

「豪ちゃん、董卓ちゃんから服をもらってきたよ」

朱霊は外史の事を知ってるから協力してもらっても平気だな。

「陽ありがと。俺が服をくれって言ったら、違う意味で怪しまれる
からな」

豪さん、確実に変態って思われますね。

「それと董卓ちゃんと賈馱ちゃんと似た体型の宦官も見つけたよ」

「流石は陽だ。じゃ案内をしてくれ」

「ちよつ豪さん、宦官つて、もしかして？」

宦官の中には、体型は女性に近い奴もいる。

「おう、宦官に催眠術をかけて自分が董卓と賈馱だと思ひこませる。そして2人には誤認をおこす幻術をかけるんだよ。董卓と賈馱に見えるようになる」

この人は本当に…

「その2人を御遣いに保護させるんですね？」

「後は軍師孔明がうまくやってくれるさ」

幻術がきれた時の御遣いはどんな顔をするんだろう。

まっ調子にのって、お手つきにしなきゃ良いだけだしな。

side 陽

董卓ちゃんと賈馱ちゃんの焼死体を御遣い達が見つけたらしい。

うん、何にも知らないのは幸せな事だ。

「陽、頼みがある。ちよつと、この世界から抜けるから、一緒に着いて来てくれ」

「陽が豪ちゃんの誘いを断る訳がないじゃない。でもどうしてあっちに行くの？」

「ちよつと面白い事を思いついてな。丁度今回の論功行賞までは待機しなきゃいけないしな」

.....

豪ちゃんとやって来たのは管理事務所の近くの服屋さん。
こつちの世界は、こんな服があるんだ。

「た、大変よ。雄獅子様が、豪様が女性を連れて来たわ。みんな雨が降るわよ」

うん。豪ちゃんは、こつちの服屋で女の子と一緒に買い物をする事はないと。

「俺は蛙か？ポリエステルで作った服を見せてくれないか。陽、今から論功行賞の場にでる将に似合うポリエステルの服を選んでくれ」

「えー陽にじゃなく？」

「それが終わったら好きな服を買ってやるよ」

「さすが豪ちゃん。でも何でみんなに買うの？」

「御遣い自慢の輝く服はポリエステルって素材で作られてるんだ。多分御遣いは論功行賞の場で目立つ為に、それを着てくるだろうな」

「そうか！華琳様や孫策様がポリエステルの服を論功行賞の場に着てきたら、横取り御遣いは立場はなくなるんだね」

「正解。だから買うのは姉ちゃんと孫策殿と周瑜殿、それに馬超殿だな」

「わかった。みんなに似合うの選ぶね。でも豪ちゃんや先生は何を着るの？」

「俺と先生は戦で使っていた鎧の汚れを落として着るさ。同じ男でも戦に出てた人間とそうでない人間の区別はつけとかないとな」

その後、華琳様達の服を選んだ私達は腕を組ながら街中を歩く。

「ねえ豪ちゃん、もし陽があの時断っていたらどうしていたの？」

「泣いても喚いても事實は変わらないからな。本当の曹仁と交代して終わりだよ」

「陽の為に泣いてくれるの？」

「さあな。こんな風になったのは、長い外史生活でも初めてだから、考えたくもないよ」

「陽もだよ。豪ちゃんと離れるの何て考えれないよ」

小さい頃から一緒だった豪ちゃん。

小さい頃から好きだった豪ちゃん。

私の小さい頃からの夢は、豪ちゃんのお嫁さん。

その夢を現実にする為にも、豪ちゃんと一緒に頑張らなくちゃ。

豪の一刀への意趣返し？（後書き）

たまに偽月でてくるかも

感想指摘お待ちしております

豪の意趣返し？ ポリエステル編（前書き）

謁見に関しては、あまり突っ込まないで下さい。

豪の意趣返し？ ポリエステル編

西涼連合天幕

side 先生（馬休）

論功行賞の打ち合わせをしていると

「先生、いるかい？」

豪さんが訪ねてきました。

人のことは言えませんが、共も連れずに一人で来るんなって本当に有力諸侯の長男としての自覚があるんですね。

「豪さんどうしたんですか？」

「論功行賞の場で先生に協力して欲しい事があってな。……して欲しいんだ」

前言撤回。

この人の武と、この悪さがあれば、どこを一人で歩いてても平気ですね。

「豪さんは相変わらずですね。わかりました翠には私から話しておきます」

翠と再会してよく言われたんですよ、豪さんの影響を受けすぎだつて。

今も豪さんの悪巧み？
を聞いてワクワクしてますしね。

「よろしく頼むぜ。服は陽が選んだから大丈夫だ」

朱霊さんの服の趣味の良さは、西涼の女性兵士の間でも定評があるんですよ。

ある女性兵士にこう聞かれた事がありました。

「曹操軍の朱霊さんは武人として有能で、服の趣味も良いのに、何で男の趣味は悪いんですか？」

これを聞いた時は翠と一緒に大笑いしました。

side 華琳

「姉ちゃん入るぜ。俺と陽から贈り物だ。論功行賞の場で着てくれ」
豪が持ってきたのは、御遣いが着ている服と色は違うけども、日の光を浴びて輝いていた。

「ありがとう。でもこれだと…」

「だから、これで…して…するんだよ。色は違うけど同じ素材の物を馬超殿と孫策殿にも手渡してある」

まったくこの子は、どこで、こんな物を手に入れてきたのかしら。

「ありがとう。弟と将来の義妹からの贈り物は大切にに使わせてもら

「うわよ」

「なっ何で姉ちゃんが、陽との事知ってたよ」

「誰も陽とは言ってないでしょ。それと豪、最近陽一人に構いすぎよ。軍の和を乱したら、わかるわよね」

洛陽城 謁見の間

side 豪

今回の論功行賞で忘れてならないのは、幼い劉協の天子としての威厳を見せつける場でもあるという事。

つまり主役の劉協がいる間はそれ以上に目立つのはマナー違反つか常識的にしちやいけない事。

論功行賞の場に呼ばれたのは、袁紹・姉ちゃん・俺・先生・馬超殿・孫策殿・周瑜殿・御遣い・劉備の8人。

さすがの袁紹も、今は地味な服を着ていた。

謁見の間は劉協に神秘的な雰囲気、ださせる為に薄暗く篝火が焚かれている。

御遣いは篝火の光が、白い学生服に反射して目立つ。

ちなみに姉ちゃん達には、それぞれの個性にあわせたポリエステル製の服の上からケープを被ってもらっている。

俺達が平伏していると、御簾の向こうから幼い声が聞こえてきた。

（どこの世界でも、最高権力者は自分に神秘性を持たせたがるんだよな。

実際の神にあたる創竜のオジキは居るだけで圧倒的な存在があるから、こんなくだらない演出は必要としなんいんだけどな）

劉協の言葉が終わると、篝火の火が減らされて闇が濃くなる。

天子「光が消えたって意図か。」

まっ、サーチにはしつかりと劉協の反応があるから少し離れた場所で諸侯の態度を見ているんだろっ。

そして俺達に退出を促す言葉が掛けられる。

俺と先生は素早く扉の脇に移動する。

あらかじめ打ち合わせをしていた姉ちゃん・馬超殿・孫策殿・周瑜殿が扉の前に立つ。

御遣い達や袁紹は当然気づかずに微動だにしていない。

俺と先生は姉ちゃん達がケープを脱いだのを確認すると一気に扉を開け放つ。

光に包まれて姉ちゃん達の服が鮮やかに光を反射する。

黄色い髪に空を思わせる真っ青な服を着ている姉ちゃん。

茶色の髪に新緑を思わせる緑の服を着ている馬超殿。

桃色の髪に火を思わせる真っ赤な服を着ている孫策殿。

黒い神に月を思わせる薄い黄色の服を着た周瑜殿。

そしてその脇に控えるのは戦場で使った鎧を着けている俺と先生。

そして謁見の間は洛陽の宦官や高級官僚の感嘆の声や嘆息に包まれていく。

こうなれば御遣いの服も、ただの学生服。

後ろでわめく御遣いや袁紹の声を無視して俺達はそれぞれの日常へと歩き出す。

豪の意趣返し？ ポリエステル編（後書き）

今悩んでいる事、次に豪の正体を知るのは誰にしたらいいんだろうか？

指摘感想お待ちしております。

凧、外史を渡る（前書き）

凧が豪の正体を知る話です。

予定では後数人いるんだけど、みんな個性をだせるだろうか心配

凧、外史を渡る

外史統括者恋姫支部

統括者達が部屋の一角に集まっていた、その顔にはみな苦痛の表情が浮かんでいる。

「不味いぞ、どうする?」

「左磁の奴よりによって、今はあの外史に行くとは」

「あの外史には雄獅子だけでなく銀狼ジャック・ウオーレンもいるんだぞ」

「ようやく怪我人も職場復帰できたというのに」

「雄獅子と左磁が出会う前に何とかせねば」

部屋は統括者達の深い溜め息に包まれていく。

side 豪

何か知らないが、俺が行っている外史の統括者達から呼び出しをくらった。

いや、統括者の方々も偉くなったもんだよ。
仕事中の俺を呼び出すんだからな、部下のしびきが足りなかったんだろつ。

「邪魔するぜ。で俺に何の用だ」

「そ、そそそれはですね。ウエツ」

人の顔を見てはくなよ。

「す、すいません。恐ろしいや緊張のあまりもどしてしまっただけです。向こうの豪様が見えない部屋で休んでろ」

こいつらの体に礼儀を叩きこむ必要があるよだ。

「豪様は確か貂蝉と卑弥呼には会いましたよね。実は後2人程管理者がおりまして名前は左磁と于吉と言つのですが」

「于吉だあ？」

「いえ豪様が会つたのは于吉違いですので、はい」

俺が会つたのが、本来の于吉。

管理者のは外史からスカウトされた于吉との事。

「貂蝉と卑弥呼は主に管理の仕事をしてるのですが、左磁達は……」

「外史を消滅させているんだろう？」

外史が治せないぐらいに、明後日の方向に進んだ場合は外史を消滅させてしまう。

腐ったミカンじゃないが、他の外史に悪影響をださない為だ。

「そうです。特に左磁は要の北郷一刀を好いていない様で」

いや、毎回毎回あんなご都合色ぼけ主義を見せられていたら嫌になるの当たり前だろ。

「最近は何遣いが魏に所属する外史に赴いて、御遣いと魏の将を皆殺しにした様で」

魏の将を皆殺し？

姉ちゃんや春さんや秋さん、陽や凧達をか。

「あ、あくまで豪様が行っている外史とは別物ですよ」

「当たり前だ。もし俺の身内に左磁が手をつけてみる。俺ここで気が済むまで暴れちゃうよ」

「で、ですから左磁が馬鹿をする前にお知らせをしたわけですよ」

「左磁は俺の事を知っているのか？」

「噂を聞いた事はあるかもしれませんが、自分が携わる外史に来て
いる事は知らないと思います」

遮断は統括者でも、かなり上の奴しか知らされない事だな。

「わかった。できるだけ左磁は無事に帰す」

職務熱心な青年らしいし。

「それと左磁は拳法を使います。その為その外史の実力を知る時には楽進を倒しに行きます」

へー、俺の可愛い弟子の凧を倒すつもりなんだ。

「もし楽進に左磁が手をだした時は新しい管理者を募集した方がいいぜ」
ちつとばかり急がないとな。

side 左磁

北郷一刀を追って、新たな外史に渡った俺は洛陽に着いた。
洛陽の荒れ具合から見ると、今は反董卓連合が終わった頃だな。
それなら北郷一刀も楽進も一力所にいるから都合がいい。

しかし、この外史はどうも奇妙だ。
于吉のやつも

「左磁とは離れたくないんですけどね。変態の勘があそこはやばい
って言ってるんですよ」

そう言って、この外史に来る事を拒否した。

「その者ここは民の立ち入りを禁止している区域だぞ。早々に立
ち去れ」

「自分から来てくれるとは手間が省けて楽だな。この外史の楽進の
実力を見せてもらおうぞ」

俺に話しかけてきたのは、探していた楽進だった。

side 凧

今は城の警備が手薄な為に、城の周囲を警戒区域としている。その男にあったのは、城の裏側にある路地裏。

男この外史の楽進と不思議な事を言つと突然蹴りつけて来た。

「今の蹴りをかわすか。この楽進は強いな」

「当たり前だ。私は曹仁様に鍛えてもらっている」

「曹仁？あーあの金髪優男か。あれが鍛錬ね」

金髪優男？豪様は金髪でもないし、優男でもないんだけど。

悔しいが、男の実力は私より数段上の様で次第に攻撃を、かわしきれなくなってきた。

「今回の人形はそれなりに楽しませてくれたが、これで終わりだ」

男の蹴りが、腹にめり込む。

むせかえると同時に大量の血を吐いてしまった。

（私は多分死ぬんだ。まだ豪様に気持ちを伝えていないのに悔しい）

それを考えると悔しさと後悔から涙が溢れ出てくる。

もう一度だけ、あの人に私の大好きな豪様にお会いしたかった。

「呔っ！左磁てめえただじゃおかねえ」

あっ、豪様だ。

最後のお願いが通じたんだ……

side 豪

「凧大丈夫か。しつかりしろ」

凧に治療をかけるが傷が深くておいつかない。

「豪様良かった、最後に会えて。これでやっと気持ちを伝えられる。豪様大好きです、強い所も優しい所も不器用で鈍感な所もみんな大好きです」

「凧、最後じゃないから返事はまだ言わねえ。あの餓鬼を速攻倒して治療に連れて行く。そしたら嫌って程返事を聞かせてやる」

「俺の名は外史矯正指導員の豪だ。左磁よ今は気絶だけで済ませてやる。俺が次にこの外史に帰ってきた時は覚悟しろや」
左磁を速攻ぶつ飛ばした俺は管理者事務所に併設してある病院へと渡る。

「頼む。この娘を助けてくれ」

ここでもなら凧を救える。

凧なら話して大丈夫だ。

俺には凧が必要なんだ。

side 凧

目が覚めると白い部屋の白い寝台に寝かされていた。

「私は殺されたんじゃない？」
独り言を呟くと

「殺されかけて、ここに運ばれたのよ。しかしあの朴念仁が規則を破ってまで女を連れてくるとはね。ちょっと待っていてね、今豪を呼ぶから」

白衣を着た艶っぽい女の人が話しかけてきた。

少しすると、部屋に豪様が飛び込んで来る。

「風、無事で良かった」

そう言うと豪様が私を抱きしめてくれた。
そして豪様の目からは涙がこぼれています。

「おーい。病室でラブコメなんて、いつの時代の少女漫画よ。それと豪チャツチャツと説明しなさい」

「わかってるよ。とりあえず2人にさせてくれ」

「私はもうお邪魔虫？へーいい度胸してるじゃない。アメルちゃんに言っちゃおうかな、豪が二股かけてるって」

「まずは部屋からでろ！」

女の人が部屋から出ると、豪様が口を開いた。

「あの人はこの病院の医者だよ。口は悪いが腕は確かだ。それとだ

な、今から言う話は結構衝撃的でかなりの決断を要する話なんだよ」

side 豪

でやっぱりこうなる訳ね。

凧と劊竜のオジキが相對している。

本当はオジキには、中々会えないんだぜ。

俺の正体を知った凧がオジキに言い放つ。

「お願いがございます。これから私はもっと武を磨きますので、豪様が受ける傷の半分を私に代わらせて下さい」

side 凧

私は鍛錬を、それなりにしてきたつもりだったが、豪様の過去を見たらそれは甘すぎました。

あの人の強さは数え切れない程の鍛錬や闘いから得たものだったんです。

でも私はもっと甘い物を知りました。

病室での豪様からの、告白と甘い口づけです。

朱霊様が豪様を照らす太陽になるならば、私はお側いて、闘いで疲れた豪様が、穏やかな日々を過せる様に努力をします。

私の真名、凧に誓って。

屈、外史を渡る（後書き）

女医さんの名前まだ考えてない

感想指摘お待ちしております

風違う外史に渡る（前書き）

ちよつと更新休もうかと思いましたが、書きたい物ができたので更新します

凧遣う外史に渡る

side 豪

凧の病室

「凧、体の調子はどうだ？」

食欲もでてきたし、もう大丈夫だと思っただが。

「はい、もう大丈夫です。もうあっちに戻れます」

「その堅苦しい話し方やめねか？俺が曹仁じゃない事を知ったんだしよ」

「しかし豪様」

「それと様も無し。お前も委員の仕事をする気なら、これは命令だ」
他の外史と一緒に行った時、様付けなんてされたら目立ってしょうがない。

微妙な空気が流れる部屋に扉をノックする音が響いた。

「豪さん事務所の者ですが、今よろしいですか？」

俺1人ならノックもせずに入ってくるだろうが

「構ねえよ。どうした？」

書類を片手に事務員が入って来る。

「誠に申し訳ありませんが、緊急の仕事をお願いしたく」

「とりあえず書類を見せる。かかる時間によつちや部下にまわすかならな」

side 凧

書類を見ている豪様の眉間に深い皺が刻まれていく。

「討伐依頼か。相変わらず俺に来るのは胸くそ悪い仕事ばかりか」

「すいません、創竜様から豪さんとお連れの方と一緒に行かせる様にと指示がありましたので」

豪様の仕事を見れると知った私は柄にもなくワクワクしていた。

「オジキの野郎。しょっぱなから、こんな仕事を見せるなよな」

「豪様どんなお仕事なんですか？」

「ある外史に渡って強くなりすぎた怪物を倒してくれとよ」
豪様は私に書類を手渡してくれた。

仕事種別：討伐

討伐対象：トロール

依頼詳細

私共が統括している外史に、管理者より強い怪物が生まれてしまいました。

怪物は勇者が物語をすすめる上で重要な洞窟に住み着いています。勇者と怪物が遭遇する前に討伐をお願いしたく、ここに願います。

私は豪様に教わった方法でトルルに関する知識を探る。

トルル・醜い容姿と強い力を持つ怪物。

総じて知能は低い。

英雄による怪物退治の昔話は、子供の頃にワクワクしながら聞いた事がありますが、何故か私の英雄はワクワクではなくイライラしている様です。

「風、帰るのは明日にする。今日はやけ酒に付き合え。準備ができたら行くぜ」

「私は何時でも、何処へでもお供します」

次の瞬間、私達を淡い光が包みました。

光が消えると目の前に豪華な衣装を着た男の人が立っていました。

「高名な雄獅子様にわざわざ来ていただくとは申し訳ありません。まったく、あの醜い怪物のせいで」

管理者を名乗る男は申し訳なさそうに、頭を下げています。

side 豪

「お前がそんな考えだと又同じ問題が起きちゃうよ。時間が勿体ねえ早く案内しな」

この管理者は問題が起きた原因を理解していない様だ。怪物とはいえ想いをもってんだぜ。

案内されたのは、今は使われていない鉱石採掘の洞窟。

広さはそれ程広くはない様で、例のトロールは中心部にあるひらけた所に住んでいるらしい。

坑道であつたからか洞窟内の移動は、かなりスムーズにできた。

何でも勇者が冒険の序盤で訪れる洞窟らしく、出てくるのはスライムやゴブリンぐらいとの事。

確かにスライムを相手にしている勇者がトロールに勝てる訳がない。

「こ、この先に奴がいますので、どうかお願いします」

管理者は、そこから動く気配はゼロだ、まっ居ても邪魔にしからならないけどな。

side 凧

あれがトロールか。

豪様の倍以上はある身体に粗末な服を着た緑色の怪物が広間にいた。

「お、おでのうちに何しにきたんだ？おではここからうごかないぞ」

無言で近づくと豪様。

そのお顔は辛そうだ。

「おではつよいんだぞ」

トルルは巨大な棍棒を振り上げる。

「これでペツチャンコなんだな」

棍棒が豪様の頭を潰すと思えた瞬間、豪様はそつと手をあげて棍棒を受け止めたんです。

それは子供の悪戯をたしなめる様な優しさがありません。

「住んでいる所を追い出す真似をして済まないな」

豪様はトルルに頭を下げました。

「でも、こうしなきゃこの外史は保てないんだよ。お前は、今まで武器で人に追い払われて来たんだろ？だから俺は素手で倒す」

「いやー凄い。流石は一撃でトルルを倒すんですから。後ご相談なんですけどこのトルルは勇者が倒した事にしていいですかね？」

そんな管理者を無視して豪様は虫の息となったトルルへと近付いて行きました。

「おではどこに住んだらいじめれないの？森もだめ、山もだめ、人間は何もしないのにおでをいじめる」

「お前はどこに住みたい？それとも人間になりたいか？」

「おではおでだもん。森でもどこでもゆっくりしたい」

「他に願いはないか？」

「おで頭が悪いってバカにされたから頭が良くなりたい」

「馬鹿なトロールだ。トロールの頭が良くなる訳が…グエツ」

気付いた時には私は管理者を殴り倒していました。

「尻やるじゃねえか。合格だ。立派な指導員になれるぞ。このトロールは倒された怪物の悲願の塊なんだよ、怪物だって平和に生きたいつてな。この管理者はそれに気づけなかったんだよ」

豪様がトロールに手を当てると、トロールは光に包まれて洞窟から消えました。

「これが俺達の仕事だよ。英雄として賞賛される事も記録に残る事もない。まっ尻の一撃ですっきりしたからやけ酒はなしだな」

醜いと言われる怪物にも優しいこの人を特別扱いするのは逆に失礼かもしれない。

「豪、それなら私達の世界に戻るぞ」

沙和や真桜に話すのと、同じ様に豪にも話しかけた。

後日、トロールに素手で挑む無謀さを知った私は朱霊さん達と一緒に豪に説教をさせてもらいました。

風違う外史に渡る（後書き）

このトロールは構想だけのオリジナル小説にでる予定です。
感想指摘お待ちしております

反董卓連合からの帰還（前書き）

よーやく反董卓連合が終了です
長すぎた

反董卓連合からの帰還

side 豪

「さあ私達の陳留に帰るわよ」

姉ちゃんの号令で曹操軍は一斉に行軍を始めた。
ちなみに左磁はジャックがああ後にボコボコにしたらしい。

そして俺は姉ちゃんを甘くみていた。

糧食が減った帰りは、荷車も軽くなると思っていたら洛陽の避難民の方々が荷車に乗っておりました。

確かに民は大事だよ、でも歩いてもよくな？

改めて荷車の中を確認すると、子供やお年寄りが厳選されて乗っている。

この時代は親への考はかなり重要なものとされていたし、子供を置いてく親はいない。

「豪は弱い者に、優しい男の子よね」

そんな姉ちゃんの牽制が聞こえてきそうだ。

side 天和

「お姉ちゃん少しは落ち着いてよ」

「良いでしょ、ちーちゃん。やっと豪君や曹操様や先生が帰ってくるんだよ」

豪君達の帰りを待つ時間は、予想以上に長く感じたんだもん。

「天和姉さんにしてみればら曹操様や先生は曹仁様のおまけでしょ？」

人和ちゃん、それ正解。

流石に声にはだせないけどね。

「でも曹仁様の活躍は凄いよね。シ水関でも虎牢関でも、かなりの武功をあげれたらみたいね」

ちーちゃんの言うとおり、豪君の大活躍は陳留でも話題になっていた。

焰龍さん達の鍛冶屋も試作品の弓矢を見る人で、ごった返しになる程だもん。

当然、今日帰還する将や兵の家族や、曹操軍の将を出迎える民は凄い人数だ。
これじゃ、豪君が私に気づいてくれる可能性は、哀しい事にかなり低いと思う。

side 豪

ようやく陳留に帰って来れた。

反董卓連合の活躍で、治める土地は増えはしたが、流民も増えたらしく食糧の確保や、新しい雇用の方が必要となるだろう。

しばらくは武官より文官としての仕事を重視して、国を富ませる事に努めなきゃいけない。

それが黒幕に対抗する有効な手段となるだろう。

そう言えば一度陽と一緒に、御遣いと偽董卓が幸せそうに手を繋いでいるのを見かけた。

「豪ちゃん、やっぱり御遣い手をだしたね」

呆れを通り越して憐れみを含んだ目で陽が、御遣いを見ていた。

side ジャック

陳留に着いた曹操軍への出迎えは凄まじいものだった。

先頭は夏侯惇、夏侯淵姉妹。

続いて朱霊や李典を初めとした武官。

荀イク、鳳統の軍師達。

そして曹操、曹仁の姉弟がやってくると民衆の熱狂はピークに達した。

裏方を好む豪さんが、こんな華やかな場に立つとはね。

豪さんはサーチをかけていたらしく、張角を見つけて手を振り返していた。

あれは曹操の教育の賜物だな、あの朴念仁をあそこまで仕上げるとは尊敬するよ。

ちなみに張角達が先生に手を振ったら、馬超がガンをつけまくっていた。本音は馬超は他の女への牽制、馬岱は先生に甘えたいらしい。馬超と馬岱は馬騰の治療を少し見届けてから西涼に帰るとの事。

s i d e 豪

俺は帰還の宴の中、そっと席を立つ。

黒幕は今回も姿を見せなかった。

次は誰を手駒にするつもりだろうか？

これからは、ますます負けれない戦いが続く。

曹家の曹仁としても、指導員の豪としてもだ。

自然と険しい顔になる。

背中から聞こえてくる賑やかで、暖かい声を守る事を誓って。

反董卓連合からの帰還（後書き）

しばらく幕間となる予定です

幕間 ジャックとの出会い（前書き）

本当はジャック初登場の時に書く予定でした。

幕間 ジャックとの出会い

side 豪

「ごーちゃん、陽今日のお昼はパスタがいいな」

この外史にパスタなんてある訳がない。
つまり陽はあちらの世界に連れて行って欲しいんだろう。

「パスタって俺あんまりうまい店は知らないぞ」

パスタよりラーメンか、うどんだし。

「事務所の近くにオープンカフェの可愛いお店あるんだよ。そこに行こ」

オジキは陽に指導員としての基礎知識の他に色々な情報を渡したらしい。

陽さん一応は三国志の人間だからオープンカフェは自重して欲しいな。

「オープンカフェ？なんであんな目立つ所に行きたいんだよ」

こないだは腕を組みながらアイスを食べさせたし。

「目立つからいいんだよ。向こうの人にも陽が豪ちゃんが一番だつて教えなきゃ。豪ちゃんそれと納豆パスタは陽とのデートの時は禁止ね」

「ならオムライスにするか」

「オムライスなら陽が作ってあげるよ。今日は一緒にパ・ス・タ」

side ジャック

事務所で書類整理をしていたら目の前に若い指導員達 came。

「ジャックさん、豪さんは俺達に嫌がらせをしに来たんですか？」

指差した方を見ると、尊敬する上司の哀しい姿があった。

(豪さんオープンカフェ似合ってねえー。それに椅子小さすぎだろ)

あれが嫌がらせね…。

こいつら朱霊の押しが強さ知らないんだよな。

あいつ豪さんにミツキー ウスの耳付き帽子被らせた女だぜ。

「悔しくて仕事にならないんで邪魔しに行つて下さい」

邪魔というより、もっと恥ずかしい光景になると思うが。

案の定、俺が相席を求めると朱霊は豪さんの横にピッタリとくっついていた。

いや俺の両脇に余裕で椅子がはいるスペースがあるんだけどね。

「そう言えば豪ちゃんと王連さんって、どうやって知り合ったの？」

side 豪

「あれはだな…」

今から数年前の管理者事務所

一仕事を終えた俺は書類作成の為にパソコンを立ち上げる。

「おつ、依頼メールが来てるな」

仕事内容：妨害及び足止め

妨害対象：ソードマスターカイン

依頼内容

私達が統括する外史の要となる者アベルの父親ソードマスターカインの妨害及び足止めをお願い致します。

あつ、添付ファイルもある。

外史の説明か。

気の弱い少年アベルは伝説の勇者の子孫。

父親は政争に敗れて雲隠れした王国の元軍団長で今は子供達に剣術を教えている。

アベルが旅立つきっかけは故郷が帝国の侵略にあってしまい、大切な者を守る強さを身につける為に幼なじみの女の子ソフィと旅立つ。

でも管理者がアベルを強くする為に師匠あたるカインを強くしすぎ

ら、帝国が侵略できずに困っている。へー魔術書で強化された兵を一人で倒すとは、面白そうだな。

とりあえず外史に渡ったらアベル親子をチエック。

で帝国の進行を手助けする為にカインを足止めすりゃいいんだな。しかし雲隠れした人間を探すのは骨が折れそうだな。

…いた、いや正確にはあった。

カイン流剣術道場が、雲隠れする気ないだろカイン。

カインは渋めのおじさんで、アベルは眼鏡をかけた美少年。

そして、そこで気になる少年を見つけた。

武の才は確実にアベルを確実に越えている銀髪の少年。

俺は興味津々でサーチをかけてみる。

名前：ジャック・ウオーレン

立場：アベルの幼なじみのガキ大将。帝国の侵略時にソフィを庇って死亡する。

いいね、スカウト申請しとくか。

- - - - -

帝国軍の兵が次々とカインに倒されていく。

それじゃ足止めしに行くか。

「帝国軍の兵よ。無駄に命を散らす行為は誉められた物ではないぞ。そう私の名はソードマスターカインだ。」

う、うぜー。

「怖いなら逃げでもいいんだぞ。私は背中から襲う卑怯な真似はしないから……ブフツ」

足止めだから、気絶させてもいいんだよな。

もちろんカインは正面から堂々と気絶させてやったよ。

ジャックを探すと、ソフィを背中で庇い帝国兵を睨みつけている所だ。

「俺がソフィを守るんだ」

満身創痍のジャックが叫ぶ。

いい目だ、命の危機にも折れない強い目をしている。

「ソフィ、アベルと逃げるんだ」

あつ、本当にソフィ逃げてやんの。

ソフィが居なくなつたしそろそろ行くか。

邪魔な帝国兵は頭を掴んで投げ飛ばした。

「おい小僧その傷じゃ長くもたないぞ。この世界を捨てて俺について来い。脇役じゃなく本当の主演にしてやるぞ」

.....

「それで俺は豪さんについて行つたんですよね。お陰で女房にも会

えましたし」

「もしかして魔術書で太平要術の書なの？」

「陽、正解だよ。だからジャックはあの外史に来たんだよ」

もしジャックをあの時にスカウトしてなきゃ、陽とパスタなんて食べれなかっただろうな。

幕間 ジャックとの出会い（後書き）

幕間でまた展開おくれるかも

曹仁伝主要人物一覧(前書き)

他の作者さんがやってるのをみて、やってみたかったキャラ紹介
見る人はいるのかな？

曹仁伝主要人物一覧

曹仁伝主要人物一覧

豪

でかい、強い、悪いの三拍子が揃った本作の主人公。

元は正史のしがない独身サラリーマン。

頭があがらない人：創竜・曹操・アメル・アグラバイン（サモンナイト2）

好きな食べ物：白米・カップメン・日本食

嫌いな食べ物：人参

特徴：ごつい体に分厚いヒゲで顔は強面。

外史生活のお陰で人生経験は豊富だけど、恋愛に関しては鈍感。

様々な外史で武術や魔術を取得しており強さや頑丈さは桁外れ、調子にのって怪我をしては曹操に叱られている。

曹操 真名華琳

恋姫の主要キャラ、偶然か創竜の企みなのか豪の姉となる。

弟の豪を溺愛しており、昔から、豪が心配をかける度に説教をしていた。

そのお陰で、今や立派な豪使い、矯正指導員が外史から連れて来て欲しい人1位

ただ今お姉ちゃんと豪の約束10箇条を作成中

大切なもの：自分の国の将や民・豪・豪からもらった短剣や指輪

豪の呼び方：豪

豪からの呼ばれ方：姉ちゃん

朱霊 真名陽

豪の幼なじみ、小さい頃から側いたお陰で豪を怖がらない。バランスの良い体型の正統派美少女。

光を思わせる黄色の髪をしている。

色白で髪型は豪に誉められたポニーテール。

身長は150センチぐらい。

普段は鋭い目つきだが、豪と会うときは緩みまくる。

胸は並+

豪に鍛えられた為に武力は高い、豪が絡むとさらに高まる。

豪が小さい陽を必要以上に強くしたのは、自分が外史から離れた時に曹操を守ってもらう為

他人にはクール、豪にはデレまくる。

豪の正体を知っている

大切なもの：豪ちゃん・豪愛の剣・豪ちゃんと過ごす時間

豪の呼び方：豪ちゃん

ジャック・ウォーレン

外史矯正指導員で豪の部下、ある外史で死ぬ所を豪にスカウトされた。

豪と同じく強面な顔で銀色の短い髪。

豪を尊敬しているも、関係は悪友に近い。

大切なもの：女房

豪の呼び方：豪さん

馬休 真名療

豪が黄巾党に潜伏した時に出会った医者、先生。
馬超の許嫁で馬岱の兄、西涼を出奔後に黄巾党に流れ着く
大切なもの：患者・翠・蒲公英・豪さんからもらった医療書
豪の呼び方：豪さん

胡質 真名調

曹操軍の探偵文官。

調査能力の高さには、豪も一目を置く、黒髪のボーイッシュ美少女。
豪の内政への考え方に関心して曹操軍に入る。
豪と仲良くなる為に策を練るも陽の押しの強さに負け気味。
大切なもの：兄貴・兄貴からもらった探偵道具
豪の呼び方：豪の兄貴・兄貴

楽進 真名凧

曹操軍三人娘の一人で拳法使い。
豪の強さや分け隔てのない優しさに惹かれる。
豪の正体を知っている。
最初は曹家の長男の為に豪様と呼んでいたが、ある経験で同じ目線
を持ちたくなり豪と呼ぶようになった。
大切なもの：豪・武術・豪からもらった足甲・沙和・真桜
豪の呼び方：豪様 豪

鳳統 真名雛里

御遣い軍から豪の器に惹かれて曹操軍に来たちびつ娘軍師。

豪の背中におぶさると直接指示をだし鉄人2号（豪？）の正太郎君並みの活躍ができる。

豪の不器用な優しさの裏に隠された繊細を知り策で守る決意をする。

大切なもの：豪様・豪様からもらった帽子・抱っこ・朱里ちゃん

豪の呼び方：豪様

張角 真名天和

数え役萬三姉妹の長女。

豪に最初出会った時は顔の怖さでピンタをかますも、先生の診療所で豪と話す機会が増えて惹かれ始める。

戦にでている武人豪よりも豪自身を気に入っている

大切なもの：妹達・豪君・支援者・豪君からもらった首飾り

豪の呼び方：豪君

創竜 オジキ

正史や外史を司る存在。

豪のいた正史の管理からは手をひいて人間に任せている。

豪を正史から呼んだ張本人（竜？）

竜の姿は維持するのが楽なだけで本当の姿は謎。

今は豪の結婚式のスピーチとジャックの子供の名付け親になるのを狙っている。

その気になれば外史や正史を簡単に消滅させる事もできる力をもつ。正史や外史を維持する為に管理者や統括者（神）を作り出し、さら

に矯正指導員も生み出した。

豪達には、くだけた話し方をするが、本来は統括者クラスでも会える事は稀。

豪の呼び方：豪

大切なもの：正史・外史・矯正指導員の面々

曹仁伝主要人物一覧（後書き）

このキャラのこれおかしくね？とか
このキャラのこれを知りたいとか
このキャラをたしてとか
意見を待っています

豪のシングルライフ（前書き）

前に書く言ってた豪が恋姫に来る前の生活の様子です
主要人物一覧と一緒に、見てくれる人は…

豪のシングルライフ

豪が恋姫の世界に来る少し前の話

携帯の目覚まし音が狭い部屋に鳴り響く。

いや部屋その物は狭くはないのだが、そこに寝ている男の大きさをせいで手ざまに感じてしまうのだろう。

「あー、よく寝た」

目覚めきれないのか、豪は自分の頭をガシガシとかきむしる。

携帯のアラームをとめてメールをチェックするも、きているのはメルマガと野郎からのみ。

もつとも携帯の電話帳の大半が男だから仕方ないのだが。

昨日飲み干したビールの空き缶を握りつぶしながら寝室を後にする。

豪は稼ぎがある為、それなりに大きなマンションに住んでいるも、外史にいる時が多い為か部屋はシンプルを通り越して飾り気も色気もない。

夕べ飲む前にセットしておいたジャーから飯を丼に盛り付け、鯖缶を缶のままテーブルに置き朝飯の準備を完了する。

料理はそれなりに作れるも、男一人の朝飯に手間をかけるつもりは豪には全くなかった。

水で顔を洗い寝癖だけをとって出勤。

幸いに今日は急ぎの依頼がないから、溜まりに溜まった書類を片付けたい所だ。

定時より一時間ほど早く着いた事務所に人気はない。

眠気覚ましの熱い緑茶を持って、パソコンを立ち上げ書類作成との

格闘を始める。

30分程たつと他の指導員も出勤して来たのでタイムレコーダの打刻を依頼する。

いつ依頼が来るからわからない豪にとって書類は作れる時に作っておきたいのだ。

「豪さんまだ昼飯食わないんすか？」

「ジャツクか。書類がたまってるし、お前と違って愛妻弁当なんざ、夢の又夢なんだよ」

「またアメルさんに心配されますよ」

「ばれなきや大丈夫だし、あの人は誤魔化せるしな」

豪はこの時は嘘も誤魔化しも一切通用しない2人目の姉ができる事は予想だにしていなかった。

なんとか書類を片付けて、そのまま創竜のオジキに報告しにむかう。

「豪、お前もたまには、浮いた話を聞かせてたらどうだ」

「オジキそれは無理つうか無茶な話だぜ。こないだは怪物退治、その前は悪徳將軍の代役だし蛙やトカゲが相手じゃ俺がごめん被るつての」

「人の外史に行ってもろくに女と話さずに帰って来るではないか」

「顔を見て怯えれたり泣かれたら話なんざ無理だよ」

「本当に恋愛事は情けない男よの」

「俺に女ができるより鶏が空を飛ぶ方が簡単だよ」

報告を終え豪が部屋をでると創竜は何かを思いついたらしくニヤリと笑みを浮かべた。

残業を終え、スーパーの割り引き商品を手に帰宅。

「ただいま」

誰もいない部屋に豪の低い声だけが響く。

(寂しくはない、けどこの無駄に広い部屋に女が来る奇跡が起きたりしねえかな)

豪がこの寂しくも静かな生活を懐かしく思い出すのは、まだまだ先の事だった。

豪のシングルライフ（後書き）

幕間予定

ジャックの嫁さん

アメル姉ちゃんの説教部屋

陽の思い出

とか書きたいです

オリキャラ、恋姫キャラの見てみたい幕間があれば頑張って書きま
す

豪の雇用計画 調の決意に、雛里の収穫、天和の感謝（前書き）

今回新たに出てきたオリキャラは感想からもらいました。

豪の雇用計画 調の決意に、雛里の収穫、天和の感謝

side 豪

洛陽からの帰還の翌日いや正確には翌朝なんだけども、また姉ちゃんに呼び出しをくらった。

ちなみに他の洛陽組は休暇になっている。

「姉ちゃん入るよ」

「豪、貴男が提出した流民の雇用政策は明日からやるわよ」

俺の提出した雇用政策は流民の働き場所を生産・工業の2部門に大別する。

生産には農業・林業・酪農・養鶏・漁業・加工部門を

工業には鍛冶・治水・鋼業・建築・道路整備部門を

まず俺が地下水脈を掘り当て溜池を作って、治水で用水路を作る。

鋼業も鉱脈を探して産出した鉱石を精製して鍛冶で農機具や武器を作成させる。

他の石は治水や、道路整備に流用。

養鶏では、卵や鶏肉をメインにして鶏糞は農業部門に

それぞれ、軌道に載るまでは食事と生活費を支給して利益がでしい各部門事に独立採算製へと移行。

董卓には卵や加工部門で作らせた麦芽糖でカステラとかを作らせてお菓子屋をやらせる予定。

なぜ、カステラかという栄養の高さから、昔は馬騰殿の病の病人食に使われていたからだ。

オープンに代わりには石釜を使う。

早い話が農業とかを国規模で大きく行うんだよ。

史実の曹操も流民を農業に従事させたみたいだし。

しかし一つ大きな懸念がある、治水にしろ鋼業にしろ最初は俺から始まるんだよ。

「ちなみにお姉様、俺の次の休みは何時に？」

「あら、豪なら水脈や鉱脈を掘り当てるは、朝飯前でしょ？なら休みの朝飯前に片付ければ大丈夫よ」

「姉ちゃんひどっ。技能を必要とする鍛冶には焰龍を、鉱石に詳しい者が必要な鋼業には創拍、全体の指揮が必要な治水には天目を、軍との連携も出くくる道路整備には天津をそれぞれの頭に据えようと思う」

焰龍達の女房が噂で彼奴らが偉くなったて聞いたたらどんな反応をするんだろ？

「その辺りはまかせせるわ。豪の外交に対する方針を聞かせて」

「警戒すべきは袁紹、袁術は配下の孫策殿に独立されたら終わりだし、西涼は先生がいるから問題なし、御遣いは連合で徐州の太守になったけども、役人をうまく扱えないから逆に弱体化するだろうなでかくなれば、なるほど統制は難しくなるんだぜ。民衆は理想だけじゃなく成果も求めてくるし。」

「横取りで太守、信じたくない話ね」

「他の諸侯は前線にも出なかつたしな。どうせ盟主袁紹のこり押し

「だろ？姉ちゃん一人をを目立たせたくないだろうし」

袁紹は御遣いを姉ちゃんへの牽制に使いたんだろうな。

「豪には無理させっぱなしね」

強気な姉ちゃんの弱気な顔、これに弱いんだよな。

「無理、無茶は俺の専売特許だぜ？とりあえず下準備してくる」

side 調

しばらく兄貴の水脈や鉾脈掘りに同行する事になったんだけども…

「兄貴、これなに」

待ち合わせ場所に兄貴が持ってきたのは許緒が使っている武器と同じ型の物だった。

ただし鎖の長さは十倍近くあり、鉄球に至っては兄貴が余裕で隠れる程に大きい。

「斧だと刃こぼれするし、鎖があるから引つ張れば戻ってくるからな。これなら水脈や鉾脈を簡単に掘り当てれる」

「いやいや兄貴、それ攻城戦に使うべきでは？」

「でも兄貴それを引き摺ると色々やばいんじゃないのか」

「道路整備の地ならしの時は引き摺るさ。他の時は持ち上げれば済

むし」

それで済むのは、兄貴限定だけだな。

「と、とりあえず水からだよな」

「胡質さん、豪さんって人間だよな」

「天目、それを言うな」

治水担当の天目と落ち合った俺達は用水路の予定地近くで水脈を探す事にしたんだけど

「この辺が丁度いいな。調、天目思いつきり離れてるよ」

そう言うと兄貴は、空高く飛び上がり鉄球を地面目掛けて投げつけた。

兄貴、普通はさ。

水脈を掘るってのは、少しずつ掘って

「やったー！！水が出たぞー」

みたいな展開になるんじゃないのか？

鉄球で地面をくぼませて、あっさり溜池を作るって。

「天目、後から創拍達が石を運んでくるからそれを溜池に敷き詰める。それが終わったら用水路の作成。用水路ができたら俺が水脈まで地面を貫くからよ」

普通は地面を貫くなんて言ったら噴飯ものですけど、豪さんが言うのと早く用水路を作くれ、にしか聞こえませんかって天目が笑っていた。

鉾山に創拍の悲鳴が響く。

「豪さん、加減をしてくださいよ。流民の人達どん引きじゃないですか」

いや創拍、流民じゃなく俺もひいてるよ。

水が吹き出す危険性がある水脈と、違い鉾脈では兄貴は遠慮なしに鉄球を地面にぶつけていく、いや地面を砕いていた。

「流民のみなさん、陳留に住みたいなら豪さんに慣れて下さい。それと豪さんは手を出したりしなきゃ襲ってきませんから」

創拍、兄貴は野生の熊じゃないんだから。

見た目は熊っぱいけども。

……なんだ、この色気のない展開はら折角の兄貴と一緒の仕事なのに。

「胡質さん、押してもないのにひいたからですよ」

創拍うまい事言ってくれるじゃないか。
次からは押してもおしまくってやる。

side 雛里

「雛里頼む。一緒に来てくれ」

豪様が、大きな体も縮めて私を拝んできました。

董卓さんに店の説明をしたいそうなんです、豪様一人では怖がる可能性が高いそうなんです。

これは好機です。

豪様と一緒に居れる上に、董卓さんとの話を早くまとめれば、董卓さんや賈馱さんが豪さんに慣れる機会が減ります。

董卓さんは私に近いものを感じるんですよ。

体を縮めて頼み事をしてくる豪様を可愛いと思う乙女はこれ以上は必要ありません。

あの背中は誰にも譲るつもりもないですし。

「豪様はお忙しいから董卓様への指示は私にお任せ下さい。私、お菓子作り得意ですから大丈夫ですよ。でもその前にカステラを詳しく知りたいから豪様が作ったカステラを食べさせて下さい」

豪様が、可愛いしゅぎましゅ。

まさか私が男の人を可愛いとか思える日がくるなんて。

豪様がお菓子作りをする姿は、可愛いんです。これが北郷さんが言っていた、ぎゃっぷ萌えなんでしょうか。あの大きい手で、細々とした作業をする豪様。カステラの焼き上がりを真剣な目でみる豪様。うまく焼き上がったカステラを私が食べる姿を嬉しそうに見る豪様。カステラの美味しさにも驚きましたが、今日はそれ以上の収穫がありました。

side 天和

豪君達が帰って来た時に、私達を睨みつけてきたのは先生の婚約者さんだったんだよ、しかも西涼のお姫様なんだった。

「先生の本当の名前って馬休さんだったんだー」

「そうですね。数え役萬三姉妹として、いつか西涼に公演に来て下さいね」

「任せて。先生それより豪君知らない？」

「豪さんは朝一で曹操様に呼び出されたみたいですよ」

「えー、帰ってきたら歌聞いてくれる約束してたのに」

「そんな消極的で大丈夫ですか？今回の戦で張遼や呂布も加わったんですよ、あの人達もいつ豪さんに惚れるかわかりませんよ」

「えー。やだ、それは絶対に嫌。ちーちゃん、天和ちゃんお姉ちゃんは今から豪君を探しに行ってきます」

「いいけどお姉ちゃん、曹仁様の居場所わかるの？」

「うー、先生ーどうしよう」

「ジャックさんわかりますか？」

「豪さんは多分町外れの丘で夕日でも見てるよ。張角それと豪さんにこの歌を歌ってやれ」

王連さんは懐から歌詞の書いた紙を渡してくれた。

「王連さんありがとう。行ってくるね」

.....

王連さんに言われた場所に行くと、豪君が寂しげに夕日を見ていた。

「豪君、となりいいかな？」

「天和か、どうした？」

「歌を聞いてもらいに来たんだよ」

私は王連さんにもらった歌を歌う。

それは故郷から遠く離れた人が故郷を思い出している歌だった。

「ジャックの野郎、余計な真似しやがって。天和ありがとな。また頼む」

「喜んでくれて良かった。でもお礼が言いたいの私の方だよ。私ね、ちーちゃんや人和ちゃんからお姉ちゃん陳留に来てから歌がうまくなったねっ言われたの」

「今までは人を好きになる気持ちを知らないで恋の歌を歌ってたんだから、当たり前なんだけどもね。だからこれは私に恋を教えてくれたお礼」

豪君の頬に口付けをした私の顔は夕日より真っ赤になっていた。

豪の雇用計画 調の決意に、離里の収穫、天和の感謝（後書き）

只今リクエストでもらった凧の幕間も書いてます
御遣いは魏横断が必要だから徐州太守にしました

指摘感想お待ちしております

もう1人の姉アメル　くアメルのお説教と雑里く（前書き）

アメルを知らない方は、もう1人の姉を先に見てください。

もう1人の姉アメル　くアメルのお説教と離單く

side　メイメイ

この間、事務所に行った時に飲み友達の医者から豪の面白い話を聞いたのよ。

だから今日は豪の兄貴分のフォルテにその報告。

「へー、あの不器用者が2人も連れてきたのか」

「そう、それが2人とも美少女なのよ。1人はお人形さんみたいだし、もう1人はボーイッシュな感じの娘。写真見る？」

「可愛い弟分の女だから当たり前だろ。おいおいマジかよ、2人も可愛いね。この話は俺以外にしたのか？」

「してないわよ。アグラ爺さんは豪を連れ戻しかねないし、リュウグやロツカはアメルに言っちゃいそうだしね」

「ケイナもヤバいな。まあ一番はアメルにばれたら豪がやばいだろう？」

「フォルテさん、メイメイさん何の話をしてるの？豪君がどうしたのかな？」

「いやアメルは弟の豪は随分とモテるみたいだなーって話をしただけよ。そうよねフォルテ？ちつ逃げやがった」

「メイメイさんは今豪君がお仕事で行ってる世界に行けるんだよね。」

ならそこで私を召還して欲しいな」

豪、悪いわね。

今のアメルに逆らうのは危険なの。

side 豪

「豪様、メイメイさんって言う女の方が訪ねてきましたけど」

メイメイさんが何で？

いや確かに遮断をしたから問題はないけども

「おー元若人。中々いい部屋に住んでるわね」

「メイメイさんまだ許可してないに。まあメイメイさん見た目は中華系だから、この世界に来て違和感はないんだろうけども」

「豪様、随分と親しげですけども、こちらの女性はどちら様でしょうか」

俺から視線を外さないで睨むなんて、雛里も強くなったな。

「この人はメイメイさん。昔凄く世話になった人なんだよ。…用があれば俺から行くのに」

「用があるのは私じゃないんだよなー」

メイメイさんが意味ありげにサモナイ石を見せる。まさか…

「メイメイさんそれは不味い。やめとこ。オジキが怒っちゃう」

「私じゃないけど許可はもらったみたいよ」

訝しがる雛里を、何とか部屋から追い出すと部屋に光が溢れ出す。光が消えた場所には1人の女性が立っていた。

「ア、アメルお姉ちゃん元気そうだね」

「豪君、何かお姉ちゃんに報告する事があるんじゃないのかな？」

そう言うとアメルお姉ちゃんは笑顔で近づいて来た。

怖えー、アメルお姉ちゃん目が笑ってないって。

「何かなー？あまり心あたりはないかも」

あるとしたら、陽とか凧とか雛里とか調とか天和とか。

「なら豪君の心を、見て良いわよね」

駄目って言ったら、麻痺を、させてでも見る癖に。

アメルお姉ちゃんは俺に触れると、ふかーい溜め息をつく。

「豪君に彼女ができるのはお姉ちゃんも嬉しいよ。でも5人の女の人と同時に親しくする様な子にお姉ちゃんは育てた覚えはないわよ。正体を教えた2人は仕方ないとしても、他の女の人にはきちんとして誠意を見せなさい」

「お姉様、お話はごもつとも何ですけども、できたら話の続きは、場所を変えて欲しいな」

「豪君はお姉ちゃんの話をちゃんと聞いていたのかな？それとも聞かれたら不味い女の子がまだいたりするの？」

アメル姉ちゃん、聞かれたら不味い言葉が目白押しだろ。

「知らぬが仏つて言葉があるだろ？いくら遮断をしてるとはいえ俺の正体がバレたらやばいの」

「わかったわ。確かにここじゃ不味いから豪君の職場でお部屋を借りて続きをしましょう。それとしばらくは、家から通いなさい」

「えー、それは色々と不便だよ。ねえリンリンさん：チツ逃げたな」

「いいから行くわよ」

有無を言わせぬ雰囲気の前、今や断罪の天使と化したアメルお姉ちゃんの白い翼が俺を包む。

俺は絶対に、この人が原因で姉という存在に頭が、あがらなくなつたんだと思う。

side 雛里

豪様の慌てぶりが気になり部屋の様子を窺っていたのですが、意味不明な言葉が多く正確な内容はわかりませんが、豪様が遠くに連れて行かれようとしているのだけはわかります。

「や、止めてください。豪様を連れて行かないで下さい」

気付いた時には私は部屋に飛び込んでいました。

「雛里？やばっ。姉ちゃん羽をしまって」

「えっ、あ、うん。今すぐしまっよ」

「あ、貴女は誰でしゅか？豪様は渡しません」

私は、豪様と背中から羽を出していた怪しい女の間割り込んで、睨みつけます。

「豪君、この子は？」

「うちの文官で鳳統。姉ちゃん先、俺の頭なかを見たからわかるだろ？」

「豪様、その人は誰なんですか？」

side 豪

誰って言われても…

雛里の質問に答える「場合によっては、アメルお姉ちゃんの文字通りの天罰が倍增する訳で」

「雛里、答えを知らればお前は全てを無くすかもしれないだよ」

「私は天涯孤独の身です。劉備さんの元から離れた私にとって豪様から離れるのは全てを失うのと変わりません」

雛里の言葉が終わると同時に俺達3人は光に包まれた。

「オジキ、助かったよ。ナイスタイミング」

「豪君、創竜様になんて口を聞くの！創竜様申し訳ありません。全くいつからこんな口聞くようになったのかしら」

天使たるアメルお姉ちゃんにとって、神たるオジキは絶対的な存在なんだよな。

「相変わらず仲の良い姉弟よ。さて小さき客人に問う。今の世界から離れるのと豪から離れるのを主はどちらを選ぶ？言うておくが儂に小賢しいごまかしはきかぬぞ」

「私は親がいけません。親代わりの水鏡先生も親友の朱里ちゃんを裏切ったので会わせる顔がないんです。だから私から豪様を取らないで下さい」

そのまま、泣き崩れる雛里。

近づこうとする俺をアメルお姉ちゃんが制する。

「鳳統ちゃんだっけ？豪君の事好きなの？」

小さく頷く雛里。

そんな雛里をアメルお姉ちゃんは優しく抱き締める。

side 雛里

アメルさんと言う女の人に抱き締められると、心も体も不思議な暖かさに包まれました。

記憶にありませんが、お母さんに抱かれている感じはこんな感じなのでしょうか。

少しすると、色々な事が私の頭に流れ込んできました。

「アメルさんは、豪様のもう1人のお姉さんなんですね？」

アメルさんは私の涙を優しく拭うと微笑みながらこう言ってくれました。

「鳳統ちゃんと豪君が結婚すれば雛里ちゃんのお姉さんにもなるんだよ。豪君お姉ちゃんは鳳統ちゃんを義妹として認めるよ。もし泣かしたりしたら、わかるわよね？」

その後、アメルさんに、お芋のスープを作ってもらった私はある決意を決めたんです。

それは外史の知識を学び豪様の知恵となる事です。

もう1人の姉アメル くアメルのお説教と雑里く（後書き）

最初はハーレム化する豪がアメルに叱れる幕間だったんですけども…

感想指摘お待ちしております

幕間 指導員の歩く道（前書き）

このままじゃ幕間が続きそつな予感が…

幕間 指導員の歩く道

side ジャック

管理事務所第2会議室

どこの鈍感上司のせいで、1つの外史から3人の指導員が生まれる事になった。

今日はその説明会。

あの3人の事だから豪さんに対する質問が集中するだろうからって、俺が講師に抜擢された。

「3人とも顔見知りだけど、本名で挨拶させてもらう。今日お前達を担当するジャック・ウォーレンだ。基礎知識は頭に文字通り叩き込まれていると思うから質問形式でいくぞ。なんか質問はないか？」

「なんで、わざわざ指導員や管理者を置いてまで外史を存続させているのですか？」

流石は鳳統、まともな質問だ。

「外史は人の想いが形になった場所でもあるが、今は魂の修煉場所としての役割も担っているんだよ。正史の人口が増えた事により輪廻転生が正史だけでまかなえなくなって外史で修煉をする様になったぞうだ」

「指導員の仕事はどの様な物があるんですか？」

流石は真面目娘の楽進。

「大別すると短期と長期に分けられる。短期は主に、強くなりすぎて物語に支障をきたす者を倒す討伐・重要な役割をする者が力不足の時にする代理・要やその周りの人間を危機から救う救出や保護、同じく身代わり・人間関係を操作する為の道化とかがある。長期は転生や潜伏して武術を身につけたり信頼を得なきゃいけない場合に行っている」

「豪ちゃんは、どんな仕事をしてたんですか？」

朱霊、いきなり豪さん絡みの質問かい。

「あの人の場合は短期が多いな。代理としては魔王・裏組織の幹部・要に敵対する將軍・鍛冶職人・悪代官。後は討伐と要人の保護、身代わりぐらいだよ」

早い話が悪役とか損な役回りが殆ど。

「転生って何の為に行うんですか？」

鳳統は随分と、アメルさんに気に入られたみたいから気になるだろう。

「転生は武や魔術の基礎を学ぶ為に行うんだよ。後は今回の豪さんみたいに自然な形で潜伏する時にも使われている。外史から指導員が出て行く時には、代理をたてるか記憶を消すのが殆どでアメルさんみたいに記憶が継続されているのは希なケースなんだよ」

「それで豪ちゃんも同じ事をしようとしたの？」

「あれだけ長くいると、記憶を消すのは無理があるから違う外史から本物の曹操の弟を連れて来ようとしていた。あの人がかなり悩んでいたんだぜ」

一回連れてくる予定の曹仁を見たけど、金髪的美男子で曹操には似てはいるけど、豪さんと見た目はかすりもしない。

「豪は仕事で大怪我した事はないのか？」

「怪我どころか殺されにくい仕事もあるぐらいだよ。まっ痛いのは痛いけど、仕事に支障がでる物は創竜様が治してくれる」

つつか強制的に治されて、次の仕事をさせられるんだけど

「体験談は本人から直接聞け。後質問がないなら終わるぞ」

side 豪

し、視線が痛い。

ジャックの野郎、何言っただよ。

「つつ訳で俺がどんな仕事をしてきたかを教えるんだけど……近い、3人共距離が近過ぎる」

「こうでもしなきゃ豪ちゃん逃げそうだもん。気持ち伝えなきゃ私達からも逃げてたんでしょ？」

「外史から連れ出すのつ物凄い大変な事なんだぜ。3人も連れてくるなんて滅多にないんだし」

「アメルさんからも、聞いたんですけど豪様は外史で怪我をする事が多いって本当ですか？」

アメルお姉ちゃん、雛里に何を教えたんだよ。

「殴られる・斬られる・刺されるは日常茶飯事で、毒殺・火攻め・水攻めとか色々あったな」

ありゃ、3人共もどん引きしているな。

「中には魔王の代理をした俺を倒した日を、国をあげてのお祭りをする外史もあってな。俺の姿を描いた板に代わる代わる物をぶつけて盛り上がるそうだ」

「豪様は、そんな思いをして辛くはないんですか？」

「怪我よりも、キツイ思いをしてるからな」

.....

古びた砦に雨が降り注ぐ。

静かな砦には暖をとる為の薪がパチパチとはぜる音が響いている。

「新入りでかい体を縮こませてないで、きちんと火にあたれ」

「なーに何日もしないで救援がくるさ」

「これで、よーやく母ちゃんとガキに会えるぜ」

「愛しの彼女とデートだ」

後の世で、涙雨の砦と呼ばれる場所に俺はいた。

今この外史では、大規模な戦争が行われている。

戦争は長きに渡り、今俺の周りにいる人達も民間からの志願兵。

そりゃ自分のガキや彼女が徴兵されるとなりや志願するだろうし。

俺の今回の仕事は、敵軍に滅ぼされた砦の唯一の生存者を無事に逃す事。

志願兵という名の民間人が惨殺された事により戦況は逆転する、そして証言者以外の救出は認められていない。

つまり目の前にいる気のいい人達を見殺しにしなくてはいけないし、敵軍が来るからと知らせて逃がすのも駄目だ。

やがて敵襲により、火と阿鼻叫喚に包まれていく砦。

生存者の少年を体を張って逃がした俺はその場に佇む。

救う事も復讐する事も許せれない立場を、物言わぬ遺体に責められている感じがした。

「まあ無事に外史は予定通り進んだらしいぜ。さっ暗い話は終わりにして昼飯を食べに行こうか。しっかり飯を食べて指導員の仕事をしなきゃな」

傷を負っても歩き続けた男に、彼を慕う3人の乙女が、そっと寄り添う。

幕間 指導員の歩く道（後書き）

指導員の仕事は英雄の代理とかもあります。

ジャックの嫁さんとリクエストであった風とのデートを書いたら本編に行きたいです

感想指摘お待ちしております

幕間 凧との違い引き 〱半裸の卑弥呼様リクエスト〱（前書き）

書くの時間かかりました

策略や悪者豪は書きやすいのに

幕間 凧との違い引き く半裸の卑弥呼様リクエストく

side 真桜

いや、最初聞いた時は驚いたで。

何しろあの真面目な凧が、雄獅子の兄ちゃんの事を豪って呼び捨てにしてたんやからな。

凧に聞いたら様付けは、豪に止めろって言われたし、豪と同じ目線に立ちたいからだってノロケおった。

「ほー、いよいよ凧も恋愛成就か。なら違い引きもしたんやろ？」

side 凧

豪と過ごした時の殆どは鍛錬だったし、たまにお茶に行くぐらいで。その口付けは済ませたが……

「ま、真桜ちゃん、からかい過ぎなの。凧ちゃんが恥ずかしさの余り倒れちゃったの」

「沙和心配を掛けてすまない、大丈夫だ」

(豪と違い引き…してみたい。でも豪は忙しいから無理だよな)

side 豪

ジャックと飯を、食っていると于禁と李典がやってきた。

「凧と逢い引きをしろだと？」

「そうなの。凧ちゃんは雄獅子さんと逢い引きしたいけど、雄獅子さんが忙しいから遠慮をしているの」

「だからって、なんでお前等が来るんだよ」

中学生じゃないんだからよ

「豪さんが楽進の気持ちに気付けない鈍感男だからですよ。女がみんな朱霊みたいに押しが強い訳ないじゃないですか」

「さすがは王連や。うちらだと、そこまではつきりとは言えん」

「このお仕事大好き鈍感男は俺に任しておけ」

「ありがとうな。凧きつと大喜びするで」

そう言つと于禁と李典は大急ぎで部屋を飛び出して行った。

「ジャック、お前このくそ忙しい時になんて約束してんだよ」

「向こうでデートすれば時間は関係ないでしょ？それと豪さんデートの時にスーツや皮ジャンを着るのはやめてくださいよ。その筋の人にしか見えせんから」

.....

デート当日

凧が買い物をしたいと言うので近くのショッピングモールに行くことにした。

俺の服装は、無難に薄茶色チノパンに紺のジャケット、チエックのシャツ。

「で凧は何を見たいんだ？」

「似合わないと思うが、こっちで着る服を買いたくて……」

そっぴや凧はすれ違う女の子の服を羨ましそうに見てたよな。

「そっか。なら先ずは服を買いに行くか」

「豪は大丈夫なのか。男は女と服を買いに行くのは好まないと聞いた事があるが」

昔の俺なら無理だったと思う、経験はないけど。

「おいおい俺を誰の弟と思ってんだ。姉ちゃん達が服を買いに行く時は何時も荷物持ちしてんだぜ」

ちなみに少しでも飽きた素振りをみせたら叱れる。

姉ちゃん曰わく将来の為の修行だそうだが。

「いいのか？」

凧が恥ずかしそうに上目遣いで聞いてくる。

新鮮だ、物凄い新鮮だ。

命令の姉ちゃんや押しの強い陽に慣れた俺にしてみれば風の態度は新鮮で仕方がない。

「こっちの服が欲しいんだろ？それなら答えは一つだ」

その言葉で風が笑顔になった。

ちなみに女と服を買いに行った時には俺なりの鉄則がある。

- 1・後ろをついて歩かない
- 2・いつも視線の先にいる
- 3・飽きても素振りは見せない
- 4・長くなるのは覚悟する
- 5・どっちでも似合うや何でも可愛いは禁句

姉ちゃんと出会う前なら絶対に無理だった買い物のお供も今や鍛えられて、ここまでなったんだよ。

悪戦苦闘の末に風が選んだのは、クリーム色のロングスカートに水色のシャツ、褐色の肌白い髪風の風にとても似合っていた。

風の手には、パンパンに膨らんだ紙袋がある所を見ると、今着ている服は俺に合わせてくれたんだろう。

豪との逢い引きを満喫していたら、1人の女性が親しげに話しかけてきた。

黒く長い髪に白く透き通った肌、白魚の様に細い指でお淑やかな雰
囲気をもった私とは間逆の人。

私の顔が曇っていくのがわかる。

「豪さんいつも亭主がお世話になっております。お連れの方は楽進様ですか？ジャックから聞いている通り素敵な方ですね。豪さん大切にしないと罰が当たりますよ」

「豪こちらの方は？」

「凧は会うのは初めてだったな。ジャックの女房だよ」

ええー！

あの無愛想な王連さんの奥様が、こんなにお淑やかな美人？

幕間 凧との違い引き 〱半裸の卑弥呼様リクエスト〱（後書き）

華琳の教育の成果ができました

感想指摘お待ちしております

ジャック伝　く小藩を守る物は転生してきた者でく（前書き）

今回は殆ど恋姫や本編と関係がない、ジャックの嫁さんの話です。
豪とジャックに興味がない方はスルーしても問題はないかと…

俺は生まれたばかりらしく、目も見えないし、体もうまく動かせない。

（はつきりしているのは意識だけか。しかし赤ん坊ってのは不便だね）

次の瞬間、俺は暖かいものに包まれた。

「目が覚めたのね。本当に可愛い坊や、私の大切な坊や」

サーチで探ると、俺を抱きしめたのは女性で、話の内容からするとこの外史での俺の母親らしい。

（親に会うのは初めてだ）

生まれた外史では、物心ついた時には孤児院にいた。

（母親の暖かさってのは、随分と眠気を誘うもんだな…）

この外史に来て、早いもんで7年がたった。俺がいるのは、国の南にある小藩の穩海藩。

外史での俺の名前は若駒桜練わかこまおうれん、若駒家は藩の武術指南をしている。しかし若駒桜練って。

創竜様が無理矢理干渉したのがわかる名前だよな、読み方を変えればジャック・オウレンになるんだから。

「桜練ここにいたのか？探したぞ」

「ひ、姫。どうされました？」

俺に話しかけてきたの穩海藩の姫君。

この外史で俺より1才年下なんだけども…

日焼けした浅黒い肌に短く切つてある髪、姫様つてより腕白坊主の方が、しっくりくるよな。ちなみに色黒だけど名前は雪姫、姫の母親が北国の生まれで、この名前をつけたらしい。

「鍛錬に付き合え。これは主命だぞ」

一度殿様と姫の前で、槍の腕前を見せたのが最後、この腕白姫の指南役にさせられてしまった。

「わかりたましましたよ。では道場へ行きましょう」

厳しくも優しい父親と暖かく優しい母親、初めて知った家族の温もり。

今の所は穏やかな日々、だけどこれは外史だから何らかの事件や戦がある筈だ。

あの時と同じ後悔をしない為に、俺はある人に鍛錬をお願いしていた。

みんなが寝静まった夜、辺りの気配を探ってから連絡をとる。

「豪さん今日もお願いします」

そのまま、目を閉じて向こうに渡る。

ちなみに豪さんの鍛錬方針は習うより慣れる、慣れるよりやってみるだった。

迫ってくる壁に押しつぶされない様に槍で切り崩していくとか、違

う外史の魔物だらけの森に放り込む、豪さんとの耐久鍛錬とか、ちなみに怪我をしても豪さんが治療して再開されていく。穏やかな日々は余計に俺を焦らせた。

外史が動いたのは俺が15才になった年、近くの大藩が、いきなり攻め込んできた。

前は穏海なんて小藩を、歯牙にもかけていなかった大藩の藩主は成長した雪姫に結婚を申し込んだがにべもなく断れた事に腹をたてたらしい。

8人目の側室に、自分より年が半分以下の娘に目をつけるオッサンに流石に殿様も領けなかつたんだろうな。

確かに姫はきれいになったけど、中身は腕白坊主のままだぜ。

やれ遠乗りにつき合えだ、鍛錬につき合えだってお淑やかさのおの字もない。

明日いよいよ戦になるって夜にも俺は呼び出された。

「私ね、ずっと桜練の事が好きだったんだ。だから父様にわがまを言っただけで結婚を断ってもらったら、こんな事に……」

姫を腕に抱きながら俺は決意を決めた、親父もお袋も姫も殿も穏海藩は俺が守るんだ。

姫を城に送り届けた後の家路の途中に豪さんがいた。

「そろそろ、お前もにこの外史の話をしてやろうかと思ってな」

雪姫物語

小さな藩のお姫様が、侵略してきた大藩に毅然と立ち向かっていく話。

結末は雪姫は雪の如く戦場に儂く消えていったと記されていた。

「ふざけるな。それじゃ姫は親父やお袋は穩海藩のみんなは滅ぼされるだけの存在なんですか？」

「殆どはな、今のお前みたいに憤慨した人が望んだ外史もあるんだよ。お前の仕事は穩海藩を守り抜き、この外史から姿を消す事だ」

「姫は、姫を連れて行っちゃ駄目なんですか？」

「指導員が、外史の要を連れ出してどうするんだよ」

「駄目だって言っても俺はやりますからね」

「正史も外史も全て敵に回してもか？」

「大事な女や家族も守れない奴が、他人なんて守れないです」

豪さんは、深い溜息をついた後に、ニヤリと笑って

「ジャック、いい面になったじゃねえか。任せときな。四の五の言う奴は雄獅子が噛み切ってやるよ。先ずは人の恋路を邪魔しにきた奴を蹴り殺しに行くぜ」

豪さんは俺を連れて敵軍に夜襲をかけて追いつくどころか全滅させて、敵の殿様には2度と穩海に手を出させない様に誓わせたらしい。まあ、かなりグロイ魔術も使って脅していたが。

後から聞いた話では、創竜様は俺に外史の無情さと、物語に名前や姿さえでてこない人達にも人生があるのを伝えたかったらしい。

「ジャック、呆けてどうしたの？」

「久しぶりに穩海の事を思い出していたんですよ姫」

「姫か、何か懐かしい響きになっちゃったわね。樂進ちゃん達もこんな日がくるのかしらね」

「大丈夫だろ。豪さんもう尻に敷かれてるし」

俺と雪を顔を見合わせて笑いあった。

あの不器用な恩人にも、こんな穩やかな日が来る事を願って。

ジャック伝 小藩を守る物は転生してきた者で (後書き)

この話を呼んでくれた方に感謝です。

恋姫の二次創作で凧の名前が2回でただけです。かなり短くしたジャックの話でしたけど、どうでしたか？

次話から本編になりますんで勘弁して下さい。

感想や誤字以外の指摘はあるんでしょうか？

あったら嬉しい。

孤独な獅子と歌姫と（前書き）

ようやく本編に戻ります

孤独な獅子と歌姫と

side 華琳

曹操軍・会議の間

それは普段通り朝議をしている時の事だった。

朝議には、機密漏洩を防ぐ為にある程度の地位をもった将以外の参加は認めていない。

それを破ってまで、一般兵が駆け込んで来た。

「た、大変です。」

「今は朝議の最中よ。くだらない要件は受け付けないわよ」

「昨日、袁紹軍が突然徐州に侵攻をしました。公孫贛は抵抗するも数に押されて徐州から敗走した模様。袁紹軍は勢いそのまま我が領内に向かっていきます。その数は約3万」

兵士は言い終えると、そのまま床に倒れ込んだ。

「誰かその者を休ませる。今から議題内容を変更する」

「恐らく袁紹軍と最初に向かうであろう砦には風と稟がいます。兵の数は約7百人しか…」

絶望的状况に立たされた仲間を思っただ、桂花が齒噛みをしている。今から救援に向かっても到底、間に合わないわね。

慌てて少数で出た所で背後から襲われる可能性の方が高い、ここは風と凧の才にかけるしかないようね。

「華琳様、風ちゃん達の側には水脈を掘りに豪ちゃんが行っています。豪ちゃんの性格からしたら絶対に…」

単騎でも袁紹に攻め込みかねないわね。
それでも…

「豪も風も凧も同じ家族よ。弟1人の為に軍は起こせないわ」

悔しい、あの子を守れる強さが欲しかったのに。

豪の性格からして危険にさらされている風達を見過ごす筈がない。
でも私は王、守るべきは民と兵なのよ。

誰も何も言わない。

いえ、言えないんでしょうね。

「桂花、袁紹軍がさらに侵攻してくる可能性が高いわ。すぐに軍を編成しなさい。今回は防衛戦よ、守るべきは民の住む街を重要視しなさい」

今直ぐに豪を止めに行きたい、助けに行きたい。

望んだ力を手に入れたのに、こんな時には使えないなんて滑稽ね。

side ジャック

不味いな。

俺は最悪を予想して朱霊・楽進・鳳統に声をかける。

「俺はこれから単騎で豪さんの所に向かう。豪さんのやる事は予想がつくしな」

「豪ちゃんは袁紹なんかには負けないよ」

朱霊の言葉は、自分に言い聞かせようとしている感じだ。

「ああ、豪さんは負けはしない。お前達は魔法の話は聞いたよな、恐らく豪さんは自分に威圧と恐怖を付加させると思う。それなら勝ち戦を捨てたくない袁紹軍を追い返せるからな」

今潰走すれば、折角手に入れた徐州をみすみす曹操に渡しかねない。

「しょ、しよれなら豪様は大丈夫なんですな」

「体はな、3万人に効かせる魔法となりや砦の将や兵にも効果がでるんだよ。豪さんが活躍すればする程、守れば守る程に砦の奴等は豪さんを恐れちまうのさ」

「そんな豪はなんで、そこまでして…」

「お前達も涙雨の砦の話は聞いたろ？あの人はまだあれを引きずっているんだ。豪さんの雄獅子って異名は強さや見た目だけでついたんじゃないんだよ、家族をもたない獅子は常に一匹で動くんだ、周りの動物に怖れられて避けられながら。あの人が外史を救っても畏怖の対象になるから、ついた異名でもあるんだよ」

「なら私達が行けば大丈夫だよ。陽が豪ちゃんを怖がるなんてないもん」

「お前達は隊に属してるから無理だろ？俺はこっちでも、豪さんの部下だから駆けつけても平気だしな」

全くあの人は、いつでも自分1人が傷ついて済ませようとするんだから。

side 豪

程イク達がいる砦に顔を出そうとしたら、妙な気配を感じた。

サーチをかけると大勢の反応が……人数3万人、袁紹軍か。

宣戦布告もなしに攻め込んできたな、袁紹よ一回ビビらせてやる必要があるな。

周りに誰も居ないのを確認して目一杯濃いめに恐怖と威圧の魔法を付与する。

（死なれるより、ビビられた方がましさ。曹操軍の誰1人としてあの砦の二の舞にはさせねえ）

愛用の斧を携えて俺は袁紹軍に突っ込んで行く。

side 程イク

稟ちゃんも、兵隊さんも私も怯えています。

袁紹軍にではなく、曹仁様に怯えているんです。策をねろうとしていたら、恐怖で震えがとまらない兵隊さんが報告に来たんです。

「そ、曹仁様が袁紹軍に単騎で突撃されました」

砦の見張り台に凜ちゃんと向かうとそこには

「ふ、風あれは…」

そこには返り血を浴びながら袁紹軍、次々になぎ倒していく曹仁様がいきました。

今までは頼もしく感じていた姿も、今はとてつもなく怖く思えます。

「す、隙を見て砦を破棄します。風達は曹仁様の足手まといに、しかなりません」

正直に言うと、今の曹仁様から一步でも遠くに離れたいんです。凜ちゃんも、兵隊さんも無言で頷きました。

side 袁紹

「猪々子さん、あのみすぼらしい砦はもう墮ちまして?」

「姫逃げよう、今すぐあの化け物から逃げよう」

猪々子さんは顔を青くして震えていました。

「何をおっしやってるの。あんなみすぼらしい砦にそんな将がいる

訳ありませんわ」

袁紹が言うのは無理はなく、実質的な被害は500人も超えていないだろう。

「ひ、姫様お逃げ下さい。曹仁がそこまで迫って来ています」

「斗詩さん何を馬鹿な事をおっしゃって。ヒッ！」

豪は袁紹達から離れた場所にいるも、その体から発している異常なまでの恐怖は豪の体の大きさと相まってすぐそこまで来ている様に思わせていた。

「あ、あの化け物から徐州を守るわよ。全軍徐州に向けて前進しなさい」

しかし、いくら徐州に向かって進んでも背後から感じる異常なまでの恐怖感が消えなかった。

豪としては、袁紹達をできるだけ皆から引き離すつもりだったのだ。

side 天和

「ちーちゃん、人和ちゃん早く早く今日はこの近くで豪君がお仕事を頑張っているんだから、私達の歌で元気つけてあげなきゃ」

「天和姉さん、私達は明日の公演会の準備に来たんだからね」

「人和ちゃん、天和お姉ちゃん聞いてないわよ」

当たり前よ。今や豪君が水脈を掘る姿は陳留名物になってるんだから、近くにいるのに見逃す訳にはいかないんだから。

「天和姉さん、あれって曹操軍の人達じゃない？」

人和ちゃんが指差す方向には曹操軍の人達がいた、豪君もいるかもしれなと思うた私は駆け寄る。

「この中に豪君いないかな？天和が歌を聞かせに来たって伝えて」

「そ、曹仁様は、ここには居ない。」

兵隊さんは、豪君の名前を聞いた途端に震えだした。

「曹仁様なら、この先の砦の近くにいますよ」

話し掛けてきてくれたのは程イクちゃんだ。

程イクちゃんから話を聞いた私は怒りを抑える事が出来なかった。

「酷いよ、みんなしていつつもいつつも豪君1人に嫌な事を押し付けて。豪君は強いけど誰かを傷つけて喜ぶ人じゃないんだから」

「曹仁様1人に任せて砦を破棄ですか。策としては正しいかもしれませんが」

「人和ちゃん、全然正しくない。豪君はすっごい寂しがり屋さんなんだよ。いつも心の中では、いっぱい泣いてる泣き虫さんなんだよ。そんな豪君を怖いなんて信じれない！」

豪さんに追いつこうとしたら、張角達が程イク達にくっついてかかっていた。

「張角、その辺で止めとけ。豪さんは自分に妖術をかけたんだよ。その証拠にホレッ」

俺は程イク達を豪さんの術からとく。

「王連さん、風に何をしたんですか？何で風は、あんなに曹仁様が怖かったんですか？」

「豪さんがお前達を皆から引き離す為に、自分に恐怖感が増す妖術をかけたんだよ。だから気にするな、お前達は、このまま曹操に報告にむかえ。豪さんは俺が迎えに行く」

「私も豪君を迎えに行く。絶対に豪君は淋しくて心の中では泣いてるだもん」

「張角、今から行く場所は戦場だぞ？」

「わかってるよ。王連さんがついて来なくても1人で行くもん」

「まったく仕方ねえな。誰か馬を貸してくれ」

俺は後ろに張角を乗せて、豪さんに近づいていく。

side 天和

豪君がいた。

周りには沢山の死体、豪君は返り血を浴びて真っ赤になっている。そして泣いてる。

皆を守る為とはいえ人をいっばい殺したから。皆を守る為に大切な仲間にも恐れられたから。大切な仲間にも嫌われたから。

「張角、無理しなくていいんだぞ。今の豪さんから逃げても誰を責めやしない」

王連さんの言葉は、まだ途中だけでも私は豪君に駆け寄り、返り血なんて気にしていられない。

呆然としている豪君を力任せに抱き寄せる。

「豪君大丈夫だよ。私は豪君を怖がらないから安心して。ねっ」

side 豪

「天和、血つくぞ。後その……ありがとな」

「どう致しまして。でも豪君今度からはこんな無理しちゃ駄目だよ」

「豪さん、創竜様から連絡が入りました。返り血を落としてやるからその娘を連れて来いとこの事です」

side 天和

私達が淡い光に包まれたと思ったら、目の前に大きな竜がいた。

「すごい豪君、竜だ竜がいるよ。私初めて見た」

「娘に問う。お主その男は恐くないのか？」

「ふえー。竜って喋るんだね。全然恐くないよ」

「ふむ。ならば問いを変えよう、これを見てどう思う？」

私の頭の中に流れてきたのは竜さんに命じれて、色々な場所で戦って、恐がれている豪君だった。

「それなら私は、豪君が傷つく度に歌と愛で豪君を元気づけます」

私には戦う力もないし頭も良くない、けども豪君を元気にする事なら他の人に負ける気がしないんだもん。

孤独な獅子と歌姫と（後書き）

2つ分ければよかったかも、
感想指摘お待ちしております

曹操お説教伝 髭のない雄獅子はどら猫で（前書き）

感想でもらいましたが、ハーレム化が進む程に豪の威厳が目減りしていく気が

曹操お説教伝 髭のない雄獅子はどら猫で

side 豪

床って直に座ると冷たいんだよな。
ちなみに俺の心も冷え切っている。

正面には、素敵すぎる笑顔を浮かべているお姉様。

右手には笑顔なのに、目は笑っていない陽。

左手を見ると、無表情で見つめてくる凧。

右斜めにおわすは、ジト目で見てくる雛里。

左斜めで不機嫌オーラを溢れだしているのは調。

後ろには、春さん夏さん李典、于禁が仁王立ちしている。

俺は1人で3万人を追い返した英雄だろっ何て、強気な言葉が言える訳もなく、ただひたすらお姉様からの言葉を待っていた。

「豪、お姉ちゃん達が言いたい事はわかるわよね？」

分かりません、何て言ったらお姉様のお手元の鎌が煌めくかもな。

「豪ちゃんは陽達の心配なんて気にしてないんだよね？」

陽なら信頼をしてくれているものだど…

「豪は待つ身の辛さをしらないのだ」

凧、今まで待ち伏せされた経験しかないからさ。

「豪様、私がどれだけ心配して泣いたかわかるんですか？」

離里、賊や裏社会の人達は良く泣かしただけだな。

「兄貴は常識を覚える必要があるよな」

調、常識は人や社会で違うんじゃないかなー。

「ごめんなさい。でも結果的には皆の700人は無事だったんだし袁紹も冀州まで追い返したんだし、結果良ければ全て良しには…ならないですよ。はい」

でも俺にしてみれば、あれぐらいは無茶のうちに入らないだけだな。

「豪、ここで風達に使った妖術を使ってみなさい」

「この距離では、かなり心に負荷がかかるよ」

「使いなさい」

「それなら…」

俺は、あの時と同じく自分に、恐怖と威圧を付与する。

後ろで李典達が震えだしたのがわかった。

「これで効果がわかったら？それじゃ俺は行くぜ」

この近くで浴びれば姉ちゃんと言えども…

次の瞬間、俺の頭にガンツという音と痛烈な痛みが響いた。

「豪、お姉ちゃんは、まだ立っていいとは言っていないわよ」

姉ちゃんは俺のあたまを鎌の後ろで叩いた後に刃を首筋に当ててきた。

あの魔法は俺には少しでも恐怖を感じていれば、それを拡大するものなだけ。

姉ちゃんが俺に全くビビってないのか、覇気で無理やり抑えたのか。

「陽・凧・調・雛里、全員で豪を取り押さえなさい」

短刀を持って、さらに素敵な笑顔を浮かべるお姉様。

「姉ちゃん、何をしてくれるのかなー？」

「王連から聞いたわよ。あの妖術は見た目も重要なそうね」

ジャックの野郎、種明かしをするなよ。

「それと短刀は関係ないと思うんだけどな」

「風達が豪に脅えたままだと、戦の時に大変でしょ？それに前からこれ気に入らなかつたのよね」

俺の大事な髭に笑顔で短刀をあてるお姉様。

「姉ちゃん、いやお姉様。髭は許して、それがないと雄獅子じゃなくなる」

「もう曹仁が雄獅子ってのは各諸侯が認識しているから、髭は用済みよ」

ここは優しい幼なじみに

「久しぶりに髭のない豪ちゃんを見たいな」

あれ？それなら俺を敬愛してると言ってくれている風は

「髭のない豪か楽しみだ」

えー！ここは人を思いやる気持ちは強い雛里に

「どうせなら可愛い髪型にしましょう」

最後の望みは、男の気持ち解る女だと信じてるよ調。

「兄貴、モミアゲも切るぜ」

雄獅子の雛が、タテガミに例えれた髪が…

「懐かしいー。昔の豪ちゃんだ」陽、お前が生まれる前から豪なんだって。

「豪様、可愛いでしゅよ」

雛里に可愛いって言われるのは、なんか微妙なんだけども。

「兄貴、今の兄貴はあんまり恐くないぜ」

調、俺から迫力をとつたら何が残るんだ。

「豪、その姿で逢い引きをしたいな」

風、部下に見れたら俺の威厳が消えるんだって。

「うん、豪は可愛いんだから髭はいらないわね」

お姉様、俺は可愛くないし髭も必要なんだって。

背後からは、先まで震えていた李典達の笑い声が聞こえてくる。

「何や雄獅子やなく、どら猫って感じなの」

「真桜ちゃん、わかるの。ひなたぼっこをしながら大の字で寝ていそうなの」

ちなみに先生と馬超殿は

「なんか暑苦しさがない豪さんって不思議ですね」

「それだけスッキリしても療の半分も爽やかさが、ないんだから逆に凄いよな」

春さんと秋さん

「豪、髭で迫力を増していたなんて武人失格だぞ」

「豪様、姉上は久しぶりに可愛い姿を見れて喜んでたんだぞ」

許緒と典韋

「流琉、今の曹仁様はあまり恐くないね」

「私は、まだちょっと怖いかも」

焰竜と創拍

「創拍、豪さん見なかったか？」

「焰竜、笑いながら言ったら失礼だよ。プツ」

天目と天津

「豪さん嫌がらせですか？手元が狂うじゃないですか」

「天目、豪さんは体張って笑いをとりにきたんだよ」

荀イク

「髭が無くて暑苦しいわね。いつそお面でも被れば」

趙雲

「曹仁殿が雛里にも頭があがらないとは。まあ今なら劉備殿も怖がらないだろうが」

天和

「ちーちゃん、人和ちゃん見てみて。お姉ちゃんの豪君可愛いでしょ」

ジャック

「豪さん、雪に写メを送ってもいいですか？」

いや、いいんだよ、程イク達も俺を怖がらなくなったしさ……

曹操お説教伝 毳のない雄獅子はどら猫で（後書き）

感想指摘お待ちしております

忠犬はち豪吠えるの事(前書き)

豪にいつ鬣はやそつ?

忠犬はち褻吠えるの事

side 豪

「つかぬ事をお伺いしますが、お姉様これは何でしょうか？」

姉ちゃんから渡されたのビツチリと予定が書かれた竹簡。

「見てわからない？今日の貴男の予定よ」

それは見ればわかるけども…

「兵の鍛錬は陽、武官の鍛錬は春さん、警備は風、税制の調整は雛里って書いてあるのは？」

「貴男の担当よ。豪を派遣して欲しいって要請があつた部署の中の将から、お姉ちゃんが厳選した将を担当にしてあるから」

道理で男連中の名前がない訳だ。

「それと竹簡は毎朝お姉ちゃんが、渡してあげるから髭を剃ってから取りに来なさい」

「姉ちゃん忙しいから無理しなくても…」

「毎朝来なさい」

反論の余地はなしか。

それなら俺がとる態度は男らしく

「はい、わかりました、お姉様」

姉ちゃんに従う事だ。

こないだ、秋さんから

「華琳様は皆に兵を出さないって決めた後に一人で泣いておられたんですよ。豪様も自分は大丈夫だからではなく、自分がどれだけ周りに心配をかけてるかも、お考え下さい」
ありがたいお説教をもらったばかりだし。

このシステムを知ったジャックからは

「雄獅子からどら猫になって、今度は忠犬になりましたか。派遣で馳せ参じる忠犬派馳豪ですね」
何て言われた。

そんな規則正しい生活を送らせていた、ある日の事。

姉ちゃんから、渡された竹簡には何も書いていなかった。

「姉ちゃん何も書いてないって事は」

自由ってやつですか。

「今日は豪の開拓を学びたいって言う太守が来ているからよ」

「へ？あれは他の奴が学び様がないんだけど」

「来るのは益州の太守劉璋。劉璋は自分と似た境遇ながらも女以上に活躍している豪を尊敬しているんですって」

でその劉璋に会ったんだけど、劉璋は汚れなき名家のお坊っちゃんって感じ、それが尊敬の眼差しで見てくる。

「曹仁様お会いできて光栄です。女性以上の武を持ち、民の為に労苦を厭わない曹仁様は僕の憧れなんです」

「買い被り過ぎですよ。私は私に出来るだけの事をしているだけですから」

その時、劉璋の護衛らしい武官のつぶやきが聞こえてきた。

「これだからガキはどう見ても女より強そうには、見えないぜ」

見るからに武官って感じの女が不機嫌そうに睨んでいる。

劉璋は父親の跡を継いで太守になったそうだから、あの武官は素直に従いたくないんだろう。

「劉璋様の今回の従者には随分と武に自信がある者がいるそうですね」

「魏延さんの事ですか？とても強いですよ」

先呟いていた女がピクリと反応している。

サーチをかけてみると予想通り魏延だった。

「あの高名な魏延様ですか。よろしかったらこの曹仁、後学の為に是非とも手合わせを願いたいのですが」

「私は曹仁様の武を見たいのですが、魏延さんに確認をしない事に

は
「

「俺は構わないぜ。雄獅子だかオジジだか知らないが、女より強い男なんて、いるわけないだろ」

「魏延さんよしてください。曹仁様申し訳ありません」

先まで俺の悪い癖が始まったと苦笑いしていた姉ちゃん達も、魏延の態度を見てむかついたらしく俺を止めようとしな

「では我が軍の鍛錬場にご案内致します」

.....

side 凧

「な、凧なんか怖いで」

「真桜、私は何時もと変わらないぞ。あの魏延とか言う女が私の大事な豪に無礼な態度をとったぐらいで怒る訳がない」
そうあの女は、今から手痛い現実を見るのだから怒る必要はない。

「早く得物を持ってきな。怖くなったんならお姉ちゃんに泣きついてもいいんだぜ？」

怒る必要は…

「待って下さいよ。3本勝負で3戦した結果で勝敗を決める、それでいいですね」

「1戦目でお前が泣いて終わりだよ」

「豪の前に私が彼奴を殴る」

「凧ちゃん堪えるの。ここは我慢なの」

「沙和頑張れ。朱霊さんは春蘭様が抑えてるで」

side 豪

いや、いいよ魏延さん。

そこまで悪態をついてくれたら俺も気兼ねなくストレス発散ができるってもんだ。

魏延の得物は金棒か。

斧は最後にするとして、1戦目は無手、2戦目は短刀にしとくか。

魏延はリーチがある武器で戦ったら文句言いそうだし。

side 魏延

なめやがって、曹仁は、男の癖に無手で挑んできやがった。

俺は、とっと終わらせて益州に帰りたいたいんだよ。

鈍砕骨を振り下ろす為に頭上高く持ち上げるが、何故かそこからピクリとも動かす事ができなくなっていた。

不思議に思い、見てみると曹仁が鈍砕骨を掴んでいる。

「おい、随分と舐めた口を聞いてくれたな？劉璋の手前怒らないで

おいてやったが、ここは鍛錬場だ、泣いても終わらないぜ」

曹仁が不適な笑みを浮かべだかと思うと、強烈過ぎる頭突きを食らわしてきた。

「何で男の頭突きが師匠の一撃より痛いんだ？」

「さて先ずは1本ですね。次は短刀あたりを使いますか」

side 馬超

うわっ、痛そー。

私は思わず自分の額を押さえる。
相変わらず曹仁は規格外と言つか何と言つか。

「療、私は曹仁が槍を使っている所を見てみたい」

流石は療だ。

優しい笑顔で頷いた後に

「豪さん、翠が槍を見たいって言うてるからお願いしますよ」

それで曹仁が槍を使っただけ。

物凄い速さでつかれた槍が魏延の足元に穴をあけていく。
当然、魏延は一步も動けないでいた。

「自慢の金棒でしっかり防げよ」

曹仁はそう言うと、思いつき薙いで金棒ごと魏延を弾き飛ばした。

「さて次は、お待ちかねの斧の出番だ」

あの曹仁の顔は私も見た事があるんだ。

だからその結果もわかる、いや私の時よりもひどかった。

魏延の周りを、巨大な斧がスレスレで縦横無尽に飛び交っていく。

息をつかせぬ猛攻つて、ああゆうのを言うんだな。

実際に息をつけなかつた魏延が気絶してたし。

私も魏延の態度には腹をたてていたが、今はかなり同情をしている。

曹仁の後ろには、朱霊と楽進が手ぐすねを引いて魏延が気絶から覚めるのを待ち構えているんだ。

side 陽

うん、スッキリした。

陽の大切な未来の旦那様豪ちゃんを馬鹿にした魏延に色々と思い知らせてやったんだ。

その後は劉璋様は豪ちゃんに色々と質問をしていた。

「豪ちゃんお疲れ様。随分と懐かれていたね。豪ちゃんは劉璋様をどう見る？」

「素直で優しい少年だよ。乱世じゃなきや名君主と呼ばれただろうな」

「素直で優しいのが駄目か、同じ名家の男として何とかしてあげたいんじゃないの？」

「してやりたいのは山々だけでも、他人の家に口出しはできないさ。せめて部下がしっかりと支えてやれば安心なんだけどな」

「豪ちゃんの事は陽達が支えてあげるからね」

とりあえず今の私にできるのは、名家生まれの優しい幼なじみをギョッと抱きしめる事かな。

忠犬はち褻吠えるの事（後書き）

今回の劉璋は佐助を書くときに持ったイメージで書きました。
感想指摘お待ちしております

益州への案内人 曹仁その1（前書き）

御遣い達の領内横断はなかなか納得できる展開を思いつけませんでしたが、ある方から、厳しくもありがたい指摘をいただき新しい展開を思いつきました。

益州への案内人 曹仁その1

side 豪

どうして俺の姉達は、無茶ぶりが、好きなんだろう。

事務所から緊急呼び出しがあり、行ってみると居たのはアメルお姉ちゃんだった。

アメルお姉ちゃんは、俺の顔を見るなり

「豪君、雛里ちゃんとお友達を仲直りさせてあげて」

「はい？お友達って、雛里が誰かとケンカしたのか？」

考えられるとしたら、陽か調か。

「朱里ちゃんって娘なんだよ」

確か、それは孔明の真名。

「それって、御遣いの所の軍師だよ」

アメルお姉ちゃんは、平然とした様子で答えた。

「知ってるよ。豪君は今行っている外史を糺した後どうするかきちんと考えている？」

「とりあえず新しい曹仁を、どこかの外史から連れて来るつもりだけ」

「それじゃ駄目でしょ？豪君は黒幕さんを糺すのに色々とお世話になったんだから、きちんと元に戻しておかなきゃ。お姉ちゃんも教えたでしょ？よそ様にお邪魔したら、使った物を戻してから帰ってきなさいって」

それは友達の家遊びに行つた時の話では。

「それと雛里に何の関係があるんだよ」

「雛里ちゃんは豪君について来てくれるんだよ。だつたら親友の孔明ちゃんや育て親の水鏡先生に笑顔で挨拶させてあげるのが男の甲斐性でしょ？まさか血の繋がってない育ての親や姉弟なんて関係ないなんて言わないわよね？」

血の繋がっていない育ての親兼姉に言われたら反論の仕様がなない。

「わかつたよ、わかりました。もうすぐ御遣い軍が魏の領内を横断するから、その時に雛里を御遣い軍に監視の名目で派遣させるよ」

アメルお姉ちゃんは、えらく深い溜め息をつくと頭をおさえながら呆れた様子で話し始めた。

「本当に朴念仁なんだから。そんな事したら雛里ちゃんはどっ思つか？豪君に捨てられたらって思っちゃうんじゃないかな？」

「そうなるもんなの？」

それなら、もう少しマジに考えるか。

確か、正史では劉備軍は蜀に難癖をつけて奪い取る、でも今の劉備軍こと御遣い軍には、そんな無茶を通す余力はないだろう。

余力がないのは、御遣い軍と黒幕が関係ない証。

蜀の劉璋君と俺は顔見知りで、劉璋君には頼りになる部下が必要。

そうゆう事ね……

全く、俺の姉達ときたら、口で何やかや言っても俺が傷つかない様に配慮してくれているんだよな。

今までと違い、今回の外史から連れ出す人間は、外史に親や友達が居て想いを残している者が殆ど。

そいつ等が外史を視た時に、安心して視れなきゃついて来てもらった俺にも責任がある。

つまり雛里が御遣い達を視た時に悲しい顔をする様じゃ駄目なんだよな。

俺の表情の変化に気づいたアメルお姉ちゃんは、安心した様で笑顔だ。

「流石は豪君、きちんと新しい筋書きが書けたみたいね」

「ありがとなアメルお姉ちゃん。雛里や陽達が俺に着いてきて来れるんなら、後悔をさせちゃいけないんだよな」

「そうよ。外史を糺したから、それでもう関係ありませんじゃ、残された人は悲しすぎるんだよ」

アメルお姉ちゃんも、俺と二度と会えなくなるかもしれないって聞いた時には大泣きをしたらしい。

「特に今回は転生もしたしな。ちっとはっかし、正史の担当者に会
つてくる」

きちんと保険はかけとかないとな。

.....

華琳執務室

色々と画策をしてから、外史へ戻ると、姉ちゃんからの緊急呼び出
しがきた。

「豪、今からお姉ちゃんと一緒に来なさい。御遣い軍がうちの領内
を通らさせて欲しいって、州境で騒いでるみたいよ」

早速きましたか。

それでは、将来の嫁の為に一仕事しますか。

「姉ちゃん、この一件俺に任せてもらってもいいかな」

「豪の案次第ね。……あら、面白いじゃない」

.....

side 孔明

不味いですね。

袁紹さんに攻められたら私達が目指す先は益州。
その為には曹操さんの領内を通る必要があります。
今袁紹さんが手を出し渋る相手は、曹操さんしかいないのですから。
私達との関係性からして、最初に応対にくるのは地方の文官か、最
悪でも軍師の荀イクさんだと思っていました。
でも今私の目の前にいるのは曹操さんと曹仁さん姉弟なんです。

「うちの領内を通る必要性を、教えてもらおうかしら？」

「は、はい。私達は益州の劉璋さんの所に身を寄せようと思ってい
ます」

益州は、統治に隙があると聞いていますから、そこをうまくつけば。
でも曹仁さんの次の一言が、私の希望を打ち砕きました。

「それは丁度いい。私達は最近益州と同盟を結びましてね、特に私
と劉璋は真名を交換したんですよ。劉璋の所までは不詳曹仁が案内
させてもらいます」

この申し出を断るのは難しいですね。

曹仁さんが、いる限り曹操軍も劉璋軍も手を出せません。

益州まで行くのに、これ程頼もしい道案内人はいないんですから。

益州への案内人 曹仁その1（後書き）

思いついたは、いいが横断だけで3話はつかっちゃいそつ。
感想指摘お待ちしております

益州への案内人 曹仁その2 (前書き)

大食らいの牙さんから頂いたバトンをアップしましたので、そちらもよろしくお願いします。

益州への案内人 曹仁その2

side 離里

今、皆にいる私の前を、劉備さん達が通過して行きます。

私が豪様に頼まれたは創拍様と焰竜様の奥様と彼女がいるかどうかの確認です。

豪様に教えてもらったサーチを劉備軍に展開すると、懐かしい面々を確認する事ができました。

みんな疲れています。

特に朱里ちゃんは、この難局を乗り切ろうと必死に頭を働かせているのがわかる。

「鳳統、創拍達の女はいたか？」

私が確認した後に、王連さんが豪様に連絡をする手筈になっています。

「ええ、お二方とも同行されていました。ただ不思議な反応があったんですが、男性なのに意識は董卓さんという方達がいたので…」

「それ豪さんの仕業。宦官に董卓達の意識を刷り込んで、董卓って誤認させる魔法をかけたんだとよ」

「半分は董卓様が陳留に居るのをわからなくする為で、残り半分は悪戯ですか。豪様らしいですね」

朱里ちゃん気をつけてね。

今、道案内をしているのは、規格外の悪戯をする人なんだよ。できたら朱里ちゃんに、私の大切な人だよって紹介したいんだけどね。

side 豪

ジャックから、連絡が来た。

どうやら、例の2人は一緒についてきてきているらしい。

御遣い軍に金を貸している商人もいるみたいだ。

後ろで孔明と話をしているのが、そうなんだろう。

ちなみに御遣い軍は、先頭に孔明と張飛隊、中央に御遣いと劉備と近衛兵、続いて侍女や民で殿に関羽隊。

この先には採掘場があり、そこには創拍と焰竜が控えている。

そして商人なら、新しい採掘方法を見たい筈、むしろ手に入れたいだろう。

案の定、孔明が俺に近付いて来る。

「曹仁様、誠に申し訳ありませんが、民も疲れているので休憩をしたいのですが」

「これは気づかずに、すみませんでした。この先に採掘場がありまして、そこには鉱員達の宿舎があります、そこで休まれては、どうでしょうか？」

孔明が浮かべた笑顔は渡りに船で安心したのか、こちらの無警戒さに安心したの物なのか、わからない。

俺を扱い易いと判断したのか、例の商人が揉み手をしながら近付いて来る。

「これは高名な曹仁様にお会いできて嬉しく思います。あつ私は商人をしている張世平と申します」

確か張世平って、三国志で劉備に金や馬を借りパクされた奴だよな。多分世の中の商人の想いが、この油断も隙もない男にしたんだろう。

「いえ私など、まだまだ若輩者で、張殿は私にどのような用事がありますか？」

「後学の為に、有名な陳留の採掘場を見学させて頂きたく、いえ決して秘密は漏らしませんから」

よく言っぜ、細作を民に紛らわせていた癖に。

その細作も今頃は、ジャックの、おもてなしを受けているんだけど。

「それなら担当の物呼びます。おいっ！創拍と焰竜を呼べっ」

俺は、2人の名前を殊更に大きく呼ぶ。

打ち合わせ通りに待機していた創拍達が顔をだす。

サーチには、明らかに反応している女が確認できた。

「この2人が採掘や鉱石関係の担当者です。詳しくはこの者達からお聞き下さい」

恐らく張世平は2人を籠絡にかかるだろうが、出来高制にしている2人を動かす金をだす事は出来ないだろう。やがて、創拍達が打ち合わせ通りに騒ぎだす。

「どうした？2人共客人の前で、大きな声をだすなんて」

「曹仁様、この方が金を渡すから採掘の秘密を詳しく教えて欲しいと言われたもので、つい」

「それはいけませんな。2人は我が軍にとって掛け替えのない人材であり、私の友人です」

「いえ決して、その様なつもりではないんですよ」

慌てる張世平の前に縄に縛られた男達が転がるように倒れ込んできた。

「豪さん、こいつら鉱山を探っていましたよ。張世平との関係も、きれいに話をしてくれました。」

side 孔明

私達が呆気にとられていると、それまで穏やかだった曹仁さんの雰囲気が一変しました。

「張さんよ、随分と舐めた真似をしてくれたな。この落とし前はどうつけてくれるんだ？」

「すみません、つい出来心で」

張世平は、平身低頭謝るも曹仁さんは追求を緩める気配はない。

「俺が聞きたいの謝罪じゃなく、どうするかだよ。ジャック、雛里を連れてきて採掘の秘密がバレたら場合の被害額を計算させる」

そこで私は、久しぶりに懐かしい親友の名前を聞いた。

side 雛里

今、私がいるのは採掘場にある小屋の一つ。

向かい合わせに座るのは、久しぶりに会う親友の朱里ちゃん。

「朱里ちゃん久しぶりだね。張世平からの借金は私達に権利がうつたから。曹操軍から劉備軍への要件は2つ。侍女2人に進退を選ばせる権利を与える事と劉璋軍に加盟する事だよ」

「雛里ちゃん、久しぶりだね。本当にそれだけでいいの？曹仁さんに私達がしてきた事を考えたら……」

私も、似たような質問を豪様にした事があつたな。だけど、今なら胸を張って言える。

「朱里ちゃんは、小さい子供の悪戯に本気で怒らないよね？私の豪様はそんな小さい器はもってないの」

親友に対してだから、できる自慢と惚気。

「雛里ちゃん、なんか遅しくなったね」

「豪様の恋人は、これぐらいじゃないと務まらないんだよ」

朱里ちゃんと色々な話を終えた私が向かう先はただ一つ。

サーチで探し当てたその人は、創拍さん達4人に一生懸命に頭を下
げれ困り切っていた。

「豪様、無事に話し合いを終えました。創拍さん今度は私が豪様に
お礼を言いたいので、貸して下さいね」

女の人2人は驚いているみたいだけでも、創拍さん達は笑いながら
答えてくれる。

4人が居なくなったのを確認して、私は豪様に抱き付いた。

「豪様、ありがとうございます。お陰で朱里ちゃんと仲直りできま
した。だ、だからこれは私からのお礼でしゅ」

こんな大事な時に噛んだ私を豪様は優しく包み込んでくれる。
そしてお互いの唇を深く求め合いました。

益州への案内人 曹仁その2（後書き）

ようやく鍛冶屋の妻2人を回収できました。
次は豪の悪戯第2段が？

感想指摘お待ちしております

益州への案内人 曹仁その3 (前書き)

無理やり着地した感じが…

益州への案内人 曹仁その3

side 豪

劉璋君に手紙をだしたら、御遣い軍を州境まで迎えに来てくれる事になった。

約束の場所に居たのは、劉璋君と、劉璋君にベツタリな魏延さん。啞然としている俺に妙齡の女性が話しかけ来た。

「お主が曹仁殿か。儂の名は敵顔じゃ。うちの弟子が迷惑をかけたらしいの」

「弟子つて魏延さんですか？いやあれが魏延さんなんですか？」

魏延さんは俺の事を眼中にも入らない感じで、劉璋君に寄り添っている。

「あやつは前から、劉璋様を慕っておったが身分の違いや女の気位が邪魔して気持ち伝えれずにイライラしておったのじゃ。そこに劉璋様に誘われてウキウキで陳留に行ったら、大好きな劉璋様は曹仁殿に夢中で相手にしてくれない」

「だから俺を逆恨みしたと」

「うむ、女の気位を曹仁殿にボロボロにされて、ようやく素直になったようじゃの」

「さいですか」

これなら劉璋軍の結束は固いな。
後はジャックに迎えに行ってる人が来れば良しと。

side 雛里

豪様に呼ばれた部屋に行くと、厳しい表情をしたお爺さんがいました。

「豪様、こちらの方は？」

悪戯を仕掛けるのが嬉しい様で、ご機嫌な様子で豪様が答えてくれました。

「サーチをかけてみな 御遣いをおさえるには最適な方だ」

サーチをかけてみると、その人の正体がわかりました。

確かにこの人なら、北郷さんには効果てき面でしょうね。

「雛里、後は任せませ。孔明殿によろしくな」

side 一刀

何とか無事に、益州に入る事ができて安心をした。

「益州には、どんな可愛い娘がいるかな？」

「話を聞いて心配して来てみれば、この馬鹿孫が。一刀儂が来たからにはビビシ行くからの、女子と遊ぶ暇なぞないと思えっ」

「爺ちゃん何で、ここに？」

話しかけてきたのは数年前に亡くなった爺ちゃんだった。

「あるお方に頼まれたのじゃよ。お前が道を違えぬ様に指導して欲しいとな」

こんな、こんなふざけた真似をする奴は一人しかいない。

「曹仁の馬鹿野郎！。俺の自由が！」

「ほう。儂に会えて喜ばないどころか、恩人たる方を恨むとはな。その根性鍛え直してやる」

side 朱里

「雛里ちゃんが連れてきたあの人は誰なの？」

「北郷さんのお爺さんだよ。うん北郷さん嬉しそうだね」

「えっ、ご主人様のお爺様って亡くなっただんじゃ？」

「そこが私の豪様の凄い所なんだよ。これで私達と敵対する無謀さが分かったでしょ？」

「よ、妖術なの？でも何で」

「北郷さんは英雄になろう、周りの期待に応えようと無理をしているから。思いつきり叱ってくれたり、甘えられる人が必要なだって」

そうか、私達はご主人様に知らないうちに、無理をさせたり意見に迎合をしていたのかも知れない。

「曹仁さんって、不思議な人だね」

「知れば知る程ね」

そう言って、雛里ちゃんは本当に嬉しそうに微笑んでくれました。

益州への案内人 曹仁その3（後書き）

その1で豪は正史から、一刀の爺ちゃんの魂を外史に連れて来て身体も与えました。

この外史では後蜀は生まれません。

感想指摘お待ちしております。

&見たい幕間やバトンのキャラもお待ちしています

シングルライフからの卒業？（前書き）

報告でも書きましたが幕間のアイデアがなくて、困った時の陽頼みです。

いや書きたい幕間はあるんですけど、調が正体を知ってから話なんですよ。

調が正体を知るいい流れがなくて

シングルライフからの卒業？

side 豪

曹仁は曹家の長男、よし間違いない。

朱霊の親は、曹家に仕える武官、確かに間違いなし。それならこの状況をどう考えたら、いいんだろうか。俺の部屋が、シンプルかつ渋めに決めていた部屋が、陽に自由に模様替えされていく。

数時間前

曹仁私室

陽は俺の部屋に来るなり、こんな事をいいたした。

「豪ちゃん、豪ちゃんのお部屋に行きたいな」

「今来てるだろ？」

「ここじゃなく、あっちのお部屋。陽が一番乗りしたいの」

「良いけど、何も無いぞ」

「やったー！今行こう、直ぐに行こう」

陽は、よほど嬉しいのか笑顔ではしゃいでいる。

そいや、あの部屋にアメルお姉ちゃん以外の女が、

来るのは初めてかも知れない。

とりあえず、事務所に行き、そこからマンション近くのスーパーで飯を購入する。

金は俺がだすのに、カップメンや揚げ物系の惣菜は陽により、却下。

「これからの豪ちゃんのご飯は陽が作るよ。きちんと体に良いお料理を作つてあげるね」

どうやら、オジキは外史の情報を陽に流す際に、健康知識やレシピも流したらしい。

「しかし、陽ずいぶんと、お菓子を買ったな」

「前からチョコレートやアイスクリームって、食べて見たかったんだもん」

まあ、いくら知識が頭にあつても味はわからないだろうしな。

買い物袋を大量に持たされたまま、俺のマンションに到着。

「よっ、管理人のおっちゃん久しぶり」

「豪さんがこんな時間に帰つて来るなんて珍しいね。……一緒に居る女の人は保護対象者かい？」

「そんなのを自分のマンションに連れてこねえよ。こいつは」

「はじめまして陽の豪ちゃんが、いつもお世話になっています。私は豪ちゃんの幼なじみ兼恋人兼将来のお嫁さんの朱霊です」

管理人のおっさん驚くのはわかるが、泣きながら奥さんの仏壇に報告ってどうよ。

「さて着いたぜ。ここが俺の部屋だ」

「へー、広いね。お部屋も沢山あるんだ」

「自分の武具を置いたり、酒を飲んだ部下が泊まったりするからな」

「女の人が泊まった事はあるの」

「泊まる以前に部屋に入った事があるのがアメルお姉ちゃんだけだし、アメルお姉ちゃんも抜き打ちの食事チェックに来るくらいだし」

アメルお姉ちゃんは俺が隠したカップメンを的確に見つけては、持ち帰って行く。

「綺麗にしてあるし、お部屋の数もあるし、でもちょっと寂しい感じがするお部屋だね」

「仕事で居ない時が多いし、男の一人暮らしなんてこんなもんだよ」

「えーでも今度からは駄目だよ。陽も住むんだもん」

「へっ？いや新人の指導員には、寮もあるんだぜ」

「豪ちゃんは、陽が知らない世界で一人ぼっちで寂しくしていても、平気なの？」

若干、涙目になりながら見つめてくる陽。

「平気じゃないけど……」

「なら決まり さっ陽をお店屋さんに連れて行って」

「お店屋さんって、何屋に行きたいんだよ」

「お部屋が寂しいから、カーテンも変えたいし、可愛いクッションも欲しいな。後は陽が使う食器でしょ。きちんどこっちに住むのは、まだ先だけでもお泊まりもする時もあるからお泊まりセットも必要だね」

そして陽はウキウキでクッションやらカーテン、食器を選んでいく。俺なら絶対に買わないオレンジ色のカーテンやら野菜の形のクッション、ライオンのキャラクターが描かれた食器とかを購入させた。そして俺の部屋は、一気に可愛いらしくされてしまったんだよ。

俺の大好きな焼酎は今の部屋では、絶対に浮いてしまう。

「豪ちゃん、豪ちゃんがお仕事から帰ってきたら陽にお帰りなさいっ言わせてね」

可愛いくされた部屋も、陽にしてみれば部屋を明るくしたかったんだろうし。

何より大切な幼なじみの笑顔がある部屋には、不思議な温もりに満ち溢れていた。

シングルライフからの卒業？（後書き）

豪は、そのうち引っ越しさせられるかも
感想、指摘、見たい幕間お待ちしております

豪の荷車・荊州旅紀行 くその1

side 華琳

手元にある二通の手紙を見ると、笑みがこぼれてきた。

一通は袁術から、数え役萬三姉妹の公演を荊州で行って欲しいという依頼の手紙。

もう一通は、孫策から正式に曹家と孫家で同盟を結びたいという密書。

袁術は、歌が好きだと聞くから、数え役萬三姉妹に興味をもったのね。

一方、孫策は独立を狙っているから、うちとの同盟を望むのも、納得できるわ。

麗羽や袁術と戦うにあたって、有力な将を揃えている孫策達と相対するのは避けたいから、この同盟は歓迎すべきもの。

さらに、孫策の密書には同盟の提携には、曹仁が来て欲しいとの一文があった。

張角達との護衛という形で豪を同行させれば、自然な形で荊州の調査を行える。

私は最近モテはじめている可愛くも、不器用な弟の事を考えて思わず微笑んでしまう。

（豪が張角に同行するとなったら、陽達が大人しく待っているかしらね。もし陽達も同行するって言い出したら器量の見せどころよ）

side ジャック

おー、豪さん困ってら。

豪さんが張角に同行して、荊州に行くこと発表された途端にざつわついた朱霊達が。

それで我も我もと、同行を希望し始めた朱霊達が。

「豪ちゃんが代表で行くなら、副官が必要です。もちろん副官は陽だよ。豪ちゃん」

朱霊の迫力に無言で頷く豪さん。

「同盟には軍師同士の話し合いが不可欠でしゅ。豪様の軍師と言ったら私です」

荀イクだと駄目なのか？と聞いたら鳳統が泣くだろうから、また無言で頷く豪さん。

「それなら調査が必要だな。調査と言ったら俺だよな兄貴」

胡質にだけ、正体を教えていない後ろめたさから無言で頷く豪さん。

「張角達の護衛と言ったら気心を知っている私が適任です。そうだよね豪」

今更、凧だけ外したら気まずいのかやっぱり無言で頷く豪さん。

曹家の長男曹仁であり、自分達の想い人の豪さんから許可をもらいはしゃぐ4人娘。

それを見て、胃を押さえて顔をしかめている豪さん。

その豪さんを見て、ニヤニヤしている曹操。

今更だけど豪さんは尻に敷かれるタイプだと実感した。

豪さんが無言で、こっちを睨んでくる。

多分俺を同行させて逃げ場所を作りたんだろうけども、すいませ
ん雪から

（豪さんの将来を考えたら、そろそろみんなで行動する必要がある
よね）

って言われているんですよね。

side 豪

引いてている荷車の中からは、賑やかな声が聞こえてきている。

それは俺が参加するのは絶対に不可能な女子会というもの。

いやさ、一応俺は曹家の長男で、中の人達は曹家の家臣なんだぜ。

俺に荷車を引かせて女子会ってどうよ。…と胸の中だけで愚痴って
みる。

今は曹家の長男でも、元は空気を読む日本人で、しがないサラリー
マンなんだよ。

早く誰か御者台に来ないかな。

side 人和

荷車は、揺れも少なく快適そのもの。

みんな和気あいあいと旅を楽しんでいる…様に見えるけども。

（人和、人和なんかみんな怖くない？）

地和姉さんが言う通り、私達2人以外は明らかにお互いを警戒しあっている。

(誰が曹仁様と話ができる御者台に行くかお互いを牽制してるのよ)

その証拠に誰かが立とうとすれば、他の誰かが笑顔で話し掛けて阻止をする。

(女の闘いつてやつ?)

(曹仁様はくだらない争いを嫌うから、あからさまな敵意はだせないけども、一番最初はみんな譲りたくないんでしょ?)

(人和は誰が最初に行くと思う?)

(押しの強さでの朱霊様、軍師として隙をつける鳳統様、武術家の素早い動きの楽進様。この3人が有利かもね)

1人軍関係者じゃない天和姉さんは、迫力負けしているし。だけど最初に動いたのは意外な人だった。

「さて、兄貴も喉渴いてるだろうから、水でも届けてくるか」

残り4人が呆気にとられる中、胡質様があっさり御者台に座った。

side 調

御者台に座ると、兄貴の大きな背中が見えた。

その背中を見るだけで、俺の胸が高鳴り甘酸っぱい気持ちになる。できるだけ平然を装って、兄貴に声を掛ける。

「兄貴、喉が渴いたんじゃないか？」

俺は手に持った竹筒を兄貴に向かって投げる。

「調、気が利くな。こつも暑い中で荷車をひいていたら喉が渴くから助かるよ」

幌の中になると、気づかなかつたけど外は炎天下でうだるような暑さだった。

「しつかし兄貴も良くやるよな。馬に引かせて兄貴は、ふんぞり返っていても誰も文句言わないんだぜ」

「馬が引くより俺が引いた方が早いんだよ。それに、ふんぞり返っていたら、ケツがむず痒くなるだけだしな」

この人は本当に曹家の長男なんだろうか？
開拓に行けば作業員と一緒に働き一緒に飯を食う。

最初は警戒をしていた作業員達も、何時の間にか兄貴を自然に受け入れている。その姿は領主の弟と言うよりも、ガキ大将のほつがしつくりくる感じだった。

「確かに兄貴には似合わないよな。でも最初会った時の兄貴は印象違つたけどな」

「最初会った時には調はビビってたもんな」

「俺以外でもみんな最初は怖がるよ。最初はな」

兄貴を最初に見た殆どの人が感じるの、見た目の怖さと規格外の強さからくる恐れだろう。

その後の好き嫌いは、はっきりと別れている。

俺が調べた所、兄貴を嫌う理由は、生理的嫌悪・品の無さ・遠慮のない言葉・下々の者と仲良くする所があった。

特に女には、あまり好かれておらず新人の兵や、町の娘に至っては、名前を聞いただけで顔をしかめる奴もいた。

逆にある程度、兄貴と接している将や男には絶大な人気を誇っている。

兄貴は権力も力も絶大なのに、それを自分の為には決して振るわない。

そんな兄貴だから幌の中の4人も俺も惚れてるんだと思う。

豪の荷車・荊州旅紀行 くその1（後書き）

なんとか調に豪の正体を知ってもらわないと
感想指摘お待ちしております

豪の荷車・荊州紀行その2 雛里編(前書き)

そいや作者は雛里を二次創作でしか、知らないんだけどもキャラ的に大丈夫なんだろうか。

豪の荷車・荊州紀行その2 雛里編

side 豪

なんとか暗くなる前に予定していた町に着く事ができた。

宿屋も確保できたので、今日は寝台で寝る事ができる。

しかし汗臭くて仕方がない、暑い中荷車を引いたせいで、体中が汗臭い。

ただでさえ見た目が暑苦しいのに、汗臭いのは最悪だと思う。

それに俺は、お風呂大好きな日本人なんだぜ。

しかしこの時代の風呂は贅沢なもので、普通の宿屋に風呂はない。

ガキの頃も何度か外史を抜け出しては、部屋の風呂に入りに行ったし。

汗をかいた後に、熱い風呂に入ってキンキンに冷えたビールを一気に飲む、つまみは鳥の唐揚げにポテチ・枝豆等々。

決まりだ、陽達には疲れたから寝ると言っ戸にロックの魔法をかけておけばバレル事はないだろう。

そうと決まれば早速、ささやかな楽しみに向けて行動するのみ。

side 雛里

豪様が疲れたと言っていたのが心配で、部屋の前まで来たけんですけども……

部屋に人の気配が、全くありませんでした。

豪様、一人で向こうに行ったのかな。

そう言えばアメルさんが、豪様が1人で帰っているのが分かった時は連絡をして欲しいって頼まれていたんです。

まず、私は豪様に教わった手順で事務所に行きアメルさんに連絡を取ってもらいます。

しばらくすると、アメルさんが来てくれました。

「雛里ちゃんお待たせ。それじゃ行くわよ」

「アメルさんどこに行くんですか？」

「豪君のお部屋に行くのよ。鍵は私が持っているから大丈夫」

あわわ、豪様のお部屋なんて緊張してきました。

side 豪

風呂上がりの渴いた体に、キンキンに冷えたビールを一気に流しこむ。

「く〜。やっぱり発泡酒よりビールはうまいよな」

テーブルにはポテチ（オーツク塩味とカルーのコンソメ）唐揚げ物盛り合わせ・枝豆・焼き鳥が並んでいる。

しめのカップめんも準備も終えて完璧だ。

至福の一時、疲れたサラリーマンの憩いの時間。

2本目のビールに手を伸ばそうとした瞬間、俺は背中に寒気を感じた。

振り向くと、そこには…

「あ、アメルお姉ちゃん。急に来てど、どうしたんだ？」

俺の質問を、一切無視してアメルお姉ちゃんが口を開いた。

「豪君、お姉ちゃんいつも言ってるよね。きちんとお野菜も食べなさいって」

「枝豆や揚げ物についてきたレタスは、野菜に入らないのかな？」

「それだけじゃ全然足りません。揚げ物にマヨネーズかけるのも禁止。それにカップめんは、非常食でしか認めません」

「なんでだよー」

「豪君は塩分を取り過ぎなの。ほっといたら毎日カップめんにするでしょ？全く飽きないのかしら」

「きちんと塩・醤油・味噌・豚骨・焼きそばの、ローテーションを組んでるから飽きる事はない大丈夫だよ。ってアメルお姉ちゃん何でカップめんを片づけるんだよ」

「これは向こうに持って帰ってみんなのお土産にするんだから。みんな豪君を心配しているんだからたまには顔をだしなさい」

「わかったよ。でもなんで、俺が帰って来ているのわかったんだよ」

「雛里ちゃん入って来て大丈夫よ」

アメルお姉ちゃんが声をかけると、部屋の入り口から様子を伺う様にして雛里が入って来た。

「い、豪しゃま、お邪魔します」

「ちよつ、何で雛里が、ここにいるんだよ？」

「雛里ちゃんは、豪君が部屋に居ないのを、心配して連絡をくれたのよ」

「俺は汗かいたから風呂入りに来たただけなんだけどな」

「疲れたと言ったのが、逆に心配をかけた訳か。」

「す、凄いでしゅ。お部屋にお風呂があるんですか？」

あの外史で部屋に風呂がついているのは、余程の金持ちしかいないから雛里が驚くのも無理はない。

「俺が入っても余裕があるでかい風呂だぜ。雛里も入ってくか？」

このマンションを選んだ決め手はそれだし。

「いいんですか？でも着替えを持って来てないです」

「雛里ちゃん、大丈夫よ。来る時にお野菜と一緒に買っておいただから」

「そ、そんな悪いです」

「大丈夫よ。豪君から預かっているお金で買ったんだから」

アメルお姉ちゃんが、こっちに来た時の為に金を渡しているんだけど、野菜といい雛里の服といい自分の為には使わないんだよな。

「風呂の使い方がわからないと思うから、アメルお姉ちゃんと一緒に入ってくればいいよ」

.....

やばい、湯上がりの雛里がやばい。

風呂からあがってほんのりと赤くなった顔、大きめのTシャツだけを着ている雛里を、俺はまともに見る事ができないでいた。

ちなみにアメルお姉ちゃんは料理を作っている、意地でも俺に野菜を食べさせたいらしい。

「う、豪しゃま、黒幕は、誰についたか目星はつきましたか？」

雛里も緊張している為か、真面目な話題をふってきた。

「残っている所で可能性が高いのは袁紹か五胡、だけど袁紹の可能性はかり低い」

「どうしてですか？」

「黒幕は漢民族じゃないんだよ。誇りだけは高い袁紹が、異民族と手を組む可能性は低い。まっ袁術の所にいけば袁紹の噂も聞けるから目星はつくぞ」

そう、あの外史に居れるのも後少しなんだよな。

豪の荷車・荊州紀行その2 雑里編(後書き)

曹仁伝も、いつの間にか80話に
できたら100話を超えたいです。
感想指摘お待ちしております

豪の荷車・荊州紀行 その3 書きはじめる影(前書き)

今回の展開も、恋姫から離れすぎて、好き嫌いが別れるかもしれない
せん

豪の荷車・荊州紀行 その3 晝きはじめる影

side 調

袁術の領内に入ると、空気が変わったのがわかる。

民や街に活気が、少ないのが原因だと思う。

兄貴が、民の活力が国の活力と曹操様に提言した事もあり、陳留とその周辺の民は活気に満ち溢れている。

「酷いな。民がやせ細っている」

「税が高いんだろっさ。あれだけ痩せたら活気がなくなるのは当たり前だな」

「袁術の野郎、歌どころじゃないだろうに」

「調、街にいたら税金を中心に袁術の内政を調べておいてくれ。後最近の袁紹の噂も頼む」

side 豪

やっぱりか、調の報告書には袁術の重臣達が、主君が幼いのを良いことに甘い汁を吸っていると記されていた。

袁紹は袁紹で領土拡大したのは、良いが人手が足りずに統治がうまくいっていないらしい。

つまり黒幕は、五胡に協力をして各諸侯が戦で疲弊した時に攻め込むつもりだろう。

遅かれ早かれ袁紹とは、戦になる。

その後待っているのが、黒幕がいる五胡との最終決戦。戦の準備と同時に、この外史から俺が居なくつても大丈夫な様に準備をしておかなきゃいけない。

「豪ちゃん難しい顔をして、どうしたの？」

「陽か。もう少ししたら、この世界ともおさらばだから居なくなる準備を考えていたんだよ」

「準備って何するの？」

「前も言つたろ。他の外史から代役を連れてくるんだよ。今回は人数が多いから部下に動いてもらっている」

「華琳様や秋蘭様には言わないの？」

「言える訳ねえだろ？貴女が今まで弟だと思っていたの偽物です。偽物は用事が済んだから居なくなりますんで、何てよ」

「調ちゃんにも、言わないの？」

「言わないんじゃない、バレないようにしなきゃいけないんだよ。基本連れて来れるのは、1つの外史から1人までなんだよ」

凧も雛里も不可抗力みたいなもんだし。

「豪ちゃん一生懸命頑張ったのに、なんか寂しいね」

「それが俺達の仕事なの。4人も女を連れて帰ったら部下にしめしがつかないんだぜ」

実際、オジキが許可したから4人も連れて来れるんだし。

side 調

反董卓連合の辺りから、兄貴の様子がおかしくなっていた。

開拓も水脈や鉱脈を兄貴が見つけければ、他の連中だけでやっていける様にしてあるし。

不思議な事に、俺がどれだけ調査しても答えを掴む事ができなかつたんだ、普通は何か変化あった時にここまでうまく隠すのは不可能な筈なのに。

陽や雛里も何かを隠しているのはわかるんだ。

俺だけが仲間外れみたいで悔しい。

でもここで諦めた終わりだ、袁紹や袁術の事をもっと詳しく調べて兄貴に必要としてもらうんだ。

それは袁術の重臣を調べていた時の事。

袁術の重臣が影で誰かに会っているとの情報を掴んだ俺は現場に向かった。

(アイツは何なんだ。顔がない?)

1人は俺が目星をつけていた、袁術の重臣。

そしてそいつと会っていたの男か女かも、いや顔すらもわからない怪しい奴だった。

背はあまり高くない体型は華奢なようだけでも、頭から体をスッポリと一枚の布で覆っている。

顔は、まるで暗い闇に包まれている様でまるつきり分らない。

そいつが消えたと思った瞬間に俺の腹を痛烈な痛みが襲ってきた。

side 豪

「豪大変だよ。調が、調が」

凧が調を抱きかかえて連れて来た。

調の生気が大分弱っているのがわかる。

それにこいつは、

「凧、雪に連絡してあそこの病院に急患が行くって連絡しとけ。雛里にはアメルお姉ちゃんを呼ぶ様に言え。陽、天和にも向こうに来る様に伝える。今直ぐにだ」

俺は調を受け取るとすぐさまに向こうに渡る。

一刻を争う事態だけでも、この治療は、こっちではできないんだよ。

side ジャック

雪から連絡を受けた俺はすぐさま病院に向かった。

「ジャック、遅いよ。あの娘やばいかも知れないわよ」

寝台に寝かせられている胡質の腹が黒く盛り上がりウネウネと別の生き物様に蠢いていた。

「あれは魔物が寄生しているのか？胡質は魔力に対する抵抗力がないから不味いな」

「雪さん、魔物って何ですか？寄生って？調は大丈夫なんですか？」

いつも落ち着いている楽進も慌てている。
楽進だけじゃなく、他の3人もパニックになっていた。

「目を逸らさずに良く見とけ。あれが俺や豪さんが追ってきた奴のやり口だ」

side 離里

豪様は調さんのお腹で蠢いている物を掴むと、一気に引き抜きました。

王連さんは目を逸らすなと言いましたが、それを見た私は気が遠くなりそうになっていました。

豪様の手に握られていたのは、全身が真っ黒な不気味な生き物。それは何本もの触手を豪様の腕に巻き付けていました。

side 豪

寄生魔術か。

この魔物を調べれば黒幕を絞る事ができる。

「アメルお姉ちゃん、調を頼む」

俺は魔物を箱に押し込んで検査機関へ足を運んだ。
こんなものを使うなんざ糺すだけじゃ、終われねえぜ。

side 調

俺は気が着くと、真っ白な寝台に寝せられていた。

「目が覚めたか？早速で悪いがどんな状況で襲われたか教えてくれ」
今まで見た事のない射抜く様な視線の兄貴。

「わかenらいよ。布に包まれて顔もわからない奴だったんだ。顔が
真っ暗な闇に覆われていて」

思い出すだけで、体が震えてくる。

「そうか。嫌な事を聞いて済まない。今はゆっくり休め、そうしたら全部忘れてるよ」

「兄貴は彼奴が何者なのかわかるのか？俺は何をされたんだ教えてくれよ」

「聞かない方がいい事も知らない方がいい事も世の中にはあるんだよ」

「俺は全てを知りたいんだよ。真実を調べて知るのが俺なんだよ」

.....

気付くと俺はとてつもなく広い部屋に来ていた。

そしてそこには巨大な竜がいた……。
つて竜なんて本当に存在したのか？

「人の娘よ。真実を欲する者よ。真実は残酷で辛いものかも知れな

いぞ。それでも汝はそれを求めるのか？」

「教えて下さい。俺が何をされたのかを兄貴達が何を隠しているのかを」

「汝が耐えられぬなら記憶を消すからな」

俺の頭に流れ込んできたのは兄貴の真実と俺の腹に居た物の正体。

「調、大丈夫か？」

オジキまさかあのグロいのを、見せたんじゃないだろうな？」

「豪、それがその娘が望んだ真実じゃよ。そしてその娘はそれに見事に耐えた」

「兄貴、俺は兄貴が知っている真実は全部知りたいんだ。惚れた男の事は全部知りたいんだよ。どこまでもついて行くからな」

この世の中には、俺が知らない真実がまだまだあるんだよな。

豪の荷車・荊州紀行 その3 書きはじめる影（後書き）

これから幕間がなく、オリジナルな展開になる予定です。

感想、指摘お待ちしております

豪の荷車・荊州紀行 その3 天和の決意 歌う指導員（前書き）

何だかんだで曹仁伝も、終わりが見えてきました

豪の荷車・荊州紀行 その3 天和の決意 歌う指導員

side 天和

何もできなかった。

何も言えなかった。

倒れた調ちゃんのお腹で動いていた気持ち悪い生き物を見た時、私はただ呆然と立ち尽くす事しか出来なかったんだ。

私は陽ちゃんや凧ちゃんみたいに強くないし、雛里ちゃんや調ちゃんみたいに頭も良くない。

そんな私が、豪君の隣に居て大丈夫かな？
足を引く張るだけなんじゃないかな？

「おつ、天和ここに居たのか？探したんだぜ」

「豪君、私……」

やっぱり一緒に着いていく自信がないよ、そう言おうとしたけど

「悪いけど、仕事頼めないか？天和がいなくてうまくいかない仕事
がまわってきたんだよ」

豪君が頭を下げて、私にお願いをしてきたんだよ。

「私にしかできない、お仕事？」

「ああ、簡単に説明すると俺と一緒に外史に行って歌を歌って欲しいんだよ」

歌を歌う指導員のお仕事って。

side 豪

調を、外史から連れ出す手続きをしていたら、部下の1人が頭を下げてきた。

「豪さんすいません。手を貸してもらえませんか？」

「まったく、まず内容を話してみる」

部下が今取り扱っている外史は、ある少女が歌姫となり世界を平和に導いていく物語だそうだ。

「何だよ、この少女漫画みたいな外史は。俺の存在と間逆すぎるだろう？」

絶対に登場人物は美少年や美青年とかのイケメンしかいなんだろう。頼んできた部下も、イケメンだし。

「いやそれが要になる少女が、慢心してしまつて平和に導くのが難しくなっているんです」

そりゃな、周りはイケメンばかりでチャホヤされたら天狗になるなつても無理な話だよな。

要の少女は、歌を聞かせる相手を選び好みし始めたらしい。

「それじゃ俺なんかが行つたら逆効果だろ？」

少女と周りのイケメンに平和の有り難さを身を持って、体感させる事はできるけども。

「いや豪さんの彼女に歌手がいるって聞いたんですよ。その人も一緒に来てもらえれば、嬉しいんですけども」

あー、天和の上手さで要の少女の伸びた鼻を折って欲しいと。

「それなら天和じゃなくても歌のうまい奴は、いくらでもいるだろ？」

「その人が豪さんみたいな敵つい男を大好きなのが重要なんですよ。人は見た目じゃないって伝えて欲しいんですよ」

確かに、こいつみたいないなイケメンに、男は見た目より中味なんて言われても説得力がないよな。

言いたい事は、よく分かったが

「お前はもう少し交渉術を身につける。つうかそんなイケメンしかない外史に自分の女を連れてく馬鹿がいるか？」

天和の癒やしは、俺にとって今や必要不可欠なオアシスなんだぞ。

「お願いしますよ。話だけでも伝えて下さい」

話つってもな、イケメンしかない外史に行くから俺を見捨てないでねってのも情けないし。

その辺はぼやかして伝えるか。

私にもできるお仕事があるんだ。

「うん、やってみたいその子の前で歌えばいいんだよね」

「ああ、詳しくは俺の部下から聞いてくれ」

豪君の部下はきれいな顔をした男の人だった。

昔の私なら舞い上がっていたかもしれないけども、私の豪君と比べたら一味も二味も何味も足りないよ。

「始めまして豪君の彼女の天和です。豪君がいつもお世話になっています」

「へー、豪さんやるじゃないですか。こんな可愛い彼女を作るなんて」

「お前な、ここは私が世話になっているんですよって、答えなきやいけないだろ」

確かにね、彼氏の前で彼女を可愛いって誉めるには、美男子すぎる人だよな。

あれで彼女が彼氏より部下さんに好意をもつたら困るお仕事なんだし。

「困ってる豪君も可愛いー。豪君大丈夫だよ、私が好きなのは豪君だけなんだから」

豪君は無表情を装っているみたいけども、きつく閉じた口の端っこが緩んでいた。

前は曹操様が曹仁様を可愛いなんて言っていたのを信じなかったけども、一緒にいると豪君の可愛いさが、よくわかる。

side 豪

何だろ、この外史は。

会う男の大半がイケメンって。

お蔭で俺は何時も以上に目立っている。

あからさまに目を背ける女もいた。

帰ったら、ここの統括者とキチンとお話し合いをしておこう。

特に俺のお仲間な男の処遇については、肉体的コミュニケーションを交えながら解決策をみつきたい。

後できるだけ、早くこの外史から抜け出したい。

side 天和

来て良かった。

だって、ここで豪君を好きな女の子は私だけなんだから豪君を独占し放題なんだもん。

ビックリしたのは、この世界の男の人は齒の浮くような言葉も平気で言ってくるだよ。

でもみんな二言目は、豪君に睨まれて言えなかったけどね。

うん、何時も私がヤキモチを妬いているから、たまには豪君にも妬いてもらわなきゃね。

side 豪

この外史では、歌の上手さと見た目が重要視されるらしい。

つまり音痴で不細工な俺にしてみれば立つ瀬がない場所。

得意の肉体的コミュニケーションは野蛮とされるとの事。

とりあえず天和には要の少女と同じ歌の大会にでてもらう事になった。

要の少女は確かに歌はうまかったが、何かが足りない感じがした。

その答えは天和の歌を聞いて氷解する。

天和は歌に恋する切なさや楽しさを、自分の気持ちを込めて歌いあげた。

「豪さんの彼女すごいですね。この外史の人間を歌で魅了するなんて」

「あいつはそんな器用な人間じゃないよ。歌が好きで、人に喜んでもらいたいから歌うんだよ」

天和の歌は戦や災害で疲れた人の気持ちを癒やすだろう。

何も力を振るうだけが指導員の仕事じゃない、要が憧れる存在になったり、落ち込んだ時に元気づけるのも大切な仕事だ。

何より人が元気でなきゃ、勇者が魔王を倒しても復興ができないんだし。

ステージを降りてきた天和に先輩の指導員として告げる。

「お前に仕事の依頼が沢山くるぞ。うちの外史を元気にして欲しいつて。5人の中で天和が一番最初に見習いじゃなくなるかもな」

side 天和

うん、決めた。

私の歌で色んな外史に元気をだしてもらおうんだ。

だから荊州での公演が、数え役萬三姉妹としての最終公演になるか

しれない。

豪の荷車・荊州紀行 その3 天和の決意 歌う指導員（後書き）

話が終わりに近づく程に恋姫要素は薄くなるかも、豪が濃すぎて。

感想指摘お待ちしております

同盟の締結

side 豪

天和達の公演は、物凄い盛り上がりを見せていた。

もちろん最前列に陣取っている袁術も夢中だ、少し離れた場所にいる俺と孫策殿の密談に気づかないくらいに。

「数週間後に袁紹と袁術が陳留に攻め込むわ。私達にもお触れが届いてるし」

孫策殿は、袁術に悟られない様に、公演からは目を離さず呟く様に入話す。

「しかし、わざわざ敵を領地に呼ぶとは余裕だね」

俺も公演から目を離さずに答える。

きちんと見ていなかったと天和に怒れない為に。

「袁術に情報はいつていないわよ。軍は紀霊が、内政閻象が牛耳っているから」

孫策殿は感情を表に出さず淡々と話をすすめる。

「むしろ敵意がないふりをしといて、突然攻め込むつもりか」

俺も天和と目が合った時意外は無表情で話をすすめる。

先からやけに天和と目が合う気がする。

「貴男達の軍の動きにあわせて、私達は袁術達の背後をつくわ。そして呉が独立をする」

「詳しい事は周瑜殿と雛里に煮詰めてもらっ」

「これで、同盟は締結ね。ちよつと気になる事があるんだけども…」

孫策殿は無表情から一転して、真剣な面持ちとなる。

「何でしょうか？」

「先から歌詞に鈍感とか不器用とかが良く出て来ているけど、誰の事なのかしらね」

孫策殿は、またもや表情を一転させ、からかう様な笑顔をみせた。

「さ、さあ。誰なんでしょつかね」

天和の歌には、明らかに俺との逢い引きを元に行っている歌詞もあり、これが結構恥ずかしい。

「その人は先から、何回も天和と目が合ってる誰かさんだと思うんだけどね」

俺は公演が終わるまで、孫策殿にからかわれ続けた。

- - - - -

公演終了後に用意してもらった宿屋に立ち寄らずに全速力で荊州から脱出する。

俺なら軍の機密を探っていたとか適当な難癖をつけて拘束をするか、袁術暗殺の疑いをかけて大軍で一気に攻め滅ぼすし。

今回も頑張りました。

うちの領内に入るまで殆どノンストップできたし。

そして同盟の詳細を報告した姉ちゃんから有り難い一言が下された。

「豪、明日益州に行ってもらうわよ。劉璋に今回の戦への共闘依頼の書を届けてもらおうから」

いや、確かに言い出しっぺは俺だよ。

袁紹がうちに攻め込んできたなら、袁術の背後からは孫策殿が、袁紹の背後を劉璋君に攻めてもらう。

黒幕は両軍が疲弊した頃に五胡に攻めさせるだろう。

だから被害は最小限に抑えたいし、うまくいけば共闘を維持したまま五胡と戦える。

「時間がないからな。今回連れて行けるのは雛里しかない。陽と凧は自分の隊をまとめなきゃいけないし、調は袁紹達にだす斥候の取りまとめをもらう」

雛里と孔明なら話し合いも、スムーズにいくと思うし、ユケル飲んで頑張ろう。

「陽達には私から話しておくわ。豪はもう休みなさい」

向こうの部屋もどって、風呂入って寝よ。

.....

益州劉璋の城・謁見の間

雛里強くなったな。

謁見の間には、元御遣い軍の將達も控えていた。孔明以外の將から雛里に向けられている視線は決して好意的なものだけではない。

しかし雛里は堂々と劉璋君に進言を行った。あの関羽と目を合わせても、目を逸らさなかつたし。

「雛里ちゃん、今ちょっといいかな？で、できたら曹仁様も一緒に来てください」

謁見の間から出ると孔明が話しかけてくる。

（雛里、なんか孔明が俺を怖がっている気がするんだけど）

（仕方ないですよ。朱里ちゃんは、まだ豪様の顔に慣れてないですし、ついこないだまで敵対していたんですから）

（俺の顔、慣れが必要なのか？）

（慣れたら可愛いんですけどね。あつ着いたみたいです）

「雛里、元気そうで安心しました。曹仁様お初にお目にかかります。私は水鏡と言つ者です」

水鏡つて、確か雛里の育ての親だよな。

「す、水鏡先生、会いたかつたでしゅ」

雛里は泣きながら水鏡に抱きついた。

水鏡は、雛里の頭をあやす様に撫でながら、俺に話しかけてきた。

「曹仁様には感謝しなければいけませんね。あの臆病な雛里が堂々と進言できる様になったのは曹仁様のお陰かと」

先の進言は、おんぶされながら敵陣に突っ込んで行くのに比べたら楽だろうから、あながち外れではない。

「いえ、感謝したいのはこちらのほうです。雛里の才を磨いてくれたのは水鏡様なんですから。ところで水鏡様は何故こちらに？」

「私の育てた才がどう活躍しているかを、見ておきたかったですよ」

「雛里は我が軍で大活躍していますよ。さあ積もる話もおありでしょうから3人でゆっくり話をして下さい」

下手すりゃ3人で話せる事はもうないだろうし。

同盟の締結（後書き）

感想・指摘お待ちしております

官渡の戦い 白馬編（前書き）

久しぶりの更新です

官渡の戦い 白馬編

side ジャック

劉璋に共闘依頼を頼みに行っていた豪さんが無事に戻って来た。帰って来た豪さんは旅の疲れをとる間もなく、曹操やら朱霊達に捕まりようやく解放されたとの事。

「豪さんお疲れ様です。共闘を取り付ける事はできましたか？」

「劉璋君は快諾してくれたよ。この戦で国主としての地位を確立して、魏延殿と結婚するそうだ」

「地域の一武将から、国主の正室とは、凄い玉の輿ですね。ところで御遣い達はどうしてました？」

「御遣いは爺さんからスパルタ教育を受けてるらしいな、劉備は黄忠とかい言う地方の城主の元で内政の勉強中みたいだ。他の将も適材適所で各部署に派遣されている」

「うまく御遣い軍を分断したみたいですね。そっぴや偽董卓はどうしてました？」

俺が聞くと豪さんは気まずそうな顔になる。

もしや…

「御遣いは、新しい道を開拓したみたいだ」

豪さんは気まずいのか、新しい道と言葉を濁したけど…

「あの堅物爺さんがよく許可しましたね」

御遣いが、女に手をつけまくって叱る人だから宦官なんか手を出したら大変なんじゃないか。

「あの爺さんが若い頃は衆道の風習が残っていたから寛容みたいたぜ。それに益州では小説になる位に有名な話になっていた」

英雄と少女に扮した宦官の道ならぬ恋を描いた小説は、かなりの人氣だとの事。

「随分と自由な地域なんですね」

「国主と英雄の話も書かれたみてえが、魏延殿が作者と原稿をボロボロにしたらしい」

そりゃ自分の男が、そんなの小説のモデルにされちゃたまらない。

「豪さんも危ないんじゃないですか？」

豪さんは、兄貴な感じだし

「姉ちゃんの逆鱗に触れそうだから、中止にしたそうだし」

確かに、曹操の溺愛っぷりは凄いからね

「曹操と一緒に居れるのも後少しですね。豪さん寂しいんじゃないですか？」

「これだけ長くいれば流石にな。まっ後のことは本物の曹仁に任せよ」

本物の曹仁は、豪さんみたいに規格外じゃないし美男子だから矛盾がでなきやいいけど。

「朱霊や楽進達の代役も見つかったみたいですね」

豪さんに言っていないけど、指導員の連中は曹操の代役も見つけたらしい

「そついや調に使われた寄生魔術の事なんかわかったのか？」

「卵だけ違う外史から持ってきたみたいですよ。詳しい事は調査中だそうです」

「これだけマナが薄いから触媒や物がないと無理か。まっ下手に大規模な攻撃魔法なんぞ使われたら兵士がパニックなっちゃうから安心だよ」

今や曹操軍の将や兵士は、家族みたいな者だから心配なんだろうな。

side 豪

調が放っていた細作から袁紹達が密かに曹操軍領内の白馬に向かって動き出したの報告があった。それに対抗する為に、俺は先鋒の陽の隊に同行して、白馬と袁紹領内を分けている黄河の川岸から少し離れた場所に布陣をしている。

「豪ちゃん、あの鎧じゃ目立って奇襲なんて絶対に無理だよな」

遠目からでも、金ピカ鎧が光に反射するお陰で、袁紹軍の行動は丸わかりだ。

「慣れだろうな。袁紹自身が普段から目立つ格好をしているから派手に慣れてしまったんだろ」

「そうかもね。豪ちゃん指示をお願い」

隊長が指示をもとめてどうするんだよ。

「袁紹軍から見えない所で鶴翼の陣を展開させておけ。俺達の領内に袁紹軍が入ったら俺とジャックが背後から奇襲して鶴の翼に追い込む。それと同時に姉ちゃんに開戦の報告をだせ」

「わかったー。豪ちゃんはその後どうするの？」

「勝敗が見えたら凧と于禁が守っている延津に向かう」

「豪ちゃん延津の勝敗が決まったら、早く帰って来てね。寄り道しないで真っ直ぐに陽の所に来てね」

「袁紹が大人しくしてりゃな。ジャック行くぞ」

俺とジャックは気配を消しながら、川岸に待機している。

「いいかジャック。彼奴等が渡河しきつた瞬間に攻め込むからな。俺が攻撃してる隙に船を壊しちまえ」

「わかりました。あの鎧着て川を、渡ったら確実に溺れますからね」

「つくづくあんな鎧をきた兵に同情しちまうよ。敗走したら賊に鎧目当てで狙われそうだし」

袁紹悪いが、この後の予定が満杯なんでな。
最初から全力で行かせてもらうぜ。

side 朱霊隊副官

私は先から何回目の溜め息をついたのでしょうか。
本来なら中央に居なければならぬ朱霊隊長は右翼の最前列にいます。

曹仁様の勇士をを、一番最初に見たいと言う理由だけで。
普段は冷静沈着な朱霊隊長ですけど、曹仁様が絡むと暴走乙女になっちゃうんですよ。

そもそも今回の作戦は無謀すぎると思うんです。
いくら強いと言われている曹仁様と王連様でも2人だけで攻め込むなんて無謀ですよ。

また溜め息をついた瞬間に伝令が来ました。

「袁紹軍が来ました。曹仁様達に終わられて逃げてきます」

私の目に飛び込んで来たのは、涙目で逃げてくる袁紹軍とそれを追いかける曹仁様と王連様、そして曹仁様を見てはしゃぐ朱霊隊長でした。

「おらおら、お前達の船はもう壊してやったぜ。だが安心しろ、三途の川に新しい船を用意してやったからよ」

高笑いしながら袁紹軍を追いかけている曹仁様を見て、はしゃげる隊長が不思議でたまりません。

新人兵には、袁紹軍より曹仁様への恐怖で泣き出す娘もいたんですよ。

曹仁様と王連様が袁紹軍の兵力を激減させてくれたお陰で朱霊隊は、殆ど損害はありませんでした。

ええ、損害は新人兵の涙と私の胃痛ぐらいですから…

官渡の戦い 白馬編（後書き）

実際に日本では数十年前まで衆道の風習が残っていたみたいですが

感想指摘お待ちしております

官渡との戦い 延津編（前書き）

袁紹編が終われば

官渡との戦い 延津編

side 于禁

沙和が守っている延津の砦にも袁紹軍が攻めてきたの。

いつも凧ちゃんに緊張が無さ過ぎぎるって注意される沙和でも緊張しまくりなの。

むしろいつも沙和に注意してくる凧ちゃん鼻歌なんか歌って余裕ありまくりなの。

「凧ちゃんは、怖くないの?」

「絶対に豪が来てくれるから大丈夫だ」

凧ちゃんが自信たっぷりに答えてくれたの。

でも…

「曹仁さんは白馬に行ってるの。そんなに早く来れる訳ないの」

雄獅子さんって、呼び方は不敬だって凧ちゃんに禁止されたの。

「大丈夫だ。豪は来る」

凧ちゃんは、自信満々に答えてくれたの。

「凧ちゃんの、その自信はどこから来るの?」

「私が延津にいるから豪は絶対に来てくれる」

凧ちゃんが変わってしまったの。

side ジャック

袁紹軍には可哀想な事をしたと思う。

帰りの船を壊された上に後ろから化け物みたいな男が、いや大概の化け物も泣かす男が背後から襲ってきたんだから。

戦場じゃなきや豪さん絶対に逮捕されたな。

それよりも

「豪さん、向こうに一回戻って、延津にショートカットしませんか？」

まともに移動してたら時間が、かかるし

「随分とやる気だな。延津には凧もいるから急がなくても大丈夫だぞ」

「楽進がいるからですよ。雪の奴は楽進を妹みたいに可愛がっているんですよ」

「ジャックは相変わらず雪さん命だな」

「誰かさんと違って俺は一途ですからね」

それで向こうに渡ったんだけど、そこに雪が待っていた。

白装束をまとい袴を履いて頭には鉢巻き、手には薙刀を持っている。

雪の戦闘バージョンだ。

もしかして…

「雪、お前その格好は、まさか？」

「可愛い妹分がピンチなんでしょ？それを見捨てたら女が廃るの」

雪も指導員の1人だから、それなりに強いんだけども

「ジャック諦める。ああなつたら雪姫様は頑固なんだろう？それにお前の自慢の女房が袁紹軍なんぞに遅れはとらねだろ？」

「流石は豪さん良い事言う。さっ行くわよ」

雪は戸惑う俺を尻目に渡る準備を始める。

「雪は細かい場所を知らないだろ。一緒に行くぞ」

side 于禁

あれはなんなの？

袁紹軍は背後から曹仁さんや王連さんに襲われて混乱状態なの。

でもその混乱に拍車をかけている女の人がいたの。

その人は風に舞う雪の様に敵の攻撃を交わして、そして吹雪みたいに研ぎ澄まされた一撃を鎧の隙間を狙って斬りつけていく。

何より凄いのは王連さんと息を合わせた攻撃は、まるで2人で舞を楽しんでいるみたいなの。

私が見とれていると

「雪姉さんだ。雪姉さんが来てくれた」

「凧ちゃん、あの綺麗な女の人と知り合いなの？」

「あの人は王連様の奥様で、私を妹みたいに可愛がってくれている雪姉さんだ。羨ましいな、王連さんと雪姉さんの息のあった攻撃。私もいつか豪と…」

「な、凧ちゃん、今は戦争中だから戻って来て欲しいの」

「あつ…沙和すまない。私もでるぞ」

袁紹軍は曹仁さん達に気をとれているみたいで皆から出てきた凧ちゃんに気づかなかつたみたいなの。

曹仁さんと凧ちゃんも充分に息が合ってたの。

曹仁さんが豪快に斧を振るって凧ちゃんが氣弾で追撃、そこにまた曹仁さんが斧を振るう。

「し、新人さんは見ちゃ駄目なの？あんな戦い方は常識が通じない人にしかできないの」

凧ちゃん、曹仁さんのせいで、規格外に近づきつつあるの。

side 豪

なんとか被害は最低限に抑えた状態で袁紹の出鼻を挫く事ができた。これで袁紹は袁術に援軍を要請するだろう。

曹操軍だけなら良くて膠着状態だけでも、そこに劉璋軍と孫策軍も同時に攻め込んだら来たら状況は一変するだろう。

ましてや今の曹操軍には西涼連合も協力してくれているし、呂布や

華雄も加わっている。

官渡との戦い 延津編（後書き）

感想指摘お待ちしております。

官渡の戦い 官渡皆編（前書き）

官渡の戦いが終われば五胡編の予定です

官渡の戦い 官渡砦編

side 豪

数の暴力事だ。

白馬や延津で成果があげなかった、袁紹は官渡砦に向かって進行して来た。

それは兵を数十里に布陣させ、少しずつ前進させるといふ戦法。

力押しな感じもするが、下手に手を出せば囲まれてフルボッコにされる。

(爆弾とか爆発系の魔法が、使えれば楽なんだけどな)

「豪様、提案があるんですけども」

雛里の提案は、まず俺が開拓に使った鉄球で地面に穴を一定間隔で開ける。

当然、袁紹軍は穴を避ける為に穴の脇を通って迂回をしなければならぬ。

その為には、隊を分断する必要が出るから、それを各個撃破して行くというものだった。

「穴を埋めれたら終いだけでも、時間稼ぎはできるな。姉ちゃんに許可をもらいに行くか」

まともに正面から、ぶつかったら、損害が大きいし。

side 雛里

この策は、豪様を危険に晒す危険性があるから曹操様は反対をする
と思ったのですが

「流石は雛里ね。麗羽が攻めて来る前に頼むわよ」

あっさりと許可されました。

豪様との会話も、あまりありませんでしたし、何かあったのでし
うか。

「雛里、急ぐぞ。穴を作る場所はお前が指示してくれ」

私は、この時久しぶりのおんぶに浮かれて気づきませんでした
が、豪様は既にこの辺りから、自分がいなくなる為の準備を始めて
いたのでしょうか。

side 願良

白馬に続き延津でも、曹仁様に煮え湯を飲まされた姫様は、一
気に曹操様との雌雄を決しようとお決めになった様です。

「猪々子さん、斗詩さん袁家の総力を結集したのですから、今
度こそ華琳さんに勝ってみせなさい」

袁家の総力を、動員した今回の策で成果を出せないと、かなり不
味い事になります。

それは単純な損害だけではなく姫様の立場さえも危うくなる危
険性があるんです。

「そろそろ官渡が見える頃ですわね。さあ華琳さんの不細工な泣
き

つ面を見に行つてさしあげますわ。オーホッホッホ」

それまで順調に行軍していた我が軍でしたが、何故か、急に行軍速度が落ちたんです。

先鋒として軍を率いていた文ちゃんが、慌てた様子で本陣に戻つて来ました。

「姫、斗詩大変だよ。そこら中が大きい穴だらけでうまく進軍できないんだ」

前方の地面には巨大な穴が、いくつもそこら中に、あいています。

「猪々子さん、それなら穴の脇を進めばよろしいでしょう。華琳さんもお馬鹿です事。こんな見え見えの落とし穴に引つかかる訳がありませんのに」

「いくらお馬鹿な姫でも、それはないよな。よしっ穴の脇を通つて進軍しろっ」

side 陽

雛里ちゃんの計画通り、袁紹軍は穴の脇を通つて進軍を再開してきました。

この後、袁紹軍の先鋒が穴を越えてきたら弓隊で一斉射撃を開始。弓隊は穴の間の正面に配してあるから袁紹軍は避けようがないと思う。

自軍が進んでくるから、先鋒は前にしか進めない。

ある程度の袁紹軍が穴を、越えてきたら騎馬隊の張遼さんと馬超さんで攪乱させて、後は曹操軍が誇る武将の豪ちゃん・私・王連さん・凧ちゃん・呂布ちゃん・秋蘭様で波状攻撃をするんだよ。

side 豪

雛里の策は、とりあえず成功した。

袁紹軍は穴に落ちた兵も含め、かなりの損失を受けたと思う。

袁紹軍だけなら勝てない差だけでも、この後の五胡戦を考えると、

まだ不安があるんだよな。

そんな事を考えていたら姉ちゃんから書状が届く。

それは鳥巢襲撃の命令だった。

官渡の戦い 官渡皆編（後書き）

感想指摘お待ちしております

官渡の戦い 鳥巢襲撃の裏では

side ジャック

つい先、豪さんが鳥巢にいる淳于瓊が率いる補給部隊に1人で襲撃をかけたにいった。

情報をもたらしたのは、袁紹軍の許攸。

今までの曹操なら、この怪しい情報に豪さんを1人で、向かわせる事はなかっただろう。

原因の1つは官渡で相對している袁紹軍の大軍、もう1つは豪さんが、いや俺達の仕事の原因なんだが…。

あの5人の意志を、もう一度確かめとくか。

これ以上、あの不器用者が、傷つくのを見たくないし。

- - - - -

袁紹軍とは膠着状態にあったから、5人を集めるのに、あまり時間はかからなかった。

天和だけは、一度向こうに行ってから連れてきたけど。

「お前達、最近の豪さんと曹操の仲をどう思う？」

反応を見る限り、5人共気にはしていた様だ。

「なんか最近の華琳様は、豪ちゃんをあまりかまってるないよね」

豪さんがヒゲを伸ばしても、何も言わないしな。

「前みたいに豪を頻繁に呼び出す事がないし」

前は毎朝だったけども最近は何も伝令ばかりだ。

「俺達指導員は、どれだけ外史に馴染んでも、目的を達成したら戻らなきゃいけないんだよ。戻る側は最初から、そのつもりだから問題は無いけど残された奴等は割り切れないよな」

「私は豪様が、突然いなくなったりしたら、耐えられません」

雛里は、豪さんがいなくなつたのを想像したのか涙目になっていた。

「最近、豪さんが頻繁に向こうに戻っている理由なんだけどな。1つはお前達を向こうの生活に慣らす為、1つはマナの補給の為、そして最後は自分の存在を、この外史から消す為なんだよ」

「俺達を向こうの生活に慣らすのはわかるけど、存在を消すって何だよ」

「指導員は外史にとってみれば異物なんだよ。いない方が自然な存在。だから短時間でも外史から何回も離れていると、外史での存在が薄くなるんだよ。俺がこの外史で有名にならなかつたり親しい人間が先生ぐらいしかいないのも、それが原因だ」

「じゃ、じゃあお仕事を終えて豪君が帰っちゃったら、残っている人は豪君の事を忘れちゃうの？」

「豪さんがしてきた事は、他の外史から連れて来る曹仁がした事になる。早い話が豪君が最初から、この外史には存在しなかつた事にするんだよ。言っておくが代役を連れてきたら、この外史には戻って来れなくなるからな」

「そんな豪ちゃんあんなに華琳様と仲が良かったのに？あんなに豪ちゃん頑張ったのに？」

「あのおな、俺達の仕事はあくまで外史の展開を邪魔する要因を取り除く事なんだよ。そこには賞賛も名誉も必要ない。それに要因が悪人とは限らないし、場合によっちゃ排除した人間の家族や恋人から恨まれる事もある。文字通り親の敵にならなきゃいけない事もあるんだよ」

「でもアメルさんは、豪様の事を覚えていますよ？」

「あれはあくまで創竜様のはからいさ。俺達が外史を救って得れる特典は、外史から誰かを連れ出す事か、自分の事を覚えておいてもらい何かの時に力を借りれる事ぐらいなんだよ。まっ、それも創竜様が判断するんだけどもな。5人も一気に連れ出すなんてのは例外中の例外なんだぜ」

「兄貴は悲しくないのかな？」

「豪さんは、曹操を慕っていたからな。胸が張り裂けるぐらい悲しいだろうよ。お前達と曹操の違いがわかるか？」

「曹操様と豪君は姉弟で、私達は恋人？」

「その通り。曹操は豪さんを弟だから愛した。でもお前達は豪さんだから愛した。ここまでの話を聞いてついて行くをためらう奴がいたんなら、来なくていい。お前達が後悔したら豪さんは自分を攻めちまうからな。俺はあの不器用者には幸せなっ欲しいが、それ以

上に傷つく事を少なくしたいんだよ」

「豪ちゃん今頃どうしてるかな？」

「魔力を帯ながら暴れまわってるさ。化け物と恐れられながらな」

程なくして、鳥巢の袁紹軍を全滅させたとの連絡がきた。

何時もなら豪さんの活躍に湧き上がってるんだが。

曹操や周りの連中は、淡々と次の策を練っているし、その光景を見た朱霊達はやるせない表情でうつむいていた。

官渡の戦い 烏巢襲撃の裏では（後書き）

感想指摘お待ちしております

官渡の戦い 終・5人の決意（前書き）

官渡編も今話で終わりです。

官渡の戦い 終・5人の決意

side 豪

淳于瓊率いる補給部隊だった物が、恐怖の表情を残しながら鳥巢の大地に横たわっていた。

俺は淳于瓊達の恨みの視線を、背中に浴びながら鳥巢を離れる。

淳于瓊達を倒した知らせは、離りに伝わりそこから曹操、孫策、劉璋へと伝わり袁紹への一斉攻撃が、開始される手筈だ。

さて、俺はどここの隊と一緒に攻めるべきか。

この外史での存在が薄れているとはいえ、まだ曹家の将としては認識されてるだろう。

陽の隊が、一番安心なんだけどジャックから、意志の確認をもう一度している最中だから、会うのは避けて欲しいって言われてるし。怒られる心配もないから、単騎攻めにするか。

side 袁紹

悔しいですわ。

名家の袁家が、こんな危機的な状況に陥るなんて有り得ないですわ。少し前に、淳于瓊率いる補給部隊の全滅の知らせが届きましたわ。それに呼応する様に、華琳さんや孫策さん、あの劉璋までもが攻め込んできたのです。

でも高貴な私が、ここで弱気な態度をみせる訳にはいきませんのよ。そう決意を新たにした瞬間、猪々子さんが青い顔をしながら来ました。

情けない事から震えて怯えている様ですわ。

「ひ、姫逃げようよ。化け物がデカイ化け物が、兵を次々と倒して
るんだ」

猪々子さんが逃げて来た先には、黒い霧の様な物を、まとった大きな男が、無言で巨大な斧を振り回して次々と兵を倒していました。

(な、何ですか？あのデカイ男は、どこかで見た事がある様な……。
いえあんな醜い者が美しい私と知り合いな訳ありませんわ)

side 陽

袁紹軍が騒がしい。

多分その原因は、豪ちゃんだと思っ。

(馬鹿だよ豪ちゃんは。いくらお仕事だからってあんな辛い思いを
して。向こうに行ったら、陽が思いつきり幸せにしてあげるんだか
ら)

王連さんが何と言おうと、陽と豪ちゃんの幸せを邪魔する権利なん
て誰にもないんだからね。

side 凧

袁紹軍の騒ぎを見ても、真桜も沙和も、曹仁のその字も口にしてい
ない。

(大切な者に忘れてもらおう仕事か……。私のあの決意は間違っていない
かったんだな。これからは豪の事を絶対に忘れない私に心を休める

存在となるんだから)

その気持ちに、ためらい何て全くない。

side 調

兄貴から教わったサーチを展開すると、袁紹軍の恐怖と兄貴の悲しいまでの虚しさが伝わってきたんだ。

(兄貴の馬鹿野郎。きちんと俺に調べさせていれば、こんな事にはならなかったんだ。これから兄貴が行く外史は、絶対に俺が調べてから行ってもらうんだからな)

サーチを手に入れた俺は、今まで以上に兄貴を助ける事ができるんだから。

side 雛里

豪様から、淳于瓊隊壊滅の知らせが届きました。

曹操様に報告をしましたが無関心です。

前なら自分の事の様に喜んで、周りに自慢をして怪我がないかを心配をして、だから豪様にお説教をしたのに。

アメルさんが、豪様が1人で行動するのを心配していたのは、この為だったんですね。

(アメルさん、もう大丈夫ですよ。これからは私達が、いえ私が豪様と何時も共にいますから)

でも先ずは、私達に心配をかけた事をアメルさんを含めた6人でお説教しますからね。
豪様、覚悟して下さい。

side 天和

はぁー。

あれから何回ため息を、ついたかわからない。

豪君は、きつとまた無茶をしているに違いない。

曹操様の事は仕方ないと思う。

姉弟であれ姉妹であれ、何時かは違う人生を歩いて行くんだから。

私も、妹達と別れて新しい人生を豪君と歩いていく決意をしんだし。

(何で豪君は何時も1人で背負っちゃうんだろ? いや、今度からそんな事は絶対にさせない。半分は無理でも少しでも私も背負っちゃうんだから)

そして私は心の中で妹達に別れを告げた。

補給部隊を全滅させられ動揺した袁紹軍は曹、孫、劉の三国に瞬く間に滅ぼされた。

三国の人々は勝利に湧いていた。

この戦いの一番の功労者の存在が薄れゆく中で…

官渡の戦い 終・5人の決意（後書き）

次からはいよいよ五胡黒幕編＝曹仁伝の本編の終わりです。

指摘感想お待ちしております。 & 英語やドイツ語などの外国語に詳しい方いたらお願いが

見えてきた敵（前書き）

1話をあまり覚えていない方は、もう一度見てもらえたら

見えてきた敵

side 豪

事務所から来客が来たとの連絡が入った。

今俺がいるのは事務所にある面談室。

外史に何かあった時に直接事務所に来る統括者や管理者も少ないので、この部屋は俺も良く使っている。

でもいつもと違うのは、陽達が部屋に居ること。

口では勉強とは言っているが右脇を陽、左脇は凧と武闘派が固め、右後ろに雛里、左後ろには調が俺の様子を観察している。

ちなみに天和は事務所側の入り口に座っていた。

つまり俺がこの場所から逃げようとしても軍師&探偵が前の武闘派に合図をおくると、がちりホールドされるだろう。

4人の手から逃れたとしても、出口には笑顔で押し切る天和が待ちかまえている。

これは雛里が考えた布陣なんだろうけども、俺って、そんなに信用がないんだろうか。

とりあえず事務所に連絡をして、相談者を部屋に通させる。

「僕の可愛いジャスティー達を返せっ。この変態指導員」

扉を開けると、同時に白髪に白い髭の爺さんが俺の胸ぐらを掴んできた。

side 陽

何、このお爺ちゃん。

陽の豪ちゃんを変態呼ばわりした上に胸ぐらを掴むなんて。

当然、私は豪愛の剣を素早く抜刀してお爺ちゃんの首元に突きつける。

「ご老人、無礼にも程がありますよ」

私は感情を一切込めずに宣言をした。

全く、豪ちゃんが変態さんなら、陽がこんなに苦勞はしていません。

陽はいつでも良いのに、豪ちゃんったら、恥ずかしがるだけなんだもん。

side 調

「爺さん、大人しく座らないと陽の手元が狂っちまうぜ」

兄貴、任せてくれ。

依頼者との話し合いは探偵の基本中の基本なんだからよ。

爺さんは外史の管理者をしており、その外史の要達が行方不明になつたらしい。

話を聞いている兄貴の顔が微妙な表情になっている。

(兄貴、あの爺さんと顔見知りなのか?)

（お前達の外史に行く前に片付けた仕事の依頼人だよ。確か名前はホーリー。自称至高神だ）

まあ兄貴に依頼に来る事態で自称は確定だよな。

「それで爺さんは、何で兄貴がホシだと思ったんだ」

「ジャステイはデスクイザーが、まだ生きているから今度こそ決着をつけてきますと言ったまま帰ってこないのじゃ。雄獅子殿と言えば強くても有名だがモテなくても有名、欲求不満の塊の雄獅子殿はジャステイ達の美貌に目が眩み…悪さをしたに違いないのじゃ」

兄貴がモテないの、そんなに有名なんだ。

「確かに昔の兄貴はモテなかったかもしれないが、今は違うんだぜ。何しろ俺っていう可愛い彼女ができたんだからな」

陽達が騒いでるが気にしない。

こうゆうのは言ったもんがちなんだよ。

side 豪

「あー、とりあえず写真を見せる。あの外史に来ているんなら、この中の誰かが見ているかもしれないからな」

「これがジャステイ、光の勇者にしてホーリーランドの王子ジャステイじゃ」

ジャスティーは昭和のアイドルみたいな派手なポーズで写真に写っている。

しかし相変わらず爽やか美男子の王子様だな。

「豪様、この方がジャスティーさんですか？でもこんな派手な鎧を着る必要はあるんでしょうか？この方が豪様を狙っているんですね」

ジャスティーの顔を覚える為か、雛里は写真をじっと見ている。

「娘さんジャスティーは格好いいじゃろ？雄獅子殿と違って美男子じゃからな」

「そうですね。私の大好きな豪様と違って軽薄そうです」

「雄獅子殿も5人も女子を連れているではないか。まあよい、そしてこれが慈愛の剣姫、王女ラブリーじゃ」

写真の女はロングドレスを着て剣を構えている。

「豪ちゃん、この人とも会った事あるの？」

「醜い魔王には慈愛は必要ありませんって言われてわれたよ」

「へー、陽の豪ちゃんにいい度胸してるね。豪ちゃんは、女の子と戦うの苦手だろうから陽が相手するよ」

陽の方が、確実に強いから大丈夫だろ。

今も目が笑ってないし。

「次は暗黒の武道家、ダークじゃ」

ダークは長い黒髪的美青年。

写真から顔を逸らしている割には、しっかりとカメラ目線だ。

「豪、この男は本当に武道家か？髪が邪魔になって闘えない気がするんだけど」

凧、向こうでは、補正があったから大丈夫だったんだよ。

「次は魔術師の申し子、マジンじゃ」

マジンって言っても、頭からローブを被っているから男だか女だかわからないんだが。

その写真を見た調の表情が一変する。

「こいつだ、間違いない。俺を襲ったのはこいつだ」

ほう、わざわざ異世界から来て俺の可愛い女を襲ったと。

「ちょっと管理がなくなってないんじゃないか？それと、お前の可愛いジャスティー達は悪に堕ちてるぜ」

「そんな事があるわけないじゃろ。ジャスティーもマジンも純粋に正義と平和を愛しておる」

「ああ純粋で真っ白さ。だから欲望と怨みに、まみれた魔術書の影響をモロに受けちまうだろうよ」

いつ俺の事を知ったのかわからないが、黒幕は俺の正体に気づいたんだろう。

それで純粹で利用しやすいジャスティー達に目をつけたんだな。

幸い、今の状況じゃ曹家に関係する者を人質にしたりはしないだろう。

見えてきた敵（後書き）

作者の中でのジャスティーパーティ―は一昔前前のゲームの主人公をイメージしています

感想指摘お待ちしております

曹仁に渦巻く想い(前書き)

久しぶりに曹操さんの登場

曹仁に渦巻く想い

side 天和

豪君から話を聞いたお爺ちゃんは、泣きながらジャスティーを助けて欲しいって頭を下げてきたんだ。

「豪君、ジャスティーって人を助けるの？」

「これが俺の仕事だよ。彼奴等も、巻き込まれただけみてえしな」

私が大切な豪君は、自分の命を狙ってくる人も助けるつもりみたい。

「うー、でもあのお爺ちゃん調子良すぎたよ。豪君にあんな酷い事言っておいて、自分の大切な人を助けて欲しいなんて」

豪君にお願いしているのに、豪君の心配は全然していなかったし。

「あの爺さんにとってジャスティー達は孫みたいな感じなんだろうな。自分を慕ってくる孫みたい連中に情が移ったのは攻めれないだろう？」

「豪君も経験ある？」

「情がなきゃ目の前にいる非戦闘者を連れて来てねえよ。まっ情は情でも愛情なんだけどな」

「へへー、豪君が初めてちゃんと言葉にしてくれたー」

「大概の情は、切り捨てる自信があつただけだな。今の外史に来てから調子が狂いつぱなしだ」

豪君が割り切れていないのは多分、曹操様なんだと思う。

そんな豪君に曹操様から下された命令は、五胡の偵察だった。

side 豪

「こりゃ見渡す限りの荒野ですね。まさに僻地勤務」

俺達がいるのは五胡の領内がすぐそこにみえる砦という名の小屋。

「向こうの動きが丸分かりで、ありがたいじゃないか」

五胡が進軍して来たら遠目でもわかるだろう。

「確かにそうですね。豪さん朱霊達にも来て欲しかったんじゃないですか？」

陽達に会えないのが寂しくないとえば、嘘になるが

「陽と凧は隊があるし、相手の正体がわからないのに雛里・調・天和の非戦闘員が来ても足手まといにしかならねえよ。それに下手に人数が多いと敵が食いついてこないだろ？」

「俺達はさしずめ釣り餌ですか？曹操もえぐい策を了承しましたね」

「よく知らない規格外に強い人材を警戒するのは当たり前、敵が食

いついて打撃をあたえる事ができたら儲けもの。俺達がやられたら
甲い合戦の名目ができるからな」

曹操なら、どんな結果でも利用してくれるに違いない。

「豪さんが雛里を通じて献策したんでしょ？」

「雛里はだいぶ渋ってたけどな。餌が逆に魚を食ったら面白いだろ」

最後は半泣きで了承してくれたんだよな。

「豪さんなんか食べたら腹を壊しますよ。しかし、この上司は無
茶苦茶な策を考えつくんだから。この仕事が終わったら長期休暇を
頼みますよ」

「わかったよ、雪さんとバカンスにでも行ってきな。ちなみ俺も今
バカンス中なんだぜ」

「不吉な言い方は止めて下さいよ」

「俺だって、バカンスで荒野に来る趣味はねえよ」

まあ、お陰で寂しい生活から脱出できたからオジキには感謝してい
るんだけどな。

曹操軍本陣

落ち着かない。

私は今までに感じた事のない不安と寂寥感に襲われていた。

「桂花、曹仁から連絡はまだ来てないの？」

曹仁は私の遠戚らしい。

謁見を許したのを後悔するぐらいに美しさが無い男だったけども、使ってみると恐ろしいまでの強さを持っていたわ。

当然、桂花や秋蘭は警戒をする様に注進をしてきた。

だから雛里が進言してきた様に、五胡の偵察に使ったんだけれども曹仁が遠くに行けば行く程、危険に晒される程、気になりイライラしてくる。

「無事に皆に着いたとの連絡が雛里に届いたそうですが」

曹仁が着いたのは、皆とは名ばかりの吹けば飛ぶような粗末な小屋。

「雛里に？私じゃなく雛里に連絡をしたと言うの」

思わず語気が荒くなってしまふ。

曹仁は陽や雛里達と親しいらしく、あの娘達に連絡がいくのは当たり前前だ。

「曹家の当主たる華琳様に直接連絡を入れるのは不敬にあたると言っただけです」

曹仁は自称かもしれないから、その対応に問題はない。

でも不敬と言う言葉が私をさらに苛立たせる。

「今すぐに雛里を呼びなさい」

私の中には嫉妬に、似た感情が渦巻いていた。

side 雛里

本陣の華琳様には、いつもの様な毅然さはなく、イライラと落ち着きがありませんでした。

「雛里、曹仁からなんて連絡が来たの？」

「はっ、王連殿と一緒に無事に砦に入ったそうです。今の所五胡に動きはないとの事です」

「砦？あの小屋を砦と認めたの？本当にあの子は…」

華琳様は、自分でも気づいてない様ですが無意識に豪様の事を、あの子と言いました。

華琳様は、豪様によほど深い愛情を持っていたのでしょ。

「ご、豪様なら大丈夫です。あのお方は規格外に強いですから」

「豪？それが曹仁の真名なのね」

side 曹操

豪という名を聞いた瞬間に、不思議な暖かさを感じるのと、同時に得体の知れないイライラが、更に大きくなった。頭の中に、姉ちゃんと呼ぶ声が響いてくる。

(姉ちゃんごめん、それとただ今)

(姉ちゃん、それ理不尽)

(姉ちゃん、髭は勘弁して。それが無くなると雄獅子じゃなくなる)

姉ちゃん、姉ちゃん、姉ちゃん……

私の頭に、その言葉が響いてくる。

それを消したのは本陣に飛び込んで来た陽だった。

「華琳様、大変です。五胡が動き始めたそうです。豪ちゃんが、豪ちゃんがい」

涙目で話す陽。

五胡との決戦のついでに、曹仁に会う必要があるわね。

曹仁に渦巻く想い（後書き）

曹仁伝のメインヒロインは、皆様の中では誰になりますか？
指摘、感想お待ちしております

五胡戦 無茶は豪の特権？（前書き）

前話でメインヒロインを聞いたら、姉ちゃんが圧勝でした。

五胡戦 無茶は豪の特権？

side 豪

「この狭い小屋にむさ苦しいオッサンと2人つきりで泊まるなんて、気色悪いだけです。俺は五胡の偵察に行つてきますよ。」

「ジャック頼んだぜ。きちんと気配は消しとけよ。」

「豪さんもね。爆睡してる時に小屋に火でも放たれたら雄獅子の丸焼きになつちまいますよ。」

俺は言われるまでもなく、気配をけしサーチをはって起きながら就寝。

(サーチに反応？こりゃこの外史の人間じゃないな)

そいつは地面に一生懸命細工をしていた。

朝になり、目の前に広がる荒野にサーチをかけてみると、思わず笑みがこぼれてくる。

(妙な気配がしたと思ったら、こんな仕込みしてたのかよ。

…それなら有効利用してやろうじゃないか)

後は陽達を、どうやって説得するかだよな。

説得方法を考えていると、偵察に出ていたジャックが戻ってきた。

「豪さん、五胡の連中が動き出しました。物凄い人数で攻めてきま

すよ」

「五胡十六国の全ての国が参加していなくても、人数は半端じゃなさそうだな」

side ジャック

大軍と聞いた豪さんが、悪戯坊主の様な笑顔を浮かべた。この人が、こんな顔をする時はろくでもない事が多い。

「随分と余裕ですね。何か策があるんですか？」

「つい先面白い物を見つけただよ。その地面にサーチをかけてみる」

俺は、言われた場所にサーチをかけてみる。

これは…

「豪さん、まさか…」

相変わらず、とんでもない事を思いつくんだから。

「後はどうやってジャステイー達をおびき寄せるかだな」

「その前に、朱霊達が納得するとは思えませんよ」

「納得してもらつさ。何しろ三国のリスクは、殆どないからな」

「豪さん、曹操からのお説教が無くなった途端に無茶するですね」

この仕事が終わったなら、ストレス解消と癒やしを求めて、雪と温泉旅行に行こう。

side 陽

「……って策をたてたんだ。協力を頼む」

豪ちゃんからの伝令で、いつもの5人が集められ豪ちゃんの考えた策を説明された。

「はわわ、豪しゃま、それは策とは呼びません。軍師として認める事はできましえん」

雛里ちゃんが、慌てるのは当たり前。

私でも、策の内容を聞いて呆れたんだから。

「これが一番安全で確実なんだぜ。三国と五胡の大軍が戦えば混乱は必至。それこそ黒幕の思っ壺になっちまう」

確かにわかるけど。

「豪ちゃん、約束して。絶対に陽達の所に帰ってくるって。でなきや陽は協力しないんだから」

「当たり前だろ。多少の怪我はしても死ぬ事はねえよ。お前達が協力してくれたら勝算も高くなるんだし」

side 曹操

駆けつけた私が見たのは、五胡の大軍と1人で相対している男の背中だ。ただ。

(あれは…曹仁？あの太軍と1人で戦うつもり？)

「いらつしゃいませ五胡の皆様。どこの誰かもわからない奴の誘いにのつて、俺にケンカを売るなんざ絶対に後悔するぜ」

曹仁は怯える様子もなく、嬉しそうに大喝をした。

普通なら呆れる所だけでも、私を感じているのは心配からくるイラつき。

このイラつきは、前に良く感じていた気がする。

「ほう、あの男あれだけの太軍に怯まないとは、いい度胸をしているな」

秋蘭、馬鹿を言わないで。

あの子は、私が手綱を握ってあげなきゃ、すぐに無茶するんだから。

あの子？

あの子って？

もう少しで、何かを思い出せると思った、その時五胡の集団から4つの影が飛び出してきた。

五胡戦 無茶は豪の特権？（後書き）

メインじゃなくても、気に入ってるキャラでも曹操が圧勝しそう。
感想指摘お待ちしております

五胡戦 曹仁と曹操を隔てる壁

side 胡質

兄貴のお守りって、大変だよな。

少し目を離すと無茶するし、曹操様を改めて尊敬するよ。

そんな兄貴と相對しているのは、五胡から飛び出してきた派手な鎧を着た男、ジャステイーだ。

「デスカイザーとうとう見つけたぞ。僕達の世界だけじゃなく、この世界も戦乱に巻き込むなんて許さないぞ。正義の鉄槌を下してやる」

爽やかに熱く叫ぶジャステイー。

巻き込まれた兄貴は、苦い顔をしていた。

「相変わらず王子様はお熱い事で。わざわざ人の家の米櫃に砂を入りに来た奴が威張ってんじゃねえよ」

兄貴の言葉に反応したのは、戦場には似合わないロングドレスを着た女、確かラブリーって名前。

「この国の皆様、ご安心下さい。デスカイザーはジャステイーの正義と私の慈愛の力で倒してみせます」

それに真っ先に反応するのは、当然

「この国で豪ちゃんを嫌っている人なんていないの。それとお生憎様ですけども、ただ今豪ちゃんはたくさんさんの愛に包まれているから、

貴女の胡散臭さい慈愛なんて必要ありません」

相変わらず、陽は兄貴が絡むと話の論点がずれまくるよな。

そんな陽を見ながら、長い髪をかきあげてるのは、ダークって名前の武道家。

「ふっ、お美しいお嬢さん威勢がいいですね。でも貴女のように可愛い女性の愛は私の様に、美しい男に捧げるもので、デスクイザ」の様に醜い男には相応しくありません」

陽がどん引きしている。

俺もどん引きしたけど。

1人だけ、どん引きを通り越して怒ったのは

「豪の事を、知りもしない奴がふざけた事を言うな」

真面目な風は、あの手の男が嫌いらしい。

俺にふざけた事をしたマジンとか言う奴は

「……………」

無言で王連と睨み合っていた。

「ねえねえ、調ちゃん。あの人達違う意味で怖いよ」

俺も天和と同じ感想だ。

名前からして、お疲れ様な感じだしな。

「元々が純粹に正義や愛を盲信する性格が魔術書で欲望が拡大された結果みたいですね」

「でも雛里、正義と欲望って相反する感じがするぞ」

「拡大されたのは自信と自己顕示欲でしょうね。」

納得。
普通なら兄貴を大軍で倒せばいいのに、あえて自分達が出て来てるし。

side 曹操

曹仁と怪しげな4人組が対峙している。

4人組の後ろには五胡の大軍が控えていた。

曹仁は恐れもせずに、4人組に近づいていく。

「きちんと俺を倒せなかったから、今度はパーティーを組んできたか。」

曹仁が4人組を威嚇する様に近づいていく。

それは五胡の大軍に近づいくのと同じ事。

私の中で五胡の動きを見るには良い機会だとゆう思いと、曹仁を何としてでも止めないと駄目だとゆう相反する想いが渦巻いていた。

不思議な事に武將の王連や陽や夙は、曹仁に着いて行かないし、文官の雛里や調も、それを咎めもしない。軍に属していない天和も含めて6人の視線は、曹仁や4人組には注がれずに五胡の軍勢に向けられていた。

「ふつ、醜い男には誰も着いて来ないのだな」

「ダークさん当たり前よ。私も戦いじゃなきゃ近づきたくないですもの」

「デスカイザー、お前が持っていない友情と愛情の力を味わえ」

4人組は、曹仁に軽蔑の視線を投げかけて好き放題に言っている。

「お喋りは終いだ。とっつつ終わらせるぜ」

曹仁が斧を振るうと、4人組は誘う様に後退していく。誘われるがままに、追い詰めていく曹仁。

「ここまで来れば大丈夫だ。マジン、術を発動してくれ」

マジンと呼ばれた者が頷き手を挙げたかと思うと、曹仁の背後に光り輝く壁の様な物ができていた。

「ふっ、これはマジンが発動させた絶対防御壁の魔法。この壁に遮られると、人も物も魔法も通る事はできません。当然デスカイザー貴男は逃げられないし、助けも来れませんよ」

「弓隊の皆さん、デスカイザーに弓を放って下さい」

「騎馬隊も突撃の準備をして下さいね」

曹仁に弓が雨の様に降り注ぎ、騎馬隊の槍も曹仁体に無数の傷を作っていく。

痛い、私の体じゃないのに曹仁の体に傷がつき、血が流れ出るのを、

目の当たりにすると私の心に引き裂かれる様な痛みが走る。

自然と涙が溢れ出て気づいたら私は、曹仁に向かって走り出していた。

不思議な事に、今の曹仁は小さな男の子に見える。

光の壁は斬ろうが、叩こうが傷一つ、つかない。

私の手はそれでも止まらない、手から血が滲んでも動きを止めない。早くあの子を助けないと、その気持ちだけが私を動かす。

見る見る間に、血だらけになる曹仁。

その時、天和が大きな声で叫んだ。

歌い手である天和の声は戦場に響く。

「豪君、見つけたよー」

その声を聞いた曹仁がニヤリと笑った。

五胡戦 曹仁と曹操を隔てる壁（後書き）

今日のうちにもう一話書きたいです
感想指摘お待ちしております

Endless amount of doors 〱 沢山の扉 〱 (前書き)

豪の必殺技？が炸裂します

Endless amount of doors 〱 沢山の扉 〱

side 曹操

ニヤリと笑った曹仁は地面に片膝を着いた。

そのまま手を地面に着けた所を見ると、倒れた訳ではない様で安心する。

手を着いた曹仁が低く大きな声で言葉を紡ぎ出した。

「我が名は豪。創竜に仕えし矯正指導員にして外史を糺す者。我と絆を結びし外史の住人よ。その絆にて我に助力を願う」

曹仁は大きく息を吸い込み叫んだ。

「Endless amount of doors」

その声が響くと壁の向こうの地面や空に沢山の扉が現れた。

side 陽

豪ちゃんが叫ぶと、色んな扉が現れた。

木製だったり鉄製だったり大きさも形も様々な扉。

「王連さん、豪ちゃん今何したの？それに何て言ったの？」

「こっちの言葉にしたら、沢山の扉ってどこだな。何をしたか見ればわかるぞ」

空に浮かんだ大きな扉が開いた中からは、真っ白な龍が現れた。

「豪よ久しいな。お前が負けると俺の親友の名に傷がつくんだぞ」

白い龍が友達に話し掛ける様に豪ちゃんに話かけた。

「あの龍の親友の黒龍がある外史で暴れていてな。ダチを倒すのが忍びなくて豪さんに頼んだらしい。ほれ、お前や曹操の剣は、その黒龍から取ったんだよ」

「我が恩人に集団でかかるとは、小賢しい人間達よ」

白い龍は大きく息を吸ったかと思うと、五胡の軍勢に向けて激しい炎をはきかける。

その炎で多くの五胡の兵士が燃やされていく。

地面にある緑色の扉からは、真っ赤な鎧を身につけた女の子が飛び出してきたラブリーに斬りかかる。

「師匠。相変わらず無茶して怪我しかしてませんね。それだから何時までたつても彼女ができないんですよ」

「あれは豪さんが弟子として育てた勇者。師弟ってより兄妹みたいな関係だけだな」

「マリー、久しぶりに会った師匠に対する言葉がそれか？彼女兼嫁さん候補なら後ろにいる」

「後ろつて、ジャックさん？師匠モテないからって、男の人に？」

「陽、凧、調、雛里、天和、手を挙げる。あの5人だっ」

「全員可愛いじゃないですか。騙したんじゃないですよ〜」

そう言いながらも、マリーと呼ばれた女の子はラブリーを押ししている。

「私は師匠に返しきれない恩があるんですよ。そんな師匠を痛めつけるなら…死ねっ」

瞬間、まとう雰囲気を変えたマリーさんによってラブリーが斬り捨てられる。

「師匠。新婚旅行は私の世界に来て下さいね。旦那と2人で歓迎しますから」

鉄格子の扉からは、大きな体のお坊さんが出て来る。

「おいおい豪、お前をぶん殴るのは俺の特権だぜ。こんなナルちゃんにおされてどうした」

「あれはある外史で、豪さんと暴れまわった快って言う僧兵だ。ケンカ友達らしいぜ」

「ナルちゃん？私は美しいから嫉妬したのかい？醜い男は、これだからギヤッフッ」

「鬪つ男なら髪は短髪にしろ。それになんだこのか細い腹筋は？」

カイさんは、倒れたダークを足蹴にしている。

「弱っちい兄ちゃんよ。豪快コンビにケンカ売るのは命がけなんだぜ」

次にピンク色の扉が開く。

「あらっ豪ちゃん。弱ってるわね、襲ったげようか」

「マイク、気色悪い事を言うな」

「マイクっ言うな。私はパンジーちゃんよ。忘れるな、ぼけ獅子」

それは男だけでも女の格好をした筋肉質の宦官みたいな人？

「あれでも高名な魔術師だそうだ。敵の魔力が強くなり過ぎて困っているのを豪さんに鍛え直してもらったんだよ」

パンジーさん？は、マジンに向かって進んでいく。

「あらっ、貴女ずいぶんと可愛い子達を飼ってるのね。その可愛い子達に喰われちまいな。強制孵化っ」

マジンのロープの下から蠢くものが見えたかと思うと、それはロープを食い破って、色んな虫が見えた。

「次からはペットは責任持ちなさいね」

マジンって女の子だったんだ。

「みんな大丈夫？デスカイザーは弱っています。五胡のみなさん一斉にかかって下さい」

五胡の兵が襲いかかろうとすると、豪ちゃんの前にある木製の扉が開く。

「全く、この馬鹿孫は何歳になっても心配ばかり、かけおつてからに」

豪ちゃんと似たような髭を生やした人が斧をふるって五胡の兵を吹き飛ばす。

「悪かったな、アグラ爺さん。もう少してひ孫見せてやるから勘弁してくれ」

「俺の弟分にふざけた真似をしたんだから覚悟しろよっ」

金髪に無精髭を生やした男の人が剣を振るっ。

「フォルテの兄貴、助かるよ。あっ兄貴のお陰で嫁さんできそうだよ」

「相変わらず君は馬鹿だな。大軍相手に1人で挑むなんて」

眼鏡をかけた細身など神経質そうな男の人が、豪ちゃんに嫌味を言う。

「ネステイさん久しぶりっす。外史で何回死んでも俺の馬鹿は治らないんですよ」

「仕方ないな。サモンツ」

ネステイさんが、そう言と鉄で作られた竜が現れて眩しい光で五胡の兵をなぎ倒して行った。

「3人が来てくれたって事は…」

「ごう君、貴男って子は会う度にお姉ちゃんに心配ばかりかけるんだから」

アメルさんは厳しい言葉とは、裏腹に優しい表情で豪ちゃんを羽根で優しく包んでいく。

「アメルお姉ちゃんごめん。それとありがとう」

「ほらっ、傷は治ったわよ。この世界で最後のお仕事きちんと終らせてきなさい」

その他にも扉から沢山の人が現れて五胡の兵を倒していった。

共通点は、みんな豪ちゃんを大事に想っている事。

「豪さんの一番の強さは、武でも頑丈さでもないんだよ。行く外史で絆を結び、力を貸してもらえる器さ。今来ている人達は、その外

史で1、2を争う強さを持っている人ばかりなんだよ」

side 曹操

私は、目の前で展開された不思議な光景に圧倒されていた。
でも、なにあの曹仁の甘ったれた顔は？
アメルお姉ちゃんぐってム力つくわね。

Endless amount of doors 〱 沢山の扉 〱 (後書き)

今回の技名はtakmeio様に英訳してもらいました。改めて感謝です。

マリー、快、パンジー？の外史を読みたいってリクエストがあれば書くかも？いたらですけどね
感想指摘お待ちしております

さよなら 姉ちゃん(前書き)

マリーと豪の話は二次創作なるんでしょうか？

さよなら 姉ちゃん

side 豪

ジャスティーに向かって進んでいくと

「オーロラフェニックスアタック」

ジャスティーが、光のフェニックスをとばしてくる。

(いきなり決め技かよ。でも、これなら)

「握り潰す」

(受けてもダメージ対した事はねえけど、外野がうるさいしな)

「オーロラフェニックスアタック・改」

改造点ないのに改とは、これいかに。

「真・オーロラフェニックスアタック」

なら今までののは偽物？

「究極オーロラフェニックスアタック」

次は至高じゃないよな。

しかし……………

「一回一回技を叫ぶんじゃない。うざいんだよ」

「くっ、何で効かないんだ。まさかお前は元祖デスカイザーだな」

「なんだよ。元祖デスカイザーって。本家デスカイザーもいるのかよ」

色んな意味で、ジャステイーが面倒くさいので、ぶん殴る。

思いつき吹き飛んだジャステイーを1人の男が受け止めた。

しかし、あんなガリガリの体で良く受け止めたよな。

まさかこいつが

「豪君、そのガイコツみたいに細い人が黒幕さんだよ」

「ありがとな天和」

「ねっねっ。私、豪君の役に立った？」

「半端じゃなくな」

「師匠。可愛い彼女といちゃつきたのわかりますけど、戦いの最中ですよ。しっかりしろ、ボケ獅子」

相変わらずマリーは、いい突っ込みをしてくれる。

ジャステイーを抱えたまま、黒幕が近づいて来る。

「まさか、矯正指導員が絡んでは計算外でしたね」

「サインでもくれてやるうか。黒幕さんよ」

「魅力的ですけども、まだ手駒はありますからね」

黒幕は懐から、例の魔術書を取り出して呪文を呟く。

魔術書から溢れ出る黒い霧がジャスティーを包んでいく。

「さあ、ジャスティー。これで貴男オーロラフェニックスアタックも強力になりましたよ、防御壁の魔法は解除しましたから狙うのはデスカイザーじゃなく曹操にして下さいね」

無言のまま、ジャスティーが構えをとる。

(目が虚ろだ。それにこの魔力はやばいな)

side 曹操

曹仁と闘った男が、私に向けて構えをとり、闇色の鳥を飛ばしてくる。

(早い、これは避けれないわね)

防御の姿勢で耐えようとした私の前に大きな壁が現れた。

「くー、こいつは結構効くな」

大きな壁は曹仁だった。

「ジャスティー、デスカイザーは動けませんよ。パワーアップしたオーロラフェニックスアタックでデスカイザーを倒しなさい」

曹仁は、そのまま何羽もの闇色の鳥を受けている。

「何で、貴男は私を守るの？私が君主だから？」

「昔、武官の蹴りから庇ってもらった恩返しですよ。曹操様」

side 豪

ちよつと、まずいかもな。

姉ちゃんがいる限り、俺は動けない。

姉ちゃんが逃げたら、ジャステイーは、また姉ちゃんを狙う。

ジャステイーは、正面以外を黒幕が発動させたの光の壁に守られているから他の奴等も手出しできない。

(ジャステイーの魔力はまだ切れないだろう。こつなりや仕方ねえ)

side 陽

豪ちゃんが、闇色の鳥にボロボロにされていく。

どうするか考えていると、豪ちゃんはジャステイーに向かって走り出した。

防御をしてないから、闇色の鳥を、まともに浴びて、さらに傷だらけになっていく。

それでも豪ちゃんは、止まらない。

そしてジャステイーの前に着いた豪ちゃんは、闇色の鳥ごとジャス

ティーを殴り倒した。

side 曹操

ジャステイーと言う男を殴り倒した曹仁は、やせ細った男に近づいていく。

「流石は矯正指導員。噂に違わぬ化け物ぶりですね。手駒を失って闘う程、私は愚かじゃありませんから、しばしのお別れをさせてもらいますよ」

笑いながら、そう呟くとやせ細った男は闇に包まれて消えた。

「アメルお姉ちゃん、ジャステイー達の傷を治してやってくれ。ジヤックは傷が治ったらホーリーの爺さんの所に連れて行け。調、黒幕がどこへ逃げたか調べてくれ」

曹仁は傷だらけにも、関わらず辺りに指示を出していく。

「兄貴、黒幕が逃げた外史がわかったぜ。事務所で渡る準備もできたつてよ」

「豪様、まさかこのまま黒幕を追うんですか？」

「すまんな雛里、今逃がすと被害が拡大するだけなんだよ」

「せめてアメルさんに傷を治してもらってからにして下さい」

「今は1分1秒も惜しいんだよ。助けに来てくれた奴等には、後か

ら俺が礼に行く。陽、風、調、雛里、天和、俺は黒幕を追って、この外史には戻ってこねえ。お前達は後悔しない別れを済ませてから来い」

side 曹操

曹仁が傷だらけのまま呟いた。

「さよなら姉ちゃん。今までありがとう」

そして曹仁は消えていった。

私の心に去来するのは、三国の兵を失う事なく勝利できた嬉しさではなく、心が潰される様な喪失感だった。

姉ちゃん、姉ちゃん、姉ちゃん……

豪？

豪がいなくなったの？

何で？

私が忘れていたから？

私の大事な可愛い弟の豪は、どこに消えたの？
涙も流れない深い喪失感が、私を包んでいく。

side ジャック

まずいな。

曹操の心が潰れちまう。

「俺の名前はジャック・ウオーレン。豪さんの部下です。うちの馬鹿上司の後始末に協力して下さい。今からこの場にいる人間の記憶を塗り替えます」

そして、ジャック・ウオーレンと豪はこの外史から姿を消した。

さよなら 姉ちゃん（後書き）

まだ終わりません。

皆様の期待は裏切らない終わり方にしたいです

黒幕の素性はできてるけど、名前が浮かばないー

黒幕を糾すのは矯正指導員で（前書き）

本編も、後少しです

黒幕を糺すのは矯正指導員で

side 豪

黒幕が逃げた外史へ向かう俺に部下が併走しながら話しかけてきた。

「豪さん、が黒幕の名前はネロ・カエサセル元統括者です」

「ネロ？暴君だったのか？」

あのガリガリは、暴君ってイメージじゃないけど。

「ネロ・カエサセルは偽名らしいです。、自分は平和主義を外史に押しつけている暴君だからネロを名乗ったそうで」

「随分とネガティブな奴だな。で元統括者ってのは、何かやらかしたのか？」

「ネロは優秀な統括者だった様です。私情を持ち込まず博愛主義だったとか。ただその外史が…」

(つたく、俺に来る仕事は後味が悪すぎなんだよ)

side 陽

豪ちゃんが消えた後に、王連さんが豪ちゃんのお友達と一緒に、みんなの記憶を書き換えた。

今回の戦は、五胡をそのかした黒幕を、新しい曹仁が見つけて倒した事にするんだって。

新しい曹仁は、長い金髪に掘りの深い顔。
早い話が、世間一般で言う美男子なただけ。

「王連さん、私もすぐに豪ちゃんのところに向かうから」

「もうちょっと、この外史と別れを惜しんでも大丈夫だぜ」

「いやです。あんなのが曹仁になる外史にいたくないし。豪ちゃん
がいない世界にもいたくない。何より華琳様と、あんな別れ方をし
た豪ちゃんをほっておけないの」

「ありがとうな、豪さんを頼む。俺は残りの4人に記憶の引き継ぎ
方を教えてからじゃなきゃ、行けないんでな」

私は違う朱霊に記憶を引き継いで、豪ちゃんの元に向かう。
豪ちゃんは、事務所の廊下を忙しそうに動いていた。

「豪ちゃん、やっぱり黒幕を追いかけるの？」

私を見た豪ちゃんは驚いている。

「陽、お前おじさんやおばさんに別れを言っただけで来たのか？」

「豪ちゃん陽の家は武官だよ。戦にでる前はいつもお別れ言ってる
から平気だよ。違う外史から来た朱霊にも、きちんと記憶を引き継
いだしね」

何より今の豪ちゃんを、1人しておくなんて陽には無理。

「よっし、なら初仕事だ。この人間の魂が、どの外史にいるか探し

「といてくれ」

豪ちゃんは、黒幕の情報が書かれた紙を渡してくれた。

「そうゆう事だったんだ。」

豪ちゃんは、ずっとこんな思いをしながら、頑張ってきたんだね。

「任せて。陽は矯正指導員の初仕事を頑張るから。忘れないで、陽には豪ちゃんが必要なんだよ。だから何を言われても陽の為に帰ってきてね」

私の言葉に答える様に、豪ちゃんは背中を向けたまま手を高く挙げて渡って行った。

side 豪

「ここが、ネロの外史か。」

「何にもねーな。」

「真っ暗な闇に白い無機質な床。」

「もうここまで来ましたか。どうです？忘れられた外史は、矯正指導員でも来た事がないでしょ」

ネロが統括していた外史は、人気があった物語を基盤にしていた。だが、物語の人気が無くなり、やがて忘れられ、それに伴って外史の力も衰え消滅する。

「ここは笑顔があつた、人々の生活があつた。花が咲き作物も豊かな美しい世界だったんだ。俺の大切な大切な世界だったんだよ」

「だから新しい世界を自分で作るうとしたのか？あの外史の人間を犠牲にして。お前の評価なら新しい外史の統括者になれたる？」

「統括者？そんなのに未練はないんだよ。俺は会いたかったんだ。もう一度だけあの娘に。俺の醜い姿を笑わずに愛してくれたあの娘に」

ネロは私生活を削って統括者の仕事に没頭したらしい。当然、俺と同じく独身彼女なしの生活。

そんなネロを愛したのは要でも、何でもない普通の村娘。外史が滅亡すると、同時にその村娘の魂も違う外史に転生してしまう。

だからネロは自分が神になった世界に村娘の魂を呼び寄せたかったんだろう。

「気持ちは分からないでもないが、お前はやり過ぎた。だから糺して終わりにしてやる」

ネロが、一番暴走した気持ちを止めて欲しいだろうな。

「できますか？そんなボロボロの体で」

陽からの連絡が来るまで、頑張りますか。

「どうしました？避けてばかりじゃ、勝てませんよ」

(このケガで、受けたらきついんだよ)

「お前も当てなきゃ勝てないぜ。グッッ」

「おや、何か言いましたか？私の蹴りはどうでしたか？」

(この野郎、傷を狙いやがって)

「貴男にはわからないでしょ？一つの外史を守り育てている人間の気持ちは。暴れたいだけ暴れて帰って行く。何様のつもりなんですか？」

ネロが好き放題に、殴り蹴りをいれてくる。

side 陽

やっと見つけた。

ネロの彼女が転生した外史を。

その情報を持って、私は豪ちゃんの後を追った。

真っ暗な中で、豪ちゃんは、ひたすらネロの攻撃に耐えていた。

「豪ちゃん見つけたよ。もう大丈夫だから思いつきり糺しちやえ」

「さーて、お前の望みを叶えてやる。ただし彼女が彼氏になってるかもしれないし、他に男がいたり、お前を嫌うかも知れない。後は運と努力だ」

豪ちゃんに殴れたネロは、穏やかな笑顔を浮かべて光に消えていった。

「もう豪ちゃん無茶し過ぎだよ。なんで転生させる必要があったの？」

「あいつの魂を洗って、転生させるのが術を消すのに一番手っ取り早いからな。それに俺はモテない男の味方なんだよ」

「本当にお疲れ様。でもここ静かだね。死も何もない世界。ネロはここで彼女に会う方法を一人で考えてたんだね」

「あいつは真面目過ぎて純粹過ぎたんだよ。統括者じゃない自分を必要としてくれた彼女を救えなかった自分を許せなかったのさ」

「詳しいね豪ちゃん」

「俺も陽と会うまでは、男として必要とされなかったからな」

豪ちゃんと私は淡い光に包まれながらキスをした。

その光の向こうには、ネロと女の人が嬉しそうに微笑んでいるのが、見えた気がした。

黒幕を糾すのは矯正指導員で（後書き）

後は雛里や凧達との再会

そして、見てくれている人が期待していると思う姉ちゃんとの再会
です

その後の話1 四人との再会

side 天和

「これで完成。やっと豪君に会える」

私は豪君に着いて行く事を決めた時から、歌を書き貯めておいたんだ。

お姉ちゃんから2人の妹への最後の贈り物。

「豪君から、もらった首飾りよーし。ちーちゃんからももらった御守りもよーし。人和ちゃんからももらった筆もよーしと。では愛しの豪君の所へしゅっーぱーっ」

向こうで住む場所は豪君の家で、服、食器とかの生活に必要な物は豪君が買ってくれるんだって。

予め豪君に教わった手順で向こうに渡る。

私と入れ替えて、違う外史から私じゃない天和が来てくれるんだって。

「人和ちゃん、ちーちゃんお姉ちゃんの我が儘を許してね。それと新しい私とも、仲良くしてあげてね」

side 雛里

「朱里ちゃんと水鏡先生へのお手紙は出したし、五胡との停戦協定もばっちり。よしっ、これで豪様の所に行けます」

向こうに着いたら、まずは豪様に会って、この世界のその後を報告。そしてアメルさんと一緒に生活用品のお買い物をするんです。この世界に、心残りがあるとすれば曹操様の事。

新しい曹仁様は、優等生の美男子さん。

規格外な強さも、とんでもない無茶をする事もないから曹操様に、心配をかける事ありません。

当然お二人の関係は、良好何ですけども、曹操様は、たまに寂しそうな顔をされています。

豪様は、この事を聞いたら何て思うのでしょうか。

side 調

「兄貴の馬鹿！。なんで俺にだけ、こんなに仕事があるんだよ」

俺が兄貴から頼まれた調査は、この世界が今回の騒動で、どんな影響を受けたか。

ても、その調査項目が、膨大なんだよ。

マナの薄い世界での、放たれたマナの行方。

書き直された記憶に不備は生じていないか。

新しく来た朱霊は、自然に生活できているか等々…。

兄貴が言うには、俺のサーチ能力が優れているから頼んだって事なんだけど……。

早く終わらせないと、俺の兄貴エネルギーは無くなってしまふ。

ちきしょー、絶対に向こうに行ったら、俺が満足するまで兄貴を買い物に付き合わせてやる。

side 凧

「なあなあ風、曹仁様は格好ええよな」

「曹家の長男で、美男子の上に優しくて本当に非の打ち所がないの」

（私の曹仁は、強面で朴念仁。非は打ちまくられるかもな）

「風は曹仁様に興味はないんか？」

「私には武があるからな。異性としては興味がない」

（豪を私の大好きな激辛料理とすれば、新しい曹仁は子供向けの料理みたいで何か物足りない）

「風ちゃんつままないのー。でも風ちゃんも恋したほうがいいと思うの」

（大丈夫。今日2人と遊んだら私は大好きな豪の所に行くんだから）

side 陽

向こうに残っていた雛里ちゃん達が、無事にこっちの世界へやって来た。

「なあ陽、兄貴はどこにいるんだ？せつかく俺達が来たのに出迎えにも来てくれないんなて、ちよつと冷たくないか？」

「豪ちゃんもみんなが来るのを楽しみしていたんだよ。でも豪ちゃんは今ちよつと自由に動けないんだよ」

「動けないって。まさか豪君、怪我したの？」

天和ちゃんが顔を青くする。
大丈夫、身体はピンピンしているから。

「違うよ。今から豪ちゃんのところに行くから、そうしたらわかるよ」

side 雛里

陽さんに案内されてやって来た場所に、豪様の姿は無く、見えるの
うずたかく積まれた紙でした。

「豪ちゃんみんなが来てくれたよ。少しは書類片付いた？」

「片付けたら、直ぐに追加が来たよ。流石に一息入りたいから休憩
室に行こう」

「豪様、お久しぶりです。あの書類の山は？」

「雛里久しぶり、よく来てくれた。今回の報告書、雛里達を連れ出
す為の申請書、俺の決済を待っている各種書類、俺への依頼書とか
色々だ」

side 豪

現実から目を逸らしちゃいけない。
しかし、これは……

久しぶりに事務所に来た俺を迎えてくれたのは可愛い部下達と事務

員。

手に一杯の書類を持って、素敵な笑顔で出迎えてくれた。
サラリーマンにならわかんと思う、長期休暇中にたまっているお仕
事のプレッシャー。

俺は大人しく書類を受け取りパソコンとの格闘をはじめた。
いくら俺でも書類を糺す事はできない。
そんな事したら、始末書と言う名の書類が増えるだけだし。

「すまん、本当は迎えに行きたかったんだけども急を要する書類が
多くてな」

休憩室に着いた俺は、雛里達にジュースを渡して素直に頭を下げる。

「何か兄貴らし過ぎて怒る気力もなくなったよ。まっ兄貴に感動的
な再会を期待する方が無理だからな」

調さんその通りです、反論の余地は一切ありません。

「それで豪様、いつぐらいに片付くんですか？」

雛里には、早くパソコンを覚えてもらいたい。

「急を要するのは大分片づいたから、今日の夜には余裕ができる筈
だ。レストランに予約を入れてあるから、陽と一緒に服を買ってく
ればいい」

「豪、一つ気になる事があるんだけど、豪が使っていた部屋の扉が開かなくなっていたんだけど」

それを最初に聞いた時は、俺も驚いた。

「あー、それはジャックの仕業だよ。多分、無駄に終わると思う仕掛けがしてあるんだよ」

その後の話 1 四人との再会（後書き）

同じ体験をした事がある人はいる筈。
指摘感想お待ちしております

豪と華琳（前書き）

ようやく姉弟の再会です

豪と華琳

side 曹操

私は首都を、陳留から洛陽に変える事にした。
城は引越しの為、慌ただしい雰囲気となっている。

「華琳様、少しよろしいでしょうか？」

「秋蘭どうしたの？」

「はっ。一つだけ、どうしても開かない部屋があり、扉を壊しても
良いかと、姉上が言っております」

「全くあの娘は。秋蘭、案内してちょうだい」

その部屋は私の部屋から少し離れた場所にあった。
ここは誰の部屋だったかしら？

「秋蘭、この部屋を使っていた将は誰かしら？」

「それが誰に聞いても覚えている者がおりません」

私の部屋の近くに住める将は、ある程度の身分を持った者だけ。
それを誰も覚えていないのはおかしい。

「鍵が、掛かっているんじゃないの？」

私が、手を掛けると扉は静かに開いた。

部屋の中は、大きな寝台と大きな机があるだけで、至って簡素。

(こんなに大きな体の将が、我が軍にいたかしら)

ふと目をやると、大きな鎧が置かれている。

鎧には飾り等は、一切なく逆に無数についた傷が目をひく。普段なら見る事も嫌う使いこまれた鎧に、私は何故か強烈に引き寄せられた。

「秋蘭、この鎧どこかで見た事無かつたかしら？秋蘭？」

後ろにいる筈の秋蘭は、そこにはいない。

近くで見ると、鎧には大小様々な傷が刻まれていた。

傷は鎧全体に刻まれており、鎧の持ち主が、いかに無茶をしたのが、わかる。

傷を見る度に、私の心には持ち主が怪我をしなかったかと言う心配と、無茶をした事に対する怒りを覚えていた。

そのまま鎧に手を触れると不思議な温もりが、心に広がる。

(私は、この鎧の持ち主を知っている？)

鎧には、まだ新しい傷も見られた。

最近の大きな戦なら、五胡との戦いね。

そういえば、あの戦いで何か大事な事を思い出した気がしたんだけども。

ふと自分の指にはめてある指輪が目がいった。

雄獅子が黒い石をくわえている銀で作られた指輪。

私好みの指輪ではないけども、はめると気持ちが安らぐから気がつく、いつの間にかはめている。

傷だらけの鎧、雄獅子、…傷だらけの雄獅子

.....

豪！この鎧の持ち主は豪と言う名前だった筈。

そして豪は私にとって、とても大事な存在。

それ以上は頭に靄が、かかっている様でうまく思い出せない。

そんな時、後ろから声をかけられた。

「流石と言うか何というか。あの扉を開けた上に豪さんの名前まで思い出した様だな」

「細作にしては堂々としているわね。この部屋に何のようかしら？」

「俺の名前は王連。その鎧の持ち主の部下だよ。ここに来た理由は、鎧の回収。それがあると豪さんを思い出す奴が出かねないんでね」

「貴男は豪を、この鎧の持ち主を知っているの？」

「俺は豪さんの部下だけ。曹操、あんたも豪さんの事を知ってるんだけどな」

「わかってるわよ。私にとって、豪という人間が大切な存在だという事はわかるの。でも後は何も思い出せない……」

「豪さんもあんたの事を、姉ちゃんとか呼んで慕ってたからな」

姉ちゃん？

私の弟は、曹仁だけ。

曹仁の真名は……？

豪、姉ちゃん、豪、姉ちゃん……。

思い出した。

豪は、私の可愛い弟。

今まで忘れていたのが、信じれないぐらいに大切な存在。

「王連教えなさい。あの子が何者で、私に何をしたのかを。そして今何をしているのかも」

「本当に全部思い出したか。まっこれで俺達の計画はうまくいく可能性が高くなったと」

私と王連を淡い光が包んでいく。

目を明けると巨大な竜が私を睨んでいた。

「外史の理を破るとは、豪も、面白い者と縁を結んだものよ」

「貴男も豪を知っているの？ならあの子の事を教えなさい」

「知ってるも何も、儂が豪をお前の所に向かわせたのじゃからな」

そう言った竜と目が合った瞬間、私の中に色々な情報が流れてくる。外史・矯正指導員・転生・記憶の書き換え・もう一人の姉・血の繋がっていない姉弟……

五胡の大軍に1人で相対して怪我をした？

本当にあの子は、どれだけ私に心配をかければ気が済むの。

その上、勝手に来て、用事が済んだから記憶を綺麗にして帰る？ふざけないで。それに、陽や風を連れて来て、姉には一切の相談をしないのね。

「王連、元主として命令よ。私を豪の所に連れて行きなさい」

side 雛里

私は、パソコンの使い方を教えてもらい、豪様の書類仕事を手伝っています。

そんな時、豪様が一枚の依頼書に目を止めました。

「雛里、ちょっと外史に行ってくるから」

「豪様、まだ書類が残ってますよ。そんな急ぎの依頼はない筈です」

「最近、デスクワークばかりで、暴れ足りねえから魔王の代理しに行こうかと思ってな。なに勇者に刺されたら直ぐに帰ってくる」

「刺されたらって駄目でしゅ。どうして豪様はそんな危険なお仕事を選らぶんですか？」

「正義の味方とかは性に合わねんだよ。刺されたって、こっちに戻ってくれば直ぐに治せる」

「駄目でしゅ。間に合わないと、どうするんでしゅか？」

その時、私の肩に手を置く人がいました。

振り返ると、そこにいたのは久しぶりに会う頼もしい人、この人しか豪様を止めれる人はいません。

side 豪

背中から、凄まじい覇気を感じた俺が振り返るとそこにいたのは

「曹操？あージャックが連れて来た代理の曹操か。済まないが貴女の出番は無いと思うぜ。それじゃ雞里ちよっくら行ってくる」

椅子から立ち上がるうとした、瞬間ゴンツと鈍い音が脳天に響いた。

「つー。誰だよ、こいつを連れてきたのは得物を持たせて事務所内を歩かせてんじゃねーよ」

「豪、いつからお姉ちゃんにそんな口の聞き方するような子になったのかしら？仕事で刺されに行く？お姉ちゃんが、わざわざ来たのにどこに行くつもり」

「へっ？えー、本物の姉ちゃん？いや、記憶の書き換えは成功した筈だし。まさかあの鎧で記憶が戻ったのか」

「ようやく分かってくれてお姉ちゃん嬉しいわ。さあ謝るなり言い訳するなり、いくらでも聞いてもあげるから、ゆっくり話ができる所に行くわよ」

「痛いっ、姉ちゃん髭を引っ張ったら駄目だっつて。つつかお前等、上司の危機を黙って見てるつもりか？」

「当たり前じゃない。お姉ちゃんは豪の部下から、お願いされて来たんだから。全く部下にまで心配をかけてるなんて、本当にこの子は」

「いやいや、国どうすんだよ。つつか創竜のオジキが認めないと無

理なんだって」

「国は豪が先言ってたもう1人の私が行ってるから、心配ないわよ。それに創竜様、直々に豪の無謀、無茶を止めれるの曹操しかいないって頼まれたの。納得した？」

「納得した。納得したから姉ちゃん髭を放して」

「安心しなさい。これからお姉ちゃんが豪の健康とか予定を、しっかりと管理してあげるからね。それと創竜様から許可頂いたから、みんなで住む家を建てるわよ」

「いやそれ俺の金だろ。…いえ、文句はありません。お姉様とまた暮らせて嬉しいです」

最近、私が抱えていた寂しさの原因が、ようやくわかった。

やっぱり私には、この手がかかる弟が必要なのね。

でも血は繋がっていないみたいから、いつまでも姉弟じゃ、つまらないわね。

豪と華琳（後書き）

この話も、後数話で終わる予定です

姉ちゃんと外史旅 時々マリー（前書き）

予想以上に長くなりました。

最終話まで、三国志にあまり触れない可能性も

姉ちゃんと外史旅 時々マリー

side 豪

「豪様、決済をお願いします」

雛里が渡して来たのは、雛里達の所属配置許可書

雛里は事務に配属。

しばらくは俺の手伝いをして仕事に、慣れてもらう。

陽は、矯正指導員見習い。

そのうち、一緒に外史に行く予定。

凧も同じく矯正指導員見習い。

凧は、保護系を中心にしていく予定。

調には、依頼の調査してもらおう事にした。

天和は、個別依頼を受けてもらう予定と。

特に問題ないから、許可と。

次は… 曹操孟徳を指導員管理員として配属する。

……うん、これは審議扱いと。

姉ちゃんに管理されたら俺の自由が、無くなるの確定だし。

ただでさえ、減少中の俺の威厳は死守したい。姉ちゃんの書類を、脇に置いた瞬間に、決済印が押される。

決済印を持つのは、白く細い腕。

腕から上を確認する勇氣なんて、俺にはない。

下手に目を合わせたら、この場で説教しかねないし。

「豪、この書類に不備はないわよね？」

不備はないけど

「曹操さんには、もう少し、この世界に慣れてから働いてもらいた
く……」

「曹操さん？ 雛里はもう働いているわよね？」

（姉ちゃん、今は仕事なんだって。それに雛里達は、何回かこっ
ちに来て慣れてるし）

「雛里は、側に置いてお姉ちゃんの事は放っておくと？」

姉ちゃんからは、覇気がただ漏れしている。

（陽達も、基礎研修中だぜ。姉ちゃんも研修を受けてから）

「管理員の仕事は、矯正指導員の仕事の管理よね。なら一度、豪の
仕事を見せなさい」

姉ちゃんを連れて行くとしたら、討伐系か保護系だろうな。

間違っても、俺が魔王になって倒される所なんか見せない。
そう都合良く、丁度いい依頼なんて中々ある訳が… あった。

「雛里、今から姉ちゃんと外史に行ってくる」

俺は雛里に依頼書を手渡す。

「豪様、これは…」

「顔をだす約束してたからな。その世界には魔法があるし、モンス

「ターもいるから丁度いい」

依頼をしてきたのは統括者や管理者ではなく、外史の要。俺の弟子にして、その外史の勇者マリーが依頼をしてきた。

「豪、依頼の内容を詳しく教えなさい」

立場的に姉ちゃんは見習いで、俺はそれなりに上の役職なんだけども。

「依頼人はマリー・マーガレット。外史の要で勇者、ついでに俺の弟子。依頼内容は、大量に発生したアンデット退治だよ」

「アンデット？その勇者は退治できないの？」

「アンデットは、死体に魂がはいつて動いてるんだよ。今回は王族の墓場が荒らされたらしく、死体に傷をつけないで倒さなきゃいけないらしい」

「はっ？傷をつけないで退治なんて無理でしょ」

「墓場には、最近亡くなった幼い王女が埋葬されていたらしい。多分犯人は王女をアンデット化させたらマリーも王国の連中も手が出せないのを分かってやったんだろ」

豪は何気なく説明をしているけど、怒っているのがわかる。

「豪は、今までこんな事ばかりしてきたのは？」

「汚れ役・嫌われ役・患者ならお手の物だよ。誰かが、やらなきゃいけないからな」

だから貴男は体も心も傷だらけなのね。

「さて、準備が出来たら、向こうに渡るからな」

.....

「師匠、お待ちしてました。あれっ、

お連れさんも一緒にですか？」

私達を出迎えたのは、気の抜ける話し方をする女だった。

「豪、この娘は？誰かしら？」

「姉ちゃん、こいつは、マリー・マーガレット。俺の弟子だよ。」

「師匠のお姉様ですか」。鈍感意地悪師匠を、彼女ができるまでに育てくれて感謝です」

「鈍感はわかるけど、意地悪って、この子が何かしたのかしら」

「師匠、つたら酷いんですよ。私みたいな、弱い女の子に一人で

オーガを退治してこいだの、素手でトルルを倒してこいだの。私はお前みたいな化け物と違うっての」

「マリー、誰がか弱いだって。トルルが泣きながら土下座した相手は誰なんだよ」

「師匠のせいで、可憐でか弱い女の子が、そうなちゃたんですよ。全ては師匠のせいです」

「まったく相変わらず口が減らねえな。アンデットが出るまで時間があるな。腹拵えしたら宿屋で仮眠をとるぞ」

豪とマリーは師弟と言うより兄妹みたいな関係ね。

「師匠。私久しぶりに師匠が作ったご飯を食べたいです。主婦は人が作ってくれる料理が一番のご馳走なんですよ」

「お前の旦那に文句言われたぞ。剣術以外に料理も教えて欲しかったってな。飯は食堂で済ます」

食事を済ませて、宿で仮眠を済ませた私と豪は墓場に向かう事にした。

「姉ちゃん、ちょっとこれに触って」

豪が見せてくれたのは青い巨大な数珠。

私が数珠に触れると、青い光が私を包み気付いたら数珠に閉じ込められていた。

（「ごう、何してくれたのかしら？」）

「姉ちゃんアンデットの相手した事ないだろ？そこに居てくれた方が安心なんだよ。終わったらきちんと出すから」

（お姉ちゃんが、足手まといと言いたいの？）

「違つて。墓場につくよ」

そこで私が見たのは、腐乱した死体が勝手気ままに歩き回っている異様な光景だった。

「我と誓いを結びし闇の神よ。その力を我に纏わせたまえ。闇衣っ」

（豪今のが魔法かしら？）

「アンデットは生命活動で生まれる光を目掛けて襲ってくるから、闇衣の魔法を、かけとけば気づかれずに犯人の所に行けるんだよ」

豪の言葉通り、死体達は豪が側を通り過ぎても気づく様子がない。ふと豪が歩みを止める。

その目線の先には高価な服を身に纏った小さな女の子が無邪気に遊んでいた。

（あれが王女なのかしら？）

「まだ死んで日が浅いから王女本人の魂が入ったんだ。多分死んだ事に気づかないで遊んでるだよ。このままじゃ王女の魂は輪廻でき

ねえな」

(豪、お姉ちゃんからの命令よ。お姉ちゃんが許すから、犯人を思いつ切り叩きのめしてやりなさい。)

side 豪

墓場の中頃まで来た俺はサーチを展開する。

……

見つけた。

犯人は、やはりネクロマンサーか。

あんな子供を利用する奴は糺すんじゃなく、倒した方がいい。

ネクロマンサーは、大きな木の下で石に座っていた。

周りに戦士のアンデットを従えて王様のつもりなんだろう。

「さてお遊びの時間は終わりだ。帰ってもらうぜ。アンデットと一緒にあの世にな」

「貴様どうやって、ここまで？しかし甘いわ。俺が呼べばアンデット共は直ぐに集まる」

(豪、大丈夫なの。そこら中アンデットだらけよ)

「どうだ。俺の一言でアンデット共はお前に襲いかかるぞ。泣け喚けそして謝れ」

「るーせよ。お前王女な死体をどうするつもりだ？」

「あのガキは、王家との交渉に使ってやるんだよ。娘の安らかな死

に金を払わない親はいないだろ？」

「我が名は豪。創竜の部下にて外史を糺す者。我に従いし闇の神よ。汝の力と迷える魂を、この地より冥府へと持ち帰れ。闇消」

闇の力から、解放された死体はその場に崩れ堕ちていく。

マリーが戦えなかった理由のもう一つは、光の魔法でアンデットを倒すと魂ごと死体を消しかねないからだ。

「疑問だろ。なんで闇の魔法が無くなったか不思議だろ？教えてやるよ、闇の神さんとはケンカ友達でな。俺の味方なんだよ。あいつが優しさで作った魔法をお前みたいなカスが使うのは勘弁ならねえんだよ」

(豪、やっちゃんなさい)

豪は懐から、真つ暗の玉を取り出した。

それは闇夜よりも、黒い玉。

「お前には、この玉の中で永遠に闇の魔力の供給源になってもらうからな」

side 華琳

豪が玉をかざすと、ネクロマンサーは玉に吸い込まれていった。墓場を後にした豪が、ポツリと呟く。

「あの魔法は元々は死者にきちんと別れを告げさせる為に闇の神が作ったものなんだよ。なのにあの野郎」

私だけは、何があっても、この子を恐れずに受け止めてあげよう。
愛しい存在。
姉としても、華琳としても大切な存在だから。

姉ちゃんと外史旅 時々マリー（後書き）

豪とマリーの話を書いてみたい今日この頃。
とりあえず曹仁伝を終えてからですね。

外史デビュー 陽編(前書き)

快が出てきます
覚えてる人いるかな？

外史デビュー 陽編

side 豪

姉ちゃんと一緒に行った外史の報告書を作ろうと、パソコンを立ち上げると依頼のメールが届いていた。

(マリーの次は快からか。丁度いい陽を連れてくか)

「豪帰るわよ。それと帰りは買い物をしていくから」

退社後、姉ちゃんが食材を買いたいと言うので、でスーパーへ。姉ちゃんの後ろを、カートを押しながら着いてく俺。

カップめんを、買おうとしたら却下される。

揚げ物惣菜に、手を伸ばしたら手を、叩かれた。

「姉ちゃん肉も、買おうよ」

「駄目、豪は肉類を取りすぎなの。野菜中心の料理をお姉ちゃんが作ってあげるから」

「せめて魚肉ソーセージぐらいは……はい、お姉様にお任せします」

「任せたのなら、ほうれん草の下に、隠してある豚肉を戻してきな
わい」

「はい……」

食材を買うのは俺の金で、作るのも俺の部屋の台所なんだけども…
…そう、心の中で呟いてみる。
6人分の食材と姉ちゃんの日用品も購入。

「しっかし、こっちの街を姉ちゃんと一緒に歩くななんて想像もしな
かったよ」

「豪は最後まで、お姉ちゃんに内緒にして、いなくなっちゃたもん
ね」

「仕方ないだろ。俺達は外史の薬みたいなものなんだから」

「薬？豪が？火薬の間違いじゃなくて？」

「あのね、俺達は劇薬と一緒に。やばい時には効果があるけど、健康
な時は毒になりかねないんだよ」

「はい、はい、わかりました。さっ帰るわよ」

「ちよっ姉ちゃん。荷物は…俺一人で持ちます」

荷物を持ちながら、姉ちゃんをマンションに案内する。

「ここが俺の家だよ」

扉を開けてびっくり。

部屋から、甘い臭いがした。

玄関に可愛い置物が飾れている。

誰だよ、猫足や恐竜足のスリッパを買ったのは。

なんで自分ん家なのに、こんなに、落ち着かないんだ。

「あつ、豪ちゃんお帰りー。ご飯にする？お風呂にする？それとも陽にしちゃう？」

「陽まで、姉ちゃんがいるんだぞ。それに明日は俺と外史に行くからグッスリ寝ておけ」

部屋に関しては、姉ちゃんが満足した時点で諦めた。俺が、姉ちゃんと陽達に、口で適うわけがない。

side 陽

豪ちゃんには、グッスリ寝ておけって言われたけど無理だった。何しろ久しぶりに、豪ちゃんと2人つきりになれるんだもん。

「ねえ、豪ちゃん今から行く外史はどこなの？」

「こないだ会った快がいる外史だよ。今回は快の妖怪退治の手伝いに行く」

「快さんって、どんな人？」

「生臭さ坊主だ。あいつの宗派は、名前の頭に師匠と同じ一字をもらうんだけど、あいつはその師匠を殴って破門になったから、ただの快なんだよ」

「殴った理由が、きちんとしてるから豪ちゃんはお友達してるんだよね。うんっ、それなら安心」

それに快さんの話をしている豪ちゃん、何だか嬉しそうだし。

しっかし相変わらず小汚ねえ長屋だよな。

快の住んでる長屋は、通称あやかし長屋。

妖怪が、出そうなくらいに古いからついた名前だ。

俺は長屋の一室の戸を力任せに叩く。

「くそ坊主、来てやったぞ。くたばってないなら出て来やかがれ」

ガラリツと、大きな音がして戸が開く。

七尺近い髭面の坊主。

俺を、ここに呼んだ張本人の快だ。

「豪、馬鹿力で叩くな戸が壊れる。あと声がかすぎるんだよ。長屋の連中は、まだ寝てる時間だぞ」

「寝てるって、豪ちゃんまだお昼だよ」

「あー、ここに住んでる奴等はちょっと特殊だな。れで快、俺は何をすりゃいいんだ？」

「近くの古寺に化け蟹がでてな。問答はうまくいって正体を暴く事は出来たんだが、ちーとばかっし、蟹がでかくて退治出来なかったんだよ」

「蟹は古寺には、もういないだろう？それなら雲はあさんに聞くとするか。ところで、あのばあさんは、まだ生きてるのか？」

「豪ちゃんと快さんが話をしていて、1人のお婆さんが近づいて来た。」

「久しぶりに顔を出したと思ったら、豪は相変わらず口が汚いね。それだから何時まで、たっても一人者なんだよ。」

「よー雲ばあさん。安心しろ、今日は将来の嫁を連れて来ている。」

「嫁さん？このべっぴんさんがかい。……いい娘さんじゃないか。大事にするんだよ。」

「もっつ、お婆様ったら正直なんだから。」

「雲婆さんありがとな。ところで生臭さ坊主が逃がした蟹の行方を知りたいんだが。」

「蟹かい。……蟹は海に続く水路に隠れてるよ。夜になるまで出てこないだろうさ。」

「豪ちゃん、雲お婆さんって占い師さん？」

「雲婆さんは、雲外鏡って鏡の妖怪さ。婆さんの鏡は、この世の全てを写しだすんだよ。」

「快さんがニヤリと笑って話し始める。」

「ちなみにこの長屋の連中も殆ど妖怪さ。昏間から起きてるのは雲」

「ばあさんぐらいかもな」

「快さんって、妖怪退治をするお坊さんじゃなかったっけ。」

「この長屋に住んでるのは雲ばあさんみたいに戦う力が弱い妖怪だけだよ。快が守っているから、みんな安心して暮らしていけるのさ」

「ふーん、豪ちゃんも住んでたの？」

「快は飲み仲間が、いなくなって寂しいみたいだけど、私はこのでかい声がなくなって嬉しい限りだよ」

「へっ、婆さんだって、豪の嫁を心配してたじゃないか」

私の知らない豪ちゃんを知るのは、何か不安だった。でも、ここでも豪ちゃんは豪ちゃんだった。

「ったく陽、時間まで宿屋行くぞ。宿屋」

「豪ちゃん照れてるんだー。かつわいいー」

side 陽

夫婦っ、夫婦っ、豪ちゃんと陽は夫婦。

宿屋に泊まる台帳に、豪ちゃんが陽との関係を夫婦って書いてくれたんだ。

宿屋を後にした私達夫婦は、快さんと合流。

夜道を蟹が隠れている水路を目指して歩く。

水路に近づくに連れて生暖かい風が吹いてきた。

「ねえ、豪ちゃん。あの女の人、1人で怖くないのかな？」

柳の木の下に、背中を向けた女の人が1人で立っていた。

「ありや夜鷹だな。こんな場所に夜鷹なんざいる訳ねえのに。そこは夜鷹ならぬ夜蟹の浅知恵か。快どうする、経文で正体を暴くか？」

「この距離じゃ経文も効果薄いな。俺は顔がわれてるし、坊主に声をかける夜鷹はいねえから豪頼むぜ」

「女連れに声をかける夜鷹もいねえよ。けど放つとけば、誰かが蟹の餌になっちまうか。仕方ねえ陽はここで待ってる」

私は夜鷹の意味をサーチで調べる。

「豪ちゃん駄目っ。豪ちゃんには陽がいるでしょ」

「誰が蟹なんかと遊ぶか。客のふりをして正体を暴くんだよ」

side 豪

なんとか陽を納得させて夜鷹に化けた蟹に近づく。

蟹が俺に気づいた様で、しなを作りながら近づいてきた。

「おや、強うそうで私好みの兄さんじゃないかい。どう、遊んでいかない？」

蟹が俺の肩にもたれかかる。

「姉さんみたいな美人は滅多にいないから、どうするかな。でも姉さんは美人過ぎて怖いな」

「あら嬉しい事を言ってくれるね。怖いかどうか試してみるかい？」

「止めとくよ。ハサミでちょん切られて、食われたくないからな」

「可笑しな事を言う人だこと。私がカニだったのかい？」

「へー。俺はハサミとし言っていないがな、何でカニなんだい。つうかくだらねえ問答は終わりなんだ。どこにそんな磯くせえ夜鷹がいるんだよ」

side 陽

カニだ。

本当に化け蟹だ。

豪ちゃんの倍は、ありそうな蟹が現れた。

「おい、生臭さ坊主。早く経文を唱えろ。こんな硬い殻を殴りたかねえ」

豪ちゃんの声に応える様に快さんがお経も唱え始めた。

低く、力強く、それでいて全てを労る様なお経。カニは、お経が流れた途端に体を痙攣させて動けないでいた。

「豪、そいつに喰われた魂は成仏したよ。後は退治するだけだ」

side 豪

蟹をぶん殴ろうとしたら、陽が蟹を一刀両断していた。

どうも俺を誘惑したのが、気に入らなかつたらしい。

あそこで蟹を、問い詰めて良かった。

下手したら俺も、真っ二つにされていたかもしれない。

快は

「豪、浮気した時は俺がきちんとお経をあげてやるから安心しろ」

なんて言いやがった。

まっ、今日の動きを見る限りは、陽は指導員として、やっていけるだろう。

外史レビュー 陽編（後書き）

凧編や雛里編は反響しだいです。

いつか妖怪関係のオリジナルを書きたくてもこの話を書きました。

凧と姉ちゃんと魔王な俺と(前書き)

最近、姉ちゃんこと華琳が出てくるとヒロイン組を圧倒してる気が

凧と姉ちゃんと魔王な俺と

side 華琳

「クツ、ハアハア」

私は、嫌な夢を見た所為で最悪な寝覚めを迎えた。

いや、正確には夢で、嫌な事を、思い出してしまったんだけども。

時間はまだ早いけれど、今からもう一度、寝る気はしない。

ベッドから体を起こして、リビングへと向かう。

台所では今朝の食事当番の凧が、忙しそうに動いていた。

「凧おはよう。お水もらうわね」

蛇口をひねるだけで、綺麗な水が飲める水道は、最初こそ驚ろきはしたが、今はその便利さを享受している。

「華琳様おはようございます。華琳様もあれを夢で見たんですか？」

「やっぱり凧も見たのね。それで私達の安眠を邪魔した張本人は？」

「豪なら、まだ寝てますよ」

「本当にいい気なもんね。叩き起こしてやろうかしら」

あの子の事だから、無邪気な寝顔で熟睡しているだろう。

普段なら可愛く思える寝顔さえ、今は腹立たしく見えるかもしれない。

私は完全なる逆恨みの原因となった一件を思い出していた。

事の起こりは、昨日の昼。
事務所内が、軽くざわついていた。

「ずいぶん賑やかな。何があつたのかしら」

私は、その時、偶然事務所にいた風を訪ねた。

「それが豪に女性の依頼人が来たそう。しかもそれが初めての依頼人らしく」

私達が、来るまでは豪への依頼人の殆どは男からが多かつたそう。女性も既知の人からのみで、初見はまずなかつたとの事。

（あの子の第一印象は、こつちでもあまり良くないみたいね）

依頼人と立ち話をしていた豪が、私を見つけるとホツとした顔で声をかけてくる。

「姉ちゃん一緒に、依頼人から詳しい話を聞いて欲しいんだけど」
困っている弟を、放っておく訳にもいかず豪に近づいていく。

（豪どうしたのよ。依頼なんて何件もこなしてきたんでしょ？）

（仕方ないだろ。俺が恐いみたいで、依頼人が相談室に入るのをためらっているんだよ）

依頼人は、美人と言って差し支えないと思う。

自分の容姿に自信がある為か、噂以上に豪が迫力あつた所為なのか
2人で密室に入るのを、ためらっているらしい。

「こちらの管理員曹操と一緒に話を伺ってもよろしいでしょうか？」

依頼人の女は、渡りに船とばかりに了解してくる。

あからさまに安堵した様子には、腹がたった。

私の可愛い豪が、貴女なんか相手にする訳がない。

side 豪

姉ちゃんが来てくれたお蔭で、無事に話を聞く事ができた。

依頼内容は、慣れた魔王の代理役。

基盤の物語で、勇者と魔王は幼なじみらしい。

勇者は神族の血をひき、魔王は魔族の血をひいてる。

勇者は単純熱血タイプで、目立つ少年に成長。

一方の魔王は、弱気に育ち、存在も薄い。

対象的ではあるが、2人は仲が良かったらしい。

そんなある日、2人の住む町を魔族が襲う。魔族の狙いは、勇者の討伐と魔王の確保。

魔王は、勇者を守る為に自ら魔族に加担する。

そして幼なじみ同士の戦いとなるらしいのだが、肝心の魔王が勇者と闘いたくないとごねているらしい。

それで俺に魔王の代理をして欲しいみたいなんだけど……。

ぶっちゃけ魔王と俺は似ていない。

資料写真を見ると、魔王は眼鏡をかけたガリガリの細面、アダナをつけるとしたら、委員長。

「姉ちゃん、眼鏡をかけたら俺と魔王を勇者が間違えてくんないか

な？」

「無理ね。痩せた猫にタテガミをつけてもライオンには見えないでしょ」

「だよー。今回は、凧を連れてく。そして魔王には、直接理由聞いてくる」

「そう、私も着いて行くから」

「へっ、姉ちゃん何で？」

「豪が無茶しない様に監視よ」

side 凧

豪と華琳様と私は魔王の城の前にいた。

魔王の城だけあって、おどろおどろしい雰囲気にも包まれている。

「豪、これからどうすんだ？まさか魔王に会わせて下さいと訪ねる訳にはいかないだろ？」

「凧、俺に任せておけ。なにお前と姉ちゃんは見てるだけで大丈夫だよ」

「豪、お姉ちゃんにあの数珠に、また入れって言っんじゃないでしょっね？」

数珠？数珠に入るってどう言う事？

すると豪が、荷物から大きな数珠を取り出す。

「姉ちゃん正解。特等席でご覧あれ」

「豪、その大きな数珠はなに？」

「凧よくぞ聞いてくれた。これは封魔の数珠と言ってな、巨大な魔物を珠に封じる事ができる物さ。これは俺が改良して、対象者を保護するのに使っている。俺の首にかけてある数珠をとれる奴なんて、中々いないからかな」

そして豪が気合いを入れると、私は珠の中にいた。珠の中は意外と広く、快適に過ごせる。

数珠を首にかけて豪が、魔王の城にむかって歩きだして行く。まさか……

side 華琳

全く、この子は……

豪は、魔王城の扉の前に立つと、扉を思いっきり殴りつけた。中には、勇者の襲撃にピリピリしている魔物が沢山いるのよ。

しかし魔物が殺気立っていたのも、少しの間だけ。今は泣きながら、豪から逃げ惑っているわ。

そんな魔物の気持ちを知ってか知らずか、豪は笑顔で魔物を殴りつけていく。

一匹の魔物が、豪を指差して

「あれは人間じゃない。あんなの人間じゃない。魔物より恐い人間

なんて居るわけがない」

そう震えながら、泣いていたわ。

全く、この子は…。

魔王の部屋の扉に至っては、着く同時に蹴破るし。

明らかに怯えている魔王の肩をつかんで、豪が何かを囁く。

小声で応える魔王。

ニヤリと笑う豪。

また、禄でもない事を、思いついたわね。

side 勇者

この扉の向こうに彼奴がいる。

幼なじみで、元親友の現魔王が。

俺は、もう1人の幼なじみで旅のパートナーでもある彼女に目配せをして扉を開ける。

確かに幼なじみの魔王はいた、でかい男の足に踏みつけていた。

「待ちくたびれたぞ。勇者よ。しかし使えぬ部下を持つと苦勞するな。この程度の自称勇者に苦戦するとはな」

でかい男は、挑発的に俺達を睨みつけてくる。

「彼は自称じゃなく、本当の勇者です」

「なら俺に立ち向かう勇氣を見せてもらおうか」

.....

なんなんだ、こいつは。

魔法は打ち消されるし、剣も砕かれた。

今は俺達の心にあるのは勇気ではなく、恐怖と無力感。

「勇者つてのはな、適わない相手に損得なしに立ち向かえる奴の事を言うんだよ。神の血に助けられてた奴が勇者な訳ないだろ？どうだ自分の無力を知った気分は？だけでもお前の幼なじみは、ずっと自分の無力に立ち向かっていたんだぜ。魔族の血を使わないでな」

男はせせら笑う様に話を続ける。

「お前にわかるか？何の努力もせず栄光を掴み取る奴を横目でみていた気持ちだ。3人で行った祭りで、花火が始まる時間に1人にされた男の惨めさが。だから俺が力を貸してやったのさ」

男は、さらに大きな声で俺を嘲け笑う。

その笑いが止まった。

男の腹を一本の腕が貫いていた。

その腕の持ち主は、俺の幼なじみの男。

「じめんね」

彼奴は、そう呟くと男と一緒に黒い霧になって消えた。

side 華琳

本当に、この子は。

魔王が、勇者と戦いなくなかった理由。

それは勇者と一緒に攻めてくる自分も好きだった幼なじみの女の子に会ったら、嫉妬で勇者を倒してしまうのが、怖かったとの事。だから豪は、自分が一番の悪者になり、魔王に自分を倒させた。そして魔王には、こう言ってみた。

「消える瞬間に心の中で言ってやりな。ざまみろって」

それにしても、やりすぎよ。

目に焼き付いて離れないのよ。

豪のお腹を、魔王の腕が貫いた光景が。

当の本人は平気な顔をして、魔王を違う世界に送ったみたいけど。

豪には大事な人が傷つく姿が、どれだけ衝撃的なものなかを、きっちりと言教しないといけないみたいね。

凧と姉ちゃんと魔王な俺と（後書き）

姉ちゃんと凧がうなされたのは、豪のお腹が貫かれた瞬間が夢にでてきたと。

本当は、凧がもっと出る予定だったんですけどね

感想指摘お待ちしております

豪の過去と、よりそう歌姫（前書き）

豪の過去がチラッとでてきます

豪の過去と、よりそう歌姫

side ジャック

曹操達からは数日遅れたが、俺も先生と馬超を外史から連れ出す事に成功した。

「それじゃ、事務所を案内する」

先生と馬超を連れて事務所を案内していると、先生が事務所の一角を指差して質問をしてきた。

「ジャックさん、あれは何をしているんですか？」

先生の指差した先には、曹操達に囲まれて正座をしている豪さんがいた。

「あー、豪さん曹操を連れて行った外史で、やらかしたから説教されてんだよ」

俺は豪さんから聞いたあらましを伝える。

「曹仁達は、相変わらずだね。そりゃ目の前で腹を貫かれた所を見せられたら怒るって」

馬超が苦笑いをする。

side 豪

(あつ、あのボールペンこんな所に落ちてんだ。視点を変えると発見があるよな)

「豪、聞ってるの？まだお姉ちゃんの話は終わってないのよ」

「豪ちゃん、陽は話を聞いて泣いたんだからね」

「豪、私は今だに、夢でうなさられているんだぞ」

「豪様は自分を大切にしなさ過ぎてす」

「兄貴つて、周りの事を考えない事あるよな」

「豪君は、平気でも見ている人が辛い時があるんだよ」

姉ちゃん・陽・凧・雛里・調・天和と反論をする間もなくお説教コンボが炸裂する。

みんな息が合ってるよな、さすが絆が強い曹操軍。でも、ここは曹操軍ではなく管理事務所だ、そして俺にも上司としての威厳がある。

ここはビシッと

「ごめんなさい。次からは事前に、皆様と打ち合わせをします」

俺が土下座をすると、部下達から歓声と拍手が湧き上がった。

「豪、これから外史に行った時は常にお姉ちゃんと雛里へ連絡を入れなさい。わかったわね」

「えー、面倒くさ…くないです。きちんと善処…いえ実行します」

「豪さんおめでとございます。紐付きで外史に行くとは、鵜飼いの鵜みたいですね」

「ジャック、元はといえばお前が、あんな仕掛けをするから姉ちゃんか……いえお姉様が着てくれて涙がでるくらい嬉しかったですよ。本当に……」

「豪さんは、相変わらずみんなに頭があがらないんですね。なんか安心しましたよ」

声が出た方を見ると、先生と馬超殿が立っていた。

「先生に馬超殿来てくれたんですか！一応俺が上司になるけども、あまり気にしないでいいから」

「曹仁大丈夫だよ。その姿を見たら威厳も感じないから」

「馬超殿、ですよー。さっお仕事お仕事」

「豪様、大丈夫ですよ。書類関係は私が処理して起きましたから」

流石は鳳統、事務処理能力もハイスペック。依頼に関しては、姉ちゃんが管理してるし。

このままお説教タイムの再開かと思われたその時オジキから呼び出しが、かかった。

オジキが、直接呼び出す時は、緊急時か内密にしたい時が多い。正直お説教タイムの方がありがたい。

- - - - -

「オジキ、何があったんだ？」

「ある外史に正史から紛れた奴等がある。この者達なのじゃが」

……なんでコイツらが……

「オジキ、これは俺に任せてくれ。他の連中じゃなく俺にな」

「最初からそのつもりじゃよ。ただし張角を連れて行け」

「天和を？あいつは歌は上手いけど戦いは苦手だぜ」

「歌が必要なんじゃないよ。あの者達を戻すにはな」

俺が天和を連れてやって来たのは、俺のいた時代の正史を基にした外史。

基本、指導員は自分のいた正史関連には関わらない事になっている。今回は特例、俺が選ばれた理由は、ある程度の力があり、この時代でスムーズに動ける為。

もう一つの理由は……。

そんな俺の苦慮を知ってか、知らずか

「ねっねっ豪君、電車って早いなねー。ふわー高い建物があるよ、見てるだけで首が疲れちゃうね」

天和は見るもの全てが珍しい様で、はしゃぎまくっている。

「ねー、豪君。私にもあれやって」

天和の視線の先には、肩を組んでいるカップルがいた。

天和が俺の肩に、頭乗せてくる。

「豪君、大丈夫？無理しちゃ、やだよ」

「天和、ありがとな。もう少し、こうしていてもいいか？」

今は、抱き寄せた天和の温かさありがたい。

「むしろ私は歓迎してるんだよ」

side 天和

今回、豪君が糺さなきゃいけないのは豪君のお友達、それも指導員になる前のお友達。

豪君のお友達は、事故で死んだ後に幽霊さんになったみたい。

車に人を乗せては、あの世に連れ去って行ってるんだって、それであの世に行く途中に、この外史に紛れ込んだみたい。

道路に立ってヒッチハイクをしている私達の前に一台の車が止まった。

無言で豪君が頷く。

「どこまで行くんですか？良かったら乗せていきますよ。って豪じ

やないか！髭なんか生やしててどうしたんだよ」

「怖い顔が、ますますヤバくなるぜ。隣にいる可愛い娘は誰だよ？まさか彼女な訳はないか」

「コバ、学生じゃないんだから髭ぐらい生やすさ。坂本この娘は天和、俺の彼女つてより将来の嫁さんだよ」

私は資料を思い出す。

最初に話しかけてきた男の人が小林さん、次の男の人は坂本さん。

「えっ、細川君の彼女？うっそ芸能人並みに可愛いじゃん。美樹見てみなよ」

「本当に可愛い彼女さんだね。良かったね細川君」

「相変わらず田中さんは賑やかだな。木下さんありがとう」

田中さんって女の人は、小林さんの彼女。

木下さんは、坂本さんの彼女で…豪君が片思いをしていた女の子。

side 豪

みんな悲しくなる位に昔のままだな。

みんなとは、中学時代に仲良しグループつてやつだった。

俺1人が違う高校に行っても交流はあったが、コバと田中さんが、坂本と木下さんが付き合いだしてから遊ばなくなり、高校卒業後に東京で働きだした俺と地元の大学に進学した4人とは、すっかり疎

遠となった。

久しぶりに4人の事を聞いたのは、お袋からの電話、4人がドライブの帰りに事故を起こして亡くなったと聞かされた。だから4人とも大学生のままなんだよな。

俺は車を結界の中に閉じ込める。

みんなにこれ以上罪を犯させない為に。

side 天和

「学生はいいよな。うちの会社なんて禄に休みくれないんだぜ」

「だけど正月位は帰ってこいよ。あつ、こんな可愛い彼女がいたんじゃないか」

豪君達は、和気あいあいとお話をしている。

中学時代の事、今の現在の事、色んなお話で盛り上がっていた。車が山道に入り、人気が無くなった頃に豪君がポツリと呟く。

「お前ら、いつまでこんな事を続けるつもりなんだ？他人を巻き込んでも罪を重ねるだけで天国には行けないんだぜ」

豪君が結界を強くしたらしく、車がゆっくりと止まる。

「豪、何を言ってるんだよ。俺達が何をしたって言うんだ」

「コバ、親父さんに買ってもらった自慢の車に亡霊が染み付いてるぞ。車にみんなに対する怨嗟で満ち溢れてんだよ」

「細川君って、幽霊が見えるんだ。凄いね」

「真面目に話を聞け！今認めてくれれば、輪廻の輪に入れてやる。俺はみんなを殴りたくないんだよ」

「細川君ごめんね。もう私達はあのころの私達じゃないんだ」

木下さんが悲しそうに呟いた。

「木下さん、俺も同じだよ。みんな以上に恨まれているかもしれない
い」

私は歌う。

それは、豪君達5人が仲良しだった頃の思い出の歌。歌を聞くと4人が、苦しみだした。

それでも私は歌う。

これ以上豪の悲しい顔を見たくないから。みんなに豪君の想いを伝えたいから。

豪君との思い出を思いだして欲しいから。

先までピカピカだった車が、錆びてボロボロになっいく。

豪君と私は、静かに車のドアを開けて外に出た。

「みんなさよなら。もうお別れだ」

豪君が車を殴りつけると、車は崩れていく。

車にとらわれていた魂が天国に旅立っていく。

でも4人の魂は、暗い闇に飲み込まれていった。

豪君は何も言わない。

私も何も言えずに、豪君の背中にしがみついていた。

- - - - -

side 華琳

「そう、そんな事があったの。だからあの子おとなしいのね」

私は天和から、今回の経緯を聞いた。

豪、細川豪が正史時代の知り合いに会ったのが、これが初めてだったらしい。

そう、細川豪は自分を捨てて、外史を糺してきたのよ。

私が国より豪を選んだのは、

豪の無茶を、とめる為

私には豪が、必要だったから

そして豪と本当の家族になる為

豪の過去と、よりそう歌姫（後書き）

指摘感想をお待ちしております

豪と探偵とバーボンと（前書き）

前話の続きになりますが、すでに恋姫ではなくなっています。

豪と探偵とバーボンと

男が1人バーの片隅で酒を飲んでいた。琥珀色の酒に過去を映し出し、懐かしむ様に見た後に一気に流し込む。

side ジャック

「豪さんが行きそうな店？」

豪さんの行方を訪ねてきたのは曹操達6人。

いぶかしがる俺に対して張角が、事情を話し始めた。外史から帰って来た豪さんは、創竜様に報告をした後に、ふらりと事務所を出て行ったらしい。

800

「なるほどね。大丈夫だよ、お前らが心配するほど豪さんはヤワじやねえから」

「でも豪君すごい悲しそうだったから」

自分が側にいたからなのか、天和は自分を追いつめている様で半泣きになっている。

「あのなー、あの人はお前達に来るまでは1人だったんだぜ。1人で色んな理不尽な事に会っても前に進んだ人なんだよ」

そうは言っても、6人とも納得してないな様だ。

「多分この店にいるよ。でも豪さんを見つけても騒ぐなよ。豪さんは1人で自分の過去と向き合ってるんだから」

俺は机の引き出しから、バーのマッチを取り出して手渡す。

「そこは小さい店だから全員で行くんじゃねえぞ。あくまで大人が静かに飲む店だからな」

しかしこいつらの中で、あの店に入れる奴いるかね。

side 調

「うー、お子様はお断りしておりますって言われました」

雛里がしよげて戻ってきた。

ちなみに天和は静かに飲む店だからと断られ、陽は豪ちゃんいますか？何て言ったから門前払い。

凧は凧でラフな格好を断られた。

曹操様は豪を信じて待つと言って帰ったし。

「ここは俺に任せときな。潜入捜査は探偵の十八番だぜ」

幸いに仕事帰りだから、俺の服装はスーツだ。

兄貴が居る店は古びた雑居ビルの地下にあった。

分厚い木製の扉を開けると、店に流れているジャズが聞こえてくる。スーツを着込んだ中年の店員が声をかけてきた。

「失礼します。初めてのお客様ですか？」

俺はウォーレンからもらったマッチを手渡しながら答える。

「ええ、指導員のジャック・ウォーレンさんに静かに飲める店を訪ねたら、この店を紹介されました」

言葉遣いは気をつけなきゃな。

この手の店は雰囲気も売り物、それを邪魔する様な客は好まれないだろう。

店員に案内されて入った店は薄暗く小さな店だけでも、客同士が適度な距離を保ってるせいか、狭い印象は受けない。

兄貴はカウンターの隅で、ゆっくり飲んでいた。

いつもの豪快なイメージからは、程遠い物静かな印象を受ける。

「お隣よろしいでしょうか？すみません彼と同じお酒下さい」

兄貴に一礼して隣の椅子に座る。

「バーボン飲めるのか？」

琥珀色の液体から目を逸らさずに兄貴が話しかけてくる。取りあえず隣に座るのは拒否されずに済んだ。

「ゆっくり飲めば大丈夫だよ。この店でガブ飲みする奴はいないだろ？」

兄貴は自分の前に置いてあったナッツが入ったガラスの皿を真ん中に置く。

兄貴はナッツを一つ摘むと琥珀色の液体をゆっくりと飲んだ。

(やばっ、兄貴渋すぎ。いつもの兄貴も良いけど、渋い兄貴も良い)

そんな事は、おくびにださずに、俺もゆっくりと飲み始める。

2人の間にはジャズだけが流れていく。

「何も聞かないのか？」

「聞いて欲しくないから、この店にいるんだろ？」

実際、この店では大抵の言葉が野暮に聞こえるだろう。

「ありがとな」

兄貴が小声で呟いた。

俺は返事の代わりに兄貴の肩にもたれかかる。

何で、ありがとうなのかとか、もう大丈夫なのか何て聞かない。

兄貴の目を見ると、口角が少し上った。

そして声には、ださずに虚空にさよならと告げる。

次の朝には、いつもの兄貴に戻っていた。

曹操様が何も聞くなと言ったらしく、みんなのいつもの日常が始まる。

あの渋い兄貴は、俺だけの胸にしまっておこう。

豪と探偵とバーボンと（後書き）

曹操の膝枕で泣く

豪が飲んでる所に全員が集まる

サモンナイトの世界で男性キャラと飲む

色んなパターンを考えましたが、これにしました。

サモンナイト2やった人で豪との絡みを見たいキャラとかいますか？

姉ちゃんVSお姉ちゃん(前書き)

サモンナイト2がわからなくても、大丈夫な様に書いたつもりです

姉ちゃんVSお姉ちゃん

side 豪

「豪、依頼人よ」

姉ちゃんに呼ばれて相談室に行くと、そこに居たのは既知の女性。

「依頼人はメイメイさんか。つてことは、面倒臭いはぐれがでたんだろ」

メイメイさんは、アメル姉ちゃんがいる世界、リンバウムの統括者。

リンバウムで広く浸透している召喚術。

異世界から召喚獣と呼ばれる存在を呼び出すんだけど、術者が死んだり術者から逃げ出した召喚獣は、はぐれが召喚獣と呼ばれ危険視されている。

召喚獣としても、普通に生活していたのに勝手に呼び出されて元の世界に帰れないんだから人間を敵視する者が多い。

普通は呼び出した術者しか送喚（召喚獣を送り返す術）できないんだけど、俺は外史を渡る力を利用してはぐれ召喚獣を元の世界に帰している。

「さすがは元若人。ご明察ー、チャチャと頼むわね」

「ほかならぬメイメイさんの頼みだ。リンバウムのみんなへのお土産を買ったら行くよ。アメルお姉ちゃんに、こないだのお礼も言いたいしな」

アメルお姉ちゃんの名前がでた途端、姉ちゃんの覇気が倍増した。

「豪、私も行くわよ。姉として弟が世話になったお礼をいわなきやね。ア・メ・ル・さ・ん・に」

俺の第六感が混ぜるな危険ならぬ、会わせるな危険と告げている。

「いや、ほら統括者の許可がないと駄目だし。あまり違う世界の人が行くのはよろしくないかと、ねえメイメイさん？」

「いいわね」。アグラ爺さんも豪が向こうでお世話になった人達にお礼を言いたいって言ってたし、ついでに彼女達を連れて行けば、みんな喜ぶわね」

問題も増やしやがった。

姉ちゃんが不機嫌になりつつあるから、話題を転換。

「それではぐれは、どこに出たんです？」

「フロト湿原よ。子供の竜だから自由騎士団の連中も、退治に乗る気じゃないのよ」

「フロト湿原か。それならレムル村から、そんなに離れてないな」

レムル村は、俺やアメルお姉ちゃんの故郷。

一回焼き討ちされたが、アグラ爺さん達により復興されている。

「姉ちゃん、陽達に連絡をよろしく。俺は土産を買いに行くって来

るから」

次の日

「それでお前達は、どこに行くつもりなんだ？」

俺の前には、よそ行きの服装をした雛里達が出た。

「アグラお爺様は、豪しやまの育ての親なんでしゅよね？将来のお嫁さんが挨拶をしに行くんですから、これぐらい当たり前でしゅ」

雛里は既に緊張がMAXらしく、噛みまくっていた。

陽達も緊張してるのが、分かる。

ただ1人姉ちゃんだけは、不適な笑みを浮かべていた。

「それじゃ行くぞ」

side 雛里

ここがレムル村。

豪様とアメルさんの故郷。

レムル村は、

のどかな村と聞いていましたが…

「アイツら俺は仕事に来たってのによ」

村の入り口には、

ようこそ！ーいらっしやいませ 豪のお嫁さん達

と書かれた横断幕があり、村の中は、お祭り騒ぎになっていました。

side 豪

この騒ぎは何なんだよ。

呆気にとられていると、村からフォルテの兄貴が出てきた。

「おう、豪来たか。みんな待ちわびているぞ」

「フォルテの兄貴、この騒ぎは何なんだよ」

「お前が嫁さんを連れて来ると言ったら、あの時の連中が全員集ま
つてな」

「それを見に観光客が集まったと。確かに傀儡戦争の英雄が勢揃い
すると壮観だろうしな」

あの時の仲間が、一同に揃う何て滅多にないしな。

レムル村の復興に役立つから良しとするか。

「いやー、俺にしてみれば、あの光景の方が壮観だぜ」

フォルテの兄貴が、指差したのは、よそ行きに着飾った陽達だった。

不思議なもんだよな。

本来は交わる事のない二つの世界。

決して会う事はない人間が1つの部屋に集まっているんだから。

「みんな久しぶりだな。何つーか後ろに居るのが向こうでの俺の姉と、将来の嫁さん達だ」

「始めまして、豪ちゃんじゃなく豪さんの幼なじみ兼恋人兼将来のお嫁さん、朱霊です」

「はわわ。ご、豪しゃまのお嫁しゃんになれる様に頑張っていますゆ。鳳統でしゆ」

「ご、豪の強さに惚れました。楽進と申します」

「あ、兄貴と一緒に幸せなるのが夢だ、じゃなく夢です。あつ胡質です」

「豪君にずっとついて行きます。天和だよ、よろしくね。おじいちゃん」

約1名を、除いて緊張している原因はアグラ爺さん。

アグラ爺さんは、かつて獅子將軍の異名で呼ばれていた俺の育ての親。

当然、迫力は物凄い。

アグラ爺さんは、先から目を閉じたまま黙ってみんなの話を聞いている。

そして静かに目を開けた爺さんが口を開いた。

「皆様が馬鹿孫のどこに惚れたのかは、わかりません。不器用で鈍感な奴ですが、どうか孫をよろしくお願いします」

静かに頭を下げる老いた英雄。

陽達は緊張から、解放されて力が抜けたらしく、その場に崩れ落ちた。

これで1つはクリアできたと、安心したのも、つかの間。

姉ちゃんが、アメルお姉ちゃんを睨みつけながら覇気全開で挨拶を始める。

「こないだは、私の弟がお世話になったそうね。アメルさん姉としてお礼を言わせてもらおうわ」

「いえ、弟を助けるのは姉として当たり前ですから。こちらこそ弟の豪君の面倒を見てくれたそうで、ありがとうございます」

一方アメルお姉ちゃんは笑顔で応える。

アメルお姉ちゃんは天然のうえに、元は豊穰の天使アルミネ。

悪魔と対立していた天使の姉ちゃんに、してみれば普通の人間の覇気は気にならないのかもしれない。

でも普通の人間の、俺にしてみれば華琳姉ちゃんの倍増してくる覇気にビビる訳で。

「と、取りあえず挨拶も済んだから飯にしようか。皿をだしてくるよ」

立ち上がるうとした俺をアメルお姉ちゃんが抑えようと俺に触れた。

「ごう君、貴男って子は、また無茶をしたでしょ！お腹を貫かせた？昔のお友達を糺しにいった？少しは周りの心配も考えなさい。お姉ちゃん言ったわよね？雛里ちゃんを泣かせたら駄目だって。この短い間に2回も泣かせてどうするの？」

「大丈夫だって、腹の傷も、こないだ完治したし…あっ」

「ごう、お腹の傷は直ぐに治るって言ったのは、どこの誰だったかしら？」

「いや内臓と皮膚は直ぐに治したよ。だけどオジキの都合がつかなくて肋骨と筋肉の治りが遅かっただけだよ」

「言い訳はいらないのよ！（いりません！）」「」

その後、2人の姉による連携説教を喰らった俺。

途中から2人の息が合い始めたし。

だから会わせるな、危険って予感したんだよな。

陽達やリンバウムのみんなは、何時もの事とばかりに先に宴会を始めてるし。

リンバウムの男連中は説教をつまみに、女連中は、陽達の話で盛り上がっている。

そして最終的には、俺にとって最恐姉同盟が結ばれていた。

説教が終わった頃にはフラフラとなった俺は男連中に混じる。女連中に混じったら質問責めにあいそうだし。

「ゴーお疲れさん。お前も相変わらずアメルのお嬢ちゃんには頭が上がないな」

「レナードさん、お久しぶりです。あつこれ土産のバーボンとコーラです」

レナードさんは、俺と同じ正史のロサンゼルスから召喚されたアメリカ人。

「ゴーは幸せ者だな。美人の嫁さんに、本気で心配してくれる姉なんて贅沢だぞ」

「ありがたさが、骨身にしみましたよ」

「だいぶ応えたみたいだな。ところで嫁さんをもらって事は、こちの世界に骨を埋める決心がついたんだろ」

「ええ、そうするつもりです」

「そうか…。幸せになれよ」

その後、陽達から色々聞きだした女連中（主にトリスさん・ミモザさん・パツフェルさん・ルウ）に囲まれて洗いざらい白状させられた拳げ句、男連中の酒盛りに付き合わされた。

酔い醒ましに、外に出ると、姉ちゃんが話しかけてきた。

「みんないい人達ね。大事にしなさい」

「ああ、リンバウムみんなも、曹操軍のみんなも俺には勿体ないぐらいの大事な家族だよ」

次の日

フロト湿原に姉ちゃん、レナードさん、シャムロックさんがついて来てくれた。

陽達はアメルお姉ちゃんにリンバウムの料理を習うらしい。

フロト湿原にかけたサーチで竜を探すと

「いた、あいつだな。まだ子供じゃないか」

竜だから体は大きいも、人間にしてみたら5歳ぐらいだろう。

「シャムロックさん、あれば俺がシルターンに連れてくからカイナさんと自由騎士団に連絡をよろしくお願いします。さあ坊主、家に帰るぞ」

side 華琳

あれで、子供ね。

豪が連れて行った竜は、確かに顔はあどけないけれど、体は豪よりも大きかった。

「あの子は、よくこつこつゆう事をしているの?」

答えを返してくれたのはレナードとかいう男。

「ああ、ゴーは、はぐれを元の世界に戻すのに熱心だよ。たぶん自分の身に重ね合わせてるんだらうな」

「自分の身?」

「はぐれ召喚獣は、好んでこの世界に来たんじゃない。そして豪もな…」

そう言えば、私は豪がなんで指導員になった知らなかったわね。

姉ちゃんVSお姉ちゃん(後書き)

サモンナイト編も書いてみたいかも

指摘感想お待ちしております

指導員が生まれて、細川豪が消えた日（前書き）

ようやく最終回に繋がる形になってきました。

指導員が生まれて、細川豪が消えた日

side 華琳

いたわね。

豪は丘の上にレジャーシートを敷いて1人で座っていた。
レジャーシートには、数種のケーキとお酒が置かれて、豪はただ黙
って空を見つめていた。

その顔はどこか寂しげで、いつもの迫力もなく、一緒に来た陽達も
声を掛けるのをためらっている。

(あれが、本当の豪。いえ細川豪なのね)

その日の朝の事

豪は、かなり早く家を出た。

豪は部下や依頼者からの緊急呼び出しで、家を早く出る事が何度か
あったので誰も気にせずに見送ったわ。

事務所に行けば、顔をしかめながら書類と格闘しているあの子がい
る筈だから。

でも事務所にあの子は、いなかった。

「おはようございます。あれっ豪さんは？あーそうか今日はあの日
か」

「王連おはよう。あの日って？」

細川洋菓子店は、爺ちゃんが開いた店で、それなりに流行っていたよ。

まあお陰で俺は小さい頃から手伝いをさせていたけどな。

「雜里に1回カステラを作ってみせたる。あれぐらいはお手のもんさ」

そうは言っても、兄貴が店を継ぐから、次男の俺は家を出る必要があつたんだ。

それで高校卒業と同時に東京で働いたんだ。

仕事は、警備会社。

俺は学生時代に柔道をしてたから、その時の先輩が誘ってくれたんだ。

そして、俺が32歳の時。

その日は、いつもと何もかわらない日になる筈だった。

いつも通りに仕事を終えて、いつも通りにアパートに帰って来た。

「ただいまって、返事ある訳ねえか」

薄暗い部屋に電気をつけようと歩きだしたんだけど、何時までたっても壁にたどり着かない。

周りを見回しても、一面の闇。

とりあえず歩いていると、やけに冷たい壁にぶつかったんだ。

でも、それは壁じゃかった。

巨大な竜、オジキの足だったんだけどな。

俺は夢を見ているんだと思ったね。

そりゃそうだろ？

部屋を歩いていたら巨大な竜がいたんだからさ。

竜は俺に気付くと、こんな事を話したんだよ。

「お主、世界を救う英雄になる気はないか」

「冗談。中坊ならともかく30過ぎのオッサンがいきなり英雄になれる訳ないだろ？それに英雄なんて面倒くさいものごめんだね」

「ふむ。英雄が面倒くさいとな」

夢だと信じていた俺は巨大な竜に物怖じせずに話続けた。

「英雄は特別な才能がある奴か、担がれ御輿になれる奴しか無理だろ？それに英雄になったら行動を制限される上に、他人の理想を押し付けられるだけだからな」

指導員の仕事は、英雄と相反する事もあるから、俺の答えにオジキは満足したらしい。

オジキと対象的に俺は焦っていたな。

夢にしては、リアル過ぎるし覚める気配すらない。

そうしたら問題は、ここから帰る方法。

とりあえず話をしようとした瞬間、オジキと目が合い色んな情報が頭の中に流れ込んできた。

外史・矯正指導員・魔法・創竜……。

焦ったね、日本って国は平和で、戦や殺し合いなんてよその国の事

だ。
柔道って格闘技をしてたとはいえ、本気のケンカも数えるくらいしかやった事がなかったからな。

「無理ですよ。俺は真剣を握った事もなければ、戦を見た事すらない。他をあたって下さい」

「だからお主なんじゃよ。指導員の仕事は英雄に憧れていたら勤まらない。戦いに関しては教えてくれる人を紹介してやるから大丈夫だ。何より主には資質がある。外史を糺して導く資質がの」

1度、外史に行ってから決めれば良いと言われて、転生したのがアメルお姉ちゃんのいるラインバウム。
そこから文字通り必死だったさ。

平和な日本と違い、村から一步でも出たら弱肉強食の世界なんだからな。

だから俺は育ての親のアグラ爺さんに戦い方を教えてもらった。
その後色々あって、アメル姉ちゃん達と旅をして、色んな経験をした。

戦い、出会いの喜び、別れの悲しみ、無力の悔しさ。

途中、オジキに元の世界に帰りたいかと聞かれたけど断ったさ。

大事な仲間や、血の繋がっていない俺を本当の家族として、愛してくれているアメルお姉ちゃんやアグラ爺さんを置いて、1人平和な日本に帰る気はおきなかった。

それでもラインバウムから戻ったら、日本に帰るつもりでいたんだ。
ラインバウムを平和に戻して、帰らなきゃいけない日 came。

そしたらアメルお姉ちゃんが泣いたんだよ。

ガキみたいに思いつきり泣いたんだ。

居なくなつた嫌だ、忘れたくないってな。
いくらトリスさんやアグラ爺さんがなだめても聞きやしない。
それで俺はアメルお姉ちゃんに約束したんだよ。

絶対に忘れないし、たまにはこっちにも帰ってくるから大丈夫だつて。

まあ、その時には指導員になる決心はついてたしな。
実家は兄貴がついでに兄嫁も甥っ子もいる。

俺には彼女も嫁もいなかったし、英雄は無理だけでも外史の名も無い人を救う事なら、できるんじゃないかってな。

そして細川豪は正史からいなくなり、矯正指導員の豪が生まれただて訳さ。

だから俺はこの日、初心を忘れない為に、正史の親に感謝する為に、自分を見つめ直す為に、1回細川豪に戻って再スタートをしてるんだよ。

このケーキは、細川洋菓子店で売ってるケーキさ。
あなた達から伝えれたら技術は忘れていませんって言う自己満足みたいなもんさ。

.....

話を終えて気付いたやけに静かだ。

もしかして飽きてみんな帰ったとか？

俺が振り向くと陽達は泣いていた。

つつか俺が振り向くと同時に抱きついてきた。

「ごーちゃん、ごーちゃん、ごーちゃん。向こうの親御さんが安心できるぐらいに陽が幸せにしてあげるから」

「豪、私は豪が来てくれて感謝しているんだ。ありがとう」

「豪しゃま、私も家族はいません。だから私と家族を作りましょう」

「兄貴、いや今度からは兄貴じゃなくあなたにしようかな。来年からここに一緒にこような、ねっあ・な・た」

「豪君、寂しかったら何時までも私の前で泣いていいんだよ。私は強い豪君だけじゃなく弱い豪君も大好きなんだから」

「みんなありがとうな。良かったらケーキを食べてみてくれ」

side 華琳

私も細川豪が作ったケーキを食べた。

大事な弟……いえ、愛している男に会わせてくれた創竜様に感謝をしながら。

指導員が生まれて、細川豪が消えた日（後書き）

後 2、3話で最終回となります。
それまでもう少しお付き合い下さい。

最終話 傷だらけのライオンとさみしがり屋の女の子(前書き)

一応は曹仁伝の最終話です

最終話 傷だらけのライオンとさみしがり屋の女の子

3歳くらいの黄色い髪をした女の子が母親に甘えていた。母親も女の子と、同じく黄色い髪をしている。

「お母様、ライオンさんの絵本読んで」

「華恋は、本当にライオンさんの絵本が大好きね」

「うんっ、だって私の大切なお話だもん」

傷だらけのライオンとさみしがり屋の女の子

昔々あるところに小さな女の子がいました。

女の子のお父さんとお母さんは、いつも忙しくて女の子は寂しくて仕方ありませんでした。

ある日女の子は、神様をお願いをしました。

「私が寂しくない様にずっと一緒にいれる家族をください」

それを聞いた神様は、困りました。

「あの女の子に弟か妹が産まれる運命ではないのじゃが、でもあの女の子はかわいそうだ」

神様は少し考えて、ひらめきました。

「そうだ。わしのライオンをあの子のところに行かせよう。ライオンの傷を治すのに丁度良い」

神様のライオンは、神様の命令で悪い人達をこらしめていました。そのせいでライオンは、いつも傷だけからです。

神様は、ライオンを赤ちゃんライオンに変えて女の子の所に届けました。

女の子は大喜び。

それからはライオンといつも一緒にいました。

遊ぶ時も、ご飯を食べる時も寝る時も2人は一緒でした。

やがて女の子はきれいな少女になり、ライオンも大きくなって立派なライオンになりました。

ライオンは女の子の自慢でした。

「私のライオンは強くて大きくて、私を守ってくれる自慢のライオンなの」

でもライオンは困ってました。

「僕はもう少ししたら、神様の所に帰らなくちゃいけないんだ。でも僕がいなくなったら女の子は泣いちゃんじゃないかな」

女の子と同じぐらいライオンも女の子の事を大好きでした。

ある日、ライオンは女の子にいました。

「ごめんなさい。僕は神様の所に帰れなくちゃいけないんだ。今まで大切にしてくれてありがとう」

女の子は悲しくなりました。

女の子にとって、ライオンは大切な大切な家族なのですから。

「やだよ。私も一緒に連れて行って」

女の子はワンワン泣いてライオンは困りました。

それを見ていた神様が、女の子に言いました。

「もし、本当にライオンが大切ならライオンと家族にしてあげるよ。でも君のお家とお別れしなきゃいけないよ」

「私、ライオンと家族になりたい。私の家族はライオンだけだもん」
それから、ライオンと女の子は一緒に幸せに暮らしました。

- - - - -

「あら、寝ちゃったわね」

「ただ今。姉ちゃん華恋は？」

「今寝たわよ。豪、そのお姉ちゃんはもうやめなさい。結婚したのに何時までも姉ちゃんはおかしいわよ。華恋も言ってるのよ。お父さんは、豪太君や雛美ちゃん、平和ちゃん、探君のお母さんの事を名前で呼ぶのに、なんでお母様の事を姉ちゃんって呼ぶのって」

「うっ、ごめん。姉ちゃん」

「ほら、また！。本当にこの子は。2人ときは華琳、華恋がいるときはお母さんの約束でしょ？」

豪と華琳も家族になりました。

最終話 傷だらけのライオンとさみしがり屋の女の子（後書き）

曹仁伝は一応は終わりとなります。

この話は、作者の予想以上に感想や指摘を頂け大変嬉しかったです。この後はオリジナルを書きながら、皆様のリクエストや豪を書きたくなった時に更新したいです

この作品を楽しみにしていくれた方がいた、感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0896u/>

真・恋姫†無双 曹仁伝 ~外史を糺す者は華琳の弟で~

2011年9月25日21時14分発行